第30回 RYLAセミナー報告

国際ロータリー
第2670・2680地区

“志・こころざし”



ロータリーは
分かちあいの心

2007-2008年度　国際ロータリーのテーマ

2008年3月20日~23日
神戸YMCA余島野外活動センター

目　次

ＲＹＬＡセミナーの方針・ねらい…… 3
スケジュール…… 3

1日目

●開講式
オリエンテーション
ディーン　佐伯　直治 …… 4
ガバナーあいさつ
第2670地区ガバナー　稲山　三治 …… 5
第2680地区ガバナー　三木　　明 …… 6
ごあいさつ
第2670地区新世代委員長　古田　茂樹 …… 8

●オリエンテーション
「ロータリーがRYLAに期待するもの」
元国際ロータリー理事　今井　鎮雄 …… 10
注意事項の説明 …… 18

●ロータリアンのタベ
国際ロータリー第2680地区ライラ委員　安平　和彦 …… 24

2日目

●講義「志」
東京大学博士課程４年 人文学部　金静希（KIM Joung Hee）先生 …… 42

●ロータリアンのタベ
国際ロータリー第2680地区ライラ委員　安平　和彦 …… 68

3日目

●講義「志」
教育研究者、東京大学名誉教授　大田　堯 先生 …… 78

●フォーラム「時代の変化の中で文化の違いを乗り越えて真にお互いを理解し合うには」
フォーラムリーダー　安平　和彦
バズセッション報告 …… 100
フォーラムディスカッション …… 107

目　次

4日目

●講義「志」

元国際ロータリー理事　今井　鎮雄 先生……134

●閉講式

閉講のあいさつ

第 2670 地区ガバナー　稲山　三治……142

第 2680 地区ガバナー　三木　　明……143

ディーン　佐伯　直治……143

参加者感想文……148

参加者名簿……176

第 30 回 RYLA セミナー運営委員会……178



RYLA セミナーの方針・ねらい

ＲＹＬＡセミナーのねらいは、受講生の皆様に次のような５つの特色を味わってもらうことにあります。

1．高レベルの講義と討議
2．キャビンタイム（親睦の熟成）
3．自由と規律
4．余島の自然
5．カウンセラーシステム



恵まれた自然に囲まれた余島で、今回のテーマである“生きる”を、講義、キャビンタイム、思索の時間、バズセッション、フォーラムなどをして徹底的に学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

RYLA スケジュール

3月20日(木)				集合 (14:00)	開講式 オリエンテーション (15:00)	オープニングパーティー	キャビンタイム ロータリアンの夕べ
3月21日(金)	朝食 (7:30)	講義 **金静希氏** (9:30)	昼食	レクリエーション ヨット、テニス、ソフトボール、アーチェリー、他		夕食	キャンプファイヤー 親睦の夕べ キャビンタイム ロータリアンの夕べ
3月22日(土)	朝食 (7:30)	講義 **大田堯氏** (9:30)	昼食	思索の時間	バズセッション	夕食	フォーラム キャビンタイム
3月23日(日)	朝食 (7:30)	講義 **今井鎮雄氏** (9:30)	閉講式（11:30） 昼食 離島				

8 9 10 11 12 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

開講式

オリエンテーション



佐伯　直治

ディーン（小豆島RC）

出席者の紹介から致します。最初に儀礼上、兵庫県のガバナーからご紹介申し上げます。今年度のガバナーであられます、三木明様。「こんにちは」（拍手）

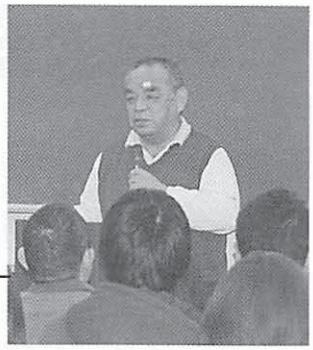
元ＲＩ理事であらせられて、顧問の今井鎮雄様（拍手）、それからガバナーエレクト、これは次のガバナーになられる方ですけれども、宮本はじめ様（拍手）、そしてＲＩの研修リーダーでもあり、パストガバナーでもあります、安平和彦様（拍手）。それから、こちらの新世代委員長であります安行英文さん（拍手）。2680地区のライラ小委員長であられます徳梅明彦様（拍手）。

かわりまして本年度、こちらのホストで、ガバナーであられます稲山三治先生（拍手）。昨年度ガバナーであられました飯忠悟さん（拍手）。それからガバナーエレクトの豊田章二様（拍手）。ガバナーノミニーの、これは再来年ですね、岡内紀雄様（拍手）。ライラ顧問であられます三宅洋三様（拍手）。当地区の新世代委員長であります吉田茂さん（拍手）。それから、古田茂樹さん、（拍手）あと、本日皆様受講生のカウンセラーを務めて下さる方をご紹介致します。

まず最初に、黒田建一さん（拍手）。今の方、兵庫の方です。今から兵庫の方をいいますので。大森英夫さん（拍手）。吉岡喜久子さん（拍手）。永田恵子さん（拍手）。我々のほうで、太田國博君（拍手）。森田康子さん（拍手）。濱田吉隆さん（拍手）。鴨居利枝さん（拍手）。それから今日、ここに今YMCAの方いらっしゃってるのかな？　すいません、ひとり抜けてました。2680地区でパストガバナーであらせます、米谷収さん、（拍手）。

皆様、ようこそいらっしゃいました。では、ただいまより開講式にのぞみまして、はじめに稲山三治ガバナーよりお言葉を頂きます。

ガバナーあいさつ



稲山　三治

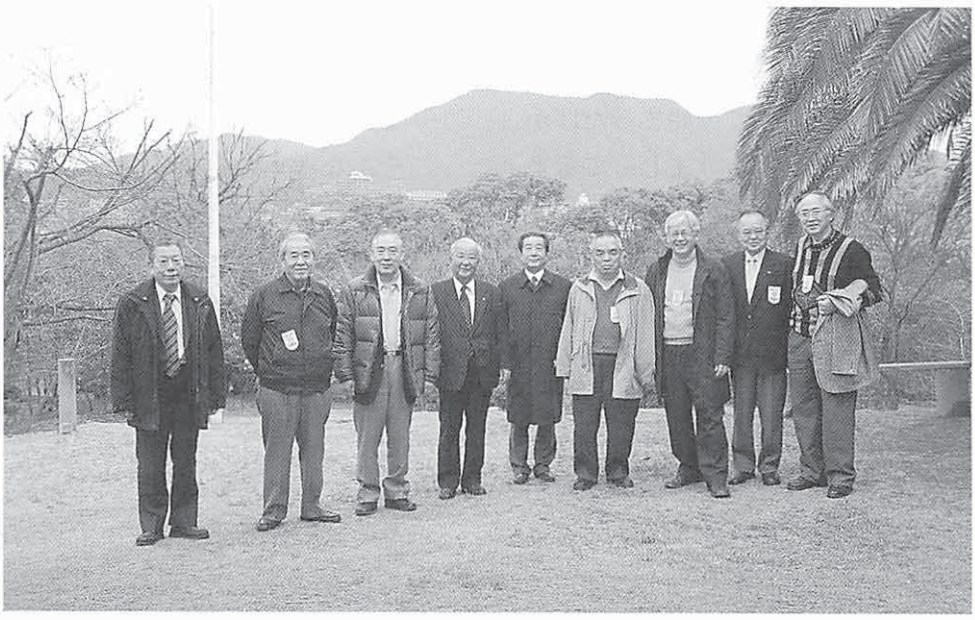
国際ロータリー第2670地区ガバナー（徳島プリンスRC）

今ご紹介頂きました。稲山と申します。本年度は2670地区の当番でございますので、先に僭越ではございますが、挨拶させて頂きます。今年度でライラが30周年ということで、もうひとつはですね、我々地区でもクラブでもいいましたけれども、このライラにくれば今井先生の話しが聞けるよと、これが一番の収穫だよと話しをずっとしてまいりました。私がなんぼいってもそれ信用してくれないと思ってましたらですね、実はカウンセラーミーティングの時にうちの事務局から二人女性がついてきました。

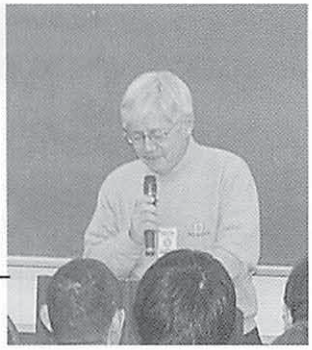
今井先生の話を聞きまして、今回も私達２人がいくよと、うち事務局に女性スタッフ４人いるんです。あとの２人も私達もいかせてくれ、いや、私達がいくよと率先して２人がきたので、そのおかげをもちまして私どもの地区から５名がぜひ参加させてくれときましたので、非常に有難く思っております。

今の、例えば我々年寄りはですね、「今の若い者は」とすぐ言いますけれども、本来若い人達は、我々の言う口上とか既成概念を壊していくのが役目でございます。ただ壊すだけでは後が続きませんので、壊す準備をしながら、次の構築の予定を作っておらなければなりません。そういう意味では、非常に良い会だと思います。

本日はわざわざたくさん集まって頂きまして有難うございます。本来は、運営その他いろいろと2680地区に御世話になっておりますけれども、まず初めに挨拶させて頂きました。これから３日間よろしくお願いしいます。どうも有難うございました。（拍手）



ガバナーあいさつ



三木　　明

国際ロータリー第2680地区ガバナー（姫路RC）

皆さんこんにちは。ようこそ与島へおいでくださいました。ひとり紹介がもれておりまして大変失礼いたしました。2680地区、兵庫県なんですけれども、パストガバナーを経験されました橋本一豊さんがいらっしゃいます。どうも有難うございます（拍手）。有難うございます。今日は約60名のこのライラセミナーの受講生の皆さん、そして大勢の皆さん方をお守りする、あるいは共に何かを学ぼうというロータリークラブの会員の皆さん方、大勢、お集まり頂きまして本当に有難うございます。

皆さん方、ライラセミナーとはいったいどういうものなのか、まったく予備知識もなく、送られてきた小さなパンフレットだけをご覧になって、地元のロータリークラブのおじさん達から一度いってみないか、あるいはこんなセミナーがあるからぜひ参加すれば何かきっと良い出会いがあったり良い事が学べるかもしれないよ、そんな事をお聞きになってこちらにいらしたと思います。ここにこられて今始まったばかりで、期待と多少の不安とがいりまじってるような複雑な心境かと思いますが、４日間すぎてみれば、あっという間にすぎてしまって来て良かったなあと、そんなことを思って頂けるセミナーにしたいと私達は日頃から準備して考えて参りました。

このライラセミナーというのは、この地区、この私達が今やっておりますセミナーは、約30年、30回目ですから、30年間にわたってやってまいりました。古くはオーストラリアのブリスベンというところのゴールドコースト、あの辺りなのだと思うのですが、別にロータリークラブが、州ができた100周年を記念してイギリスの女王様の名代としておいでになった王女様と同じくらいの年の人達を集めて何か研修をしようというのが始まりだったわけです。

それ以来しばらく低迷しておりまして、アメリカで一気に花開き、そして、この地区では約30年前から、このセミナーを始めております。このライラセミナーというのはロータリーユースリーダーシップアワーズという略語なんですけれども、ロータリーは常に若者達を育てよう、教育的なことをしよう、そして、未来を担う人々を育てていこう、共に考えていこう、そんなことを目指している団体であります。けっして寄付団体であったり、慈善団体であるとかそういうことではありません。ロータリークラブ会員自らも人間性を高めよう、そして、倫理的な運動を続けていこう、というふうな事を考えております。

そんな考えの中で皆さん方にお集り頂いて、３泊４日間、大変充実したセミナーを計画しております。自由でありますが、しかし、共に行動する機会が大変ございます。素晴らしい講義も聴けます。金静希さんとおっしゃるこの方は、また詳しくは明日ご説明がありますが、米山奨学制度というロータリーが提唱しております奨学金制度があります。この方が韓国からおいでになって、日本で奨学金をもらいながら学んでおられる。いろいろと経験されたり、日頃考え

ておられる、皆さん方と結構年齢が近い方でありますので、良いお話が聞けると思います。

そして、その次の日には東京大学の名誉教授大田堯さん、この方は実はもう90歳近いのです。素晴らしい方がおいでいただきました。また、皆さんとともに、日本の将来、あるいは私達の考え方、夢を語ろうじゃないか、そんな風な計画をしております。そして、最終日になりますが、今井鎮雄元国際ロータリー理事、目の前におられます、白髪のおじさんではありますが、私も最近白髪のオジさんになりました。人の事はいえなくなってきました。本当に柔軟な発想の持ち主で、頭脳の大変柔らかい、万年青年のような方であります。この方からまた素晴らしいお話が聞けると思いますので、ぜひ、楽しみにしといてください。

色々、ロータリーについてお話しなければならないのですが、時間もありませんし、そういったことは皆さん方の班のカウンセラーの皆さんから、直接お聞きいただきたい。それはライラのカウンセラーがその姿勢とか考え方とかいろんな生き様を通して、ロータリーを皆さん方に説明して下さると思います。そのカウンセラーの素晴らしい姿勢をご覧頂きながら、ロータリーを理解して頂きたいと思います。

もっとしゃべってもよろしいかな？

このパンフレットの7ページに書いてありますが、このライラセミナーでは、この受講生の皆さん方、新しい仲間がたくさん生まれます、年齢もそれから生まれ育った地域とか、今学生であったり、おつとめであったり、そんないろんな違う機会のところでおられる方々が、3泊4日間集まってこられるわけでありますから、大勢の違った環境の方々と知り合いになれます。そして、この4日間の充実したセミナーの期間の中だけではなくて、将来にわたるお友達、仲間を作っていただきたいと思います。そして、このライラセミナーでは、自由を重んじております。何をしてもいいということではありませんけれども、自律、自分を律する気持ちをもっていただいて、このセミナーに参加していただきたい。共同生活でありますから、皆さんどうしで行動するときは勿論時間を守ったり、場所を守ったりしていただかなければなりませんけれども、後の事は自由でありますので、自分を律しながら生活をしていただきたい。

そして、この3つ目に書いてあります、時間は万人の共有物でありますから、たとえば、60人の受講生の中にひとり遅れると、60人の人々にとっては60分の損失になります。ですから、講義の時には必ず遅れずに参加していただきたい。そして静かに聞いていただきたい、自分だけではなく、周りの人々にも気づかっていただいて、講義を聴いていただきたい。また、いろんな活動、行動をしていただきたい、というふうに思います。

それから、ここの与島は素晴らしい自然に恵まれております。船で渡ってこられて森の中を歩いてこられました。さりげなくこの島があるかとお思いかもしれませんが、日々この山を守っておられる方々が、目に見えないところにおられます。どうかこの自然を大切にしていただきたいと思います。

挨拶だか説明だかわからなくなってしまいましたけれど、これぐらいにしておきますけれども、どうかこの4日間が皆さん方の人生の中に小さな火を灯していただいて、その火をまた皆さんの地域に家庭に、そして仲間にもってかえっていただきたい。それを少しずつ広めていって頂いて、大きく灯して頂きたい、そんな思いで私達はこのセミナーを計画しております。

どうぞ、4日間、よろしくお願いします。有難うございます。(拍手)

ごあいさつ



古田　茂樹

国際ロータリー第2670地区新世代委員長（徳島プリンスRC）

皆さん、こんにちは。私は今期の第2670地区、四国地区の新世代活動委員長の古田茂樹と申します。出身はガバナーと同じ徳島プリンスロータリークラブです。今回、第30回のライラセミナーにたくさんの受講生の方おいでいただいて有難うございます。また、カウンセラーの皆さんも大変御世話になります。また、諸先輩方の経験者を中心としたロータリアンの皆さんもご参加頂き本当に心強い気持ちでいっぱいです。

今、三木ガバナーの方から本当に懇切、丁寧にご説明いただいて、新世代委員長の私の出る幕はないなと思いながらですね、ひやひやしながらですね、冗談でございますけども。

それでですね、実は私自身はロータリーのほうでは、活動を少々、クラブとか地区とか少し経験ありますけれども、今期、新世代活動委員長に就任を依頼されてなったんですけれども、ライラの経験は本当、正直申しまして初めてで、この与島にまいりました。

そのような私がですね、受講生57名の皆様あるいはロータリアンの皆様を前に御挨拶するというのは、いかほどの緊張かというのを、ぜひ、お察しいただければと思います。が、しかし、何か有意義な事を人生の先輩として申さなければいけないと思います。

私自身の、もし、あの何もすることがなくて暇でしかたがなければ、９ページに私の思いのようなものを書けということで、今はこちらの方を聞いて下さいね、もったいないですから。あの９ページの事はですね、ふれてあるんですけれども。リーダーシップ研修というのは、今井先生という素晴らしい方がやられてるっていうのですけれども。その実態を知らなかったので、自分なりにリーダーシップ研修とはこんなものかというふうに勝手に一応解釈してやってきました。

リーダーというのは例えば、日本には福田首相がいると、徳島県には飯泉知事さんという方がいると。で、我々2670地区には立派なガバナーである平山ガバナーがいると。公式のタイトルがついている方だけがリーダーでなくして、たとえば３人ともムードがよくなるように何かいいことをしようというふうに考える。考えて、その周りのものに、説明をして、じゃあこういうふうな遊び、ゲームをしようとか。あるいは、１人体調の悪いものがいたら、２人で気づかって助けようとか。いうような、周りが気持ちがよくなるような事を考えてそれを実行する、働きかける、ということが私は立派なリーダー、リーダーシップだと考えてます。

相手の表情を読むとか、空気を読むとか、読めないとかありますけれども、一応、基本は言葉だと思うんですね。人間が両端におりまして、商売をすると。ロータリアンは普通何かの商売、会社をしております。我々売る側がいて買い手がいると。そこの間にコンクリートがあったり、建築があったり、あるいは医療があったりとかあるんです。

皆さんの場合、素敵な人と出会ったらですね、私が男性で若者とすれば、女性の人がいます。

ここに何があるかといえば、気持ちよく恋愛感情に発展させたいという内容があるわけなんです。とにかく両端に人間がいるんですけれど、真ん中にブツかそれを売りたいにせよ、伝えたい気持ちににせよ、何か物があると。それをうまく自分にとっても満足のいくように、相手にとっても気持ちが良いように伝える。それが商売であれ、恋愛であれ。あるいは国自身、地域をおこしていくと。これをやるために我々集まったんだと思うんです。分かっているんですけれども、それをなすには、やっぱり専門家、経験のある方の指導がぜひ必要です。

今井先生の話を船の中で聞きましたら、すいません、正確ではないかもしれませんけども、57年前にボートでこちらの島へひとりで渡ってこられて、調査をされて、ここの島がこういう野外研修に非常に適しているということを発見されたと、で、その後ですね、私の新世代委員長の鴨居でインタクトというのがありまして、高校生を集めてロータリー精神をお伝えしていこう、リーダーシップするんですけれども、8月になったときに、非常に良い、伊勢たつろう先生という方に指導していただいたんです。

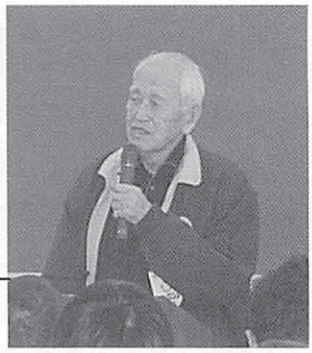
あとでわかったんですけれど、ライラの第1期の研修生の方でした。こうなると何かキーとなる人がずっとつちかってきてるのです。これが30年間続いたということは素晴らしいことなのです。

ぜひ今回も皆さんの研修も、このリーダーシップの意味というものを、私のお伝えした意味だけではなく、皆さんひとりひとりにリーダーシップの意味、意義、大切さとかを思い描いて頂いて、有意義な第30回にしていただいて、ぜひ来年の第31回がもっと有意義なライラになりますようお祈りいたしております。ご清聴有難うございました。よろしくお願いします。(拍手)

ここで、恒例になっております、今井鎮雄顧問よりロータリーがライラに期待するものとしてお話をお願いしたいと思います。



ロータリーがライラに期待するもの



今井　鎮雄

元国際ロータリー理事・RYLAセミナー顧問（神戸西RC）

ご紹介を頂きました、今井でございます。皆さん、何かあっけにとられた顔をしてるね、なんや、ロータリーってなんや、ライラってなんや、さっぱりわからんけども、集められてここにきたら、やれガバナー、ガバナーなんてのは、日本語に訳すと知事さんはガバナーというんですね。知事さんより偉いガバナーがいる、なんでかというと、ここにおられるガバナーは徳島のガバナーではないのです。四国四県のガバナーですから、徳島のガバナーはたったひとつの県のガバナーなのです。この人４つの県のガバナーですから、ライラってのはえらいんだろうと思います。そんなことはどうでもいいのです、冗談ですが。

皆さんに初めて集まって頂きましたけれども、私達からいいますと、30回続けてますと、これは、その度毎に立派な青年諸君たちに、私達がもってる希望のようなもの、あるいは祈りのようなもの、そういうものをぜひ伝えたい。そして皆さん方にも、実はライラがもっている世界的な意味を感じて頂きながら、そしてご自分の世代を担うような青年になっていただきたいということを願ってライラというプログラムが始まりました。

難しい組織は別にしまして、私達にはたくさんありますけれども、ロータリーの中で、３泊４日、もっと長いのもありますし、もっと短いのもあります。その中の費用を全部ひとりひとりの皆さんのために、ひとつひとつのクラブが５万円とか６万円お金をだして、そしてあなた方が、ロータリーが考えている時代を、次の世代を担うような青年としてリーダーシップを将来に向かって、発展させて欲しい。ぜひ、今の世界の事を考え、今の私達の国のことを考え、そしてどんな世界を創ることが我々その時代、時代に生きてる者が大事にしなくてはならないものかということを考えてもらいながら、ここを出ていって頂きたい。

ロータリーはそのような意味においてもしも必要ならばひとりひとりのそれに係る費用は、みんなでもってだして送ろうではないか、皆さんはどうか知りませんけれども、おそらく、ここで会費をお払いになった方はひとりもいないと思います。ロータリアンのクラブがひとりひとりの人達に、ある意味で期待を込めて、自分の地域社会の中にこの人がいる、この青年はぜひ、ロータリーのこのトレーニング、これはロータリーユースリーダースアワードといいますが、ユースリーダーというのは若者のリーダーということ、両方にかかります。若者達の次の次の世代を支える、あるいは指導して下さる世代として育って欲しいという願い、ユースリーダというと思います。

もうひとつは皆さんと一緒の仲間に実際の今の世界の事を考えた時に、なるほどロータリーはそんなことを考えながら今の仕事をしてるのかと、そして、またそういうようなものを私達の世代では何をしたらいいのかなどを考えながら、つないでいっていただきたい、そういう願いをこめて、皆さんひとりひとりにここに集ま

っていただきました。

実はロータリーというものは、100年ちょっとたちます。長い歴史をもっております。その歴史の中で苦労しながら育ち、今120万の方々が、世界のいろんなところでクラブを作っております。どういうクラブかというと、一番最初はわかりませんので、職業持ってる人達が集まって、なんとか自分達の職業を正しい職業人として生きるということを考えようじゃないか、自分達がどうすれば立派な職業人になれるか、ということを切磋琢磨しながらやっていこうじゃないかということを考えて集まってきました。

皆さんどうでしょうね、日本の社会の中で、ついこの2、3年の間に大きな会社の社長さんたちが、テレビの前でみんなお辞儀をしている姿を、私達嫌というほど見せつけられました。そして嫌ということを見せつけられた時に、皆さん達は大人って信用できないな、あるいは場合によっては、大人がやってるってことは、結局、自分本位のことをやっていて、社会の為に私達はいろんなことをしてるといいながら、ごまかして、そして、お金さえ儲ければ良いというような職業を、自分達の職業として一生懸命やっているというふうに思ってしまう時代になってきましたね。

その中でロータリアン達が、かつて100年前と同じような時代が続いた時にアメリカのある弁護士の方が、こんなことではいかん、私達の職業はなんであずかってるのか、どういう意味をもっているのだろう、学校の先生になりたいと皆さん方の中におられると思いますが、次の若い人達は子供たちのために一生懸命捧げて、愛情尽くして育ててあげて、立派な人に育てるということを私達の大事な気持ちだといってやりたいと思ってる方もおられるかもしれません。

あるいは、新しい時代における新しい仕事というものをどういう具合に考えるかということを考えてるかもしれませんね。だけども、そして、気がついてるうちに、いつの間にか、仕事自身の重要性ということ、仕事自身が世界の中でどんな役割を果たすかということを忘れてしまって、その仕事を通して自分達が少しでもお金をたくさん儲けたら良いのじゃないか、というような気持ちになってしまった時に、そこから世界が少しずつ滅びに向かっていった。ということ感じることができるだろうと思います。

その時に、ロータリーはそうじゃなくて、少なくとも、自分達の職業を通して、社会に奉仕をしたり、自分達の職業を通して、世界の人達に奉仕をしたり、自分達の職業を通して、そして、皆が新しい時代を作ることのために努力しよう、というグループができたのです。小さいかもしれませんけれども、そういう気持ちでやっていこうじゃないかというところで、ロータリーが始まりました。そしてそのロータリーは今、大きな中で世界が今、何を一番必要としているのか、ということを考えて、そのことの為に奉仕をするということを一生懸命やってます。

それに対して、いろんな国の人達、あるいは、国連であっても、何であっても、ロータリーがしてる仕事の世界的な意味というのは小さくても、それが世界の平和につながるのだということを考えて、ロータリーを世界の国々の中から、集まっているロータリーの中から委員をだして、そして、あなた方何を今考えてますか。私達の世界が今、こんな苦労しているのですが、何か助けてくれませんか。ロータリアンの人達がその事について一生懸命お金を集めながらやってるもののひとつに、世界中の子供達からポリオをなくそうという運動をしてます。ポリオという病気は、もう皆さん方は忘れてしまってるかもしれませんが、ちょうど風邪をひいたのと同じように、ちょっと体の具合が悪いな、熱がでたなと思ううちにそれがひきますと、後にここの関節がそのまま固まってしまって、そし

て、松葉杖をつかなくてはならなかったり、あるいはですね、いろんな他の症状がでてきますけれども、日本ではこのポリオは、もう、60年前にほとんど消えてきましたね。

私達のところでは、いろんな薬ができましたけれども、世界の中ではそうではなくて、大勢の人達が、しかもこのポリオは、伝染病でありますから、ひとつのところに残ったらそれがまた次々にうつっていって、世界中でそういう子供が増える。何とかしてこれを全部なくそうということで、20年かかって、毎年、ひとりのロータリアンが、１万円ずつ寄付しようと。そしてその１万円ずつ寄付したものを、集めてそのワクチンを買い、そしてその子供達のいる場所にいって、それを子供達一人ひとりに飲ませて、そして世界中の病気をなくすということに努力したりしてます。

このようにロータリーがしようとしてることは、人間の平和とか、人間の生きていく事のために必要なものであるとか、人間がどうしたら仲良くなれるかということを考えながら、助ける仕事を一所懸命にしてきた。これがロータリーという組織であります。

その組織が今一番願うことは何かというと、次の世代を同じような気持ちで生きていってくれる若者達、次の世代に同じような形で新しい問題が起きた時にその世界の問題、平和の問題であっても、あるいは、環境の問題であったり、水の問題であっても、そういうものについてみんなが考えてもらえるような、そういう後輩達をなんとか、跡継ぎとして育ってもらいたい。跡継ぎとして育ててもらうという意味においては、私達のパートナーとして、一人ひとりの青年を選ぼう。各クラブがそれぞれのクラブの置かれている地域の中からこの青年を与島に送ってライラに参加させよう、そして参加してもらっていろんなことをわかってもらったら、帰ってきてその地域で一生懸命、ご自分が考えている、次の世代を担うところの良いリーダーシップを発揮してもらう。その良いリーダーシップを発揮してもらうことについて、私達が何かできることがあるのならば、コンタクトをとって一人ひとりの皆さん方と連絡をしながら、その人達に良い働きをしてもらう。そして良い働きをしてもらう皆さん達が増えれば増える程、世界中でこのライラをしておりますけれども、増えれば増える程後になるとその人達のネットワークが世界の平和に導かれていくということを考えながら、このプログラムをもっております。

今、ここは大変狭いキャンプサイトですから、だいたい四国から30人、そして兵庫県の方から約30人の方々を一人ひとりを選んでいます。皆さん達は、何となく手をあげ誰かいかんかといわれて、誘われたと思いますけれども、私達のそういう願いこめて、お一人おひとりをぜひ、そういうことで私達と一緒に考えてくれませんかといって、今日集まって頂いたのが、このライラの講習会と言われるものであります。

今ご存知のように３月の末ですね。商売をしている社長さん達、後ろにおられるロータリアンはほとんど社長さんであるとか、専務であるとか、あるいは、学校の責任者であるとか、いろんな方々がおられますが、その方々の中から、この一番忙しい時に、３泊４日のための準備をして下さってる。１週間ではすみませんね、いろいろ準備をしてくれながら、皆さんをお迎えしているのです。

ちょっと、皆さん後ろをふりむいてください。すみなせん、後ろのロータリアンの皆さん、お立ち下さいませんか。こんなにたくさんのロータリアンの人達が、３月の終りの一番忙しいお仕事をほったらかして（会場、大笑い）、そうでしょう、皆さん、ほったらかしてるんですよね。さっきもお医者さんに出会ったので、今日は学会に行くといって看板にかけて本日休診としてここに来た、なんちゅう理由かといって笑ったのですが、それでも、そこで皆さん方と出会う、しかもその中でカウンセラーと称する、

ちょっと手をあげて下さい。カウンセラー、男の方と女の方がおりますけれども、女の方はロータリアンの奥さんがたが主であります。有難うございます。こういう方がたが皆さんがたと一緒に泊まり込みで、キャビンで一緒に寝て、そして話をする、皆さんに何か教えるのではなくて、皆さんと一緒に次の時代を考える、次の時代にこんなことを託したい、そして皆さんから、わかった、それじゃあそのバトンを私達がやるよ、こういって、皆さんに新しい時代の夢と新しい時代を作っていただくという希望なんです。

だから、ここはお願いの場所です。私達にとっては。一つひとつのクラブがお金をだし、そして皆さん方に集まってもらい、そして皆さん方に私達の気持ちを聞いてもらい、そしてそれを皆さんがどう取り入れ、後の残りの人生、どんな人生をたどるか、どんな仕事をなさるか、それはそれぞれ自由であります。しかしそれを通して、少なくとも自分達だけのためだけではなくて、世界のため、友達のため、よその人のために、あるいは、世界の平和のために何が出来るかと真剣に考えて下さるような方に育っていただきたいという願いをもって、今日はお集りいただいたということを覚えて頂きたい。

すみません、いつまでも立たせて。何か悪い事したみたいにいつまでも立ってもらって…。

さて、そういうことでありますから、私達はこれからのことについてのお話は、私達がそういう気持ちをもって皆さんにお集りいただいたということをまず、わかっていただきたい。

しかもそれを30年間も続けてきた。これは、毎年同じ人がくるのではないのです。２回までよかった？２回までは許されるのです。でも、お一人おひとりに５万円とか、６万円とか、かかりますから、それをクラブの人達にお願いする時に、同じ人には、もうなるべく自分達が住んでいる世界の中で１番の人が、それがすんだら２番目の人が、それがすんだら３番目、そのころはまた時代が変わりますから、新しい人達、そういう方々にお願いして、私達の気持ちを伝える、ということが、ぜひ、帰られたら、皆さんをだして下さった、経済的な意味で支えて下さったクラブで、講習終わって帰ってきましたという報告をしていただきたい。また、その時に、今度はそこのクラブの会長さんなり、そこのクラブの新世代委員長さんなり、皆さんのしておられる仕事、ロータリーがしている仕事だけではない、皆さんのしておられる仕事で、ロータリーがお手伝いすることがあったら、ご一緒に手伝いますよ、立派な仕事をして下さいね、そういう関係を持っていただくようにお願いをしてます。

実際の問題としては、いろんな形で遠く離れてしまったり、学校を卒業してそこにはいなかったりと、途切れることはあるのですが、そういう方々とも結びついて今の仕事をしてます。

そしてなお、私達はだいたい１年に１回ですけれども、世界のライラリアン、ライラリアンと言う言葉、ロータリーに属しているメンバーのことをロータリアン、それと同じ意味でライラに参加して下さってる皆さんが、ライラが終わるとライラリアンと言う名前、ロータリアンとライラリアンはそういう意味においてパートナーである。そのライラリアンの方々の中から世界のライラのプログラムに１年に１回、私達は世界大会というのを致しております。

今年は、ロサンゼルスで世界大会があります。そのロサンゼルスの世界大会の少し前に世界のライラの会を持ちます。世界のライラの会を持ちます時に、そこに何人かのライラリアンの方々で希望者がおられるのなら申し込み書を作ってだしていただいて、いくらでもいいわけにはいきません。いろんな形で、少しみんなで考えたりすることのためには、あまり数はありませんけれども、そういうふうなところに参加をしていただくということをしながら世界中のネットワークを作ってます。

その世界中のライラリアンが集まるのは、国際ロータリー、世界のロータリーの集まりがあります会の中でライラのことを考えて下さる委員の人が世界中から何人か集まっておられます。

その方々によって準備をされたライラの国際大会が今年は、今のロサンゼルス、来年は、イギリスのバーミンガム、再来年が、カナダのモントリオール、世界中、順番に回って参ります。そういう仕事をして下さる方は、日本のロータリアンからひとり、国際ロータリーというところの委員になってますけれども、今日はね、国際ロータリーの委員になっていらっしゃるロータリアンが東京からお見えでございます。ちょっと、後ろを向いて下さい。お立ち頂けませんでしょうか？（拍手）女性であります。ロータリアンというと男性ばかりではなくて、男性よりも女性のほうがこのごろは元気がよくて、リーダーシップを発揮できてそしていろんな事で努力をして頂ける。海沼さんとおしゃいます。

その海沼ロータリアンは、国際ロータリーのライラ委員、今日は四国と兵庫県のロータリアンをやってるライラのプログラムはちゃんとやってるかなと監督しに、いや本人は監督ではなく遊ぼうと思ってやってこられてるのかも、しかし、いろんなことを聞くのにぜひ海沼先生にも聞いていただきたいと思います。逆に皆さんにとってはライラとは何か？何分まで話したら良いの？私。明日まで？

それでは皆さん、ライラリアンにとってはこの講習会はなんなのだろうかとよくいわれますけれども、この講習会は、３つのグループに別れます。一番大事な事はなにかというと、今年はどういうプログラムでやるか、委員の人がみんな集まりまして、若い人達の家にきましたら、『志』という題がつきました。志、そこに書いてあります。それは今のような時代で、若い人達が自分たちの将来に向かって夢をもてないような時代になったのではないか。何かというと、意味が持てない。そして、みんな私達はまるでもって機械が仕事をするように、そのことを何かしとけば、月給ももらえるだろうし、そして60近くになって定年退職したら、自分の好きな事をしたらよろしいし、遊ぶ事についての希望はあるかもしれないけれども、何が人間にとって生きてきたかということの証しを自分で持つということについての道がわからなくなりつつあるのではないか。

こんなことを考えた時に、若者の中でもう一度『志』ということについて考えてもらいたいなと。こういうふうに委員の方々がお考えになりまして、題を『志』にいたしました。題の『志』を考えるのに何が一番大事だろうかというと、自分はこういう『志』をたてて生きようと思っているという人達の話しを聞くということが必要でないか。

第１日目に話をして下さる金静希さんは、まだ、学生でありますが、名前のように韓国から来た学生であります。東大の大学院で今、勉強していて、今年卒業のはずですね。そして、可哀想に卒業論文で必死になってるのです。だけど、あなたが、なんで、日本にきて、そして勉強しようと思ったのか、しかもこの人ね、何を勉強してるかというと、古事記ですよ。古事記って、こんな乞食でないですよ。日本の原点ともいわれる古事記とか日本書紀とかを勉強しながら、実際自分達がいろんなためにコンフリクト起こした、いろんな意味で持って、いろんなぎくしゃくをしたり、韓国と日本の間の中で、どうすれば新しい世界を、平和をつくるためにできるか。

そういうことを真剣に考えた結果、最後に、その原点になるようなことを日本で日本の言葉で学んで、それを自分が書いて、そして日本とはこんな国なんだ、こんなことが素晴らしかった、こんなこといろいろあったけれども、こんなことを考えると私達これからもやろうということを考える。そういう気持ちをもって日本に

勉強しにやってきた。実は日韓親善会議というロータリーの会がありました時に、若者の意見を聞きたいといったときに、この方がそういう話をしてくれたので、そういう志をたてて、そして、苦労しながら、まったく私達とちがった、韓国での世界の中から日本にまで行って、それじゃあ原点になるような古事記とか、動機があったのです。

それは、また、聞いてくださったらいいと思います。そういう気持ちで来た、大変、志の高い青年でありましたので、この方に自分がどんな意味で生きてるか、どんな志をもちながら、日本にきて苦労しながら勉強したか、ということを、何をいってくださるかわかりませんが、私達が聞いたときには、話が素晴らしかったものですから、若者の代表として、その人の話を聞かしてもらう。

おそらく、まだ、学生ですから、他の先生のようには長くは時間とれないかもしれません。1時間ぐらいのお話をぜひ、していただいて、場合によってはそれを参考にして、皆さん方が、その後で考えてもらう。そこには、皆さんの、後からいいますけれども、皆さんの時間を大事にしてもらいたいというのが次であります。

そういうふうにして2番目の先生で選んだのは東大の名誉教授でいらっしゃいます、先ほど、ちょっとご紹介がありました。ご年配でありますけれども、日本の教育の問題について苦労しながらいろんなことを、たびたび発言してくださいます。

今、日本の教育は、あわてふためいて、あれをしてみたい、これをしてみたい、といってトライアンドエラーを続けてるようなところがあります。かつて日本の教育というのは、素晴らしい成果をあげました。しかし、今は、これでいいのか、ゆとりのある教育がいいのじゃないか、そしてみんなが考える時間を持たせたら良いじゃないか。ゆとりのある教育がいつのまにか遊びの時間になったり、何かしてしまったために、今度は大事な事がぬけてしまって、世界のランキング、もう東大、慶応、ナッシングであります。アイラという雑誌にそう書いてます。日本の教育はもう決して世界をリードするような教育ではない、もっと考え直さなければならないというので、教育についての国民の代表になるような方が集まって、一所懸命今考えて、また、国の教育のあり方を考えなおさなきゃならない。考えをなおさなきゃならないということは、今の時代の中に考えなきゃならんものは他にもたくさんあります。

そういう意味で、私達の2番目の、いいかえたら、私達が今考えた時にこの人達の話をぜひ聞いて下さいねというような講師を選ぶのに大変委員の皆さん方は苦心をされました。その事を皆さんに伝えて、どんな話か真剣に聞いて頂きたいと思います。

それから、2番目はさっきいったようなカウンセラーという皆さんの先輩のロータリアンの方々に、ある方はお医者さんであったり、ある方は主婦であったり、いろいろありますけれども、皆さんと一緒に夜、自分の部屋に帰った後、いろんな話をする時、良いカウンセラーになってもらいたいと思って、講義ではなくて、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

また、私達、ロータリアンとして、こんなことをお手伝いすればもっと素晴らしくなる、そういうお手伝いをしようという気持ちで、そういう方々にはいっていただく。これは四六時中はいっていただく。これは頭数が多くなってはいけませんので、皆さんのグループにひとりだけ、仲間としてはいっていただく、従って、リーダーというのはつけませんで、カウンセラー、この人達と一緒に考えるという、そういう先輩がいて下さる。

それから、3番目は皆さんそれぞれ考えをもって集まってこられた方です。そしてそのようなことについて真剣に何かやってみようと考えられてる方ですから、その皆さん方がお互いに

自分達のもってる問題をぶつけあってく、志をたてる、なんで私達はそんなに志がたてにくいのか、どちらかというとあまりにもいろんなものが細切れになってきて、私達が本当に必要なものはなんだろうかということを忘れてるのではないだろうか。なんでもいいですから、皆さん考えて下さい。

その、皆さんで考える時間をなんとかして与えたい。個人的には、思索の時間というのがあります。今まで自分が歩んできたものを、ご自分自身で考えた時に、ベストの生き方、ベストの生活をしてきただろうかということを考えて頂きたい。同時に、私達は社会の中で生きるということはどういうことかということを考えてもらう。志とはどういうことかということを考えてもらう。そこにいろんな意見ができるだろうし、いろんな問題もでてくるだろうし、今、現代がもっている一番大きな病巣なようなものもそこで浮んでくるかもしれません。

そういうのを皆さんが一緒に考える、キャビンでみんなで考える。個人で考える時と、グループで考える時間とを分けてもっていただきます。そして最後にそのキャビンでもったいろんな問題を、最後の晩にここでフォーラムをしてキャビンごとに一人ずつ代表をだしてもらって、パネルでもって私達はこういうことを考えてきた、こんなことを問題にしたよと、話し合いみんなと一緒にそれをシェアしていただきながら、ひとりだけでできなかったことをこんなに大勢の人の中から代表の方にでてきて話した時に、ああそういうこともあったなあ、あれは私達ディスカッションしなかったけれども大事な事だとわかってもらう。こういうことをしながら話しをしていただけたらと思います。みんな記録にとらしてもらって、そしてこれからの自分の生き様のなかでそういうものを大事な宝としてもって頂ければ有難いと思います。

最後の日曜日に終りの会をいたしますけれども、終りの会の前に私が全体のしめくくりといいますか、皆さんのもっていた問題はこれですねと、皆さんが今不自由している問題はこういうことですねと、このことについて私達は、こんなことをかんがえてみましょうか、ということと同時に私の方からも今の時代をどう生きるかということについて、いろんな人の意見を紹介をしながら終了させてもらいたい。

少なくとも、おひとりおひとりが、何かこれを大事にもってかえったらいいのだなというふうなことを考えて頂けたらいいなと、これが私のプログラムとして提供するものであります。

また、ここはレクリエーションをする場所であります。水泳はちょっと寒いでしょうね、上がってきたら、名前がかわってきたなんて場合もあるので、水泳はちょっと止めて下さいね。ボートもありますし、ヨットもありますし、子供達も相撲をよくやってますけども、今、国技館でやってますけども、与島大相撲、誰か怪我しますよね。知りませんそれは…。

とにかく遊ぶのもいろんな形で遊んで頂ければ結構ですけれども、私の最後の願いは、この3日間、皆さんが生きてる時の一番大事な時間になるように過ごして欲しい。先ほど三木ガバナーからお話があったように、皆さん自由なんです。

私達の方で決めてる事は、講義の時間は守って下さいねという事です。遠くから年輩の先生がわざわざ来て下さる、あるいは若者で卒業論文を書きかけてる彼女が、そのままほったらかして来て皆さんにシェアをして下さるということを考えて頂きたい。こんなような時間を皆さんが大事に考えて、少なくともこの3泊4日は自分としてはこれからの考える考え方を、あそこの場所でもう一度、階段の曲がり角を曲がったな、というふうにして次に上がっていって欲しいと思います。

私達、そんな機会になればここに集まっているロータリアンが時間をさいて、後ろの方のロータリアンの方、今、すました顔して聞いてお

られますが、心の中ではね、いやあ、ちゃんと会計は帳簿合わせているのだろうか、いろんなことの心配があるのです。お医者さん達もそれぞれあると思います。けれどもそれを押してこの時間にさいて下さった事もお礼を申し上げたい。

そして、また、おつきあいいただいたことにも感謝申し上げますけれども、皆さんはそのことも含めて、ぜひ、大事にして、皆さんが、皆さんの時間を大事にして頂くということが一番私にとっては大きな願いだということを覚えていただいてですね、過ごして頂ければ大変有難い。

私の方から、私達が期待している、このライラというのは、そういう気持ちで作りましたよということを申し上げて、そして、この島は私がさっき見つけたと申しましたけれども、1948年ぐらいでしたかね。まだ若かりしころに、この島を見つけて、みんなとここで一緒にやろうと集まってきた場所です。それから60年間青年達と一緒に語り合いしてきております。そういう方々が今の生き様を考えた時に、この時間がどんなに大事だったかと私は覚えておりますので、皆さんにとっても大事な時間になったということを喜んでかえって頂ければ有難いと思います。有難うございました。(拍手)

注意事項の説明

司会　先生、お話有難うございました。ここで、まだ、ご紹介しきれてない方がおりまして、先ほどガバナーの紹介をした時にそのまま引き続き紹介しますと紹介だけで30分ぐらいかかりまして、なかなか閉まらないので、ちょっと遅れましたけれども、重要な方をご紹介いたします。

今も今井先生からご紹介があった東京の元恵比寿クラブの会長であり、世界のライラの重鎮でもあります、海沼美智子先生（拍手）。旦那様のよしかつさんでよろしいですかね？（拍手）。それから、今日の開講式の介添えに世田谷中央から関博子さん（拍手）。旦那様のまさなさん（拍手）。有難うございます。日本橋クラブから、すごく良いクラブですね。伊賀よしつぐ様（拍手）。この方伊賀忍者のお孫さんだそうです。それから、濃畑雄四郎様（拍手）。武蔵野府中からいらっしゃいました。ようこそ。池袋の西からやってまいりました、ひらいけんたろう様（拍手）。この方は有名な江戸川乱歩さんのお孫さんなので、また、つかまえてお話をお聞き下さい。米山奨学生でラオスからいらっしゃいました、チャパンニケモワンマンさん？（拍手）ようこそ。

それから、ライラ委員を紹介します。まず、最初に兵庫地区のほうで、ライラ小委員長の徳梅さん（拍手）。加藤拓さん（拍手）。滝澤功治さん（拍手）。安平先生（拍手）。黒田建一さん、カウンセラーですね（拍手）。同じくカウンセラーの大森英夫さん（拍手）。我々の方で、高松の日野博夫さん（拍手）、白石正明さん（拍手）。

……あそこは、歩けるわけなんですね、それで、極端な話、本土のほうまでいくことができます。フリータイムの時間にそこを散策してもらうのは結構なんですが、向こうへいって帰ろうと思ったら、潮が満ちて帰れなくなった、もしくは、無理して、膝までだからいいだろうと帰るとですね。あそこは、潮の流れが複雑かつ早いそうなので、万が一のことを考えますと、渡りきるとか、無謀な事はできたら控えて欲しいと思います。散策していただくのはおおいに結構です。記念写真をとっていただくのも結構ですけれども、そのあたり、注意していただきたいと思います。

それから、今井パストガバナーからお話がありましたが、ここでは水泳はできません。そういうことも十分頭にいれて欲しいと思います。ここでは、自由でありますし、今夜のオープニングパーティではお酒もでます。お酒に酔って頂くのもおおいに結構なんですけれども、その辺は皆様方、大人として自律ある行動で、節度をわきまえて欲しいと、そのようにお願いしたいと思います。

それから、先ほども、時間は共有であると、いうことを申されました。キャビンタイムの時、皆さんが各班57名の大勢のかたですけれども、13、4名のグループに別れて頂くことになるのですが、皆さんが討論しているその時は、時間は皆さんの物です。過去にあったのですが、そういう時に、電話がはいってきて、突然メールをするために長時間、場所を抜けたことになる

とやっぱり他の受講生からしたら、意をそぐわれることがあるかと思うのです。そういった意味もふまえて皆様方携帯の扱いは大人の扱いをして頂きたいと、そのように思います。

これも、先ほどもお話があった件ですけれどもお風呂ですけれども、11時といいましたが、実際には12時を回ったこともあります。そういったこともありますし、今回57名と多いので、できるだけ皆さん順序よく後の人のことを考えて入浴をスムーズにすませていただきたいなと、そのようにお願いしたいと思います。

それから、体調が悪くなった時には、カウンセラーの方、もしくはロータリアンの方に、できるだけ早く伝えて頂いて、自分で無理して我慢をしないようにお願いしたいと思います。これは我々ロータリアンが受講生に対して心配しなければいけないことなのですが、万が一、倒れたと、心臓の不調とかそういうことがあって、そういった場合、ここのインフォメーションセンターにはAEDがあるということだけを頭の中に入れておいて欲しいと思います。

明日、レクリエーションの時間がありますが、皆さん、若い方が多いので、体は普段十分動かしている方ばかりだと思うのですが、昨年も突然、体を動かしたために、ちょっと足の筋をのばしたとか、そういった方が若干名いらっしゃいました。そういったことになると楽しい雰囲気が、壊れるようなことにもなりますので、ウォームアップ等は十分に行って、スポーツをして欲しいと思います。

私からの具体的な注意事項は以上です。どうか、日曜日の午後には皆さん笑顔でこの島から帰れるようになることを期待しまして、私からの注意事項とします。有難うございました。(拍手)

今の注意事項で、2、3件もれていることがあります。ここはみたらわかるように消防車がはいれません。ですから、タバコを吸う方、むやみやたらに火をつけないようによろしく。万が一火事になったら、全員でバケツリレーになりますから、それなりの覚悟をよろしく。

それから、水はここは井戸ではありません。水道水をひいてますが、夏近くになるまで、冬場はここの施設は使わないので、赤錆がでます。ご存知のように四国はあまり水がありませんので、そのあたりよろしくおねがいします。この2点を加えまして、今からYMCAの方から、説明をうけます。山根所長と、坂田さんという方が、ここの島の説明をいたしますので、よろしく。

山根　皆さん、こんにちは。ようこそ与島の方へおいでくださいました。今ご紹介頂きました、与島野外活動センター所長をしております山根と申します。よろしくお願い致します。

今井先生が50数年前にこの与島を発見していただいたおかげで、こちらにも働かせていただいておりますが、皆さん初めてですか？　何人かの方、こられたことありますか？　どうでしょうか。最初の印象はどうだったでしょうか、船に乗り継いで、無人島のような島へ行く、すごく不安があったかもしれませんが、このように立派な施設をもった島でございます。

周囲が2.2キロあります。1番高い所は40メートルぐらいありますので、海もあれば山もある、そういう自然豊かな島になっています。なかなか、口で説明できませんので、ぜひ、空いている時間に島を散策していただきたいと思います。危ない所以外は安全ですので、皆さんの確かな目で確認をしながら、ここはどうかなあということでみてもらったらいいと思います。とくに冗談ではありませんので、危ない所はほとんど無いと思います。少し、急に崖がくずれそうなところはありますが、それは、皆さん見たらわかると思います。ぜひ与島をくまなく歩き回って、この良さを実感していただきたいなあと思っております。

春が近づきつつあり、与島は冬の景色から春めいてきました。桜は、セミナーが終わるころには、少し蕾がふくらんできまして、開花宣言できるかどうかの時期を迎えています。皆さんも同じようにまだ少し蕾が堅くなっているかもしれませんが、この与島の中で蕾を大きくふくらませて、花咲かせて、大きくなって、美しくなって、横にも大きくなるかもしれませんが、大きくなって、元気になって、育って頂きたいなあと思っております。３泊４日、よろしくお願い致します。もう１名坂田というスタッフがおりますので、もう少し、生活上の注意をさせていただきたいと思います。

坂田　皆さん、こんにちは。スタッフの坂田です、宜しくお願いします。簡単に与島での注意事項をお知らせします。今、皆さんがどの辺にいるか、おわかりになりますかね？その冊子の８ページに確か地図があったと思います。

今、皆さんがいらっしゃるところは、大集会室、南の浜の少し上ですが、そこに皆さんがいます。受講生の皆さんが、今日、泊まられるお部屋は、ちょうど皆さんの左手をご覧下さい、何もみえないですね、この山の上にキャビンがありますので、そちらに泊まって頂きます。食堂は右後ろの建物、そこが食堂になります。お風呂は、その食堂に隣接しています。

何度も与島は無人島といわれてますので、ひとつ注意して欲しいのが、火の扱い。与島は火事が起きますと、消防車は入ってこれませんので、大変です。火の扱いだけは注意して下さい。タバコを吸われる方、いらっしゃいましたら、喫煙所で、灰皿のあるところで、吸うようにして下さい。ドライヤーを使われる方、いらっしゃいますか？　完璧ですね。もし使われるようであれば、部屋でひとつだけにしてください、二つ使ってしまうと、ブレーカーが落ちます。とくに、夜は、与島はただでさえ暗いので、電気が落ちると、本当に何も光りがなくなってしまうので、気をつけてください。お風呂の時間ですが、夜は10時までにはいるようにしていただけたらなと思っております。あと、もうひとつ、インフォメーションセンターというところがありますが、皆さんが、受付をした場所で、そこにスタッフが常に駐在してますので、何か緊急事態があったら、そこに来て下さい。インフォメーションセンターに簡単なお土産とお菓子と、ほどよい量のビールとジュースを売ってますので、ほどよい程度に買っていただきたいなと思います。また、何かありましたら、質問等ありましたら、お声をかけて下さい。よろしくお願いします。（拍手）

司会　今、三木ガバナーの方からクレームがはいりまして、神戸YMCAの水野様、神戸の会員の方でもあるのですが、ご紹介もれがありましたので、よろしく。（拍手）

それでは、皆様、ご待望の班分けというのを説明していただこうと思います。あらかじめカウンセラーの方は決まってます。それではA班にあたるところのカウンセラー、男女の２名の方、前へよろしく。

この名前を呼ばれて、こちらの方へ掲示いたしますので、自分の入るお部屋等、確認して下さい。確認するのはこれが終わってからにして下さいね。

黒田　はじめまして、カウンセラーの黒田と申します。A班、森田さんと一緒にカウンセラーをさせて頂きます。今、名前をご覧になったと思うのですが、14名、男性９名、女性５名、一応、私どものほうとしては、手元にある資料でチェックしてます。字とか読み方とか間違っているようでしたら、また、言って下さい。すぐ訂正します。名前は読み上げますので、まず、常岡義政さん、松浪和正さん、ジャヤトさん、松田啓希さん、飯間徹彦さん、この５名が部屋が101です。この方達は非常に不幸なことに私

と一緒に帰郷するということになってます。いわば、懲役刑みたいなものですね。下のかたは禁固刑といって、働かなくていい、そういう感じになるかと思います。

201号、松田啓希さん、真野貴史さん、小濱正也さん、中邨悠さん、小野諭さん、以上、5名のかたは201号で、かなり101とは2,30メートル離れてます。だから、誰かリーダー決めてきっちりやってもらわないと、時々、僕が見にいくかもしれません。次に女性です、301号ということで、5名、中島悠さん、田尾有加里さん、疋田香織さん、眞鍋文さん、山本友紀さん、以上、5名ということになります。合計14名。それで、お風呂の関係なので、たぶん、全員の前でマイク使って話す機会はあまりないと思うので、お風呂は一応、カウンセラーの間で決めました。1班あたり30分。これは入りはじめて、出るまで、ようするに30分きたら、もうその時点では誰もいない状態を作っていただかないと、ひとりでも、私ぐらい、僕ぐらいいいや、なんてので、5分、10分延びると、全体にずーっと、延びていってしまいますから、30分時点で、次の班に必ず渡せるように、そういうふうにしていただきたいのが、1点。

順番ですが、これももう、くじ運みたいなもので、あきらめていただかないとしょうがない。今日はA班から、A,B,C,D、4班あるのですが、その順番です。明日は、ひとつずれまして、A班が一番最後、Bが一番、B,C,D,Aで次の日はさらにもうひとつずれると、C,D,A,Bと、そういう順番になります。繰り返しますが、時間がきたら、次の人にはいってもらいますから。さっきいった、ドライヤーの関係もありますが、この辺り、とくに部屋の中で色々話をするときに、お風呂、ひとりふたり長いとそれにつらなって、5人ぐらい遅れてきちゃうと、非常に時間にロスができてしまいますから、その点だけ、ぜひ、皆さん、注意して頂きたいと思います。ちなみに、お風呂に入る開始時間は、今日は見込みとしては7時半としてますが、今日はちょっと状況がわかりませんので、場合によっては8時ぐらいということもあるかもしれません。その辺りはまた、大幅にかわるようでしたら、連絡したいと思ってます。以上です。(拍手)

有難うございました。それでは、B班、大森さん、鴨居さん。

大森　こんにちは、B班のカウンセラーをさせていただきます、大森英夫です。それから、女性の方のカウンセラーは鴨居利枝さんです、よろしくお願いします。B班のメンバーですが、右のほうから、男性からご紹介いたします。安部祐一さん、それから、待場博道さん、枡谷英樹さん、稲葉輝宏さん、上羽裕樹さん、戸田遥基さん、切石明良さん、高橋遼介さん、吉田将三さん、男性が9名です。安部さんから、稲葉さんまでが、102号です。また、後で案内します。僕と同じ部屋になりますが、宜しくお願いします。それから、10メートルほど離れた所にあるキャビンに別れるのですが、202号が上羽さんから吉田将三さんまで、202号といことになります。それから、女性ですが、大島実幸さん、別所さんは今日お休みだそうです。大川千穂さん、東真梨子さん、久保早哉香さんが、302号ということですので、宜しくお願いします。

それから、後は、お風呂のことですが、今日は先ほど黒田さんがいわれましたが、A班は8時から8時半まで、それから、B班が8時半から、9時まで、C班が9時から9時半まで、D班が9時半から10時までということになってますので、皆さん、要領よく流して下さい。お風呂を要領よく入らないとキャビンタイムが短くなりますから、全員でさっさと息をあわせて、あの外科手術も一緒ですが、息をあわせれば手術もうまいこといくのです。息をあわさない人がでてくると、手術台の人は、死んでしまうことになりますから、よろしくお願いいたします。

以上です。

司会　今の大森さんはお医者さんなんで、いろいろ相談できると思いますから、得でしたね、B班の人。それでは、C班、太田さん、永田さん、よろしく。

永田　こんにちは、C班発表いたします。色分け、黒、青、赤で書いてますが、これは部屋によって色がかわっているだけで、別に何の他に意味もありません。103号室の方からお名前申し上げます。下川尚樹さん、上村健作さん、竹村秀史さん、橋本英明さん、以上です。それと、カウンセラーの太田國博さんが一緒になります。次は、203号室。奥山将司さん、秋山晃二さん、川西剛さん、高岡亮平さん、島田佳和さん、以上5名の方です。残り女性の方5名いらっしゃるのは、みんなそれで一つのお部屋になります。申し上げます。齋藤奈奈さん、岩蕗かをりさん、秦麻美絵さん、西森美和子さん、長島道子さん、そして、永田恵子なのですが、いつもの年は、女性のカウンセラーは女性と一緒になるのですが、なんだか今年はカウンセラーは部屋の大きさの関係ではいれないそうなので、401号室におります。何かありましたら、どうぞお声かけ下さい。もちろん、寝るまで一緒にミーティングは致しております。以上です。

司会　有難うございました。それでは最後、D班、濱田さんと吉岡さん、よろしく。

吉岡　こんにちは、もうA,B,Cと済みましたので、残りの方がD班でございます。D班は男性が、畑達也さん、堀川寿和さん、吉田靖順さん、西村恵祐さん、堀川正吾さん、田鍋伸明さん、合田啓祐さん、光田正さん、お部屋番号は少し小さな字なのですが、左肩に書いてございまして、これはこちらに貼りますのであとでご確認下さい。104の方は先ほどのご説明どうり、懲役刑で、濱田さんと同じお部屋でございます。それから、女性の方、嶋田加奈さん、酒井智加さん、笹田彩さん、原田礼さん、杉本京子さん、杉村ゆかりさん、今回女性の方は304号室、すべて同じお部屋でございます。私は401というお部屋におりますので、よろしくお願い致します。どうか、4日間よろしくお願いいたします。有難うございました。(拍手)

司会　今から受講生の方は6時のオープニングセレモニーまで、班別に実際お部屋に入っていただいて、行動していただきたく思います。また、夜、寒いと思った時、毛布は数枚はエキストラがありますので、早めにこちらの方にお申し出ください。後2点あるから、もうちょい、がまんね。

皆さんは、自動的にこの会が終わってからも、学友会というところの組織にはいれます。これは第1回から30回までのおおよそ1800ぐらいの学友の方がいらっしゃるのですが、その方々とお知り合いになれます。実際、私27回の時にカウンセラーをしましたが、自分の班の中からロマンスが生まれて、3年間遠距離恋愛をした末に、この2月に結婚しました。出会いもひとつの運ですから、ここでしっかりつかんで、やってください。

今いったように、エンジェルロードというのは、思い思われるふたりが、歩いて恋が実る所でして、一人でいっても、男同士でいっても、溺れるだけで、かつて20人ぐらい死んでますからね、そんな危険なところはいかないように、お願いします。今から終わりますけれども、これから、ライラ委員の方、両地区は今から委員会がありますので、お残りください。6時に皆さん、そこの食堂で会いましょう。

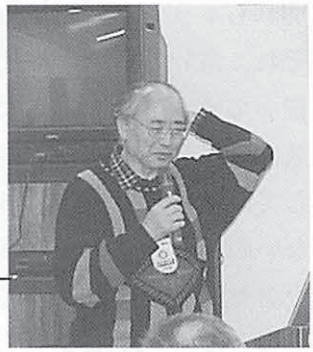
ちょっと待って下さい。

今からの15分か20分のことだけ。今、紙があるから、貼って、もう一度確認していただいたら良いのですが、それぞれの班が3つの部屋に

別れちゃうので、とりあえず、いっぺん、それぞれ、自分の指定された部屋へ入って、荷物を置いてください。そこで5分、10分ちょっと、名前ぐらい自己紹介あると思うのですが、班としては全体で14、15、15、で動かなくてはいけないので、15分間ぐらいしたら、男性のいるカウンセラーの部屋、101、102、103、104、そこへ皆さん、一度来てください。その段階でまたどうするか考えますが、いったんそうしないと、おそらく顔もわからないし、名前も今のみたって、全部覚えている人はたぶん数名しかいないと思います。一度そこで、名前と顔ぐらいは覚えてもらって、食事をしていただきたい。いちおう、今から部屋へ入っていただいて、15分ぐらいしたら、それぞれの部屋へ入ってください。お願いします。

最後に明日、8時45分にそこの食堂のところで、地区委員とカウンセラーの方は、朝、スタッフミーティングがありますので、お集りください。では、皆さん、6時に会いましょう！有難うございました。(拍手)

ロータリアンの夕べ



安平　和彦

国際ロータリー第2680地区ライラ委員（姫路RC）

佐伯ディーン　この「ロータリアンの集い」を始めるにあたりまして、今井元RI理事より、ひとことお言葉を頂きたいと思います。ご清聴のほどよろしくお願いしたいと思います。（拍手）

今井鎮雄　実はこの30周年をいちばん楽しみにしてた人が、一人来ておりません。それは、深川君です。一番最初にですね、「ライラをやろうや」って言った時に、ちょうど深川パストガバナーは、まだその当時は青少年委員長、今だったら、新世代委員長をしておられました。当時のガバナーが、「それは良い事だから、青少年委員長と話しをして決めて下さい」ということでした。

私はその深川君と話をしながら、「やろう」と言ったら、彼もまた、今と一緒ですね、「やりましょう」と言っといて、「ところで何をしますの？」というふうなことでね。「いやいや、これはこうこうということだから」、「じゃあ、やりましょう」。そんな話をしながら今までやってきました。したがって、今日、来れなかったことを大変残念がってました。

実は、10日かもう少し前に、怪我をしまして、入院して、手術をしたものだから、お医者さんが、もう、ギブスのようなものはみんなとれてしまって、歩いてますし、起きたり寝たりも自分で自由にできるし、しゃべることも自由にできるのですが、「もう少しリハビリが必要だから、そんなに早く出たらいかん」と。「出たらまた、同じようになるぞ」と。「第一、友達が悪いのだから」、（笑い）というふうな話をしておりました。

「元気なので皆さんによろしく」ということを言ってましたので、覚えておいて頂きたいし、また、おそらくもう１週間もしないうちに、元気になって帰って来る、あとは日にち薬ですから、大丈夫だと思います。そういうことがありましたので、皆さんの中には、「深川さん、えらい来ないな、あるいは来ないのおかしい」と、思っておられる方もありますけれども、別に私達けんかしたわけではありません（笑い）。

そういうことですので、ご報告だけしときます。実はそのことはプライベートなことなので言わないでおこうと思っていましたが、ところどころで皆さんから、「深川さん来てないけど、どうされたんですか」、とか、「何か悪かったのですか」とか、言われるので、「いや、悪かったけども、今は元気だ」と、こういうふうにご報告いたしたいと思います。

それじゃあ、今日、誰がするのかと、それはですね、安平さんです。去年と今年とRIのトレーニングリーダー。ガバナーエレクトがガバナーになるのに、サンディエゴにトレーニングを受けに行くのです。そのトレーニングを全部指導するのが、トレーニングリーダーの役割で、これは大変大事な役割であります。行く前から、トレーニングリーダーの方には、マニュアルが届いたり、こんなことみんなで勉強しといてくれということだけではなくて、１週間ぐらい早

く行きまして、そこで、今度、伝えて欲しい大事な事は、これこれだっていうことの話があります。これがまた、この1週間、あとの2週間よりも長いみたいに感じて、そういう時間でありますけれども、去年もそれをやっていて、今年もやっているということは、どういうことかというと、いちばん今のロータリーの状況、問題点、わかっておられるのです。ちょうど良い機会だから、安平さんの話をじっくり聞こうということで、やってもらうという、どうぞ、そのことも、不幸中の幸いかもしれません。三木君、あなたはなんべんも聞かれたのでしょう？お寿司屋に4回いかれたそうで。(大爆笑)

私、実は、何月だったかな？　12月じゃない、11月にちょっとシカゴまで行ってきました。それは、これからのロータリーの中で、ポリオプラスの問題が残っていますので、その問題をどのようにするか、ということと、これからどういう姿勢でやるかということでですね、話し合いをするから出てこい、ということでございました。

そのこと自体はいいのです。もうすでにロータリーの友で発表されてますけれども、ビル・ゲイツがですね、1億ドルのお金を寄付する、という。それはロータリーがしているような援助のための寄付をするということでありました。今、ビル・ゲイツは世界一のお金持ちから落ちましたね。第3位になりました。ところが、この前、テレビで見てましたらね、やっぱり、ビル・ゲイツの寄付をする場所というのは、非常によく、いろんな角度から調べて、そしてこれが一番、今の世界のために、あるいは、人類のためになるというところに、そのお金を寄付して、その仕事を助けるということで、非常に評判が良い、みんなが感心している、ということがテレビか何かに出てましたから、聞かれた方がおられると思うのですが。

それと同じようにですね、ビル・ゲイツは、ロータリーがやっております、今のポリオのことだけではなくて、水の問題について調べた結果、非常に大事な問題だということで、自分で1億ドルのお金を出すということについて、決心した理由だそうです。これは私達は、高く、そういう検査の結果、ロータリーがしてる仕事が、世界の将来のために最も役立つのだということを感じてたということについて、私達は、自信をもって、このことを選んだことが良かったのだというふうに思います。

しかし、同時にビル・ゲイツが言った事は、1億ドル出しますけれども、120万のロータリアンのみなさん、3年間で1億ドル、ひとつ、あなた方も集め、合計2億ドルのお金を有効に使うようにしましょう、ということです。ちゃんと担保がついてますね。その1億ドルをこれから、3年間ぐらいで、全ロータリアンが集めなければならないということです。

ところが、ご存知のように、だんだん、時代が進んでいくに従って、ロータリーは100万から少しきれるくらいに下がったところが、また、120万ぐらいに増えている。理由のひとつは、やっぱり、開発途上国、いろんなそういう国々が、ロータリーに入って来た、そのこと自身は大変有難いことなのですが、お金を出す出さないになると、その人達は非常に苦労しています。

例えば私が妻と話して聞いている時に、アフリカのロータリーの連中なんて、晩のご飯を自分の家で食べた後で、公民館のようなところに集まってきて、そして、私達のこのプログラム、水の問題をどうするかだとか、あるいは食糧の問題をどうするか、あるいは、教育の問題をどうするか、と語り合いながら、そういうプロジェクトを作り、そのことに努力をし、みなさんに応援を頼むという形をとっている。

だから、私達は、彼らが自分の食事代も払わなくても、なおかつ、そういう新しい世界の動きの中で、人類としての役割を果たそうと努力しているということは、やっぱりある意味において、大変評価して良いのじゃないかと、私達



のありかたというものを、そんな意味でもですね、考えてみる必要がある。

それから、これは、この前のライラの時だったかな、寄付の問題、これもテレビかなにかでやってましたが、寄付をするというときに、どういう動機、どういう寄付があるのか、という時に、世界の人達は、「これはいい仕事だから寄付をしよう」という考え方が支配的だけれども、日本の人たちは、「これが自分の職業に役立つかどうか、評価が高くなるか、高くならないか」、ということで、寄付をしている。寄付の動機が少し違うのではないかということを誰かがいっていたのを思い出しました。

実は、私YMCAですから、しょっちゅう乞食の親方みたいなことを言って、みなさんにお願いをしにまわることがあります。アメリカで、ホンダが、暴走族がたくさんおりました時に、1万台か何かのですね、スクーターを寄付してくれましてね。そして、それでもって、暴走族の人達に、警官を指導者にして、その練習をさせるというプロジェクトをアメリカのYMCAがつくりました。そしたら、警官が暴走族の連中の気持ちを理解するようになったし、暴走族の連中も警官と親しくなって、そして、暴走をしたらどんなふうになるかということがよくわかり、大変効果があったというようなことがありました。

じゃあ、日本でもやったらいいじゃないかと、おもしろいから行ってみようや、といって募金に行ったら、アメリカはそれがちゃんと宣伝になるけれども、日本ではそれにならんと言ってですね、割に、その寄付をしてもらえない。話の仕方はいろいろあったのでしょうけれども、そのことを考えた時に、ロータリーが本当にどういう気持ちで寄付してるかということを社会の人達がどうやって理解するか、段々日本も企業それ自身が性格を変えてきている時に、そのロータリーのあり方自体が、みんなの中に浸透していく。それがあの公共イメージを高めるということと非常に深く似ている。少しずつそういう世界が動いているなと感じて帰ってきたということだけ、ご報告いたします。いいでしょうか、このくらいで。もうちょっと？　もういいですか？　有難うございます。それでは、いよいよ真打ちに、どうぞ。(拍手)

安平和彦　安平でございます。こんなに沢山の方の前で話をするなんて、思いもしてませんでした。今も、今井先生の話にございましたけれども、深川先生が不慮の怪我をされまして、これは、実は、私も、そこにいる三木ガバナーも、責任のあることでございまして、えー、ちょっと、一緒になって、酒を呑みすぎた、ということでございまして、それで、お怪我をなさって、今、入院中です。もうじき元気になられますけれども。そんなことで、私も責任のあることですから。まあ、「深川先生いらっしゃいませんから、私も責任とらなしゃあないな」と、いうふうに思ったわけでありますけれども。先日、今井先生が、深川先生のお見舞いに行かれまして、深川先生が、「いやもう、ちょっと酒の上で、怪我して、反省してます」と言ったら、今井先生は、「反省するのは猿でもできるよ」と言われまして、「そんなことよりも体を元気にしたまえ」とこういうふうにおっしゃったと、深川先生よりメールが入ってまして、あっはっ（爆笑)。

もうひとつあるのですね、実は。その前に深川先生のメールで、「実は今井先生にお見舞い

いただいた」と、「40分、お話ししました。今井先生がお元気なので安心しました」と。話しが逆やろと、（笑い）というて、三木ガバナーと笑ったんですけれども。ま、そんなことがございましてですね、深川先生も、もうすぐお元気になって、復帰なさると思うのですが、今日は、いらっしゃらないもんですから、しょうがないので、私が話をさせて頂きます。

今からの話は、実は、今度、ちょっと話に行かないかんところがありまして、そのために、パワーポイントをちょっと作ったのですが、それの予行演習というかなんというか、その一部を、ご披露して、ちょっと僭越な話しがいっぱい出てくると思いますが、ご容赦いただきたいと思うのです。

ロータリーの制度的意味理論、とそれから、ロータリーの理念論、ふたつの話をしたいと思うのですが、最初はとにかく、今年のテーマはなんやろかというところからちょっとやって、歴史論はちょっと時間かかりますので、ぱぱっと飛ばしまして、理念論をやりたいと思うのです。ちょっと暇がかかりますけど、聞いて下さいね。

それで、今年のテーマは「ロータリーは分かち合いの心」というので、ウィルキンソン会長は、「クラブ奉仕を通じて愛をわかちあう、クラブ奉仕はロータリーの手です。職業奉仕を通じて愛をわかちあう、職業を通じてロータリーの声となれます。社会奉仕を通じて愛を分かち合う、社会奉仕はロータリーの心臓部です。国際奉仕を通じて愛をわかちあう、ひとり一人がロータリーの目です。青少年活動を通じて愛をわかちあう、青少年はすべての人々にとっての未来です。会員増強を通じて愛を分かち合う、増強と退会防止はロータリーの生き残りをかけています。ロータリーの真髄は愛であり、その発露が親切心であり、ロータリーの親切心と愛とは、理屈とはかけ離れたもの、われわれは、その愛を実践し、分かち合い、互いに助け合うのです。」と言っています。「愛を分かち合う」。言葉がきれいなのですね。いかにも、耳障りの良い言葉ですし、耳障りはいいのだが、いったい、なんやねんというところでは、ようわからへんなあと、実は思っております。

これは深川先生がいつもおっしゃることですが、「ロータリーというのは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人のもっとも優れた倫理運動である」というふうにおっしゃったり、それから、ロータリーモットーで、「ideal of service 奉仕の理想」とか、「Service above self超我の奉仕」というのもありますし、「He profits most Who serves best最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる」。こういう素晴らしいことを、ロータリーは、言っているわけですけれども、実は、この辺のところはお分かりのところですから、ぱっぱっとやりますけれども、ロータリーの最初は、会員同士はともかく、他人に対してわかちあいの心なんて、全くなかった、我利我利亡者というか、自分達だけの会やったということでありますよね。資本主義の嵐が吹き荒れていたシカゴの町の弱小実業人及び専門職業人の助け合い運動であったと。それがまあ、「わかちあいの心」を生み出してきたのは、ドナルド・カーターの物語が最初だろう、というふうなことで、ここからロータリーの草創期の物語にちょっと入ってみようかということであります。

ご承知のように、ロータリーは、1905年の2月23日に、「マダム・ガリ」というイタリアン・レストランの店で夕食をとったポールとシルベスター・シールが、ユニティビルの711号室にあったガスターヴァスの事務所に向かった、こういうこと最初でありまして、シルベスター・シールとポール・ハリス、ガスターヴァス・ロア、ハイラム・ショーレイ、この4人が最初の会合

をもったというのが最初だという話しになってますね。２週間後の３月９日に２名の参加がありました。この２名のうちのひとりは、親睦派の大将でロータリーソングのことでも有名ですけれども、第５ロータリアンといわれているハリー・ダグルス、彼を含めて２名が参加しまして、さらに２週間後の３月23日に３名の参加、合計９名になりました。ここで、ポール・ハリスは、「今や機は熟した。さあ、役員を選任して、規約を作成しよう」というふうなことで、シルベスター・シールを初代会長に選任をし、規約を決定して、ロータリー・クラブという名をつけたということであります。

初期ロータリーの基本ルールとしては、1業1会員制の原則と規則的例会出席の原則（例会出席強制の原則）、これが、基本ルールだったということであります。ロータリーの名称はご承知のように、例会をもちまわりしていましたので、ローテーション、という意味で、ロータリーということになりましたし、ロータリーのエンブエレム、徽章ですけれども、これは最初は、いろいろ馬車の車輪とかありましたけれども、1920年に６本の支柱と24個のギヤ、1923年には、それまでギヤの真ん中がまん丸だったので、それやったら、すべってしまうやないかと、いうことで、1923年に楔穴にしたというのが、ロータリーのエンブレム、それが今に至っているということであります。

例会で卓話を我々やりますけれども、その慣行は、シルベスター・シールが、３月23日に「石炭業界の展望」というふうな形でイニシエーションスピーチをしたのが最初だといわれています。ロータリーソングというのは、今も言いましたように、ハリー・ダグルスが、親睦派と奉仕派が割れてクラブの親睦がグジャグジャになった時に、「諸君、歌を歌おう」というふうに言って、歌を歌ったのが最初だと、これもひとつの慣習でございます。

ご承知のように、初期のロータリー思考というのは、資本主義の嵐の吹き荒れた殺伐としたシカゴという大都会の中で、お互いに胸襟をひらいて、どんなことでも語りあえる友人を作ろうというふうなことでありまして、最初の綱領も、「会員の職業上の利益の増大」、「社交クラブに付随する親睦」、という二つでありました。したがいまして、お互いの会員の相互扶助、互恵主義が最初のロータリーの思考でありました。相互扶助というのは3つほどありまして、1つはお互いに会員同士で、取引をやろうと、例えば、石炭が欲しいということになったら、シルベスター・シールのところで買う。洋服が必要ならハイラム・ショーレイのところで買うという、お互いの原価の取引がひとつの話でありますし、それから、会員以外で誰かが、「石炭が欲しいのだけど」、と言うたら、「それは、シルベスター・シールのところがいいよ、彼はちゃんと良心的に売ってくれるよ」とか、「洋服が欲しい」といったら、「ハイラム・ショーレイのところがいいよ」というふうに、他人にメンバーを紹介するというか、すすめるというのが、２番目。３番目は、いわゆるその業界の知恵の交換というか、そういう精神的互恵主義。お互いの相互扶助というなかには、その3つの要素があったというふうに言われています。

そういう、お互いの互恵主義の団体、いわゆる我利我利亡者というか、なんというか、利己的な団体の中で、奉仕概念が生まれてきたきっかけというのが、有名なドナルド・カーターの物語であります。ドナルド・カーターは、入会をすすめられた時に、そんな単なる互恵主義はクラブ内の利益交換にすぎないので、対社会的な意義を欠いてると、そういう利己的なことに終始するクラブには将来性も入会の意義もないと、言って、入会を断ったというふうなことがございまして、ポール・ハリスは、それでいた

く反省をして、そうか、やはり社会に対する奉仕理念、そういうものも必要だというふうに考えまして、シカゴクラブの定款を改正して、シカゴ市の利益を推進し、市民のなかに市に対する誇りと忠誠の精神を普及すること」というふうな趣旨の定款をいれました。それが、「分かち合いの心の目醒め」というふうに言えるんかなあと、大変こじつけでございますが、思っている訳です。

そういう中で、当時、公衆便所設置運動、いわゆる社会奉仕活動のなかで、公衆便所を2カ所作りました。こんなものを作ったそうであります。田中先生がおっしゃっているところでは、公衆便所の設置については、飲酒業界というのですか醸造組合と、百貨店組合が大変妨害したと。なぜかというと、だいたい、街でトイレに行きたくなったら、バーに入って、バーで一杯飲みながら、トイレを借りる。女性は百貨店に入って、トイレを借りる時に何かを買うだろうと、いうふうなことで、バーの組合とか、百貨店の組合が、そんなトイレつくってもろたら困る、ということで反対したと、こんな話があるそうでございます。

そういう中で、1908年に、これも歴史的な事実ですけれども、アーサー・フレデリック・シェルドンという人が入会いたしました。彼は「商取引は売り手と買い手の満足感の上に成り立つのだと。信用、信頼というのが大切なんだ」と、というふうなことを申しました。その年に、チェスレイ・ペリーという、後に全米ロータリークラブ連合会の事務総長に就任して、32年間事務総長を務めたという人もその年に入りました。そういう中で、親睦互恵派は、「ロータリーなんてのは、お互いが弱小の実業家、専門職業人が集まって、お互いの親睦をはかって、お互いに互恵、利益を図ったらいいじゃないかと、それ以上のことを目指す必要はないよ」、というのが、親睦互恵派なんです。ところが、アーサー・シェルドンは、「いやいや、単にお互いのその親睦、互恵だけでは、将来はないよ、そして、ロータリーというのは、そういう社会的に目覚めたのであれば、全米に広げていかなければならない、そうすべきだ」というふうに、言いまして、ポール・ハリスもこの一派に流されてしまったわけですけれども、そういう、親睦互恵派と奉仕拡大派が対立して、分裂の危機に陥りました。それを救ったのが1910年の全米ロータリークラブ連合会の設立であります。1910年、その当時、全米で16のクラブができていたわけでありますけれども、そのクラブの代表を集めまして、全米ロータリークラブ連合会を設立いたしました。そこで、ロータリーの情報提供、それから、拡大、それはもう、全米ロータリークラブ連合会が、やるんだと。そして、クラブは、親睦なら親睦で良いじゃないか、というふうなことで、クラブと連合会の役割を分担したというふうなことで、うまく分裂の危機を回避したというふうに言われています。

これもご承知のことですけれども、1911年にポートランドで、第2回の連合会の大会が開かれました。この時に、フランク・クリンズという人が、Service, not self、というのをコロンビア川のクルージングの船で演説をしたというふうなことがあります。これについて、田中パストガバナーは大会採択の記録はないというふうに言っておられます。このService, not selfというのは、のちにService above self に変わったと、その辺の詳しい事は省略いたしますけれども、ということであります。同じ、ポートランドの大会で3日目に、シェルドンの、He profits most Who serves bestというのが、採択されました。シェルドンそのものは大会に参加してなくて、チェスレイ・ペリーがシェルドンの原稿を代読したようでありますけれども、「20世紀における商業主義の指標は協調するこ

とでなければならない。知恵の光明に照らされることによって、人は、経営の科学は奉仕の哲学であることを理解するに至る。他人に最もよく奉仕する者が、最も多く報いられることを理解するに至る」、というふうな演説原稿をペリーが読みましたところ、みんな感激をいたしまして、その時の大会宣言の結語に採用されたというふうなことであります。

そういうのが1911年で、そしてその流れをうけまして、その後、職業倫理について、いろいろ議論されるようになりました。そして1915年には職業倫理訓が制定されました。これは、13年にバッファローの国際大会でラッセル・グライナー会長が提案をいたしまして、スー・シティロータリー・クラブが苦労致しまして、1915年のサンフランシスコ大会で「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」ということで正式に承認されました。1905年にロータリーができまして、その後、いろんな流れの中で、職業倫理についていろんな議論がされて、1915年、つまりロータリーが創立されて9年後に、ロータリー倫理訓、道徳律というふうな形で結実されたと、そしてその内容が非常に倫理的だということで、今から思うとすごいことだなというふうに思っております。この職業倫理訓、道徳律はですね、翌年のガイガンディカーのロータリー通解に収録され、配布されました。これらは、個人としての人格を高めることが、結果として人との分かち合いに通じるのだという、優れて個人奉仕的分かち合いの心とも言えるものでありました。

一方、同じころに、身体障害児への奉仕活動が起こりました。ここにありますように、1911年頃から全米で身体障害児養護学校設立運動というのが起きまして、シラキューズ、トレード、そういうクラブが、クラブ財源をもってこれに参加をしました。クラブ財源でそういうものを作ろうという話であります。それが、後の1933年にエリリア・クラブのエドガー・アレン、彼はダディ・アレンと子供達から慕われたようでありますけれども、そのアレンによる国際身体障害児協会設立ということに結晶したというか、まあ、そこまでいったということでありますが、こういうのが、大変素晴らしい社会奉仕だというふうなことで、各クラブは競って社会奉仕活動をやることになりまして、まるで、クラブが慈善クラブを呈することになりました。これは団体奉仕というか、団体的かつ直接的わかちあいの運動だというふうにとらえられるわけでありますけれども、そういうふうに、個人奉仕と団体奉仕という概念が両方出てきたという話であります。

そういう中で、第２の危機と、この画面で言っているのはですね、田中パストガバナーの画面ですので、それをちょっとパクっているわけでございますが、職業奉仕理念（個人奉仕理念）と社会奉仕理念（団体的奉仕理念）との衝突、この危機を、決議23–34をもって分裂の危機を回避したということであります。決議23–34というのは、ご承知のように、ロータリーは基本的にはひとつの人生哲学だ（Fundamentally Rotary is a philosophy of life)、それは利己的な欲求、俺だけが金儲けしたいという利己的な欲求と、だけれども他人の為にも奉仕しなければならないという奉仕感情、この２つの矛盾する心の葛藤を中和するのが、ロータリーの哲学なんだと。それが Service above selfの哲学であり、He profits most Who serves bestという実践倫理原則に基礎を置いているんだ、という話しであります。この辺はまたあとで申し上げます。

決議23–34では、団体奉仕もいいんだよと、個人奉仕も団体奉仕も双方の立場をとりいれています。ただ、最後に、「クラブがひとかたまりになって行動するだけで足りるような事業よ

りも、広くすべてのロータリアン個々の力を動員するもののほうが、ロータリー精神によりかなっているといえる。それはロータリークラブでの社会奉仕活動はロータリークラブの会員に奉仕活動の訓練を施すために考えられた、いわば、研究室の実験としてのみ、これをみるべきであるからである。」というふうに言っていましてね、昔の、前原勝樹さんとかいう、ロータリーのことをいろいろ説いていらっしゃる方は、クラブでやる社会奉仕活動、例えば清掃奉仕とか、そういうふうなものはですね、そんなもんたいしたことをやってるわけではないのですね。それは、要するに、ロータリアンに、ロータリーの社会奉仕とはどんなものかということを勉強してもらう機会をもうけているのだと、研究室の実験だと、こういうふうに言うておりまして、従って、クラブがやるような社会奉仕というのは、そのこと自体が意味があるのではないよと、その成果が意味があるのではないよと、それは、そういうふうにクラブの会員に社会奉仕とはどういうものかと勉強してもらう機会なんだというふうに、言うておりましたし、そういうふうに我々は勉強をしたわけであります。

あと、主なところは「四つのテスト」の話とか、それから、国際奉仕理念の導入、それからこの辺は飛ばしますが、世界社会奉仕概念の発生。今も世界社会奉仕というのはもてはやされていますけれども、もともとは、インドのニッティシ・ラハリー、62–63年の会長ですけれども、kindle the spark with in（ 世界中のどこかに不幸な人がいるかぎり、我々みんなは幸せになれない）というふうに非常に格調高いことを言った会長がいらっしゃいまして、その方が世界社会奉仕概念を提唱したというわけであります。戦後のロータリーの流れとしては、今言いましたように、世界社会奉仕プログラムというのが1962年に、78年に３－Hプログラム、85年にポリオプラス、というふうなことで、人道主義に基づく国際ボランティア活動に、まあ傾斜というのですかね、そういうふうな感じが今しております。

そこで、本当はこれからが、本論になりますけれども、「初期ロータリーの原則としての一業一会員制は、今どないなってんねん？」という話しであります。この初期ロータリー原則の同業者排除の原則、というのは、ご承知のように、当時、同業者というのは互いに疑心暗鬼になって、お互いに、なんとなく感情的にうまくいかないと。そういう中で、同業者を排除して、あらゆるいろんな職業から、別々の会員がくれば、そんな疑心暗鬼はないわけでありますから、仲良くできるよ、というポール・ハリスの発想から生まれてきたというわけであります。と言うことは、あらゆる職業の横断面をとらえて、それぞれの職業から代表的な方にきてもらって、クラブを構成すると、そういうのが望ましいということでありまして、そういう意味では、ロータリーというのは職業分類クラブということであります。そこでは例会が大変大切だというふうに強調しておりまして、いろんなところから来て頂いた代表者に例会で色々勉強してもらう。ガイ・ガンディカーは「入りて学び、出でて奉仕せよ」、と言っておりますし、米山梅吉は、「ロータリーの例会は人生の道場である」例会で人生の道場として自分を磨きなさい、とこういうことを言っています。

なによりも重要なのは、「ロータリアン大使論」というのがあります。今、ロータリーというのは、あらゆる職業の横断面をとらえていろんな職業から来てもらっているんだ、というふうに申しましたけれども、現象的にはそうかもしれませんが、理念的にはそうではなくて、そういうふうなロータリアンは、ロータリーからその職業分類といいましょうか、職業にむけてロータリーが派遣している大使なんだと。すべ

からくロータリアンは、ロータリーの例会で、学び合い、そして職業倫理を高め、そして自分の職業分野に帰って、ロータリーからのメッセンジャーとして、ロータリーの理念哲学を広め、その職業分野の倫理を高めなさい、というのがロータリーアン大使論でありまして、これが、ロータリー通解の中でガイガンディカーが言うているわけです。

そういうふうなことで、もともとは、一業一会員制の原則というのがあったのですが、その後、会員の種類の増加がありました。最初は正会員だけ、その後、アディショナル会員ができ、パストサービス会員ができ、シニアアクチブ会員ができ、名誉会員も途中からあるのですが、アディショナルは、２人まで可能ですので、結局、正会員、アディショナル、パストサービス、シニアアクチブで、事実上５会員制になっていたわけであります。正会員自体も、もともとはロータリーは男性会員だけだったのですけれども、1989年から女性会員も容認されるというふうなことになりました。そういうふうなことで来てたんですけれども、ご承知のように、2001年の規定審議会では、会員を、正会員と名誉会員の２種類だけにし、そして、１業５会員制まで、ないしは50人以上のクラブは10%までオーケーやと、いうふうなことで、１業１会員制というのを真正面から廃止してしまったということであります。

ところが、昨年の規定審議会では、財団学友に正会員資格を認めました。実はロータリーというのは、企業の社長とか、支店長とか部長とか、いわゆる、企業の中で裁量権がある人でないとだめだと。ペーペーの平社員は正会員資格がなかったわけですね。それはなんでやというと、おそらく、ロータリーの職業倫理を高めようと言った時に、やっぱり、業界ないし少なくとも職場において、職業倫理を高めようと思ったら、裁量権がなかったら、そんなことできないわけですから、ペーペーの平社員が何言うたって、支店長や社長が駄目だというたら、それまでですから、そういう意味で裁量権があるというのが一つの条件になっていたわけです。
それからもうひとつ、ボランティアが、ロータリー精神と同じような精神でもってという限定がついてるはずですけれども、そういうボランティアとして社会奉仕活動をやってる人に対して、そのボランティアという資格に基づく正会員の資格を与えるようになりました。このふたつが昨年の規定審議会で決まったことでありまして、こういう点から、ロータリーの「職業分類クラブ」というのは、終焉をしたというふうに考えられるわけであります。

もうひとつの原則、初期ロータリーの原則としての、例会出席強制の原則でありますけれども、もともとの趣旨はご承知のように、一番最初のロータリークラブというのは２週間に１回の例会でありました。その時に「連続４回例会に欠席すれば当然に会員資格がなくなる」というふうなことで、非常に厳しいルールでありましたけれども、考えてみれば、２週間に１回ですから、４回連続して出て来なければ、2か月も出て来ない。あのシカゴの街の中で、弱小の実業人ないし専門職業人が、お互いに助け合っていこうよというふうに誓い合って作ったクラブで2か月間も顔をみせない、そんな奴は仲間じゃないよ。そういうふうなことで、連続4回欠席をすれば、もう、必然的に会員資格はなくなる、というのが、一番最初の規則でありました。

それが、だんだんと緩められてきまして、1922年にメイクアップ制度というのができました。都合が悪ければ、他のクラブに行って出席すれば、メイクアップになるよという話しであります。そのメイクアップ制度も、その後どんどん広げられていきまして、ローターアクトの例会とか、IMとか、いろんなところに出席すれば、メイクアップが認められることになりま

した。それから、我々、60%ルールというのをよく言うていたわけですけれども、60%ルールというのは、例会のなかでの60%の時間、１時間だったら36分間の出席義務ですか。それから、半期の出席率として60%出席しとかないかん。それ、いつできたんかなあと思って調べましたら、1922年のロスの大会の時に定められております。従って、80年以上守られて来たわけですけれども、昨年の規定審議会は、例会の時間の60%というのには特にはふれてませんけれども、例会の出席率の60%を50%に変えました。従って半期の出席率が50%を満たしていれば問題はないというふうになりました。

それから、例会そのものも２週間に１回、または月２回の例会でもいいよということにしようというような制定案がでましたけれども、それもいきなり通ってしまいました。ただこれにつきましては、理事会預けということになりまして、今、世界で試験的にやってみようというふうなことで、様子をみて、正式に次回の規定審議会でRI理事会か何かから提案されて採用されるのではないかなと思っておりますけれども、そういうふうにルールが、緩和されてまいりました。

ここに書いていますけれども、「規制緩和の歴史と会員減少のパラドックス」という、ちょっと古い話になるのですけれども、京都南クラブの五十嵐さんという方が、しばらく前に、「イエロー・カードをもらったロータリー」というようなことを書いておられました。イエロー・カードは当時、サッカーでイエロー・カードとか、レッド・カードとかいわれていた時代でありまして、ロータリーというのはイエロー・カードをつきつけられたのだと、いうふうに言っていましてね。五十嵐さんの論調では、「ロータリーというのは、創立以来、規制緩和、規制緩和を続けてきた。１業１会員制の緩和、それから、例会出席強制の原則の緩和。このように、緩和、緩和を続けてきた。それは何のためというたら、増強のため、会員を増やすために緩和をしてきた。いわゆる窓口を広げようというふうなことで緩和をしてきた。それからもうひとつありましたね、女性会員の容認。そうやって、ロータリーは、緩和、緩和の歴史をしてきたのにかかわらず、現実はどうなんだと。どんどん、会員が減って行ってるじゃないかと。当時、日本とか、韓国は非常に不景気で会員数が減ってましたけども、未曾有の好景気のアメリカだって、どんどん減って行ってるではないか。新しい会員がどんどん入る。女性会員がどんどん増える。だけれども、旧き良きロータリアンが、ロータリーに背を向けて去っていってるではないか。そういう、いわばパラドックスをどういうふうに解釈するんだ」というふうな批判を言うておられた訳です。

要するに、ロータリーの魅力が喪失して行っているのではないかということでございました。その辺のところは我々もよく考えなければならない問題だろうというふうに今も思っております。そこで、少し話を変えまして、理念としての、ideal of service 奉仕の理想とは何かということを今から少し話をしたいと思います。

「奉仕の理想、奉仕の理想」というふうに我々は言っておりまして、いかにも「奉仕の理想とはなんやねん」というのは、わかっているように思っている訳ですけれども、実は、奉仕の理想とは何やねん、というのは、手続要覧のどこをひっくりかえしたって、その定義はどこも書いてないわけですね。ところがロータリーの綱領には3箇所も出て来てます。前文の「有益な事業の基礎として、奉仕の理想を鼓吹し、これを育成する。」 第3には「その個人生活、事業生活、社会生活に、常に奉仕の理想を適用する。」

第4は「奉仕の理想に結ばれた云々」と、短い綱領の中に３カ所も奉仕の理想と言う言葉が出てまいります。

「奉仕の理想」というロータリーソングもあ

るわけで、我々は、奉仕の理想を当然のごとくわかったように使ってますけども、実際なんやねん、というのはよくわからない。昔、うちの地区のＩＣＧＦで、「奉仕とは何か」というパネルディスカッションがありまして、その中のパネリストのひとりが、「奉仕というのは、広辞苑でひいたら云々」というようなことをいろいろしゃべりはったんですけれども、そのとき、森パストガバナーが、あとで、コメントをおっしゃいました。「奉仕」というのは「service サービス」の日本語訳なんだと、だから、「service サービス」という言葉を英語の辞書で調べるならともかく、「奉仕」という言葉を広辞苑で調べても適切な意味がわかるはずがないじゃないか、というふうにおっしゃったことを今も鮮明に覚えております。

いずれにしても、service サービスという言葉についてはよくわからない。調べてみましたら、綱領の中にserviceという言葉がでたのは、1912年の綱領ではじめて出てまいりました。1912年というのは、時期的に考えますと前年の1911年のポートランド大会で、He profits most Who serves bestやService, not selfとかいうのが採択された年です。それから、「Ideal」という言葉がありますけれども、Idealという言葉が綱領に出てきたのは、1918年のカンザスシティの改正綱領が最初ですけれども、15年のロータリー道徳律には、２度にわたりIdealという言葉が出てまいりますし、ロータリー通解ではいたるところにIdealという言葉がでてきます。ロータリー通解では、The ideal of serviceという言葉はでてきませんけれども、The ideal of Rotaryという言葉がでてまいります。その後、The ideal of serviceというのは、ロサンゼルスの改正綱領に、現在の綱領の原型でありますが、3カ所出てまいりますし、23–34の各所に出てまいります。従って、この ideal of serviceというのはなんやというのを探るには、これらのモットーとか、道徳律、ロータリ通解、決議23–34を読み込むことがヒントであろうということです。

そこで、ちょっと走りますけれども、ロータリー道徳律、これはご承知のように1915年サンフランシスコ大会で採択されました、「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」ということでありまして、バッファロー大会でラッセル・グライナーが提唱したものだということであります。詳しいことは省きますけれども、その第1条には、「自分の職業に価値を認め、これにより、自分は社会に奉仕すべき好個の機会を与えられたものと考えるべきこと」、第2条には、「自分の身を修め、自分の実力を涵養し、自分の奉仕を広げるべきこと、ならびにそれを通じて奉仕に徹するものに最大の利益ありとするロータリーの基本原則を実践すべきこと」とか、そういうことがありまして、第11条に、「最後に、すべて人にしてもらいたいと欲することを人に対しておこなうべし、という黄金律の普遍性を信じ、我々は、地上の天然資源がすべての者に均等な機会として与えられてこそ、人類社会は最良の状態になるべきことを主張してやまないものである」と、そういうことを言っております。

それから、倫理訓の目的はなんだということでありますけれども、「この倫理訓の目的は個人の完成をその基礎とし、国家の永続はただ自我を温存するためなりとの立場をとるギリシャ的倫理観ではなくして、この倫理訓の根本前提は愛なのである」と、いうふうなことも言っています。このロータリー道徳律ですけれども、その翌年のロータリ通解に収録されまして、その後、RI細則の15条、のちの16条、14条になったりしてますけれども、RIはロータリー道徳律を採択するということを細則に明記しておりました。ところが、51–52年の理事会は、手続要覧への掲載を中止し、80年の規定審議会は、このRI細則16条を削除したというふうなことであ



りまして、以後RIの公式文献上から姿を消しております。2680地区は、これがけしからんということで、地区独自の職業倫理訓を採用したりもしております。

それから、次にガイガンディカーのロータリー通解ですけれども、1916年、翌年であります。ガイガンディカーというのは、フィラデルフィア・クラブ出身の23–24年のRI会長であります。関東大震災とガイガンディカーと書いておりますけれども、日本に東京クラブができた時に、東京クラブは大変、ちんたらちんたらとしたロータリー例会をやっておりました。月に１回の例会でありまして、12月とか１月というのは、みなさん、忙しいから例会やめましょうということで、やってなかった。という中で、関東大震災が起こりまして、そこにガイガンディカーがただちに２万５千ドルの義援金を送り、それから、世界中から８万９千ドルの義援金と物資がおくられてきたということで、米山梅吉をはじめ、東京クラブのメンバーはたいへんびっくりいたしまして、これはロータリーはすごいもんだと、いうふうなことで大変反省しまして、以後、1922年に採択された、標準ロータリークラブ定款に沿った運営をするようになったという有名な話があります。

ロータリー通解はここにありますように、ガイガンディカーが、理論及び教育担当委員会委員長としてまとめたもので、全編、大変高度な職業倫理と奉仕理念を提唱しております。これ1916年ですから、これも今から何年前でしょうね、すごい昔ですけれども、大変、当時のロータリーアンたちが、倫理的に素晴らしいことを言っていたんだなと思います。このガイガンディカーのロータリー通解が、以後、ロータリーのバイブルというふうなことで、戦前、戦後のロータリアンに本当に教科書ということで読み継がれてきたというふうなことでありますし、なお、その中では、Service, not selfという言葉を使っておりまして、自己滅却の奉仕、というふうな意味でつかっていたということがあります。ガイガンディカーがどういうことを言っているのかというと、私、非常にガイガンディカーが好きなので、ちょっと、書いてますけれども、こんなこと言ってますね。

「ロータリアンはロータリーから各種の職業分野に派遣された代表なのであり、各種の職業分野からロータリーに派遣された代表ではない。この解釈をとると各会員はロータリーの代表として、つまりメッセンジャーとして、ロータリーの原理と理想を説き、ロータリーの他人に対する思いやりの精神とロータリーの職業倫理基準をその同業者に伝達すべき義務をロータリーから課せられることになるのである。同様にしてロータリアンはロータリーの代表として、自己の職業分野における劣悪な理想といかがわしい職業をやめさせるべき責任を感じなければならない。」 ロータリーから、自分の職業分野に派遣された代表なんですよ、そういう意識をもってやりなさい、という話なんです、非常に高度の精神性を言っているのだと思います。

それから、「ロータリーには、他のクラブにはない特徴があり、その特徴は主として、教育的性格にあり、各会員に各自の職種に職業倫理向上の念を植え付けるべき義務を課する点にある」と。ロータリーというのは教育的性格にあるのだと、こういうふうなことを言っています。それから、「出席義務を果たすべき確固たる保障のない場合は、その職種の代表とならな



いほうがよいのである。ロータリー・クラブというものは、いわば電流の通った電線のようなものであって、電気が通ったり通らなかったりするようでは、さしたる役には立たないのである。」 ロータリーアンというのは、クラブ例会で自分を高めて、そして、その派遣された自らの職種に行って、そしてそのロータリーの哲学を広めるべきだと。そうすると、例会に出席できないような者はだめだよと、電流の通った電線、電線というのは電気が通ったり通らなかったり、出席したりしなかったりではたいして役に立たない、ちゃんと出席する者が、会員として望ましいのだと、こんなことを言っています。それから、これもいいですね、「しばしば、ロータリーの良き親睦がロータリーのすべてであると誤解されている、ロータリークラブの中にもまた、ゆらぐことのない親睦の確立こそロータリー存在の根拠であると考えている者もある。しかしながら、良き親睦は、決してロータリーのすべてではないのであって、良き親睦は、ロータリーという苗木が根をおろし、そして成長するための土壌をなしているのである。」ということを言っております。これも良い言葉だなあと思います。

それから、「会員の心の中に最高の職業倫理基準をなお一層しっかり植え付けること。ロータリアンとは、奉仕能力の涵養に専念する人のことである」と。「奉仕とは人の気づかぬうちに、そっと物を置いてくるというような、単に物質的な意味をもつものではない。ロータリアン的意味での奉仕とは、心の過程のことである。奉仕とは奉仕すべき人と物とを結びつける心の状態のことである。」こういうふうなことを言っております。

最後に、この決議23–34でありますが、ロサンゼルスの改正綱領採択の翌年、そして前文に奉仕の理想の適用ということを何回か言うておりまして、第１条として、ロータリーは基本的には（Fundamentally）ひとつの人生哲学である。それは、自分だけが儲けたい、という気持ちと、だけども他人のために、果たさなければならないという義務感との間に常に存在する葛藤（コンフリクト）を調和する、いわば利己と利他の調和の哲学がロータリーなんだと。その哲学がService above selfであり、He profits most Who serves bestという実践倫理に基礎を置くというわけであります。そしてこの「利己と利他の調和の哲学」というふうにいってますけれども、この哲学が、「The philosophy of Rotary ロータリー哲学」であり、「The ideal of service 奉仕の理想」にほかならないと。決議24–34条を読むと、そういうことになるんだろうと思います。

優れて、因縁論の世界だと思っております。因縁論というのは東洋哲理が専門でありまして、ご承知のように易経のなかに、「積善の家に余慶あり、積不善の家に余殃あり」、良いことを積み重ねると、いいことがあるよと、悪いことをやっていると、いずれ、悪い事がでてくるよ、というようなことを易経が言っておりますし、「善因善果、悪因悪果」と仏教で言いますが、良い事の結果として良い物がうまれる、悪い事をしていると悪い結果がうまれるよというふうなことであります。伝教大師最澄は「道心のなかに衣食あり」 衣食と書いて、「えじき」と読むのですが、ひたすら道を求めると、衣食は後でついて来るんだと。昔、神戸の岡崎パ

ストガバナーが、これはHe profits most Who serves bestと同じことを言っているんだというふうにいったことがございます。
それから、日蓮上人、この人は、「人に物をほどこせば、わが身の助けとなる、例えば、人のために灯を灯せば、わが前明らかになるがごとし」と、かなり直截的な表現ですけれでも、例えば、暗い夜道で、人の為にその足元に明かりを灯してあげたら、自分の前の道も明るくなるでしょうと、人に施す事は、自分も助かるんですよ、というそういう因縁論を言ってるんだと思います。

道元禅師も、「他人の利益を図る行為はおのずから自利となる」と、人に良いことをしてあげると自分の利益が奪われるというふうに人は考え勝ちだけれども、そうじゃないよと、利業は同一であるよ、ちょっと言葉忘れましたけれども、要するに、他人の利益を図る行為は、いずれは、自ずから自利になるんだと、というふうなこと。これは、「情けは人のためならず」、今は間違って使われていますけれども、人に情けをすることは、その人の為じゃ無しに、いずれ回り回って自分に還ってくるんだよ、という、そういう因縁論を言っているわけでありまして、これらはまあ宗教的な話でありますけれども、このような因縁論は東洋の実業倫理の世界でも大変普遍的であります。
二宮尊徳が、報徳思想というのを唱えておりまして、二宮翁夜話というのがあります。今日ちょっと原稿もって来ていませんけど、二宮尊徳が箱根湯元の温泉場の縁に腰掛けて、弟子に説いたという話があります。湯舟のなかで、温かい湯が流れ込んでくると、誰しもこう自分の方に湯を掻き寄せたくなるでしょう、だけど、いくら自分の方に湯を掻き寄せたって、その湯は自分の傍らを通って、よそに行ってしまうじゃないですか。そうじゃなしに、その温かい湯は、まず、人のほうに押してあげなさい、人のほうに押してあげると、どの湯は人を温めて、いずれは回り回って、自分の方に戻って来るじゃないですかと。人のほうに、押してあげることを仁といい、自分の方に掻き寄せることを不仁、と言うんだと。動物をみてみなさい、犬でも猿でも、こういうふうな形で、自分のほうに掻き寄せることしかできない、だけど、人は、人に押すこともできるし、掻き寄せることもできるじゃないですか、それを人に押さずに自分の方へばかり掻き寄せるのは、それは、犬、猿と同じじゃないかと。それは、言うたら禽獣と同じではないかと。恥ずかしいことではないか。そんなことを言っていたと思うのですが、そういうふうなことで、大変、そういう意味での因縁論を上手く表現したというのがこの報徳思想の湯舟の話ということであります。

近江商人の話も、ご承知のように、「三方よし」の商人道、「売り手よし、買い手よし、世間よし」、こういうふうに言われていますけれども、売り手と買い手だけが良い、それで良いのか、と言うたら、そうじゃないよ。たとえば、ギャングが麻薬の取引をするとかなんやかんやした時に、ギャング同士ではそれで満足しているかもしれませんが、世間はそれはだめでしょう。売り手も満足するし、買い手も満足し、合わせて世間もそれは妥当な取引だねと認める、というふうなことを言ってはじめて、まっとうな取引なんだという商人道を言うてます。また、石田梅岩も、石門心学というところで、その商人道、江戸時代には、士農工商ということで商人は一番身分が低いという中で、商人の商人道を説いて、倫理に従った取引をやれば、そのことによって得た利益は、武士が俸給をもらっているのと同じなんだと、こういうふうなことを言った話しだったと思います。

そういうふうに考えてきた時に、ロータリーの職業奉仕論、因縁論と書いていますけれども、ロータリーの職業奉仕論、社会奉仕論というのは、私は因縁論の世界だろうというふう

に思っております。利己と利己の調和の哲学、Service above self「奉仕第一、自己第二」、とか「超我の奉仕」、超我の奉仕はちょっと言い過ぎだと思うのですが、自分よりも、人をたてる、人のことを先にするんだということは、やがては回り回って自分の人生を照らすんだと、他人のために奉仕する事は、やがては自分に戻ってきて自分の人生を照らし、自分の商売を隆々とするだと、これは因縁論の世界だと思いますし、He profits most Who serves bestというのは、倫理に従って、他人のために、一所懸命職業に励めば、いずれは物心両面の利益を得られるんだというふうな事だと思います。

このprofit という言葉が、大変、英米人には金銭的なもの、即物的なことだというふうな捉え方をされまして、このモットーは一時、英米人から大変非難をうけまして、金で奉仕を釣るだとか、というふうなことで非難をされたのですが、1935年の第5回の太平洋リージョナル・カンファレンスがマニラで開かれました時に、ポール・ハリスが、「このprofitとは、ドルのことでもセントのことでもないんだ、人生のsomethingのことなんだ」というふうに、このモットーを擁護したという話が残っています。本当のところは、シェルドンはかなり金銭的な意味合いで最初考えたようでありますけれども、その後、金銭的なことだけではなく、精神的な物心両面の満足やというふうにいわれまして、そして、ポール・ハリスもそういうふうにそれを擁護したというようなことであります。

ついでに申しますと、このモットーは、そういう第一の非難を受けてたわけですけれども、ご承知のように最近、He profitsのHeというのが、これが男女の性別を意味する事で、けしからん、というふうなことで大変非難をうけまして、ご承知のように、このHeというのが、They profit most who serve best.というように、今、モットーが変わっているというふうなことがございます。ただ、モットーはThey profit most who serve best.に変わっていますけれども、このHe profits most who serves bestは、シェルドンが言った歴史的な話しでありますので、ロータリー章典をみていただきますと、きちんとHe profits most who serves bestということで残っております。ただ、手続要覧では、今、このモットーは削除されてしまっています。そんなことがありまして、このモットーは2回の難儀を受けてですね、今、They profit most who serve best.というモットーになってますが、これも、今度2010年の規定審議会で、One profits most who serves best.というふうにRI理事会の提案で多分なるだろうというふうに言われてます。

それはなんでやというと、They profit most who serve bestというのは、日本人が非常に反対していまして、それは、They profitでは団体奉仕である、あくまで、個人奉仕の表現をすべきではないのか、というふうなことで、個人奉仕ならば、Oneでいいじゃないか、とこういうことでですね、今度は、One profits most who serves best.にモットーがかわるだろうと一応、予想されております。

私は、ロータリーの職業奉仕論というのは、商売の極意論だと思っております。ちょっと即物的かもわかりませんけれども。我々、よく言うんですけれども、この時計、例えば、5万だと。ならば、5万で時計を売買しましょうと、時計という商品を5万円というお金で対価を受けるという、そういうふうに現象的には言うわけですけれども、ロータリーはそうではなくて、これは時計だけれども、「満足」、満足見えますね、満足という商品を売ってですね、「感謝」というお金、感謝という対価をうけるんだと、「真実」という商品を売って、「信用」という対価をうけるんだと、こういうふうに概念するのですね。こういう満足と感謝、真実と信用、こういうふうなことで商売をやっていけば、いずれ、絶大



なる信用を得て、隆々という商売が繁栄するのだと、いうふうなことがロータリーの職業奉仕論だと私は思っております。ちょっと即物的すぎるんですけれどもね。

ここに書いてますけれども、職業倫理というのは、1915年のロータリー道徳律、16年のガイガンディカーのロータリー通解、あれからすでに90年もたっているんです。90年以上たっている、そういう中で、全然生かされてない。やはり我々は、商売をするときに、宇宙の摂理、ちょっとおおげさすぎるかもしれませんが、神様がみてますよ、ないしはロータリーという神様がみてますよ、それに恥じない商売をしなければいけない、と思う訳でありまして、それにしますと、最近のいろんな事については大変、悲しいなあと。価値観の変化と書いていますけれども、これも言うのですけれども、何年か前の神戸新聞に正平調というコラムがありまして、そこに、現代学生百人一首のことが書いてありましてね、その時に入選しましたのが、高校生ですね、「何欲しい聞かれて言うには金権力、君らほんとに小学生か」という、正確には覚えてませんけど、高校生がですね、小学生に、「君等何欲しい？」昔は、まあプラモデルとかなんとかと言うとったのかもしれませんが、最近の子供は、「金くれー、権力よこせー」、「お前等ほんまに小学生か」と言うて、高校生が、腕組んでため息をついているという姿が思い起こされますが、とにかく、世間一般が、銭、金というか、金銭至上主義というか、そういう価値観に変わってしまっているというのは大変残念だというふうに思っておりますし、そういう中でここにありますように、いろんな不祥事がありました。

エンロン事件、三菱自工の欠陥隠し、中央青山監査法人粉飾決算加担事件、それから、耐震強度偽装事件、雪印食品、日本フード、ダスキン、不二家、白い恋人、ミートホープ、比内地鶏、船場吉兆、赤福、云々…。今日も新聞載ってましたね、もう、なんぼでもありますね。で、雪印食品、日本フード、中央青山監査法人は、会社が消滅しました。船場吉兆も民事再生を申し立てました。ミートホープの経営者は、不正競争防止法で摘発されまして、懲役６年の求刑をうけまして、一昨日か、その前に、４年の実刑をうけました。船場吉兆も不正競争防止法で強制捜査を受けています。ダスキンは株主代表訴訟で、取締役に52億円の損害賠償命令を受けたと、いうふうなことでありますけれども、やっぱり、職業倫理の退廃事件というのは、なんぼでもでてくるというのであります。

我々は、ロータリアンとして、自分を磨く、磨いて人と分かち合う、結果的に自分の商売を栄えさせるんだという、そういう、確信をもってしなければならないだろうと。そしてそれは、例会における切磋琢磨、例会において一所懸命人と学ぶ、そして、例会は、「入りて学び、出でて奉仕せよ」、「ロータリーの例会は人生の道場である」と、そういうふうな昔の先達のことを頭において、そして、例会にはできるだけ出席して、そしてロータリアン大使論、例会から、ロータリーから職業先に派遣された大使、というふうなことで、自分のロータリー哲学をひろめていかないかん。アメリカでバイキンマンといったら、英米はバイキンというのはものすごくいやがるんですね、僕はまあ言いますけど、ロータリー哲学で覆われたバイキンマン、触ったらロータリー哲学がうつったという心意気で

ね、やっていかなあかんのんとちゃうかと、理想主義ですけれども、そういうふうに思っております。終りですけれども、縁あって、我々、ロータリーの世界にはいっているわけですから、一生もんのロータリーであります。昼飯会ではさみしいし、感性的親睦ではさみしい。色々勉強することは楽しい、そういうことを知って、なによりもロータリー哲学、ロータリーの奉仕の理想は、必ずや他人を助け、ひいては自分の人生も照らし、必ずや自己の職業を隆々と栄えさせるという確信と、ロータリアンとしての誇りをもって、ロータリー人生を楽しみたいとこういうふうに思う訳であります。

もうひとつありましてね、次年度「Make dreams real」李東建会長エレクトのテーマであります。これは、98–99年のジムレイシー会長の「Follow your Rotary dream」、「dream」いうて単数やったんですけど、今度は「Make dreams real」こういうふうに言っております。これは宮本ガバナーエレクトが色々今度説明されると思いますけども、ロータリーの夢、「Dreams」ですから、いろいろあるでしょう。ポリオ撲滅の夢とか、世界理解と親善と平和の夢とか、職業倫理確立の夢とか、新世代を育成する夢とか、いろいろあるでしょう。これを本当に現実化したいね、というのが、次の李東建会長エレクトのテーマであります。ポリオ撲滅ももうちょっとでいけそう、まあ、わかりませんけど、この話もいろいろありますけれども、そういうことになりまして、今井先生もポリオ撲滅の国際ロータリーの副委員長ですか？　委員長補佐、委員長みたいなものですけれども、まあ、そういうことでありまして、私は保健飢餓救済のゾーン・コーディネーター、ちょっと分野は違うのですが、ポリオ撲滅と関係ありますので、非常に興味をもってみておりますけれども、もう数年でなんとかなりそうかなというふうな感じがしております。そんなことでありまして、大分時間をとりましたけれども、今度どっかでしゃべるやつをですね、予行演習のつもりでさせていただいて、また、皆さん、眠たいのによく聞いていただいて、有難うございました。これで終りたいと思います。（拍手）

佐伯ディーン　ひとつ僕言い忘れていたことがありまして、今日から木、金、土と3日間過ごされる方はそのままでよろしいのですが、今晩で帰るとか、明日で帰るという人がもしいれば、自分が使ったベッドのシーツは各部屋の入口のスリッパなんか置いてある所に置いといて下さい。それだけ宜しくお願いします。それで我々はその部屋が出入りしたんだなとわかります。また、新しいシーツにかえますので。以上、よろしく。明日は朝7時半からご飯が食べられて、スタッフの方は8時45分にスタッフ・ミーティング。皆様は、9時半からこちらの朝の研修がはじまりますので、よろしくお願い致します。どうも、ご苦労様でした。（拍手）


2008.3.20-
主催：R.



「志」



金 静 希（KIM Joung Hee）先生

ホストクラブ：第2650地区東京日本橋RC
東京大学博士課程4年　人文学部

●プロフィール

ホストクラブ：第2650地区東京日本橋RC
東京大学博士課程4年　人文学部
米山記念奨学生（第9回ロータリー日韓親善会議　米山記念奨学生スピーチ　スピーカー）

今井　皆さん、おはようございます。昨日は仲良くなってきましたか。今日はもっとみんな仲良くなって下さいね。午後からはスポーツのレクリエーションがあったり、夜はカンシルファイヤーといってキャンプファイヤーがあったりしていろいろ楽しみですから、ひとつよろしく。

今朝は、米山奨学生といって、ロータリーの方で、外国から優秀なる生徒を招いて、その人を一年間御世話するのですけれども、その中で、去年、日韓親善会議が青森で行われた時に、講演をされた金静希さんが講師となって、東大の学生さんなのですが、お話を今から聞きます。

金先生については、関博子さんに紹介していただきますので、ひとつよろしくお願いいたします。

それでは、ただいまより本日の部を開始いたします。関さん、金先生の紹介だけお願いいたします。

関　皆様おはようございます。東京第2750地区からまいりました、米山奨学委員長をしております関博子です。よろしくお願い致します。今日これからお話いただく金静希さんですが、彼女は私どもの2750地区の42名いる奨学生のひとりです。今年でちょうどまる2年の奨学期間が終わる学生さんで、東京大学大学院の方で古事記、日本書紀の勉強をされております。また、去年秋に、今井先生がおっしゃったように青森のほうで日韓親善会議でスピーチをしましたところ、大変大きな反響でいろいろなところから、どうしても金さんにスピーチをして欲しい、というリクエストがありました。大変忙しい中、秋田にいったり、いろいろと活躍して下さってますけれども、もう、論文書くのにこれ以上時間はもう無理ですというのを一所懸命私はマネージャーがわりになって、みなさん、申し訳ございませんということで言っておりましたけれども、本日はこちらの方のライラセミナーにおいて、金さんの話をみなさんに聞いていただきたく、お伺いいたしました。皆様よろしくお願いいたします。

それでは、金先生、よろしくお願いいたします。

金先生　おはようございます。韓国からきました、ソウル市出身で金静希と申します。最初は、ロータリアンの方から、このライラのところで『志』を題目にして、2時間半しゃべってほしいといわれて、びっくりしました。もし私

が学生の立場だったら、寝るに違いないと思ったわけですね。それで、どうしても、志について２時間半しゃべるのは無理だろうと思って、最初の所は韓国文化、私、韓国語を教えてもう15年になるのですね、韓国文化についてしゃべりたいなあと思っております。

はじめさせていただきます。今回の話は２部構成になっています。１部の話が終わった時点で、休憩をとるかとらないか、時間的にどうなるかわからなくて、なんともいえないんですけれども、もし時間がとれたら、５分か10分とるかもしれません。最初のところ、１部は韓国文化を紹介しながら人が生まれてから死ぬまでのことを示すことで、２章にはいる前にできるだけ、皆さんの頭から国の観念をとっぱらって、人、個人個人の観念から人生をどのように生きていくか、このことについて考えていただきたいと思います。

皆さんは今まで自分が歩いてきた道とこれから歩いていくだろう道について真剣に考えながら、たまに笑いながら、聞いていただけたらと思います。日本と同じですね。病院で子供が生まれます。昔は家で生まれる場合が多かったみたいですけれども、もう、今は当たり前ですね。子供が生まれると名前をつけるのですが、日本は家族が名前をつけると聞いたんですが、韓国の場合、占い師がつける場合が多いです。

私の名前は金・静・希と申しますけど、漢字で希望の希をつかいます。皆さんのプリントでは、私の名前はヒメという漢字を使って静希の希が姫の漢字になっていたのですが、希望の希です。自分としては自分の名前を静かな希望と訳するのですが、人々からは、静かにして欲しいとよくいわれます。今韓国も日本と同じで少子化問題が深刻になっています。たぶん、統計によると日本も1.25？それぐらいの出産率を示しているそうですけれども、韓国も同じく95年度には1.08ぐらいで、いちばん世界的に出産率が低い国になってます。2007年度には、亥年で、



2007年度に子供を産むとすごく運の良い子供が産まれるといって、急激に出産率が増加して、1.25まであがったそうです。

でも、いくら増加していても高齢化が進んでいる中で、子供がひとつの家庭にひとりしかいないというわけですから、いろいろ大変です。これから産業人口は減る一方ですし、若者ひとりが多くの年輩者の世話をしないといけないということですから、これから、韓国の少子化問題が人々の頭を悩ますだろうと思われます。

出産率がこのように低い理由としては、保守的な韓国社会で、家事と仕事の両立ができないということをあげることができます。結婚をあきらめる女性が増えていることと、高い物価と教育費のために子供を産みたくても産めないという夫婦が増えているということをあげることができます。うちの兄弟も兄と姉、ひとりずついるのですが、みんな、ひとりずつ産んでいて、もうひとり産めよといったら、いや、教育費が高いからもう産めないよという感じです。

また、もうひとつあるのは、離婚率が増えているんですね。この間の新聞記事では、それも世界一だという話を聞いたのです。とにかく、２人に１組、３人に１組が離婚している状態です。それは日本より韓国のほうが、保守的なんです。よく日本人の女の人が、韓国の男の人は格好いいっていうんですね。すごくひっぱる力が強いです。でも恋愛して、ひっぱって、結婚すると、言葉は忘れちゃったんですけれども、すごく、亭主関白が多くなるみたいで、それで

離婚する人が多くなるという話を聞きました。

子供が産まれると日本と違って、100日がたつと祝いのパーティーをします。これも昔は家でやってたんですけども、今は何かの食堂か会館、それかホテルを借りてやります。お客さんはだいたい20人、30人近い親戚達を集めてパーティーをするんですけれども、このように食べ物を重ねて置くのを、福を重ねるという意味で重ねます。だいたい置物は決まってるんですね。りんご、梨とか、ケーキとかそういう物を置きます。

100日祝いが終わって、1年祝いもやります。これはもうちょっと大きく盛大にするんですけれども、このように韓国の伝統的な服を着させて、1年祝いをします。この周りは、50人、60人、たぶんいるはずなんです。これは何かというとトルジャビといって、いろんな物を前に置きます。たとえば、これは鉛筆、お金、ボール、糸、本。これは何かというと、占いなんです。

たとえば、鉛筆やボールペンを、お客さんの前でとらせるわけです、赤ちゃんに。これこれ、とれとれと言うと赤ちゃんが、もしこれをとると勉強ができる人間になるだろう、本をとると、それもそうなんですね。あとこれは作家になるだろうという話もあります。ボールとか運動器具をとると、運動がよくできる人間になるだろう。で、お金をとると金持ちになるだろう、糸をとると、これは女の人の場合だけ置くんですが、針仕事のよくできる人間になるだろう、といろんなものを置いて子供をためすわけです。将来何になるかということをためすわけです。

でもこれは、ほとんどの場合がインチキなのが、うちの姉の場合を例にすると、お客さんの前で披露するその前のところで練習させるんです。拍手をしてこれこれ、とれとれというふうにすると、子供は何回か練習すると気がそっちに向くじゃないですか。姉は勉強ができる人間になってほしいということがあって、ずっと本をとらせたそうです。本当に本をとらせて、今、うちの姪はすごくて韓国全国の何位にはいるぐらいの勉強がよくできる子になっています。

その次は招待された人は、このように指輪をもっていかなければなりません。もちろん、全部のお客さんがもってくるわけではないのですが、日本円にすると、1万円ぐらいですか、それぐらいをもってきます。それか、赤ちゃんのプレゼントをもってきたりします。これを1年祝いの指輪という意味でトルパンジと呼びます。

あとの使い道は例えばうちの兄弟からすると、兄も姉も私も10何個ぐらい指輪をもらうじゃないですか。それを集めて兄が結婚する時に、結婚のプレゼントとして女の人に指輪と腕輪とを、兄弟の物を全部、プレゼントしたそうです。そのようにする人が多いみたいです。

その次にこれは小学校なんですけれども、韓国でとても有名な小学校です。今の李明博大統領が、すごく英語のことを強調しはじめました。その英語の強調のために会社も英語試験、今まではTOEICだとか、TOFFLだとかをうけさせたんですけれども、これから、会話の試験をうけさせるそうです。

その話から高校も授業を全部英語でやるようにという政府の方針がでているので、今これが本当に実践させるかどうかわからないんですけれども、みんな騒いでいる状態です。そのこともあって、この学校が注目を浴びるようになりました。だいたい1クラスに20～30名ぐらいいますけれども、先生が2人います。同じ授業を2人がやります。1人の授業は韓国人がやって、もうひとりの授業はネイティブスピーカーがやります。カナダ人だとか、アメリカ人がやるそうです。同じ授業を韓国語と英語で同時にやっているわけです。

この間、新聞記事で韓国の上位の1％の人々の子供がここにはいると書いてありました。1％の人々の子供が0.001％の子供に、人として成長するためにはいる学校といいました。実は

うちの甥もここにはいっていて、うちは絶対１％の中にはいるわけではないのですが…。それで、うちの母になんでこんなデタラメな記事をのせるのかときいたら、いやあちがうんだよ、今のサムソンの会長の直系の長男が、今ここの３年生になっていて、他の子供達の親もみんなすごいところの会長さんだとかそういう人が親になっているといってました。

このような英語に対する熱望のため、子供や妻を英語圏の国に送り出す場合もあります。それで、みなさんテレビで見たことがあるかもしれませんが、雁の父って聞いたことあります？

雁って、鳥の雁で、英語の教育のために自分の息子、娘を英語圏の国へ送らせるわけです。小学生、幼稚園の時から。ひとりで送らせることはできないから、自分の妻も一緒に送らせて、父だけが韓国に残ってお金だけを送ることになっています。それで、なぜ雁の父っていわれたのかわからないですけど、かわいそうに遠くの南をみながら、なんて鳴きます？　ぎゃあぎゃあと鳴く、その姿からでたかもしれない。

実際、社会的な問題になってまして、親が自殺するようになったわけです。自分の寂しさ、お金だけを送る自分は何をしてるのか、ということで、自殺をする人が増えてきました。しかも、家族がみんなバラバラになっているから、夫婦関係も問題になって、離婚する夫婦も増えているそうです。

私が大学にはいる時はこのように、英語も大事だったんですけれども、英語の次に日本語に人気がありました。その時は、勉強ができる人は日本語学校に入るとかそういう話があったんですけれども、今は全然違っていて、日本語学校は人気がなくなったそうです。日本語はもう経済的に駄目だといって、これからは中国語だといって、うちの甥と姪も小学生になってから、中国語を勉強しはじめました。

次は受験戦争です。最近は韓国語を勉強する人多いじゃないですか、これ、なんて書いてあるかわかります？　こんぶって書いてあります。私、韓国語を教えているから、よく、発音の似ているものを連想させて覚えさせるんですけれども、勉強する人間は昆布をたべながら勉強しろといって、こんぶというのは勉強という意味です、韓国語で。アニョンハセヨはご存知ですよね。ハセヨは、して下さい、と言う意味です。こんぶはせよ、といっちゃうと、勉強して下さい、ということになります。

韓国も受験戦争はすごくひどいものです。みんなこのように勉強するわけです。後、日本も？？室というところがありまして、私も最近そこで勉強するようになったのですが、韓国は？？室ではいって勉強するのが当たり前のことになっているのですね。家で勉強する人それほどいないです。お金をだして、？？室にはいって勉強します。

これはなにかというと入試の時に食べなければならないもの、食べちゃいけないものです。水飴というのは、くっつくじゃないですか、ですから、試験に合格するという意味を表します。テレビでもこの間ニュースで見ましたが、親達が自分の子供の入試の合格のためにその学校の正門にこの水飴を全部くっつけるんですよ。それで、その掃除のためにあとの人々が大変だという話を聞きました。これ、ワカメとのりまきはなぜだめかというと、日本はカツ丼を食べる、食べちゃいけないものなんかありますか？　ワカメはすべる、ですからたべちゃいけない、のりまきは切られるじゃないですか。ですから、何かのひもをつないではいっていけないところをはいれないということで、食べちゃいけないことになっています。

韓国は誕生日の時にワカメのスープを飲む習慣があります。なぜそのようになったのかわからないのですが、受験生の時は、いくら誕生日であってもワカメのスープは飲まないことになっています。ＳＫＹ、これは皆さん多分きいたことないと思うんですけど、韓国ではスカ

イというととても有名な話です。スカイ大学といわれてます。ソウル大学をご存知ですか？日本の東京大学にあたる大学です。コリア大学は、日本でいうと早稲田大学、やや庶民的な大学、？？大学というと慶応大学ぐらいにあたります。このＳＫＹをもじって、スカイ大学と呼ばれています。

韓国は、たぶん日本より学閥社会だと思うのですが、このスカイ大学をでるとある程度大丈夫だと、自分でその学閥のコネでつないでくれるから、この大学をでると大丈夫だといわれています。後、ちょっと余談なのですが、韓国がなぜ、コリアだということをご存知ですか？このコリアという国が朝鮮時代の前のその前の時代の中世の国なんですけれども、この時、1200年それぐらいにあたりますね、その時、韓国が一番貿易が盛んな時代でした。

それから、貿易商人がきて、いろいろ貿易をしているうちに、その人々がこのコリアという名前をちゃんと発音できなくて、コリオ、コリオといっているうちにコリアになったということです。これは実際の話です。

その次に政府？？のスカイというのは最近これはすごく批判されているものですけれども、ソマン教会という教会があります。後、コリア大学、さっきの？？大学です。キョンサン地方というのは、この釜山のあたりのここら辺をキョンサン地方と呼びます。何かというと、今の大統領が、ここに通っています。通っているというんですか？　日本では、教会に通う。日本では教会の勢力があまり強くないんですけど、韓国は教会と仏教が本当に両立されていて、すごく力が強いんですよ。ここに通っている人々が韓国の上流階級をほとんど構成しています。会員を選ぶときも、彼もここに通っていて、コリア大学の出身です。キョンサン地方のここら辺の出身です。人もそうなんですが、一番権力、動くところをほぼここの人を選んだということで人々にすごく批判されました。

問題なのは、どうなんですかね。もともとこの人々はある程度既得権をもっていたんです、昔から。こっちのキョンサン地方は、今までの大統領が、金大中大統領、ご存知ですか？その大統領を除いてほとんどの大統領はここの出身ですよ。韓国の首都はソウルなんですけれども、第２の首都は釜山ですね。なぜここが第２の首都になったかというと、今までの大統領がこっちの出身ですから、自分の産業支出をほとんどの場合、こっちにもっていってしまった。それで、発展させたので、釜山が産業地域になったのです。いいのかどうかよくわからないのですが、とにかく、今はこういうことで批判されてます。

次は、成人の日です。ちょっと違いますね。日本は１月ですか、韓国は５月の３番目の月曜日になってます。普通はこういうのはやらないのですよ。これ韓国の伝統的な服装で、たとえば、お辞儀をするときはこうやって、こうやって、なんとかやるんですけれども、そういうことをやったりするのはほとんどない。日本は着物を着て、式場へいって、何かやるじゃないですか、わからないんですけれども。そういうのは普通はないんです。普通は、このように恋人同士で過ごします。恋人がいなければ、友達同士で過ごします。なぜ女の人だけにそうなのかわかりませんが、男の人は女の人にこれをあげることになっています。バラの花と香水とキスと。日本と同じ20歳になったときに、これをもらいます。私はちょうどこのとき、大学３年生でして、初めて、彼氏とつきあったんです。

この２つはもらったんですけど、下の段階がすごく恐くて、この人にやられたらどうしようと思って、すごく恐くて、ずっと怒りっぱなしで、私今日は気分が悪い、気分が悪い、といって、それで、逃げて帰った覚えがあります。後で後悔しました。

その次は２月14日、３月14日、同じです。これは、日本から伝わったものですから、同じで

すね。バレンタインデーとホワイトデー。ただ、義理チョコはそれほどださないような感じをうけます。日本より、もうちょっと、派手なことが好きで、このように大きな籠箱に、お酒だとか、いろんなものをいれてあげたりします。自分で作ってあげるのはほとんど見たことないですね。

次に日本にないのは４月14日、５月14日、ブラックデー、ジャージャーメンの日ともいうし、イエローデー、カレーデーともいいます。ブラックデーというのは２月14日、３月14日、何ももらってない、私の人生は真っ暗だといって、このジャージャーメンを食べます。これ、実際私も食べました。カレーデーは、日本も黄泉の国って、あるじゃないですか、黄色というのは悪いイメージをもっています。どこからちなんだのかわかりませんが、大便からちなんだかもしれませんし、それでもう、真っ黒よりだめな黄色です。ここまでももらってないわけです。ここまでも彼氏、彼女ができていない、ということでこの日にまた、カレーを食べます。

韓国はいろんなデーを作って、物を売ってます。これは、５、６年前から始まったそうですけれども、ホワイトデー、バレンタインデーより、もっとひどい状態になっています。ホワイトデー、バレンタインデーは、恋人同士に物を贈るのですが、これは恋人じゃなくて、友達同士も贈るんです。このペッペロというのは、日本のポッキーとまったく同じものです。ロッテは日本も韓国もありますから、名前だけ違うものです。なぜ、ペッペロという名前がつかわれたかというと、ペッペハダというのがすごくやせているという意味です。そこからちなんで、ペッペロという文字がすごくやせてるじゃないですか、いち１いち１それで、11月11日をペッペロの日にして、すごくやせている人間ですから、たくさんのお菓子をあげて太らせよう、味が全部、一緒なんですよ。ちょっとちがっても同じぐらいな味、たとえば、ひとりに何十個ともらうわけですよ。あちこちでくれるから。もらうから、自分もあげないといけないじゃないですか。お互いにいらないお菓子を、もうたくさんたくさんもらってて、誰かがやめればいいことを誰もやめられず、お菓子の会社だけは、お金を儲けているという話になっています。

韓国の休日はみなさんに配ったプリントにあります。日付の次に韓国の公休日になにがあるのか見てみましょう。まず、１月１日、日本と同じく、正月です。ただ、韓国は正月が２つあって、陰暦である場合と、陽暦である場合があります。１月１日は陽暦である場合であって、２月は、陰暦である場合、２月の末頃になります。ほとんどの場合、１月よりも２月の方を正月として扱います。家でも、普通の家庭でも２月のほうを正月とします。明けましておめでとうございます、ということを２月の末頃まで、ずーっとやり続けます。

この日はお雑煮みたいな、まんじゅうとおもちがはいっているものを食べます。それを食べて１歳とった感じをうけますね。あと私よく思うのが、日本の年賀はがきですか、私も送ったりもするし、もらったりもするんですけれども、ちょっとやりすぎではないかと思う時があるのが、だいたいひとり何枚ですか？　何枚から何十枚、人によっては、何百枚と聞いたこともあるんですけれども、それをだすみたいですが、普通、韓国ではそれはないです。
年賀はがきはなく、年賀状はありますけれども、だいたい、ひとり２、３枚ぐらいですかね。本当に親しい人にだけあげることになっています。

正月には、皆さんぐらいの歳はお金頂けるんですかね？　韓国だったら、大学生ぐらいになるともらう場合もあるし、もらえない場合もあります。丸出しでお金だします。こうお辞儀をしたあとに、いくらですかね、子供だったら、１万ウォンから、日本円でいうと千円ぐらいから、始まって、何十万ウォンぐらいまであげま



す。ですから、子供が多い家はあまり行きたくない、日本も同じだと思うのですが、そういうのがあります。門松ですか、そういうのはありません、韓国は。

あと３月１日ですか、絵でわかるように植民地だったある日、この女の人ですね、当時16歳でした。柳寛順という女の人です。この時は植民地時代でしたが、３月１日、女の人が、飛び出したわけです。太極旗、国旗をなびかせながら、大韓独立万歳を叫んで飛びだしました。それを見た人々が一緒にその運動に参加して、結局、無抵抗抗争だったんですけれども、多くの人々が殺されたんです。もちろん女の人も刑務所で死にました。

それを記念する日でこの日になると、いくら日本人の観光客であっても、この３月１日の独立宣言書が朗読されたのが韓国のソウルパコダ公園で、そこに行っちゃいけないということになってます。行くといろいろ人々が言うとかいうのがあります。昔、ちょうどその日に私は行ったんですけれども、日本人のお客さん達が集まっていてわいわい騒いで写真を撮っていたんです。それをみて大丈夫かな、何もなかったんですけれども、結局、こちらはすごく心配していた憶えがあります。

あと、４月５日は日本と同じです、緑の日で、別に特に何もないですね。こどもの日は鯉のぼりはないのですけれども、子供にプレゼントをしたりすることはあります。あとここにあるのは公休日だけですから、書いてないのですが、５月８日が親の日です。父の日、母の日を一緒にして親の日になっていて、カーネーションをつけてあげます。５月15日は先生の日でありまして、先生にプレゼントをしたりします。４月８日は、お釈迦さんの誕生日がなぜこっちにきているかというと、これも陰暦であります。ですから５月の末頃になりますね。

韓国は仏教が朝鮮時代にすごく弾圧されて、全部寺が山の方に動いているんです。ですから普通のソウルの辺りでは寺はみられない状態ですね。山にいって、私、仏教徒じゃないからよくわからないんですけれども、こういうことを日本語で何て言う？　ハスの何？　それをつけておいたりします。６月６日、簡単に言えば、国の為に殉職した人を弔う日になっています。７月７日、憲法記念日と同じです。８月15日、これはまあ日本から解放された日ですね。植民地時代から解放された日です。８月15日、これも陰暦です。韓国で１番大きい休日が正月とお盆にあたります。この日になると大民族が移動するといって、すごく道路が混んでいる状態になります。

正月もそうですし、お盆もそうですし、この日になるとさいしゅう？？をします。法事をするのですけれども。法事はだいたい長男の家柄だと、３代上、５代上まで法事をしなければなりません。うちも長男の家でして、ほとんど１か月に１回、２回は何かの行事があります。それで、何十名のお客さんが来て、この法事をするわけなんです。そのために、長男の家柄だというとすごくみんな嫌われるのです。お嫁さんを迎えるにはすごく大変なことになっています。

10月３日、建国記念日です。これも皆さんに配ったプリントに、タングン神話というところありますね。最初のページですけれども。タングンという人が韓国を最初の国である朝鮮を立てた記念日です。たとえていうと神武天皇が、日本を建国した日だと思えばいいでしょう。

ソウルの左側に陸地からつなげたワイミドという島がありますけれども、その上にワイミドというところにマニーサンという山があります。日本でいうと高千穂にあたりますね。日本神話の。天照大神が、高千穂に天下ったように、ハノンという神様がマニーサンに天下るわけですね。

神話？みなさんのところにあるので、それを読んでいただくとわかると思うのですけれども、神様が天下りました。地上では虎と熊が、私達を人間にならせて下さいと、祈っています。神様はあなたたちはヨモギとにんにくだけを食べながら、100日間がまんすると人間になるだろうと告げます。虎は逃げます。熊だけが残って、熊は女になります。熊女と神様が結婚して、韓国の最初の国である、「朝鮮」という国を建てたタングンという人を産むわけです。神話学者達は、これについて、日本の神話との類似性を指摘したりします。

それで、日本でも三種の神器ってよくいわれるじゃないですか、実際に日本書紀とか古事記に三種の神器が書いているわけじゃないんですよ。三種の神器というのは、平安時代、それ以来の神道の話からでた話なのですが、それと、韓国のハノンという神様が天下った時、三種の神器のようなものをもって天下ってきて、それと比較したりします。韓国も剣と鏡と玉、この３つをもって天下ったという話が伝わっています。これも韓国最初の神話テキストにそういうものに書いているんじゃなくて、その次の時代が下って、言われた説なんですけれども、それを比較したりします。

このプリントで、１番最後の段落を見るとここで熊は人間になり、虎は人間にならなかったというのは、熊と虎を世話していた２つの部族が戦い、熊を崇拝する部族が勝ったことを意味します。みなさんはこの段落をみて何を思いますか。

私がこれを見て、ぱっと思いついたのは、なぜ、意味します、なのか。意味すると思います、と言えばいいですよ。意味します、と誰もいえないものを、神話の時代というのを誰も言えない、何があっても。それは検証不可能なものを、皆さんがよくみかける本や雑誌やテレビで見かけるように断定した表現を見ることができるわけです。

これを見て人々は鵜呑みにして、本当かよという感じにうけとるわけです。とても危ないことだと思います。この神話で私が得たことは、人々が何かを成就するために、ヨモギとにんにく、つらいことを象徴するものですが、それを辛い経験をしながら、自分のことをやりとげないとそれは意味がないとか、ということを私は感じとりました。

その次、結婚式です。昔はこのようにやるみたいですけれども、今は昔の伝統的な結婚式はなくなりました。ほとんどなくなりました。やる人もいるのですが、あまりないですね。この真ん中にニワトリを置きます。あとまた、めでたいことで、食べ物を積んでおきます。赤いものをくっつけるのですね、女の人は、なぜなのかはそれはわかりませんが。お辞儀をして、宣言をしてやるみたいです。

今は普通の人々だったら、日本は神式だとか仏教式だとかあると聞きましたが、それはないですね。ほとんどの人が、結婚会館というところか、それとも結婚式場か、ホテルを借りてやります。これは、新郎じゃないんですよ、新郎はこの前にたっています。これは新婦の親か、親がなければ、一番近い、親戚関係の人に頼んで、一緒に歩いていきます、新婦と。前に新郎がいて、継がせるわけです。あなたにまかせますよという意味で継がせます。

日本では仲人が前にたっていると聞きましたけれども、韓国は仲人じゃなくて、社会的に身分のあるとても有名な人、それか、兄の場合を例にすると、学校の先生に頼んだり、それか、義理の兄の場合を例にすると、会社の社長に頼

んだりして、前で、スピーチをさせるんです。彼等の結婚を宣告します、という話をやらせます。

結婚式の時、お客さんも、お金、日本はちょっと高いと聞いたんですが、そんなに高くないです。一番安いので日本円でいうと３千円から、５千円、１万円、２万円、このような順番でいきます。公務員は、韓国ではお金の無い人と呼ばれて、彼らは３千円ぐらいをだすそうです。値段は葬式の時も同じです。封筒は別にきまってなくて、白い封筒に自分の名前を縦で書いて、それで、式場に入る前にだせばいいわけです。これはペペと呼ばれているものなんですが、結婚式、さっきのものが終わってから、だいたい、30分、20分で終わりますが、次の部屋に移動します。

この移動しているのは、新郎側の家族だけです。もともとは。最近はそれも男尊女卑だといって、新婦側の家族も参加したりします。こちらの前に置く物は女性側が用意しなければいけません。これは、仲の良いことを象徴するおしどりを置きます。ナツメと栗とかは決まって置きます。なぜかというと、このように新郎側の親戚や人々がすわったら、お辞儀をするのですよ。お辞儀をするとこの人々は、封筒にお金いれて、食卓に置きます。これはあとでの新婚旅行の旅費になります。置いた後、栗とナツメを投げます。これはたくさんの子供を産んで下さい、という意味だそうです。

さっきあの結婚式の時に、３千円、５千円といったのですが、日本もそうですね、４がはいるのが悪い数字だといって、いれないです。最近は離婚率がひどくなってきているといって、ほとんどの人が子供が産まれない限り戸籍をいれないことになっているみたいです。それで、戸籍がきれいだから、私はまだ結婚してないということで、結婚してることを隠して、結婚する人も何人か見ました。

その次もみなさんに配ったプリントにもあります。韓国で結婚式の前にハムを渡す行事があります。ハムというのは、箱という意味です。カンという漢字をつかいます。新郎から新婦へ贈り物や書状がはいっているものですけれど、日本でいうと結納にあたります。私、結納を見たことなくて、何がはいるのかわからないのですけれども、こういう大きな箱に、旅行鞄でも良いです、その箱に女性にあげるハンドバックだとか、結婚を象徴する金の指輪、金のネックレス、ルビーのネックレス、ルビーの指輪、こういう飾りものを入れておきます。

それをもって、結婚する前日にやる場合もありますが、だいたい１週間ぐらい前に新婦側に行きます。右側の絵を見ると男の人が、イカの面をかぶっています。それは新郎ではなくて、新郎側の一番親しい友達がかぶったりします。ハムサセヨといって、箱をかってください、箱をかってください、と大きな声をだしながら、新婦側の家に行きます。だいたい、６時７時頃に行きます。そうすると、皆が、見物に町中の人々がでてくるわけです。それを見ながら、どこどこのお嬢さんが今、結婚するんだということがわかるわけです。

そうするとこの女の人の、新婦はでないですが、新婦側の友達がでます。友達がでてきて、どうかこの家にはいってください、はいってください、とねだります。そうすると、男側が、歌をうたってくれ、踊りをおどってくれ、お酒をついでくれと、色々要求します。実際、私も参加したことがあるのですが、すごく恥ずかしかったのが、本当に道端で、町中の人が見てるんですよ。そこで変な踊りをするわけですよ。何人かの女のお友達が。それをしながら、でも、はいらないんですよ。はいってください、はいってください、といってもはいらない。それは基本になっています。

はいらないと、その次に女の人の側が用意した封筒に１万ウォン、２万ウォン、３万ウォン、５万ウォン、お金をいれて、はいるように下に

置くのです。置くとその封筒を踏みながら、新郎側の友達が新婦側の家にはいるわけです。そのお金は結婚式の後披露宴というのがあって、日本の披露宴は家族が出席するみたいですが、韓国の披露宴は友達だけ出席します。その披露宴のお金として集めているそうです。うちの兄の場合は、このお金は女性の側の負担になりますから、すまないといって、あなたとあなたの友達、２人だけでいいといって、２人でいったのですが、姉の場合はだいたい６人、７人きて、すごく騒いでいたような記憶があります。

葬式です。結婚して人生の半分も過ごしたかと思えば、次は葬式です。人が死ぬと最近はほとんどの場合、病院に運びます。病院に葬式場がついているわけなんです。部屋を借りるのがだいたい、１日100万ウォン以上ぐらいかかるそうですけれども、このように全部用意してくれるのです。物を置くものも決まっています。お客さんは黒いスーツできて、さっきの３千円、５千円、１万円ぐらいのお金をだして、喪主に挨拶して、その次に線香を立てます。線香を立てて、お辞儀を２回半します。死んだ人に２回半、生きている人には１回半します。正月には１回半するのですけれども。死んだ人の写真を花で飾ったりします。日本は早めに帰ると聞いたのですが、韓国はずっとやるんですよ、３日間。ずっと夜明かしをしなければならない喪主達はすごく大変です。この式場の横に小さな部屋がついていて、喪主はだいたい家族２、３人いるじゃないですか、その人々が交代で寝ます。ずっと立っていなければなりません。お客さんが来るから。

なぜこのようなのがあるかというと、韓国はお客さんをすごく多く呼びます。そうすると地方からもあがってくるんです。地方からあがって来ると朝２時３時とかになるわけです。そのお客さんを迎えるには夜明かしをしなければならない。それで、みんなと一緒に悲しみましょということですね。

３日目の朝の日に家族達を呼びます。私は父の時に出席したのですが、くるくるまわすんです。その麻で、死体を。まわしてまるでミイラになるようにして、口の中に偽物のお金を入れます。あの世にいく旅費という意味でしょうか、日本もあるんですかね。それで、３日目、埋葬地にいきます。

日本はみんな火葬ですよね。韓国は火葬か、埋葬かどちらかです。火葬はまだ、どっちかというと親不孝をする感覚をもってます。無くなるという感覚があって、これも社会的な問題がありまして、すごい小さい国に全部墓地化すると国の土地がなくなるんじゃないかということで、問題になって、どうか、火葬をして下さいといって、国的に納骨堂をつくったりしているんですが、まだまだ、埋葬する人が多いです。

うちも全部埋葬したのですが、埋葬する時に棺のままで死体を埋める場合もあるし、棺をそこで焼いて、死体だけを埋める場合もあります。それは地方によって異なります。３日目がそのように終わってから、４日目は何も無いです。

５日目もう一度家族達が墓参りにいきます。それで、その時まで着ていた黒い服を、病院で用意している服ですけれども、それを焼きます。それで、韓国の葬式は３泊５日制と呼ばれています。

日本と違うのが、これは私はすごく衝撃だったのです。先生の葬式に行ったのですが、喪主達が少し微笑みながらお客さん達を迎えますね。たまには笑う人もいました。これは韓国ではありえないことです。私は１回ちょこっとこれぐらいお客さんにしたことでものすごく怒られたのです。喪主が笑うことはありえない、あなた、親不孝している、あなた、悲しんではないのではないかとそのように悪口をいわれます。

しかも、日本の葬式に行ったら、すごく親切に笑いながらお客さんを迎えていて、しかもとなりの声が、しっかりしているね、という話が

聞こえたのです。先生のお父さんが亡くなった時も、もう４日目でしたが、先生の大きなシンポジウムがあったのです。韓国だったらありえないです。葬式があって、次の日にシンポジウムに参加するというのは、けしからん、ですよ。

出席してちゃんと講演をして、しかも飲み会にも出席して、わははははと笑いながら飲み会を楽しんでました。もう、絶対ありえないことです、これは。後、韓国の葬式に行って、そういうことはないと思うのですが、喪主が誰なのか区分するには、男の喪主は腕に麻で作られている腕章をつけます。女の人の喪主は白いピンをつけます。それで区別します。

死んでから、法事ですね。このように物を置く場所だとか、置く物だとか全部決まっています。梨とりんごはこのように上の方だけ皮をむいて置きます。魚の干し物も必ず置きます。魚も置きます。後、これはお好み焼きみたいなものなんですが、チヂミを起きます。後、飴も３つ置きます。栗とナツメは剥いた栗、ナツメ、これも必ず置きます。これをちゃんと順番どおりに置かないと、これも礼儀正しくないとよくいわれて、みんな勉強してるわけですね。それで法事をやりますけれども、さっきも言ったように、長男の家柄が大変で、これが、すごい問題になっています。

これからは、韓国の文化の話はやめて人がどのように生きているのかをみてみたいと思うのですけれども、この顔の写真を見る限り、すごく楽しんでいるように見えます。これはサムスノリといって、４つの伝統的な楽器をつかって遊ぶ能楽、農民達の遊びです。小鼓と太鼓、チントケンガリと呼ぶのですが、この小さいものをもっているのが、１番のものです。テンポをつけて、音楽を楽しみます。

この間、たぶん新聞でもみたと思うのですが、韓国の重要文化財である、南大門に、ある人が放火しました。年は確か60歳ぐらいで、チェなんとかいう人だったんですけれども。国に、土地を売って、彼が願っていたお金が4,500万円ぐらいもらえるはずだと思っていたのに、1,000万円ぐらいしかもらえず、それがすごく不満で放火をしたそうです。それがなぜ、南大門と関係があるのかと思うのですが、でもその人は、自分の不満を人のせいにしたわけです。他のところにぶつけて、このように重要文化財を無くしてしまいました。

彼はお金のために、自分の怒りと不満を他の所にぶつけたのですけど、障害をもっていても一生懸命生きる人もいます。この人は20歳のイヒアというピアニストです。生まれつき指が２つしかないのです、両手が。でも、ピアニストであって、２つの指をくださった神様に有難うと言ったことを聞いたことがあります。この人はインターネットでピックアップした記事ですけれども、一方の腕と一方の足がないですね。この人の顔から自分の人生に対する不満は見えないです。この人はオスニという人で、事故で両方の腕をなくしました。絵に興味があったみたいで、大学にいって勉強して、今はタンコク大学、結構良い大学ですけど、そこの大学の東洋の美術の先生になっています。この人は障害じゃないのですが、世界的に有名なバレリーナです。カウスーチンという人です。この足が新聞にでた瞬間人々はすごく驚愕にさいなまれたんですね。人々の目にはすごく美しくて、とても何もかももっている人に思えたのです。自分の話をこのように公開した瞬間、この人はここまで登るためどれほどの苦しみや、努力を積んできたかが分かります。

でました。さっきの方の関さんと、韓国の大統領です。この人だれですか、奥さん？彼が有名なのは、この言葉です。月火水木金金金、絶対休まないといわれています。毎日４時間しか寝ないといわれてます。彼が大統領になってから、今、公務員社会が揺れ動いています。自分が休まなければそれでいいのに、相手のことも自分の部下たちも休ませないようにしているよ

うです。もともと国務の会議は9時半から始まるものを、8時からはじめようとしました。8時からはじめようとするとすべての部下は6時に出勤しなければいけない。それなのに、夜はまた、家に帰れない。それですごく不満が増幅しているのです。

この間それを批判するジャーナリストが、だいたい頭が使えない人間が体でこんなに苦労させるんだという話をしました。でも、この間大統領の代弁人が、世の中は頭と体と両方を使わなければついていけない。私は頭と体と両方、つかいます、と言っていたそうです。

後、彼の有名な話は奴隷論ですね。国の主人は国民であって、自分は奴隷であると。公務員はみんな奴隷であると。主人が起きる前に奴隷が何時間も前に起きて働くのはあたりまえだとそう言ったそうです。色々問題があるのですが、この人はすごく貧しい環境で育っていて30代に、たぶん皆さんご存知だと思うのですが、30代に苦労しながら勉学に励んだそうです。そのすごい一生懸命ぶりが多分会社でもそういうところを買ったと思うのですが、社長になります。その後、彼はその会社をやめて、ソウル市長になります。

チョンゲチョンという川をみたことあると思うのですが、そのチョンゲチョンを、もともとすごく汚いところだったんです。商店街でした。うちの近くにあります。それをきれいな川に変えるということを発表して、すごい反発をうけました。商人達は自分の足の置き場をなくしますし、自分の商売がどうなるのかと心配したわけです。それで、ハスのおけをもって、彼に脅迫したそうです、あなたを殺すぞといって。それにも屈せず、その今の綺麗な所をつくったわけですね。

それで、彼はブルドーザーというニックネームをその時にもらったそうです。私は実は彼はあまり好きじゃなくて、たぶん、もし大統領選挙にいったのであれば、選ばなかったはずです。なぜかというと、色々疑惑がかけられていたわけです。テレビとか、新聞で見たと思うのですが、不正の疑惑がかけられていて、そこまでして、そんな問題のある人を選ぶ必要があるのかとそう思ったわけです。

人々がなぜこの人を選んだかというと、韓国でも日本と同じく、すごく格差がひろがっていて、昔は、ソウルの駅でホームレス、そういう人をほとんどみたことないのです。でも、そのアイ？時代の次から次へとホームレスが多くなって、あと、ニップ？日本とまったく同じ現象が行われていて、人々が食べるのに困っていることがあって、金持ちはだんだん金持ちになって、その問題をなんとかしようということで、彼じゃないとこれをこの経済的問題を立て直す人はいないと人々は判断したわけです。

うちの家族に聞いたらね。みんなこの人を選んだそうです。そういうのはあまり好きじゃなかったわけですが、この間の新聞、彼が演説をしたのですが、その演説の文章を読んでちょっと気が変わりました。それは、変化の概念を取り入れてしゃべったスピーチの文章だったのですが、それはそうと、私も自分の中で変化という概念はとても大きな比重をもっています。

彼が言ったのは、自分は昨日と今日と明日が違う。昨日、自分を見た人は、今日の私を判断することはできない。今日私を見た人が明日の私を判断することはできない。私は常に発展して変化している、と書いてありました。

韓国のインターネットの新聞記事は、下の方に、自分の意見を書けるようになっています。それで、人々の世論がわかるわけです。下には全部、だからあなたは信じられないんですよ、という悪口ばかりを書いてありました。

でも、私が思ったのはそのように自分の変化を徹底に認識している人間は、相手の変化も感じているはずです。相手の変化も他の人々の変化も、人々がどのように変わって、どんな間違いをしてもそれを反省できる、それを発展に結

びつける、そういう力があると思っているはずだと思いました。自分はそうであると相手もそうである。そのようなことをわかっているはずだと思いました。それで、ちょっと気が変わって、あ、この人はちょっと信じても良いのではないか、ということになっています。

この人はパックネという人で、パッチョンヒネルといって、すごく有名な人なのですが、1963－1978年まで、大統領をしていた人、ハクチョンギ大統領という人の娘です。この人は、もしこの人が出たなら、私は彼女を選んだはずなのですが、ハンナラ党というイ・ミョンパクとこの人が闘って、この人が負けたわけです。それで、イ・ミョンパクが他の人と決戦して、彼が大統領になったわけです。1970年代のそのハクチョンギ大統領はすごい韓国を経済的に発展させた大統領として有名です。しかも、彼女のお母さんである、イ・ヨンスという人は、今までの大統領は、何人かいたのですが、みんな誰にも注目されなかったのです。彼女の母だけは、国の母と今でも呼ばれています。

その人は貧しい人々、何かのいろんな障害をもっている人、そのところに、彼女の足が運ばないところはないといわれています。今は、ラビオ患者ですか、それが、今は、伝染病でなくなってきているのです、どうなってるのですかね。昔は伝染病だったんです。ラビオ患者達が集まる村がありました。その村は誰もはいったことがないのですが、彼女の母だけは、はいって、その人々と握手をした写真が公開されて、人々にすごい感動を呼び起こしたのです。

でも、彼女は、日本にいる北朝鮮人によって、暗殺されます。大統領を殺そうとしたと思うのですが、彼女の母が暗殺されます。その次の次の年ですか、お父さんである大統領も、当時の中央情報大臣ですか、その人に暗殺されます。次々と自分の親が暗殺されていることをみると、この人は何を感じたのだろうかと強く思います。

この人のホームページに入って、当時の気持ちを見たら、こう書いてありました。人々は幼い自分が正気を失うのではないか、と心配していた。このような大変な時期に生まれたことを恨んだりもしたけれど、岩に波がぶつかる姿を見て、岩のように生きようと思いながら、克服した。

私はこれを見た瞬間、なぜ、岩にならなければならないのか、ふと思ったのです。それは、昔から私も、自分が何の感情も感じられない岩になりたいとずっと思っていたからです。大変なことがあったときでも、私は人に言う性格ではありません。電話番号帳を開いて、そこに、全部ぶちまけます。言いたいこと全部吐き出したあとに手帳を閉じます。人々は私と同じように苦しみを感じる中で生きていると思うのです。その人々に私の苦しみまで、かぶせることはできないのです。

でも、彼女の文章を読んでいるうちに、世の中の物事はすべて何かの理由があって、行われるのではないか。岩になろうとしたら、その岩になるための理由はあるはずだと思いました。

たとえばこういうことです、日本人の性格もいろんな気候だとか、食べ物だとかそういうことによって形成されるのですね。人々の性格は環境や自分の経験によって作られるものです。そのようにほとんどの場合何かのことには、理由があるはずです。私は彼女の写真をスクラップし、その次にそこで、こう書き込んだ覚えがあります。

そのまま、ハングルを日本語に訳しました。大きな岩に頼るのではなく、自分が大きな岩になろう。そして、他の人がよりかかることができるようにその場を平らにするのだ。子供達の落書き板になろうが、とがった錐でもまれようが、その場にいてよりかかることのできるそういう岩になるのだ。とてもおおげさに思えて、率直にいって、恥ずかしいのですが、これは常に自分にいいきかせている言葉です。

自分が今何かの苦痛を感じているのであれば、それは何かに向けてあとで使わせるはずだと思います。昔神様が私に、何の変哲もない人生と毎日が幸せな人生とどちらを選ぶのか。それを選べと、私に選択権があったとしたら、私は何を選ぶだろうか、と思ったことがあります。

答えは後者でした。私はすごく好奇心が多くて、もし、毎日がすごく幸せであれば、何も感じられないのではないか、私は何も得られないのではないか。そういうことを感じています。ですから、いくら辛いことがあってもそこから学ぶものを選ぶはずだと思っています。

ここまできて皆さんに、私は人の生から死までを見せたのがわかると思います。ちょっとふざけて文化の話をして、おもしろい話をしようと思ったのですが、結論はこういうことです。

この人は知らない人です。うちのおばさんではありません。これは、もう世の中で一番可愛いうちの甥と姪です。今は小学生ですけれども、これは幼稚園のとき、この子は兄とそっくりです。ちなみにうちの兄はめちゃくちゃカッコいいです。

私の宝物なのですが、この祈りは、幼い時に、なぜこれをのせたかというと、たぶん私が小学生になる前のときだと憶えているのですが、祖母の祈り声に私は目を覚ましました。祖母が、自分の家族が健康でありますように、あと、この子達が成長して人々の力になりますように、そう祈ってました。読みます。

私は自分が目を覚ましたのを祖母にばれるか心配で身動きもできずに、ただただ、祖母が健康で長生きできるように、泣きながら祈りました。私は昔、どうせ死ねば終りだと、何週間も無力感にさいなまれたことがあります。どうせがんばったって、何にもならないのではないか、棺の中にはいるとそれですべて終りではないか、今、がんばったって、何の力がはいっているのか、何が残るのか。身の回りのものがすべて、荷物のように思われました。今もそれはかわりません。

母が何か物を置くと、私は、物を増やすな、爆発寸前だ、部屋が荷物で多くて、と怒ったりします。でも、それは他人を気遣うロータリアンの皆さんと出会ってから、少しずつ考えが変わってきました。ある日、布団の中で思ったのです。朝起きた時の感覚だったのですけれども、すごく暖かかったんです。自分はこの布団を作れるのかとふと思いました。作れないです、私は。自分がこの田んぼが作れるのか、作れない。この家が作れるのか、作れない、私には何もできません。

私は東大で勉強している人間ですから、東大人が何を食べるのか写真を見ましたけれど、その写真のおぜんにのっている食べ物すら私は作れない人間でした。私に何ができるのか。何かをやろう、今まで考えてみたら、全てのことが皆の力のおかげで私は生きてきたわけです。そうすると何かを返さないといけない。昔はテレビのコマーシャルで、顧客のために、みなさんの幸せのためにがんばります。こういうコマーシャルがでると、また、宣伝かよと思ったりしたのですが、今はその中で本当のこともあるのではないかという思いをするようになりました。

本当のプロ意識というのは、結局、自分のためではなく、相手のために動いている人の心から生まれてくるのではないかと思いました。私はこの真ん中にいる人間です。私もいつかは、祖母のように死んで、棺の中にはいると思います。昔はすごく人が生きるというのはとても虚しいことだと思ったことがあります。その虚しさで何週間も無力感にさいなまれました。でも、それが、自分が、すごく単純な考え方をもっていたと、ある日、気づいたのです。

自分の人生だけを考えると、虚しいと思うしかありません。自分が何をやったって、何の名誉があったって、何のお金をもらったって、もうけたって、結局それは、つかの間のことで、



棺の中にもっていく物は何も無いです。でも、それを私を真ん中にいる瞬間の自分であると思うのであれば、祖母の祈りをその次の子供達につなげることができるのではないか。

今まで人々から、受け継いだ遺産だとか、もらったものを次の人に受け継ぐために頑張っていくこと。それは、虚しいことではなく、意味のあることではないか、そう思いました。

先月韓国に１週間帰ってきました。うちの甥に声をかけたのです。最近任天堂DSのゲームに夢中です。一生懸命やっている子供で、「おいおい、後で何になる？　あなた将来何になりたい？」と聞きました。「外交官」と答えます。「なぜ、外交官になりたいの？」と聞きました。「そりゃあ、旅行が楽しいから」と言います。いやあ、何か足りないでしょう。私は外交官になって、何かのために誰かのためにつくしたい、そのような答えが聞きたかったのです。

それで、少し話を変えてみることにしました。「良いね、あなたこんな良い物をもらって、また、服も可愛いじゃない、嬉しいね。こんなに良いものもらったのだから、何か返さないとね」と言いました。親が答えます。「寄付すればいい」。「いやあ、寄付もいいけれど、何か根本的に考え方を変えないとね」と私は言いました。その時まで、ずっと任天堂のDSをしながら、私に答えていた甥がぱっと目を上げて、私をじーっと見て言います。甥が、「おばさん、私、ゲームがしたい」。まだ、甥に言うには、時期が早いかもしれませんと思いました。

でも、いつかこの子はわかってくれると思います。生きることはとても短い時間だと、人々はその時間をいろいろな過ごし方でつかうけど、どれが価値のある人生なのか、それを自分で思い起こす日があるだろうと思いました。自分の不幸を人のせいにして、自分の道を一生懸命、歩いていくその姿を見守ってあげたいと思います。また、今度韓国にいくときは、姪に同じ声をかけるつもりでいます。

皆さんもどうでしょう、これから。自分の甥と姪がもしいるのでしたら、息子、娘はいないでしょうから、甥と姪がいるのであれば、声をかけてみませんか。何かをもらったのであれば、今まで、何かに感謝したのであれば、１万分の１、100万分の１でもいいから、返せと。

ここで、２部の話の予告をして、１部の話を終らせていただきたいと思います。２部では他者を見るまなざし、日韓関係のお互いを見るまなざしについて話をさせていただきます。

私は、韓国と日本にまたがっている人間でして、よく日本人が韓国人の悪口を言うことを聞き、韓国人が日本人の悪口を言うのを聞きます。その話を聞いた時に、本当にわかっているのか、ということを聞きたくなります。この写真は全部日本のものからひっぱったのですが、日本では、お箸はこのように置きますね。基本的に韓国ではお箸をこのように置きます。それで、お互いに違う視線で見ていているのではないかといつも思うわけです。それをプラスにすれば一番いいのではないかと思って、これをピックアップしました。休憩を10分ぐらいはさんだ後、話を続けたいと思います。（拍手）

再開します。

先ほどは寝る方が５人ぐらいいたのですが、実は私もすごく眠くて、２日間２時間ぐらいしか寝ていないのです。それで、しゃべっているうちに私は寝てしまうだろう、寝言をいうだろうと思っていたのです。どうだったのでしょう、寝言をいったかもしれません、途中で。これか

らは、ほとんどの場合、文章を読むと思います。私、日本語が上手でないので、そのまま、しゃべるには、ちんぷんかんぷんになると思いますし、やっぱり、読んだほうが、皆さんの頭に入りやすいと思います。

この話はとても私の個人的な話で、うちの祖母の話にはいるのですが、私は祖母の話をするときはいつも泣きます。ですから、途中で泣き出すかもしれませんが、頑張って、にこにこしながら、話をしたいと思います。今回、私がここに呼ばれたのは、さきほども話があったように、去年の９月、日韓親善大会で私が、奨学生の代表として30分スピーチをしたのですが、それがきっかけとなったそうです。

当時の原稿は、ロータリーの友という雑誌が毎月発行されているのですが、その２月号にほぼ全文載せられています。２部はその話の続きをもってはじめさせていただきます。

「チャングンの誓い」というドラマありましたね、私すごくおもしろく見たのですが、その「チャングンの誓い」のある場面、そこから私はチャングンが何かの自分の役、技術について私はうぬぼれていたという話をする場面がありました。その場面を見て、私は、改めて、すべてのことについてわからなさを悟るようになった、自覚したという話をしました。その中で人に対するわからなさの自覚は、その前から、ドラマを見る前から、自分の中にしっかりと根づいている概念です。

それでは、うちの祖母の話にはいることにします。祖母は20年間アルツハイマー病でした。確かでないです、たぶん、82歳、83歳ぐらいのときだったと思うのですが、急に私の部屋に入ってきて、服を脱ぎはじめました。脱ぎはじめて、パンツでもない、パンツっぽいものから、ギジュマンをとりました。「これを何とか隠してくれ」と言います。で、「なんで、私の部屋に隠すの？　祖母の部屋に隠せばいいのに」と答えました。「いやあ、私の部屋は共産党がはいるからだめだ」と言います。「共産党がどこにいるの、今の世の中に」と言ったら、うちの父をさして、「あの人が共産党だ」と言ってました。

最初は冗談だと思ったのです。何言ってるの？というのですが、祖母の顔は、とてもまじめな顔でした。そこから、たまには、記憶が戻って、普通の人のように生活し、でもたまには、うちの家族のことがわからず、口にだしてもいけないような悪口をいったりもしました。

私達は敵にもなったり、へんな道端の人になったり、いろんな人に変化させられていきました。家族のように見える時もありますが、そうでない時もありました。道の感覚も失ったようで、たまに警察によって連れ出されて、家に戻りました。真夜中、何か音が聞こえて、２時か３時、祖母の部屋に行ったら、自分を監禁したと泣き叫びながら、部屋のものを全部投げだしていたのです。

自分でちゃんと便をすることもできないのに、おむつをするのをとてもいやがっていました。それで、母はいつも、おむつをしないからしょうがなくて、しかも祖母はほとんどの便が、胃腸がとても悪いので、下痢の状態だったのですけれど、それを毎回、布団を変えながら、毎日洗濯をしながら、過ごしていました。

家族は、だんだん疲れていきましたが、それでもなんとか一緒に暮らしていました。しかし、父の病気が悪化し、母が、父とともに一緒に病院にはいることになりました。母は、私にこれはもうどうしようもないと言いました。誰かが祖母と一緒にいなければいけないのですが、兄は、会社、姉も会社、誰も祖母の面倒を見る人がいない。ですから、祖母を病院にいれようという話になりました。

私はあのとき、大学院の助手でした、大学院の助手は、綺麗な人を助手として選ぶのではなくて、成績優秀な人を助手として選びます。助手でしたけれども、じゃあ私が何とかするから、

祖母を病院にいれないでいてくれました。何か理由はわからないのですが、祖母を病院にいれることは、そのように離ればなれになり、家族が家族じゃなくなるという感じを私はうけていました。

学校の助手をやめることにしました。やめると少し時間ができるので、何とかできると思いました。でも、やめてもそれから毎日学校、病院、家をいったりきたりしました。1日6回も家に戻りました。何で、病院が1時間半かかるところにあるのよ、なんで、学校は40分もかかるところにあるのよ、とひとりでぶつぶついいながら歩きました。

その日もまた、朝、家をでて学校に行って、授業を受けて、また、家に戻って、洗濯機をまわして、干した物を戻して、アイロンをかけていたのです。その前に祖母の食べ物のお膳を部屋の中に入れて、洗濯機をまわして、また、アイロンをしていたのですね。そのとき、私の次の後任の助手から電話があって、どうしても電話を切ろうとしません。韓国で一番有名な話が、象を冷蔵庫に入れる方法。象、大きな象。これを助手にやらせるという話があります。それほど助手の仕事は色々大変だといわれています。先生と学生達の板挟みになる場合が多くて、いつも、とてもストレスがたまる仕事でした。

でも、私はいつもニコニコしていたので、彼女は私がニコニコしているから、それが、すごく楽しい仕事だと思っていたらしいのです。電話で、私に文句をぶつけるのです。姉さんのせいだ、これは。なんで私をこんなはめにはめさせたのか。本当に大変でどうしたら良いのかわからない。私はアイロンをかけながら、これ終わってまたあの病院に行かないといけないし、話をしたくなかったのです。

でも、私は、自分のことや家族のことを人に言ったことなくて、彼女に何も言えなかったのです。どうか、早く終わってくれ、終わってくれと思いながら、アイロンをかけていました。

その時です、いきなり、何かが流れてきました。私は居間にいたのですが、そのところに大便まじりの水があふれて流れてきたのです。何かがあるらしい、ちょっと大変、電話切るからごめんね、といって、電話を切りました。

あわてて祖母の部屋に行き、ドアをあけた瞬間、祖母は、何気なく水だらけの大便だらけの中で座って食事をしていました。祖母の部屋の横にシャワー室がついているのですが、そのシャワー室から水の音がしていました。あけてみたら、たぶん、私は洗濯機の音と、あと後輩の電話の音のためにその音に気づかなかったわけですね。シャワー室の上から水が落ちていて、洗濯室が全部うんこがついてるものだらけで、あちこちに並べてあってそこにシャワー機が落ちているから、大便のまじったその水が飛び散ってるわけです。それが増えちゃって、詰まってるわけですね。ですから、水が流れずにそれがすきまを通して居間まで流れてきたわけです。

それを見て、昔、母が祖母に叫んだ時があったことを思い出しました。どうしろというのよ、と叫ぶところを見て、何で、罪のない祖母に叫ぶのか、と母に怒ったのですが、その時に、同じく母のように叫んでいました。それはどこにむけられているのか、自分もわからなかったのですけれども、完全に泣き叫んでいました。

あの時、思ったのは、他の家族がみんな外にでている時に、母ひとりでどれほど苦しかったのか、ということです。母と全く同じ経験をしていない私が、母に何をいったのか、反省をしはじめました。

それから、父は亡くなり、私は1年半後、自分の専攻である日本の上代文学は韓国に資料がほとんどないので日本で勉強するしかないといういい訳をして、日本に来ました。東大に合格しました。その薄っぺらい紙一枚で、祖母を捨ててきました。

そして、何か月後、母から祖母を病院にいれ

たという電話をもらいます。母曰く、結構良い病院だし、色々よく面倒見てくれるところだといわれるし、良い所だよといいます。私は自分が捨ててきたのだから、何もいえずに、ただただ、うんうんと聞いているばかりでした。

夏休みのとき、韓国に帰り、祖母の病院を訪ねました。もともと、家族が訪問する日ではなかったのです。招かざる客でした、私は。行ったら、祖母は縛られていたのです、ベッドに。誰が私の祖母を縛ったのかと、わんわん叫んだら、あるおばさんがきて、うちも大変だよ。あなたのおばあさん毎日、壁に大便を塗っているのだよ、というのです。それで、縛ったものをほどきました。うちの祖母の趣味、生活です。とてもそれを楽しんでいました。自分の大便をこう、さわって、部屋中に塗って過ごすのです、自分の部屋だけではなくて、あちこち塗ります。

私は鼻がにぶくて、大丈夫だったのですが、他の家族は大変だったようです。でも、彼等が私の祖母を縛ったことについて、私は何もいえませんでした。ただ、結局、うちの祖母の面倒をみてくれるのは、彼らしかないのだから、ただ、有難うといって、いろんな食べ物だとか、プレゼントをもって、挨拶に行きました。

日本にきて1週間ぐらいたったと憶えています。今度は私は祖母が亡くなったとういう電話をもらいます。祖母が病院にはいってから、3か月ぐらいたったときのことでした。死因は心臓麻痺だそうです。しかし、次にでた母の言葉は私を凍りつかせました。「おばあさんが、風邪をひいて肺炎になっていたようだよ」。日本にくる前日、祖母が私に寒いと言いました。外は完全に真夏日。病院の中も冷房を弱めにしていたのか、ほとんど汗を流さない私が汗を流すぐらいですから、ほぼ30度近い気温でした。私は祖母が病気だから、たぶん、思い込んでいるだろうと思って、何言ってるの、といって無視したわけです。

でも、母の電話を聞いていて、気づいたわけです。うちの祖母は、春夏秋冬関係なく、いつも冬の服を着ていました。その服に慣れていたはずです。でも病院では、患者服1枚だけ。うちの祖母は病気を一度もわずらったことがないのです、私の記憶によると、ほとんどの場合。この頭だけがちょっと変でして、あとは何の問題もありませんでした。風邪をひいたことを私は何十年も見たことがないのです。その人が病院にはいって、3か月で亡くなりました。病院にはいらなかったら、風邪なんかひかなかっただろうに、いや、私があのとき、少しでも祖母に服を着せたら、少しでも祖母を暖かくしてあげるように職員に頼んであげたら、私が日本に来なかったら…。

葬式のとき、涙1滴も流せませんでした。私に涙を流す資格はないと思いました。母が言います。私達みんな、力をあわせて、祖母を殺したよね。私は何も答えず、拳を握ったまま、体を震わしていました。日本に帰って、私は、祖母と同じような状況に自分を置くことにしました。祖母と同じく、何も聞こえない、ほとんど聞こえなかったのです、何も見えない、何も見えません。インターネットも見ませんでした。本も読まず、外にも出ず、テレビも見ず、食事は適当にすませて、じっと座っていました。

私は全ての世の中の刺激を自分から遮断して、祖母とできるだけ似ている状況にしてみようと思いました。1日、2日、3日、もう頭が変になりそうな気がしました。4日目の朝、私は大声をだして外に走ってました。人から視覚、聴覚、触覚、感覚の器官が遮断されて、何の感情も感じられなくなった時に、人々は、正気を失うのだ、そう思うようになりました。

結局、祖母がアルツハイマー病にかかったのも、我々家族のせいではないか、そう思ったのです。見ることができなかったら、大きな彩りの色をぬった、何かの色でも見せるべきでした。聞くことができなかったら、大きく叫びながら、昔話でも話すべきでした。動けなかったら、背

負ってでも町中を見せながら、その感動を味あわせるべきでした。

私の部屋には曾祖父から、祖父、父と母、甥と姪の写真まで、全て、ぱーっと飾ってあります。貼ってあります。それは自分が間違った道に行かないように自分を戒める意味で、置いたものですが、祖母の写真だけは、私は葬式以来見たことがありません。それ以来、私の目でしか相手が見られない。私に相手がわからせないという認識感、徹底にねじれています。わかるはずはないから、わかろうとする努力をします。

私は韓国語を個人レッスンと団体レッスンでやっているのですけれども、常に学生の立場で考えます。英語、中国語も個人レッスンと、団体レッスンで同じく学生の立場になって、その学生達が先生を見て何を感じるのか何を求めているのかを考えます。何か、相手の行動に嫌な思いをしたときは、私に相手のことがわかるはずがない、と常に自分に言い聞かせます。

私も人間ですから、他人に怒ったり、悪い思いをしたりする時があります。その時は、ほぼ１年もたたないうちに反省文を書きます。私はその人のことについてわかる筈はないと。たとえばこういうことです。これも１か月前のことだったのですが、とても寒い日でした。私はアルバイトに行っていたのですが、目の前で、ほとんど胸を丸出しにした女の人が自転車に乗って走ってきたのです、私のところのほうに。瞬間的に眉をひそめました。なんだ、そんなに自慢したいのか。でも、何歩もいかないうちに、私はまた、反省をしはじめました。私の胸は彼女のように大きくて、昔から人々に褒められてきたのか、いやいや、絶対違う、私にそんな覚えはない、じゃあ、そういう人であるならば、あの人の気持ちはあなたにわかるのか、いや、私はわからない。それなら、それが、認識できないのなら、そのように相手がわかることができないのなら、あの人のことをすべてそのまま受け入れるべきではないか、いってみれば、そういう反省を繰り返しているわけです。

それでは、日韓のお互いを見るまなざしはどうなっているのでしょうか。この間「女性の品格」という本を読みました。どうしても読みたくなかったのです。あまりにもマスコミで騒いでいたのですが、先輩達からも読んでみて、と薦められたのです。目次をみると、これ当たり前の話じゃない。なんで、こんなことに時間を費やさなければいけないの、と思ったわけです。それで、ずっと読まなかったのですが、テレビに彼女がでて話をすることを聞いて、この人はとてもいい人だなあと思って、じゃあ読んでみよう、で読んだわけです。

読みながら思いました。ここが日本だから、ベストセラーになったんだなとつくづく思いました。私からいうと、日本人ほど、他人のことを気にする民族はいないと思います。しかもそれが人に迷惑をかけていけないという認識が徹底していると感じています。それは先ほどの箸の置き方から、能の足の動きからも、三味線の音のとぎれからも感じられます。また、まるで、ひかえ目の美学、私は呼ぶのですが、そのような感じを受けます。それは善し悪しの問題じゃないのです。ただ、心配なのは、このような自分の視線で相手を見るのが正しいのか、それが品格と定められることは、妥当なことなのかという、それがちょっと心配でした。

例えばこの本では、人にお世話になった時に、すぐお礼状をだしなさい、といいます。他の人はどうなのかわからないけれど、たぶん、韓国人もそうですが、少なくとも、私は、嫌です。もし知り合いがこのように１回ぐらいは良いのですが、たいしてあまり親しくない時に、その時は良いけど、何回もそのようにお礼状を送って下さるのだったら、絶対、友達にはなりません。私の中では受け入れられません。

なぜかというと、自分がそうしている限り、相手からもそうしてもらいたいという気持ちがあるだろうと思うからです。そうすると、私も

そうしないといけないし、本当に、気遣うのは良いのですが、気遣うことで、本当の本質を失っているのではないか、その形式的な面だけ続く、それを大事にすると、他の内容的な面に力がなくなるのではないか、それが心配なわけです。

昔からのしきたり、それが間違っているといっているのではありません。それは、とても大事なものです。私は年輩の方々をみると常に思うのですが、本当にこの方々は尊敬しなければならないと思います。それは、私が幼い時と、今の自分を見ると、よく変わってきています。それは、いろんな経験から積んだ学んだ感情や、そこから得られた自分の価値観や考え方が変わっているからです。

そうすると、年輩の方々は、私よりも、もっともっと、多くのことを学んでいるはずです。それを私は学び取らないといけないと感じています。ですから、彼らが作った文化や儀式やしきたり、そういうことをとても大事にすべきです。ただ、大事にするのはいいのですが、一歩下がって考えてみると、この規範がどこの規範なのか、どこの礼儀でどこの常識なのか、もしかしたら、自分の常識は自分だけの常識なのかもしれない、自分の国だけの常識なのかもしれない。あまりにも当たり前の話ですが、人々はこれをよく忘れているのではないかと感じます。

私は今の大学で学んだのはまず、すべての私がもっていた常識を撤廃することでした。いくら著名な学者が書いてあるものでも、それを例文として引用すると先生に怒られます。それはその人の考え方、あなたはその人の考え方をどのような調査を踏んで、段階を踏んであなたが証明できたのか、それが証明できないかぎり、あなたはその人の話をしてはいけないと学んでいます。マスコミや出版界に自分達の責任がどれほど重いのか、もう少し考えていただきたいところです。

この間、学生からこう言われました。「先生、日本人は本当に表と裏が違うのですか？」。その話を書いた本を読んで、私は日本人と会って、日本人からすごく親切にしてもらっても、どうしても腑に落ちないのです。この人は私の前にいるときだけ、親切であって、裏返すと私の悪口を言うのではないか、そう思われるわけです。それがとても気になるといってました。

これについて、こう答えました。あなたが悪いことをしたのなら、そう思っても仕方がない。そうでもないのに、先に心配する必要はないのだ。それをいう前に逆に考えてごらん。日本人は韓国人に対して短気でよく感情を表す。ある意味では礼儀正しくないと感じる人が多い。日本人の人は幼い頃から、そのように教育されているかもしれない。相手に自分の感情を即座に表すのはいけないのだと。それは相手を配慮しない態度だと。一般的に、その場で、誤解のないように話し合う韓国人とは最初から考え方が違うのだと。

これと似通った例として、私が教えていた日本の学生との会話を例にします。学生といっても私が韓国語を教えている学生ですから、私よりは年上の男性です。昔、私は東京の吉祥寺に住んでいて、部屋が小さくて他の広い所に引っ越しをしようと、あちこちで不動産をまわったのです。でも、吉祥寺は、外国人だからといって断る場合がとても多かったのです。ある日、彼にグチをこぼしたのです。「なぜか、吉祥寺は他の所と違って、外国人というとすぐ断りますねえ」と。

彼曰く、いやあ、韓国人は汚いイメージがあるからそうじゃないですかあ。もうびっくりしました。だって、韓国人は毎日シャワー浴びないですよね。私は怒りをこらえながら、答えました。日本は韓国と比べて湿気が多いです。湿気が多いから昔からシャワー文化が発達したわけです。でも、韓国はすごく乾燥しているのです。毎日シャワーを浴びちゃうと、肌によくな

いと昔から言われています。もちろん、毎日シャワーを浴びる人もいます。それは、いちがいにはいえないと思います。

また、彼からこう言われたこともあります。「韓国人は茶碗を食卓に置いて食事をしますね。それを犬食いといいますよ」と。また、カチンときました。なぜ、カチンときたかというと、韓国で犬を人にたとえる表現はとても悪い悪口に限ります。彼は単純に言葉の説明をしたのにもかかわらず、私は、犬、人、これだけを連想して、怒ったわけです。もちろん、実際彼に怒りをだしたりはしてなかったのですが、もし、あのとき、そのことにわからずに、彼に怒ったなら、どういう反応だったでしょう、彼は。わかりません。たぶん、変な先生だ、何で怒るのか気難しい先生だと、そう思ったのではないでしょうか。

日本にきていろいろ驚くことがあります。一番驚いたのが、スポーツ新聞です。女の人のほとんど全裸写真が載っていますね、その写真を何気なくみるオジさん達の顔を見て、子供もいるのに大丈夫なのか、とすごく驚きました。また、渋谷の、何族ですか？　顔を真っ白にして化粧している女の人々を見ても驚きましたし、韓国だったら、制服を着ている人は、化粧をしたり、ピアスをしたりしてはいけないのです。私の学校の場合を例にすると、髪の毛はひっぱって、ここまでこないといけないし、スカートをひっぱってここまで、ひっぱらなくてもここまでこないといけないのです。そうじゃないと、点数が削減されるわけです。

それを、日本の人々はどう思っているのかというのが、最初は（今はそうではないのですが）気になってました。また、テレビを見ても、芸能人同士が頭を殴る場面があるのですが、それを見て、最初はとても心配したのですね。何か、起こるのではないかと思ったのです。

なぜかというと、韓国では頭を殴るというのは、親の侮辱をするという意味なのですよ。ですから、絶対、いくら親しい友達同士であっても殴ってはいけない、触るのもあまりよくないことです。なのに、殴り合いをしていたのですから、最初は理解できず、驚きました。でも、今からこれらを見て、あ、韓国とは違うんだ、このような違いが、私がわからない日本の、どこかの内面的な何かがあるかもしれない。そう思うようになりました。

相手について判断しない、相手に対して良い感情なら、そのままもち続けますが、悪い感情がはいった場合は相手について判断しないことにしています。わかるはずがない、きっと、私の知らないところで何かあるだろう、このような認識は、個人、国、テキストなど世の中すべてのことに同じように働きます。

そして、理由もないのに、韓国人の悪口を言う日本人、日本人の悪口を言う韓国人をみると、何か言いたくなるわけです。もうちょっと自分のわからなさを自覚してほしい。そう言いたい気持ちにかられます。

別に私は日本と韓国のかけはしになりたいという、そんなおおげさなことを思っている人間ではありません。ただどうしても必然的に日本と韓国の境目に立つしかない私からすると、私のまわりの人間達がけんかしないでほしいというのを、願っているわけです。

それでは、自分が日本にきて学んだことをもう少し詳しく、自分が何を目指し、どういう方法で、それを実現しようとしているのか、話したいと思います。

区域を超えて学問をするということです。例えば、私は文学と歴史の接点にかかわっています。うちの学科には哲学と文学をする人もいるし、美術と文学をする人もいるし、そういう比較をやっている人です。私の場合も古事記、日本書紀、歴史と文学という接点のなかで分析を行うのですが、最初日本語を勉強しはじめたのも、歴史学を学んだ時に先生が、日本書紀の記事をもって、いろいろ批判しているのを聞いて、

これは少なくとも、日本と日本文化と日本語をわかってから話すべきではないかと思って、日本語を勉強しはじめました。

でも、勉強に対する情熱、自分のしたいことに対する鋼の意志、信念、そういったものが、私には足りなかったようです。私は日本に来て何か月もたたないうちに、自分が地獄に堕ちたなとつくづく思いました。毎晩寝られず、2時3時に起きて、あーっと叫んだんです。あの時私のとなりの部屋はとても大変だったと思っています。

今の指導教官は韓国の指導教官でもあります。でも、韓国の指導教官はとても無口な人で、今の指導教官について、何も言ってくれませんでした。最初指導教官について、話を聞いたのは、研究生としてきた時、韓国人の留学生達とあった時のことです。彼ら曰く、えー、あなたが、○○先生の弟子か…。なんで？　また勇気ある学生がきたって、うわさだよ。その先生のいじめに人々が耐えられず、みんな逃げているんだ。でも、残っている学生は、世の中の一番強い人間になるはずだ、といわれている、そう言ってました。

先生がどれほど恐い方で、どのようなやり方で学生に接しているのかそれは、経験しない限りわからないと思います。私は、今も先生と会う直前に、必ずお腹をこわします。

ちょっとだけ授業の雰囲気を紹介すると、普通他の大学院では、先生が教えたり、学生が発表したりして討論で行われますね。でも、うちも討論は討論ですけれども、まず、学生が発表したら、だいたい、先生がしゃべる前に20分、30分、沈黙の時間が流れます。それは、先生が、この人にどれほど言えば良いのか、たぶん考える時間だと思うのですが、本当に冷や汗を流します。それから、先生の質問がはじまります。学生達が質問したり、また助け舟をだそうとしたら怒ります。質問で、どれほど馬鹿なのかということがわかると言います。私は先生の質問も意図がわかりません。ずっと、なぜ、なぜ、なぜと繰り返します。今思うと、それはソクラテスの門のほうに近いものだと思うのですが。今の学生はあまり、なぜ、なぜ、考えないじゃないですか。でも、先生はそれを最初から教育されたわけです。ただ、私はそういう教育方法は初めてでしたから、どうしたら良いのかわかりませんでした。先生との話は1日中やっても終わらないのですが、私が1番つらいと思ったのは、そういう教育方法でした。

私は完全に途方に暮れていました。勉強しようとしても、どこからどのようにすればいいのかわかりません。韓国で学んだ日本の古典というのは、日本の中学のレベルぐらいですよ。それは、韓国の知識が低いという意味ではなく、韓国で外国の古典を学ぶ必要はないわけです。それだけを学んできた人間がいきなり、東大の博士課程といっしょに授業をうけるわけです。あの時の状況は、「あいうえお」を学んでいる人間が、ネイティブスピーカーとしゃべろうと、しかも哲学的な話をしようとすることと、まったく同じ状況でした。前にたちはだかっている大きな壁、これをどうしたらいいか、私は、どうでもいいと思いました。なんというへんくつな性格な先生と出会ったのか、自分の不運をなげきました。

ところで、ある日のことです、学校から、寮に帰るところでしたが、私はその日、学校の裏門を見つけ、いつもの道と違う道を歩いていました。肩を落として、目は下をむいたまま、とぼとぼ歩いていました。どこまできたのか見上げてみると、目の前にある住宅の外側に小さな庭がありました。いくつかの竹とそのまわりに名の知れない植物だけがありました。

なんという美しさでしょうか。知らず知らずのうちに立ち止まってしまいました。ちゃんと見たくてその場でうずくまりました。最初目にはいったのは、背丈の低い枯れかけていた植物です。潮腐れのように葉っぱはすべて垂れてい

て、いつ落ちるかわからない状態でした。すでに落ちて腐っている葉っぱもありました。あ、これって私とそっくりじゃないか、あなた生きていて意味ないのに。

それから、他の竹の葉っぱと枝の色合いを下から上へと一段一段とたどっていきました。また立ちあがって、もう一度上から下へ見ました。ああ、これだったんだ、急に私の目は熱くなりました。すべての枝と葉っぱが調和して美しい絵をつくりだしていたあの光景、高くそびえていた枝が私にこう言ったような気がしました。

私が高くそびえていて、両腕に大きな葉っぱをたくさんつけた理由は、強い日差しと激しい雨足から若葉を守るためだよ、落ちていた枯れ葉も言います。私はこれから他の植物の命と次の新しい命を支えるために、肥料として働くんだ、それが私の役目、どう？格好いいでしょう。ところで、おい、君、あなたは今何をしているんだい？　ひとつの土台に立っていた、あの植物達、まるで人間達がつながっているように思えたその光景をみながら私はぱっと気づいたのです。

私が、勉強しないといけないのは、このためだったんだ。私は幼い頃から何かについて欲張ることはなかったのです。上へ上へ進みなさい、勉強しなさいといわれても、なぜ、進まないと行けないのか、なぜ勉強しないといけないのかが、わかりませんでした。勉強しないと良い職業にもつけないし、お金も儲けられないし、豊かな生活ができない、いい人にも巡り会えない、といわれました。

でも、それは私には関係なかったのです。私は小さな部屋の中に、ひとりで本を読みながらすごせれたら１番幸せと感じていました。でも、あの光景は勉強する理由は、自分ではないということをいってくれたのです。私がみたその光景、植物達が美しい１枚の絵を作っていたこと、私はそこから、家族の絵を見ていました。私は父の臨終にも、祖母の臨終にも間に合いませんでした。そして、母、私は祖母を捨てて日本に来たという罪悪感にさいなやまされています。

あの庭を見て思いました。ずっと自分が悪いと思って、何が変わるのかと。それと、父と祖母が願っていたことだろうかと。あの方々は私のために肥料になってくれたのに、私は今何をしているのだろうか、私は彼らの失ってしまった時間を背負わなければならないと。頑張って生きなければならないと。それが、私に今まで愛情を注いでくれた、あの方々に対する、恩返しであり、義務だと。ここで頑張らずに、自分の役割を果たさずに、途中で枯れ果てるなんて、みっともない、許せない罪だと思いました。

皆さんは私が一生で子供と祖母の写真を載せて巡回する、矢印をのせたことをおぼえていると思います。これはまさにこのような考え方からでたものでした。木から育ち花は咲く、いくつかその花は散ります。でも、散った花は肥料になって、他のちがう花を咲かせます。

こちらにいるロータリアンの方々は学生の皆さんを見ながら、同じまなざしで見ているのではないでしょうか。どうか、美しい花を咲かせてくれ、我々は貴方達を見守ってあげる。

ともあれ、それから、私はとても忙しくなりました。歩く時間がもったいないです。１日が終わってその日何もやってないと思うとストレスで寝られなくなりました。時間というのは私だけの時間じゃない、同じ土に根を下ろしている、私を見守ってくれている家族の時間でもある。１分１秒は私だけじゃなくて、彼らのためにつかわなければならない。そのような時間の大事さが、そのようにして私に重くのしかかりはじめました。

そうしているうちに私はだんだん先生のことがわかるようになりました。何年か前のことです。先生の講演会が予定されていた３日前、先生のお父さんが亡くなりました。葬式の時、私は先生のお父さんがどれほど厳しい方だったのかを聞くことになります。３日後先生は講演を

して、飲み会にも出席しました。先生はその飲み会で、私達ゼミ生のテーブルにきてこう言います。なんの前触れも、なんの説明もないです。世の中で一番悪い人間になりなさい。もちろん、それについての説明はなかったのです。

これはどういう意味でしょうか。いい人は天国に行くが、悪い人はどこにでもいけるという意味でしょうか。だから、人のこと気にせずに、自分の道につきすすめということでしょうか。他の学生はそれをどう受け止めたのかは、わかりませんが、私はその言葉を聞いた瞬間、先生の価値観、人生観がすべて凝縮している言葉だと思いました。

先生は学生に怒る時のように、同じく学会でも怒ります。他の学校の先生達と集まったとき、うちの先生がでた夢、誰がもっと恐い夢をみたのか、話し合ったりもします。100人ぐらい集まったところで、先生がトイレにいこうと出た瞬間、いきなり皆の話がとまり、誰が先なのかわかりませんが、ほぼ同時に溜息をついたこともあります。皆の恐怖の対象である先生、うちの先生は上代文学では、１番有名な先生です。裏では先生について何の話があるのかわかりませんが、先生の前では何も言えません、誰も言えません。先生は誰も歯向かえないように、学問という鎧で、武装していたのです。

私の耳には世の中で１番悪い人間になりなさいという言葉が、世の中で１番強い人間になりなさい、という言葉のように聞こえました。昔はただ恐かった先生でしたが、今は先生の怒りがどれほど学問的情熱に支えられているのか、どれほど学生達に対する愛情に基づいているのかよくわかります。先生は、わざと私達をどん底まで突き落とし、助けを求める手に背中を向けたままこう言っていたのです。

とことん途方にくれろ、とことん苦しめ、そして、這い上がるのだ、誰からの助けも求めず、自分の手と足でしっかり這い上がる方法を見つけろ、それを自分の物にして、誰もが傷つけることができないように強くなるのだ。

また、１か月前のことです。うちの大学に４つの国立大学、韓国のソウル大学、中国の北京大学、ベトナムのハノイ大学、日本の東京大学の学長と先生達が集まって、東アジアの古典教育というタイトルでシンポジウムが開かれました。私は、先生達の話を聞いているうちに、これはうちの先生が絶対に怒るだろうと思って、びびりながら、先生の顔を見ていました。あのとき、司会の先生がうちの先生にコメントを要求しました。先生はすでに怒っている顔で、具体的な調査無しに、東アジアの共通点をつくろうという話に自分は何のコメントもできないと言いながら、壇上から降りようと立ち上がりました。ベトナムの学長でしょうか、なんとか雰囲気をおさめようとして、マイクをとって話を続けましたが、先生は通訳のイヤホンをはずしたままでした。

知らない人が見ると単なる気難しい人に思えたでしょう。しかし、先生が立ちあがった瞬間、私はまたもや先生が、私にこれがどれほど駄目なシンポジウムだったのか教えようとしていることがわかりました。次の日、先生は私達が、あなた達の時間を無駄にしたことについて謝ると言いながら、頭を下げました。先生があのとき教えたのは、どんなことがあっても自分の信念から目をそらしてはいけない、逃げてはいけない、妥協してはいけない。そのようにして、自分の道をつきすすめ、ということでした。

ここで、私が具体的に何をやっているかいうために、最近韓国で話題になっているヨン様主演の太王四神記というドラマで話を切り出したいと思います。今、日本のＢＳでもやっているようですが、このドラマの内容は韓国の朱蒙が真相神話と中国領土まで、その勢力を拡張した高句麗の好太王の話をひとつに融合したものだそうです。このドラマが制作された背景には中国との微妙な感情の争いがあります。2002年から中国政府で、自分の民族を団結しようとする

趣旨で、東北工程という研究プロジェクトがはじまりました。これは、ロシアがいろんな民族が団結できなかったように、自分の民族もそのようになるのではないかという心配から出発したものです。

昔の高句麗というのは中国地方まで、あったものです。その高句麗まで自分の国のように同じ歴史の中で、考え始めようとする動きがおこったわけです。もちろん、韓国の大きな反発は買いました。マスコミも中国の歴史を歪曲する悪者といい、連日さわぎだしました。放送は彼等のいう古代の国々を描いたドラマを次々と制作することになり、政治家に代わってマスコミが時代劇という番組をとおして中国に反中感情をあおり、人々はそれにのっかって、熱中しながら、中国を非難し続けました。

この間アンケート調査をしたのですが、昔は日本がいちばん嫌いな国と韓国人が答えたのですが、今はそれが中国人がいちばん嫌いな国といっているそうです。中国は自分達の政治のために歴史を利用したように、植民地時代に、日本でも同じことが行われました。これは、皆さんもご存知のように、日本書紀の神功皇后の話と新羅征伐だ、百済を献上、現在中国にある好太王碑文をもちだして、古代に支配した国であるから自分達は、正当であると主張しました。

この歴史の論争は何の結論もなく、今も続いています。自分達の歴史に基づいて相手の歴史を批判する中国、日本、韓国の人々、それが、歴史家だけではないということは皆さんもご存知のはずです。人々は自分達の主張を解決するためにいろいろな資料を持ち出します。そして、それが、自分が言うのが正しい歴史だと主張します。

ところで、なぜ、話が終わらずに、ずっと続くのでしょうか？　それはすべての歴史が違うものを語っているからです。みなさんもご存知のように日本の神話は、聞き神話、にわ神話といって、同じく取り扱われました。それで、その神話とまた韓国の神話を比較したりするのです。でも、うちの先生と、私もそのような立場なのですが、それはいけないのだと、日本書紀と古事記はあまりにも違います。その世界観によって違うのですけれども、例えば、古事記には、日本の国語である、日本はでてないです。日本書紀は和と日本がでています。これは、外国版のためにそのようになったわけですけれども、そのようなさまざまな違いが、ひとつの意味をもって全体を構成しています。

そういうものを考えずにただただ、同じく我々の歴史が正しい、もちろんこれは、私は日本だけを批判するのではなくて中国も同じでありますし、韓国の方も同じであります。我々が認識しないといけないのは、その第一の歴史を語るためにどれほどの歴史が排除されているのかということです。どれほど政治的イデオロギーが作用しているかということです。我々が学ぶ歴史は、すでによく整理された、その都度目的にあわせた、もちだされたものです。自分達の歴史がバラバラなのに、なぜ、相手の歴史を歪曲するなと怒鳴るのでしょうか。歴史家たちが真の歴史を探ろうとしている作業を否定しているわけではありません。でも、より慎重にテキストを扱うべきではないかと思うわけであります。

私は今の論争が、子供達に恥ずかしいと思います。私は我々が学んできた、第一の歴史を否定して、それぞれテキストの中で、歴史化された、かっこつきの歴史が何を語ろうとしているのかを見ます。古事記とはちがう日本書紀は何を語ろうとしているのか、テキストの中でその原理を見出します。私はこれらを通してすべての歴史は解釈であるしかないこと、客観的な歴史はありえないことの証拠をみせることで、今の日中間の口争いをすることに楔をうちこもうとするわけです。

私がやっていることは今まで当たり前のように思えてきた既成の秩序に対する挑戦であります

す。どんな反発があっても、どんな壁にぶつかっても、今の日中間の歴史の論争が子供達に恥ずかしいと思う以上後ろに下がることはできません。中国、韓国、日本という国の概念それは、最初から我々にあったはずではありません。しかし、人々は、いつからか自分達が作り出した枠組みに気をとらわれて、自分達のもちぶんをとろうと喧嘩しています。私は皆さんから世の中とは、国と国の区別の無い、人と人とのつながりだと学びました。

また、先生と出会って、学問に対する情熱、学生に対する愛情、そして、固い信念を学びました。甥と姪が産まれて一生この子達のためにささげようと思いました。私は自分が世の中からもらった、恩恵の百万分の一でも返すために、学生達の教育に力をつくしたいと思います。

これは社会奉仕という高邁な理念ではなく、生きている人間としての私に与えられた最小限の義務だと思います。私は甥と姪が大きくなった時に、韓国社会で、日本人といって悪口を言う人々が少なくなる、できるだけ減るようにがんばりたいと思います。

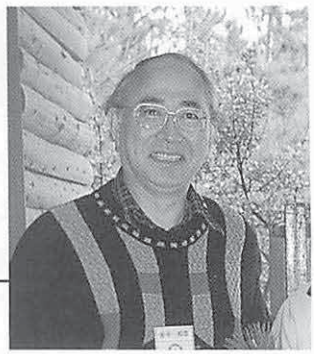
それは日韓親善、世界平和を願う気持ちには及ばない、ただただ、私の愛する甥と姪が人間を憎む人々の間で生きてほしくないという小さな願望からのものです。人には優しく、自分には厳しく、そのようにして自分の時間を学生達のためにつくしていき、私が死ぬとき、自分の人生はなんだったのか、という質問にこのようにひとことで答えられれば良いと思います。私の人生は学生達のために質の良い肥料として働いていたものだったと。

ご清聴、有難うございました。(拍手)

司会　金講師、大変良いお話有難うございました、また、皆様、今一度盛大な拍手をよろしくお願い致します。(拍手)

稲山ガバナー　どうも、長い長い時間にわたり、色々日本と韓国の説明をしていただきまして、有難うございました。我々もロータリアンでございますので、最後にあったように、やはり、争いのない世界を創るために努力してますので、同じような気持ちの先生に、ほんの少しではございますが、お礼をして終わらせたいと思います。本当に有難うございました。(拍手)

ロータリアンの夕べ



安平　和彦

国際ロータリー第2680地区ライラ委員（姫路RC）

今井　ここに来た人は、これからガバナーになられる方と同じ知識を得ていただくために、昨日は世界の歴史、今日は日本の歴史、これを安平教授によって…あんまり長くならないようにね、教授。

安平　いや、ホンマにやるんですかね（拍手）。せっかくキャンプファイヤーが終わって神聖な気持ちになっていますから、綺麗な月が出ていますし、それから星も出てますから、星座の話でも誰かにやってもらったら一番ふさわしいんじゃないかと思うんですけど。ホンマにやります？（拍手）それで何かやれということなっても、何もできませんので、日本ロータリー史をちょっとだけやろうかなぁというふうなことで、もう皆さんご承知のことばっかりだと思いますけれども、普段、深川先生の話されていることを、復習の意味で少しだけやりたいと思います。

日本のロータリーは、1917年に政府の米国財政調査団という、目加田男爵を団長とした調査団がありまして、それに三井銀行の当時の重役の米山梅吉が参加したということが一番のきっかけでありまして、その当時テキサスのダラスのロータリークラブに、福島喜三次というのが、三井物産の子会社、米山梅吉から言うと自分とこの子会社の社長として在籍しておりまして、この方が日本人ロータリアンの第１号というふうに言われておりますけれども、その福島喜三次がおりまして、米山梅吉がそこに立ち寄りまして、福島喜三次の家に泊めてもらったというふうなことがあったようであります。なんかその時に米山梅吉が歌を詠んでいます。ちょっと忘れましたけど、「テキサスのひんがしの野に…」という歌を詠んだらしいですけど、ちょっと忘れました。で、その後福島が日本に帰国することになりまして、その時に「日本にもロータリー・クラブを作ったらどうだ」ということを向こうで薦められて、そして委任状のようなものをもらって日本に帰ってきました。その福島は、向こうでは子会社の社長だったわけですけれども、日本ではそんな力はありません。で、どうしようかというふうなことで、米山に相談しまして、「そいじゃあ作ろうか」となったらしいですけれども、結局１年かかってもできなかったようであります。そこでRIの方は、日本にある米国の子会社の支店長であったウイリアム・ジョンストンに「お前もやれ」というふうなことで委嘱をいたしまして、米山と福島とウイリアム・ジョンストンの３人の協力で1920年10月20日に東京クラブができたということのようであります。登録番号が世界の855番、創立会員は24名でありまして、初代会長に米山梅吉、幹事に福島喜三次がなりました。

で、東京クラブは、当初月1回の例会でありまして、10月にできましたけれども、11月は例会を開催いたしましたけれども、12月と1月は「皆さん方お忙しいから止めましょう」という

ふうなことで例会は取り止め、というふうな、チンタラちんたらとしたクラブ運営をしていたようでありますけれども、23年の9月1日に関東大震災が起こりました。で、この当時、ガイガンディカーという、例の哲人ガイガンディカーですけれども、彼がRIの会長をしておりまして、直ちに25,000ドルの救援資金を送ってくれた。同時に、全世界から89,000ドルの義捐金、救援物資が送られたというふうな話で…これはいまの金額にすると何億何十億というような大きな金額だと思えるんですけれども…で、米山梅吉はじめ東京クラブのメンバーたちはビックリいたしまして、「ロータリーって大したもんや」というふうなことでですね、気持ちを改めました。ちょうどその前年1922年にロサンゼルスの世界大会で、ロータリーの定款、細則、それから標準ロータリークラブ定款が制定されておりましたが、それ以後、その標準クラブ定款に基づいたクラブ運営をするようになったということだそうです。

で、参考ですけれども、この22年の標準クラブ定款はですね。それ以前にできたクラブに対しては、それ以降にその標準クラブ定款ができたわけですから、22年以前に作られたクラブは「特権保有クラブ」と言いまして、標準クラブ定款に従う必要もないわけですけれども、従って、東京クラブも、出来たのが1920年ですから、特権保有クラブだったわけですけれども、この23年にその特権を返上いたしまして、以後、標準クラブ定款に基づいたクラブ運営をするようになったというふうに言われております。

で、それが東京クラブの創立でありますけれども、一方、翌々22年11月に大阪クラブができました。これは星野行則という銀行マン、なんとか紀陽銀行…何? 鹿島銀行? なんかそんな名前ですね、の、なんか相談役かなんかがですね、シカゴに行って、ロータリーに興味があったもんですから、ロータリーのことを勉強して、非常に興味を持って、日本に帰ってきました。ちょうどその頃に、福島喜三次が東京から大阪に転勤になりまして、星野が福島に話を持ちかけて、福島からいろいろ学びながら大阪にクラブを作ったというふうなことのようでありまして、東京クラブと大阪クラブというのは全く別のルートからできたのです。したがって大阪クラブは日本では2番目ですけれども、東京クラブの子クラブではないというふうなことであります。

それで24年には神戸クラブが、これは大阪クラブを親クラブとしてできました。そして名古屋クラブは東京クラブを親クラブとして、京都クラブは、これは大阪と名古屋の両方がスポンサーに立ったか、ちょっと忘れましたけれども、25年に京都クラブ、27年に横浜クラブ、それから当時は日本の領土は韓国、いまの朝鮮半島、それから満州にもありましたので、そういうところにもクラブができました。28年、大連クラブ、奉天クラブ、ハルピンクラブ、台北クラブというふうに、順次日本の海外領土にもできました。そういうふうな中で、28年の7月に、平尾釰三郎という東京クラブの会長ですけれども、その平尾釰三郎が強引にRIに要求いたしまして、無理やり70地区になることを認めさせ、初代ガバナーには米山梅吉が就任しましたが、この時に余りにもRIに強引な要求をしたので、戦後日本のロータリー復帰が遅れたというふうなことが言われております。

で、戦前のロータリーは、次第に「ロータリーの日本化」という現象が起きまして、大阪クラブの土屋元作（大夢）という方が、「ロータリー以前の偉大なロータリアン」というふうなことで二宮尊徳の報徳教の教えとロータリーのHe profits most Who serves bestとの相似性を指摘したという話であります。昨日も申しましたけれども、二宮尊徳の二宮翁夜話の中に出て

くるような、その報徳教は、ま、湯舟の理屈ですね。もう一度言いますと、湯舟の中で温かい湯が流れてきた時に、誰しも自分の方に掻き寄せたいけれども、そうじゃないよと。いくら自分の方に掻き寄せたって、温かい湯は自分の傍らを流れて余所へ流れていってしまうではないかと、そうではなしに、そういう温かい湯は人の方に押してあげなさいと、そうするとその湯は人を暖めて、いずれは回り回って自分のとこに帰ってくるではないか。その中で、それを自分の方に掻き寄せるのは不仁であり不義であると、人の方に押してやるのが仁であると、こういうふうなことを言ったというのが、この報徳教の教えであります。

ロータリーのHe profits most Who serves best「最もよく奉仕する者最も多く報われる」というふうに訳されますけれども、もっと言うならば、他人のために倫理に適った仕事をやっていれば、それはいずれ物心両面の満足が得られるんだよ、ということと、先ほどの湯船の話は同じこと言ってるんだということを土屋大夢が言いまして、日本にもそんなバタ臭いことでなくたって、それ以前にもっと偉大なロータリアンというのに二宮尊徳がいるよと、いうふうなことを言ったようであります。

それからロータリーの日本化の中で、日本語のロータリーソングというのがありました。当初、ロータリーソングの慣行は、あちらではハリー・ダグルスがやり始めたわけですけれども、日本でも、やはりバタ臭い、向こうのロータリーソングを歌っていたようでありますけれども、それではイカンと。日本人には日本のロータリーソングを作ろうというふうなことで、1935年に「奉仕の理想」と「我らの生業」が発表されました。我々が歌っている「奉仕の理想」「我らの生業」はこの時にできたというふうなことであります。

それから、「大連クラブのロータリー宣言」っていうのは、昨日も申しました職業倫理訓、これを大連クラブのメンバーが、何遍も何遍も反芻しまして、それをもう少し短く8カ条にまとめたというのが「大連クラブのロータリー宣言」で、これもロータリーの日本化という現象と言われております。

で、そういう中で、日本では軍国主義、国粋主義が興ってきましてですね、時代的には1931年に満州事変、32年に五・一五事件、33年には国際連盟から脱退をいたしました。そして36年には二・二六事件が起きまして、37年日華事変、38年国家総動員法というふうなことで、もうどんどん戦争に向かって国がそういう流れになっていくわけですけれども、そういう中で、ロータリーはですね、フリーメイソンとの関係を疑われて、「スパイ組織ではないのか?」ということで、官憲から随分干渉圧迫を受けたということのようです。クラブの例会に特高が監視に来るとか、そういうふうなこともあったようでありまして、とにかく米山梅吉に対しましても「そんなものはやめてしまえ」というふうな、いろいろな圧迫があったそうでありまして、結局1940年に、昭和15年でありますけれども、静岡クラブを最初に、日本のロータリークラブが全て解散し、ＲＩから脱退をいたしました。

こういう流れの中で、いま我々の例会では日の丸を掲げておりますけれども、例会にあの日の丸を掲げるようになった慣行・慣習も、こういうフリーメンソンとの関係を疑われた時に、「いやいや、そうではありません」と、「日本のロータリーは国家のためにも天皇のおんためにもやってるんですよ」というふうなことで、日の丸を掲げるようになったというふうに言われております。しかしながら、やはりそれでは疑いが晴れないというか、やはり特高なりそのへんのところからいろいろ圧迫圧力を受けて結局解散脱退したというわけであります。で、そ

れと、ここに書いてませんけれども、当時東京の三越、三越百貨店で「スパイ展」というのが開かれておりまして、その中にロータリーがフリーメイソンと関係付けられて展示されとったというふうなことがありまして、米山梅吉は随分抗議をして、「フリーメンソンとは関係ない」と言って、取り除いてもらうように言ったんですけれども、最後まで取り除かれなかったというような話も残っております。

ま、そういうことで、結局日本のロータリーは昭和15年に全て解散脱退したわけですけれども、その解散当時、満州とか朝鮮半島とか台湾とかそういったのも含んで48クラブ2,142名いたそうであります。しかし、ご承知のように解散してからも、名前を、東京クラブは東京水曜会、大阪クラブは大阪金曜会、神戸木曜会、福岡清和会、札幌職能クラブというふうに変えて、1回も例会を中止することなく、従前のロータリークラブと同じような例会をこういう名称でやっていたというふうなことのようでありまして、戦後国際ロータリーに日本のロータリーが復帰するまで、そういうふうなことでやっていたということであります。まさに、官憲から圧力圧迫を受けた中で、そういうふうに、まったく「隠れキリシタンのようにやっていた」というふうに表現されてますけれども、やっていたと、場合によっては拘束されるかもわからない、検束されるかもわからない、いうような身の危険を冒しながらやってきたというふうなことでありました。やっぱりこう、当時も、ロータリーには素晴らしい魅力があったんだろうというふうなことが思われるわけであります。

で、戦後は、国際ロータリーへの復帰を願ったんですけれども、なかなか認められませんで、そういう中で46年、昭和21年ですけれども米山梅吉が亡くなりましたし、その年の9月に福島喜三次も亡くなりました。また、翌年、昭和22年にはポール・ハリスも亡くなりまして、日本が頼りとする人たち、ロータリアンたちが亡くなってしまったんですけれども、そういうふうなこともあったし、それから戦前の日本のロータリーが大変わがままを言ったということもあって、なかなか復帰が認められなかったというふうなことであります。

その後、日本側では、47年3月に「ロータリー復帰協議会」いうのを作りました。そしてその年にロータリーの3代目事務総長のジョージ・ミーンズが来日して、日本のロータリーの現状を見て帰って、結局その翌年の1948年、昭和23年に、RI理事会が日本の国際ロータリー復帰を認めまして、翌年1949年、昭和24年に、まず東京、大阪、名古屋、京都、神戸、福岡、札幌、この7クラブが復帰をいたしました。そして、第60地区を構成いたしました。で、その年に復帰7クラブと20の戦前クラブの復活、2クラブの新設がされました。

翌1950年、昭和25年ですけれども、この年に15の戦前クラブの復活と私の姫路クラブも含め13クラブが新設されました。そんなことで、クラブが復活し、また新しいクラブもできましたので、昭和27年になって地区を東西に分割いたしました。東日本が60地区で38クラブ、西日本が61地区で28クラブというふうなことでありました。で、その年の4月に1地区としての最後の大会が開かれまして、この時に「以後2つの地区に分かれるけれどもお互いの間で情報交換しよう」ということで「ロータリーの友」の発刊が決定されました。

それからこの時に、ロータリーソング「手に手つないで」が発表になりました。「手に手つないで」は、従いまして昭和27年の発表であります。で、この年の10月に、今度は2地区に分かれて初めての地区大会が神戸で行われました。その時の前夜、懇談会にオリエンタルホテルの小曽根真造さん、神戸に小曽根真さんというジャズマンがおりますけれども、彼のおじさ

んになるんですかね？ この方がソングリーダーで、「どうぞみなさん手をつないで、そして高らかに歌いましょう」ということで「手に手つないで」をみんなで歌ったというのが、いまのこの「手に手つないで」の慣行というか風習というか、そういう最初だということであります。いろいろ謂われがあるわけです。

で、日本のロータリーは、その後55年には4地区に分割をいたしまして、その後もクラブの増加に伴って地区を分割いたしました。その中で日本からのRIの会長も68年－69年には東ヶ崎潔さん、82年－83年には向笠廣次さん、この2人が出ました。今井先生も間違ったら会長になってはったんですけども、今井先生が逃げはりまして、大変残念ながら3人目の会長が出なかったんです。大変残念なんですが、ま、そんなこともございました。

現在34地区、ゾーンから言うと1から4Aまで、このゾーンというのは理事の選出母体ということで、あるまとまりごとに34のゾーンを作りました。世界で34ゾーンあるうちの 1、2、3と、4のAというのに日本が割り当てられているわけですね。で、日本は、現在2,319クラブ98,584人、減りましたですね。12万人おったんですがね。いま本当、10万人切ってしまったんですね。大変減りました。

ついでの話ですけども、国際ロータリーとの関係ですけれども、国際ロータリーというのはクラブの連合体でありまして、国際ロータリーの会員は各クラブでありまして、我々は国際ロータリーのメンバーでも何でもないというふうなことであります。で、国際ロータリーは何をする所かと言いますと、奉仕理念の提唱、ロータリーの拡大、情報媒介、連絡調整、こういうふうなことだろうと思います。管理主体としては、会長、会長エレクト、それから17名の理事で構成される理事会。で、多くのクラブ群がありますので、その管理の都合上、一定のまとまりごとに地区というのを置きまして、そこに概念上は国際ロータリーからの派遣役員としてのガバナーを置きます。この地区というのも、これは1917年か8年頃、22年には地区というのは完璧にできてましてですね、その頃にもう地区制度ができているわけであります。

さっきも言いましたように、国際ロータリーとクラブの関係というのは、元々国際ロータリーのたくさんのクラブの連絡調整を図るために作られたというようなことでありまして、国際ロータリーの会員はクラブであって、個々のロータリアンではないと。よく、ついつい口が滑って「国際ロータリークラブ」というふうに言ってしまうんですけれども、国際ロータリークラブというのは一切ございません。で、ガバナーは、RI理事会の指揮下にある。私は、RI理事会の手下やと、こういうふうに呼んでますけれども、そのRIとクラブというのは基本的に対等の関係にあります。従ってガバナーがRIの手下として何を言おうと、クラブは基本的には対等の立場で、ガバナーの言うことを聞く必要は理念的理論的にはないと。そしてRIの言ってるプログラムは、基本的には推奨、リコメンドとして、クラブには、RI定款、RI細則、それから標準ロータリークラブ定款、それからロータリーの基本原則に反しない限りは、クラブは自治権がありますので自由に定めることができる。いまCLPという、クラブリーダーシッププランというふうなことで委員会構成を言うてますけども、あれもあくまでリコメンド、推奨でありますので、クラブは別にそのとおりやることは全然必要ない。クラブはクラブに一番ふさわしい、そういう委員会構成を図ればいいというふうなことであります。ただ、全く対等かと言えばそうではない部分もありまして、直接監督権事項もあります。たとえば人頭分担金を払わなければクラブを除名することができるとかですね、そういうようなことで一部直接監督権でRI

がバサッとやれるような部分もありますけれども、理論的には元々は対等の関係だったということであります。

今年は、ここにありますように、カナダのウイルキンソンという方がRI会長でありまして、テーマは「ロータリーは分かち合いの心」ということでありまして、水保全、保健および飢餓救済、識字率向上、これが強調事項であります。これ、前年もこういう強調事項があって、それをそのまま引き継ぎますというふうなことでありました。2680地区のガバナーは三木明、2670地区は稲山三治ガバナーであります。次年度ですけれども、来年の会長は李東建、韓国の出身で、「夢をかたちに」というテーマであります。で、李会長エレクトも、今年の07–08年を踏襲しまして、先ほどの水保全、保健および飢餓救済、識字率向上、これが強調事項ですよと。ただし、強調事項を通じて子どもの死亡率低下を呼びかけて、毎日毎日１万人の子どもが、きれいな水がないことによって亡くなってるよとか、５歳未満の３万人の子どもたちが本来避けられるはずの理由によって死んでいる、そんな話でありますけども、そういうことを強調しておられます。

で、もうこれで終わりですけれども、ちょっと早いということですが、次年度のテーマは「Make dreams real　夢をかたちに」です。昨日もちょっと言いましたけれども、98－99年のジム・レイシー会長、今井先生と同期のガバナーですけども、「Follow your Rotary dream」、この時は「dream」、単数やったんですが、今回は「dreams」ということになっています。これ英語やから、単数か複数かわかるんですけれども、最初もらったときには日本語で「夢をかたちに」、単数なのか複数なのかわかりませんでして、後で英語のものを手に入れたら「Make dreams real」とこうなってまして、「あ、なるほど。いろんな夢がロータリーにはあるんだ」。たとえば、ポリオ撲滅の夢、世界理解と親善と平和の夢、職業倫理確立の夢、新世代を育成する夢など、いっぱいいろんな夢があります。

ポリオの話は今日ちょっとやりましたけれども、なんとかこのポリオが、もう数年でうまくいけば撲滅することができるかもわかりません。撲滅というからには、野生ウイルスによる患者の発生がなくなって３年間検証せなアカンのですかね？　ということで、お医者の先生がいらっしゃいますけども、実際のところはなかなか難しい部分もあるんだろうと思いますし、いまのポリオワクチンが生ワクチンでありますので、100万人に1人くらいはワクチン投与によって実際に麻痺を起こしているというふうなことがありますので、日本も生ワクチンの投与じゃなしにソークワクチンと言うんですかね？　毒性を弱めたような奴で注射でやろうというふうなことで、先進国は生ワクチンの投与じゃなしに注射でやろうというようなことになっておりますけれども、やはり生ワクチンの投与の方がポタポタッと２～３滴飲ませばそれで良いようですので、全世界的にはそういうふうなことで今やってます。

本当は、ロータリーが2005年、ロータリー100年の時に撲滅できる寸前まで行っとったんですよね。2001年か2年の時に500名切ってましたから。ところが、マジアベ会長というのが出ましたけど、2003－04年やったですか？　そうですね？　彼は、ナイジェリアのカノ州出身だったんですけれども、あの時に、お膝元のカノ州で、そのポリオのウイルスワクチンがなんか逆に害悪広めるんだというような変な噂が出て、ポリオの投与がしばらく途絶えたんです。途端にワンサと患者が出て、挙げ句の果てに隣の国やらあっちゃこっちゃを通って輸出されまして、インドネシアにも随分出ましたですね。ネパールにまで飛んじゃったりして。そんなこ

とで、もうこれはちょっとでも手を緩めたら元の木阿弥になるだろうというふうなことだろうと思いますので、これ止めるわけにはいけない。ここまで来ると。99.9%くらいまでやってきとるわけですから、止めるわけにいかないというふうなことで、今日も言いましたけれども、国際ロータリーは、2004年の規定審議会で、最優先事項がポリオ撲滅だと、ポリオ撲滅ができるまでは国際ロータリーとしては全世界的な社会奉仕プロジェクトはやらないと、こういうふうに言いましたし、昨年の規定審議会でも同じ内容の決議をいたしました。

いま必死になってやっとりますし、ビル&メリンダ・ゲイツ財団が1億ドルを寄付してくれたと。アメリカは同額補助というのが好きなんですよね。「俺は1億ドル寄付するから、ロータリーも1億ドル用意せぇよ」と、ま、こういうことであります。もうこの1億ドルは既に振り込まれてるようでありますので、ロータリーの方もこの3年間で1億ドル用意して、合計2億ドルのお金で、いよいよ最後のポリオ撲滅の使命を果たしたいというふうなことであります。

その他の夢もいろいろありますけれども、この程度に終えておきます。お疲れのようですので、こんなところでよろしゅうございますでしょうか? どうもありがとうございました（拍手）。今井先生なんか言いたいことは？

今井　言いたいことはないです。言いだしたらキリがないから。9時まであと10分ほど？何言ったらいいのかな。一つはポリオのことですけども、WHOの新しく就いた事務局長は「3年間で完遂する」ということを就任の時に言いました。その理由の一つは、先生方もおられるけども、大変新しいワクチンを見つけることができた、作ることができたんだと。そのために効率が非常に良くなったんで、その分だけ早くセーブすることができると。もう一つは野性株のことを問題にして、その他の奴は必ずしも残ってたって構わんじゃないかと。要するに、なんかあちこち出てるのはそういつまでもなくならない。しかし野生株は、そこでもって撲滅する宣言はできる。そういうこと書ければ「この3年でやっちゃうんだ」と。これ実はビル・ゲイツが1億ドルですか、計算できないけども、これを寄付するっていう話が出た時に、「ロータリーどうやって来たんです、あなたの方もそれだけ出せるか」と。出せなかったって、役員の方で「うん、出せる」と言ったったら大変なことになるんで、一体出せるかどうかで随分問題なりました。

去年の10月頃の理事会、私がちょっとポリオのことで近くに行きました時に、問題はウチがうんと、理事会がうんと言ったら全部の支所からそれをやらんといけないのだけども、それが本当にできるだろうか、だいたいいま嫌われてるんだから、「またお金か」「またポリオか」と嫌われてるんだから、できるかどうかって…いろんなことですけども…最後の日に「やっぱりイエスと言おう」ってことは大変ですよ。イエスと言ったら1億ドル…いま、ドルちょっと安くなりました? いまのドルが安い時に早くやっとかにゃあ。1億ドルですけれど、それを3年以内に。そうすっとWHOなどが言ってるポリオなくすゴールとほとんど一緒になってくるだろうと。それで、確信を持ってるってことはみんな言ってます。大変、何らかの根拠があるに違いない。従ってユニセフだとかWHOとか力入れて、うっかりするとロータリーがこれだけ努力してるのに、最後の最後に完遂したら「WHOが頑張った」とか「ユニセフが頑張った」とか言われかねないんですよ。ウチ、宣伝下手ですからね。その意味でも、もう少し…。

それからもう一つ、なんでそんなにお金がかかるんだってことがあります。ワクチンの値段

だけだったら、案外安いんですよね。だけども、さっき言ったように、いまの４つの国っていうのはみて開発途上国ですし、戦争してるとこが多いもんですから、生のワクチンを運んでくのに、そう長い時間かけられない。あれ、どれくらいの期間大丈夫なんですか？　それをやるためにはどうしても、田舎に行く時にも冷蔵庫担いでその中に入っていかなきゃならない。冷蔵庫を担いでったって電気来なけりゃ冷えないんで、氷と一緒に行ったってそんな２日も３日も持たない。そういうこともあって、小さな冷蔵庫を開発してもらって、それをどっかで充電してもらっては持って歩くみたいなことをしてます。しかもそれを運ぶのに、田舎に行けば行くほど車がありませんから、駱駝に乗って「月の砂漠を～」というわけにもいかないので、そういう費用が随分たくさんかかるということであります。むしろワクチンの値段というのは大したことありませんけども、その全部動員したりするのに非常にお金がかかるということです。

何年前だったか、僕この前行ったんです。私、安平さんのガバナーの時に、安平さんの代わりに私が何人かの人と一緒に行った。ところがですね、日本と、その時はインドに行ったんですが、日本とインドの違いは、お正月なんて向こうはあんまり関係ない。だから、お正月の２日からやるって言ったんです。「１月の２日ってのはやりにくいからもう少し他の時にできないか」と言ったけども、「できない」と言われたんです。となると、帰りが帰れないんです。学生やなんかがあちこち遊びに歩いて、帰りにみんな飛行機満員になっていて、私ら帰ろうと思ったら飛行機の安い切符が手に入らないってことで、おかげで１週間、私はインドにいました。

おかげさまでヘンテコな所に泊まったりね、意外なものを発見しました。皆さん、野良牛ってご存じですか？　牛がね、飼い主がいなくなるんですよ。飼い主がいなくなるって、その前は飼い主いたわけで、その牛に飼い主いないってのは、餌をくれる人がいないんです。すると牛はどうするかってぇと、自分であちこちゴミ探してね、食べてる。それを野良牛というんです。そしたらインドの連中が、「へぇ!」とビックリした。「そんなことビックリするこたぁない、この頃はお金無くなって象に餌をやらないもんだから野良象もいるんだ」っていうような話です。そんな所の中を…もう１～２分…。

日本では京都、2650地区がほとんど毎年いくつかの部隊を出して、そしてポリオのワクチン投与に行ってます。で、私にインドの連中は「今井さん、いつかはお宅の地区から来てください。いつでも歓迎し、そのための準備をいたします」と。飯ガバナー、いかがでございますか？　そういうようなことでですね、一遍行かれて、どれほど大きな規模で、これは国を挙げてのプログラムですよ。ナショナル・イミュナイジングデイという名前で一遍、国を挙げてですから。

街の真ん中、ニューデリーなんか行きますと、街の真ん中にロータリーのポリオ撲滅デイという、この日からこの日までやると、あちこちに張ってあるんですけど、そのくらい一生懸命で、だけど田舎行くとなかなかそうでもない。

ちなみに変な話ですけど、なぜインドが会員が増えたかという話の時に、そこに大勢の村の人を連れてって、そしてポリオのワクチンを投与して、「どうだ君、こんなに素晴らしい人道的仕事をロータリーはしてる。君らも入るか？」と言うと、そしたら、「入る」と言う。「それならこれにサインしたまえ」ってサインして、入会申込金と入会金とガバナーが自らお払いになって登録しますと世界で１位になるんですよ。

で、次の回払う時に、「俺、いつそんなもん払うんだ。そんなら出ます」って引っ込んで、出たり入ったりの会員も多いけども、それは国が貧乏なせいでもあります。やってることは尊敬します。これ面白いんです。この前もありま

したけどね。ロータリーって言って、国民が「あぁロータリーって素晴らしい仕事してる。人道的な仕事してるし、社会整備の仕事もしてるし、平和のための仕事もしてるし、水の供給もいろいろしてくれてる。ロータリーは素晴らしい仕事してる。だからロータリーに入ることは名誉であるし、みんなから尊敬受ける」っていうグループと、「ロータリーって何してるかわからん」と、「どっかでもってお金持ちが１週間に一遍集まって飯食って騒いでるだけじゃないか」と言いながら、「でも、あのグループ入りたいな」と言って入る国があると。

日本はどっちかというと、「ロータリアンは素晴らしい仕事してる」っていう評価をコミュニティから得てるかどうか、よその国に比べたら、あんまり得てない。「ロータリーはお金持ちの集まりだ」と言うと、「あぁそういうのありましたな」ということがあったりする。これ私らにとっては余り名誉なことじゃない。たぶん私たちはそんな意味じゃない、こういう会をしている皆さん方には当てはまらないのですけれども、日本のロータリーが考えないけないことの一つだろうと思っています。

それから、いまの米山梅吉と平尾釰三郎。平尾釰三郎って、神戸に道があるんです。甲南大学、甲南病院、その他を作ったのは平尾釰三郎です。ところがですね、帰ってきた時に、あなた商工大臣、いま何大臣？　貿易なんとかになってほしいと、その時の大臣から言われて、「いや私は文部大臣なら引き受けるけれども商工大臣は引き受けません」と言って、文部大臣になった人ですよ。神戸に住んでいて、大変いい仕事をしました。三宮から昔汽車で行く時に、三宮から大阪まで１カ所だけ止まったところがある。それは、住吉という駅です。その住吉駅のすぐそばに、実は平尾さんの家もありましてね。そしてそこに、２等車一つついていて、そこに大阪の財界の人がみんな集まって乗ってくんです。通勤時間くらいの時に、帰りもまた住吉だけ止まって帰っていく。その電車のグリーン車の中で、大阪の財界の人がしょっちゅう四方山話をしながら帰ってくる。星野行則とかね、それから平尾釰三郎とかがね、入ってくる。たぶんそういう時にロータリーの話が出たんだろうと、いま考えると想像します。

もう一つ。平尾さんのこととか申しますと、やっぱりそこに住んでたお金持ちに株屋さんがおりまして、那須さんという方ですけども、平尾さんに、「私も株で相当儲けたので、いまのうちに仕事を辞めて、株で儲けたお金の一部を慈善事業みたいなことに使いたいけど何がいいですか」と聞いた。「そうですね、株は下落しますから、いまのうちに」って。そしたらその時に平尾釰三郎が、「神戸の新川に行って、そこにいた若い牧師さんが一生懸命貧民窟の中で働いてる」と。「その人に聞いてごらん」と。で、その人が行ったのが、賀川豊彦の新川の動きです。そしたらその時、賀川豊彦が「生活協同組合を作ったらどうですか」と答えた。そこで、生協ができました。

ちなみに賀川豊彦は神戸で生まれましたけども、国は徳島です。参加者で徳島の方、手を挙げてください。お願いしたいんですけど、来年賀川が徳島のあそこで仕事を始めて100年になりますんで、100年の記念の集会を開きます。私が実行委員長であります。いろんなことをしていますけれども、こうやって宣伝するのも私の仕事だと考えています。

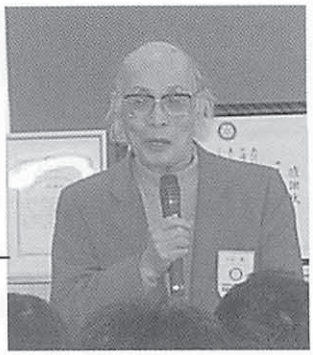
ついでですから平尾さんにくっつけていろんなこと言いましたけども、徳島の人も是非にご参加ください。鳴門に賀川記念館あるのご存じの方いらっしゃいますか？　お一人しかおらない。ドイツの兵隊さんの記念館がありますよね。そのこっち側、反対側に賀川記念館があります。で、賀川さんのお墓もそこにあります。一度あそこでロータリーの集会をしてください。私、

喜んで行って宣伝します。はい、ありがとうございます。余計なこと言いました（拍手）。

佐伯ディーン　みなさん、長時間ありがとうございました。無事ここまで進みまして、もうちょっと魂抜けそうですけれども、また一つよろしくお願いします（拍手）。

講　義　3日目

「志」



大田　堯　先生

教育研究者、東京大学名誉教授、都留文科大学名誉教授、
日本子どもを守る会名誉会長

●プロフィール

■略　歴

東京帝国大学文学部卒業。
東京大学教育学部教授、日本子どもを守る会会長、都留文科大学学長、日本教育学会会長などを歴任。専攻は教育史、教育哲学。
最近は講演・執筆など多忙だが、その中で故郷の広島県三原市本郷町の「ほんごう子ども図書館」の設立に尽力。長年の研究者としての実績とあわせて、同市から名誉市民の表彰を受けている。

■主な著書

著書は多数。以下に主なものを列挙する。
※「教育の探求」（東京大学出版会）
※「教育とは何かを問いつづけて」（岩波新書）
※「教育とは何か」（岩波新書）
※「教育研究の課題と方法」（岩波書店）
※「地域の中で教育を問う」（新評論）
※「子は天からの授かりもの」（太郎次郎社）
※「生命のきずな」（偕成社）
※「『はらぺこあおむし』と学習権」（一ツ橋書房）

佐伯　それでは本日の２回目の講義を始めます。

今日は大田堯先生、この方は、教育学者であり、東京大学名誉教授、都留文科大学名誉教授、日本子どもを守る会名誉会長。略歴で申し上げますと、東京帝大文学部教育学科卒業、東京大学教育学部教授、日本子どもを守る会会長、都留文科大学大学長、日本教育学会会長などを歴任され、専攻は、教育史、教育哲学、最近は講演・執筆など多忙のなか、故郷の広島の三原市本郷の町で、「ほんごう子ども図書館」の設立に尽力され、長年の研究者としての実績をあわせて三原市から名誉町民賞の表彰を受けた方です。また、今日、先生、90歳の誕生日なので、みなさん拍手をしてあげてください。

（拍手）

それでは先生よろしく申しあげます。

大田先生　ご紹介を受けました大田です。

今日は私の誕生日ということですが、90歳よくまぁ、ここへ来れたと…１日１日をできるだけ充足していきたい。そういう志を持って生きてはいるわけですけど。

挫折も繰り返し、怠慢も繰り返し、なかなか思うようにいかないのが人間という生き物の常だというふうに思っています。

今日は「志・こころざし」という題で話をするということになっているわけです。

志という言葉で僕が思い出すのは、ふるさとと言う、みなさんよくご承知の、例の「うさぎ追いし」とか、「こぶな釣りし」とか、そして果ては、「志を果たしていつの日にか、ふるさとに帰る。青い山、そして、清い川、いつの日にか帰ろう」と。こういうふるさとの歌を思い出します。

これ外国なんかで日本人が集うと、この歌は共通に歌われるといいますから、かなり普遍的な志の歌であると思うんです。

でも今日はそういう意味の志というものとは必ずしも一致しないかもしれない、と私は思います。

あの「ふるさとの歌」と言うのはかなり古い歌でして、「立身出世という、村を捨てた人間がなつかしいふるさとを、哀愁を持って思い出す」という歌でもあると思うんですが。

僕の今日お話しします志は、それとはちょっと違ったものになるのではないかと思っています。

私が今から30年ぐらい前になりますけれど、東京大学で皆さんご存知かもしれませんが、1969年、安田講堂の事件、警官隊導入という事件がありまして、そのときに僕は学部長として、その一端の責任を負っている人間であります。

非常に不幸な出来事でありまして、直後に私は大学を去りたいと覚悟したんですが、引き止められまして、しかし定年前になって都留文科大学という大学、山の中の大学の学長に求められて、東大の門を去ったわけです。

赤門を去るときに開放感にあふれたというか、ほっとした気持ちだったという記憶があります。その東大時代に私は、附属中・高等学校の校長を教授兼任でやったことがあるんです。校長であるその附属中学、高等学校というのは、東大が今までエリートばかりを集めているという、そういう戦後の反省からして、完全な抽選制で入れるという制度でありました。もっとも附属中学、高等学校は出ても、東大に入れるという人はほとんどいなかったというような妙な形でした。その学校の校長兼、まあ教授だったということがありました。

校長である以上、子どもに触れない校長はないだろうと思って、私は教員会議にお願いをして授業を持つことをお願いしました。

社会科の授業を持ったのです。その社会科の題目は「人類の歴史」という題目で、「希望者だけ集まりなさい」ということで、30数名の中学校の生徒さんが集まって授業をしました。

ところが授業が始まると、実は「イリン」という人の書いた「人類の歴史」をテキストにしたんですが、なかなか大変ですね。本当に授業をするのにいろんな準備をしなきゃならない。1時間済むとほっとする、そういうふうな状態でありました。

3時間目ぐらいだったと思うんですが、授業をやっと終わりかけて、まもなくベルが鳴るであろうというその時に急に「質問があります」という生徒さんの手をあげた反応がありました。

もう授業が終わろうというのに「質問があります」と言われる。「なんだい？」とつい機嫌を悪くしました。解放されるはずなのに…。

そしたら彼は、「人間は何で二本足で立ったんですか？」と言うのが質問なんです。そんな難しい質問にすぐ答えることはできません。

そこで私は、「この次の時間までに調べてこよう」という約束してしまいました。実はそういう教師は、ダメな教師なんです。「なんで二本足で立つようになったの？」という生徒に、それを僕らと一緒に考えましょう」と「みんなで考えましょう」と、こういうのがいい教師なんです。

ところが教えたがりやの教師なものだから、「次の機会に調べて報告をします」なんていう、とんでもない約束をしてしまった。いろいろ調べてみるけど、なかなか自分の満足するような答えが得られないわけです。

たとえば人間はサルのような状態で、木の上にいたけど、サバンナという平原に降りてきた。そこは雑木が沢山あって、背の高い植物があった。

背の高い植物があると、敵が向こうからやってくるときに見えない。見通しをよくするというのには高い姿勢が必要だからと言うので立つ

ようになったと書いた本もあったのです。

まあそういうこともあるだろうけど、それではちょっと僕は納得いかない。それから高い木があって、実が上に付いているから、それを取って食べるようになったから立つようになったとそういうふうに書いてある。

「ダーウィンの進化論」の俗説的な考え方だと思うんですけど、そういうふうなことが書いてあって、1週間一生懸命調べてみても、これぞという理由がはっきりしない。

そのような状態で私は授業に現われまして、率直に生徒君に、「いろいろ調べたけれど、納得いくような答えが得られなかった。こういうことも書いてあったという、先ほど言ったことも述べて、私は納得できないんだ。勘弁してくれ」と、こう言おうと思ったときに、僕の答えが出てきたんですよ。

そこで思いのままに言いました。

「僕はこう思う。人間が立つようになった、二足直立歩行になったのはなぜか。それは人間が「その気になった」からだ、と言ったのでした。

で、その気になったからでは、生徒が納得するはずがないと思ったら、生徒の中から一人立ち上がってね、「先生、人間はやる気になったんだなぁ」って。

(笑い)

共感してくれたわけですよ。これは本当なのかもしれないと思ったわけね。

そんなことがあって、いつもそれが頭にありまして、今西錦司という世界的にも知られている人類学者、この方が「私の進化論」という本を書いていらっしゃる。一生懸命に読んで、いろんなことがずっと書いてありました。

最後に今西さんは、どういうふうにおっしゃってるかというと、「人は立つべくして立った」とこう書いてある。「立つべくして立った」というと、「なんだ、そんなことなら、その気の方が、もっと積極的じゃないかな」というふうに思たんですけど(笑い)、実は、今西理論というものがありまして、今西哲学によってそういう考え方を最後にまとめてそう表現されたのだということは、私には分かったわけであります。

で、それに対していろんな異論が出るわけですよね。

それで、その異論の出し主の中に、免疫学の権威の方がおられまして、「立つべくして立ったんじゃ、何のことかわかない。免疫学の研究からすれば、そういう、いい加減なことじゃ困る」という意見だったと思いました。

で、その方は、多田富雄さんという、みなさんもご承知かもしれない。「免疫の意味論」という非常に優れた研究をお書きになった方で、その方が、「今西理論と言うのは何のことか分からない」とこういうふうにおっしゃったんです。僕も同時にがっかりしたんです。

ところが、その後年、多田富雄さんが、「例えば進化論一つをとっても、象の鼻はなぜ長くなったか？　必然的に決まったように見えますが、本当は偶然の積み重ねで決まるのです。必然的に進化が起こるように見えたのはそれが長い長い時間をかけて起こって、偶然の事件の蓄積にほかならないのです」こういうふうにおっしゃっているわけです。

だから、偶然性の蓄積であるという。長い長い時間にかかる偶然の成果として直立歩行が成り立ったんだ、とこういうふうにおっしゃっているわけです。

こう見てくると、僕の二本足で直立歩行するというのは、「その気になったからだ」というのも、今西理論とも繋げてみると、そんなに見当はずれではないのではないかもと、僕は考えるようになった。

「志」というとちょっと肩に力が入りますが、「その気」と言ったら、毎日使っとるわけですから、その方が僕は好きなんですよ。

「立志」とかなんとかいうふうにすると、固くなっちゃうんです。「その気」なら、ここん

ところは僕はいいんじゃないかなというふうに、現在も思っているわけです。「その気」というのはですね。どういうものかということを考えると、学会で「その気」というのは通用しないんです。その気なんて言ったって、なんだって、思われちゃうんです。だから言葉を変えて、漢語にして、「選択意志」とでもこう言えばいいんです。

「選択意志…ものを選んで、選ぶ意志」こういう決意をした。

だから、選択意志といえば学会に通用するかもしれない。

選択意志というのはどういうところで起こるか。これはもう間違いなく人間では前頭葉で起こるんです。他の動物にも選択傾性はあると思うんですけども、例えば狼が獲物を見つけるという、目当てに向かって駆けつけるという場合には、確かに意図というものが働いている。

しかし、その場合はわりに衝動的で単純な選択だと思うけど。人間の場合の「その気」って言うのは、前頭葉が発達しておりまして、非常に複雑な条件を踏まえた上での選択だから、人間という動物は多肢選択型の動物だと言うことができる。

「多肢」って言うのは、またこれも漢字ですけど、「多くという字と、月偏に支える」多肢選択型、たくさんの選択肢の中の一つをその気になって選ぶ。これはやっぱり志に通じると思うんです。あまり信用されないかな。（笑い）そういうその前頭葉の発達というのは、これは大変なことなんですよ。

人類の生命は30数億年。38億年という人があり、30数億年の生命の歴史というものがありまして、そして小さな細菌から出発して、そして爬虫類みたいな動物は非常に古いタイプですが、爬虫類だとか。それからこの背骨のある魚やそれから鳥や、その他の動物がだんだん進化を遂げて、いろんな種類の動物が出てくるわけですが。



それらが蓄えていった、脳の脳幹、呼吸を取り扱ったり、人間の生き死に直接かかわる脳幹の上の部分に、大脳の辺縁系っていって、回りの部分の、古い動物の中にもある、そういう部分もあって、その上に大脳新皮質というものがのっかっているというふうに、30数億年の歴史の脳の発達を積み重ねて、前頭葉の部分に、多肢選択型な人間が生まれたわけです。

「志」って言うのは、おそらくその多肢選択型の人間という動物が30数億年の歴史の積み重ねの上で、到達した段階で、人は意志、選択意志というものに到達をしたんだということができるのではないかと思うんです。

ですから、僕らが今ここにあるのは30数億年の歴史をみんな背負って、みなさんがここにいらっしゃるわけで、しかも前頭葉が発達することによって、いろいろな選択肢の中からある選択肢を選んで行動するという。そういうことをやるのが志というものの、いわば生物学的な基礎であるということは一つ頭に置けばどうだろうかと思うんです。

90歳、疲れるということはあまりないんですけど、足腰がやっぱり弱りますのでちょっとこの辺で、後ろの方も顔を覚えていただきましたので、座ってお話を申しあげることをお許し願いたいと思います。よろしくお願い致します。

あのデカルトが、デカルトという哲学者。名前聞いたことあるでしょうでしょう？　ない？

よく知られているルネ・デカルト（1596－1650）なんですが、まあいいです。あとで勉強

してください。

で、デカルトが、「方法の話」翻訳は「方法序説」という難しい題になっています。「方法の話」と訳せば良かったんですよ。

「方法の話」の一番最初のところに、人間という動物はボンサンス、フランス語でボンサンスを良識と訳してあります。

「あらゆる人間はボンサンスを間違いなく持っている」という意味の表現を「方法の話」の最初に書いてくれているわけです。

それはどういうふうに訳してあるかというと、誰でも人間である以上、良識を持っている、と訳してあるんですよ。

僕は、その良識というものをみんなが持っているかと言われると、ちょっとそれはあんまり適訳じゃないな、というふうに思っているんです。

そこで僕は訳し変えて「分別（ふんべつ）」とこうした。

あらゆる人は、分別を持っている。つまり多肢選択型の人間として、選ぶということをやる能力を人類は与えられている。誰もが与えられている。だから良識というよりも分別力を持っている。分別するっていうのは選ぶことでしょ。ですから選んで意志を表現するっていうのが分別だから、志につながるわけですよ。

すべての人がそういう分別力というものを持っている、こういうふうにデカルトは言ってるわけです。

もちろんデカルトの時代には、重層的な脳の発達という認識はもちろんなかったでしょうから、どこからそれが生理学的に来てるのかということはデカルトは説明はしておりません。この人間という動物に限らずあらゆる動物というものがまずですね、自分で変わろうという力を持っているんです。

後でもお話ししますけど、エーリヒ・カール作「はらぺこあおむし」という絵本、これはみなさんご存知でしょ？　たいてい小さいときには目を通しているという絵本なんですよ。僕は絵本図書館やってるから、見てるんですけど。

眠るときにも絵本を読んで眠るんですけど、そしたら安らかに眠れるんです。その「はらぺこあおむし」が、初めは葉っぱの上に白い卵としてちょこんと産み付けられる。それが、ある日にちが経つと、毛虫にかわる。小さな毛虫に変わる。その次には葉っぱをパクパクパクパク食べて、大きな虫になる。そしてその次には蛹になる。最後に蛹を脱皮して、羽化して、ぱーっと立派な蝶々に。

あれ誰かがやらせているんですか？　自分で変わってるんでしょ？　もちろん背後に自然の摂理があり、これを神という形で表現することもできるわけだけれど。生き物っていうのはみんな自ら変わる力を持ってるんです。それでなくっちゃ、皆さんも0.1ミリの受精卵からこんなになったんですよ。私はそうじゃない、と言わせませんよ。（笑い）

みんな0.1ミリから出発をしてですね、そして38週間ほどお腹にいて、外に出てくるってわけでしょ。それで細胞は大変な増殖をいたしまして、そして60兆とか、大人になれば60兆とか70兆とかいう分裂をし、しかも同様の細胞であって胃の働きだけをする細胞、それぞれの一つ一つの細胞はみんな同じだけれど、ある特定の機能だけそれぞれの器官ではするという分業をやる、そんなことはみんな自分でやるんだから。ここ非常に大事なことなんです。

あらゆる生き物は自ら変わるという力を持っている。自ら変わりながらも、自分というアイデンティティーというものを持続するということ。矛盾してるようですけど。

人間だって、0.1ミリから出発して、こういうふうになって、いろいろ人生を、長い人生をおくられるわけだけれど、変わりながらアイデンティティーを持っている。変わりながら変わらないということです。すごいでしょ、これ。

明らかに毎日変わってるんですよ、みんな。

細胞は新しい細胞になってるんですよ。だからそういうふうに常に、常に古い物を捨て、新しい物を獲得してる。

そういうことを繰り返しながら、それでいて、大田堯は大田堯であるというように、アイデンティティーが保たれる。一見矛盾しているような状態だけれど、それが命というものの実相なんです。

そういう生命力というものの中の、いわばいちばんおそらく最後の、最後に近い段階の新しい動物であるある人間。そこの中には今までの長い生き物の歴史の蓄積が、人類というものの脳の中に結集されている。いや、あらゆる器官をつくる一つ一つの細胞の中に38億年の歴史が蓄積されているのです。そのために人間が上等で、他の動物が駄目だということじゃ決してないですよ。

他の動物もそれぞれ生き物としての権威を持っているわけだけど、歴史がそういうふうに出来上がっているということは事実だとを言ってもいいのではと僕は思うんです。

ですから、「志」というものは底の深いもの、38億年の歴史の蓄積の結果、僕たちの、多肢選択型の動物としての志というものが生まれてくるのだというふうに考えたいと思います。

人間の尊厳の自覚と並んで、他の動物もみな尊厳なんだけど、人間の尊厳もそういう状況の中で、認識をしあうことができるのではないかと私は思うんです。

そこで今度はちょっと方向を変えまして、じゃあ今の日本人の、日本の社会の中での志というもの、どういう状態にあるのかということをお話をしてみたいと思います。

そうですね。今私どもは、市場経済という社会にいるということは、みんな認めると思うんですね。お金による市場経済、これが現状だというように思うんです。ところが後ろにいる年配の方とか僕なんかはですね、その市場経済が支配的な状況になる前の、半世紀以上前の状況というものを知っているはずなんです。

市場経済はずっと今まであったわけじゃないわけで、その前私どもの経験した経済の状態と言ったらですね、これはもう専門の経済学者でない人間の言うことではあるんですけど、「お得意様経済」なんですよ。

僕は広島県の三原市の郊外の農村に育った人間でありますけど。その村の小地主だったんですが。そこへですね、忠海か三原から、「かべり」と言ってね、女の方が頭に樽を持って、新鮮な魚を持って、峠を越えて、村へおいでになるんですよ。

そして、お得意様をまわって新鮮な魚を売って帰られるという、「かべり」という商売があったんですよ。

ここの家はどんな魚をよく買うかということもみんなよくわかっているし、食を通して生活も分かるぐらいに人間と人間との密度というものは非常に濃いかったわけですよ。かつての「かべり」さんなんていうのは。

そうかと思えば、反物を売りに来るということがありましてね。

ここの家ではこう衣類を好む。こういう柄を愛することが分かっていて、そういうおつき合いの中で人格と人格と触れ合いながら、そこでやりとりをする。

村にも雑貨屋があったんです。あったけど、そこでも、帳面に付けるんですよね。

いっぺんいっぺんお金を払うんじゃなく。お盆だとか、年末に帳簿に付けておいてまとめて払うという。あるいは、農家がお米を売ったときにまとめて払うとか、そういうふうなことをやって帳面につけるだけっていう。カード式じゃないけど、一種の昔のカード式だよね。

そういうことで、お金を実際使わなくてもそれでやっていく。いちいち名前を書いて、いくら何を買ったか、その帳面を見ればその人のなりわいまで見えてくるという、家の様子も見えてくるというぐらいに人と人との関わりという

ものが非常に濃密だったんです。

これを「お得意様経済」とこう言うんだけど、厳密に言えば、手工業時代とでも言うべき、手わざ工業の時代とでも言うべき、状態というふうに言ってもいいのではないか、と思います。

お魚や反物のほかに、薬屋さんも見えましたよ。この家はどんな病気がしがちだということもわかるんです。そんなふうな深い人間関係の中でもって、物のやりとりが行われたという時代は半世紀ぐらいまではかなり、特に農村では、顕著にそういう状況が残っていたんです。

日本社会というのは、長い間、近代化と並行して政策的に農村社会を保存をしました。なんで農村社会を保存したかと言うと、日本は広い植民地を持たなかったから。安い労働力を農村に依存するという形になったというようなことがあるんですが。そんなこと話してると時間がなくなっちゃうから止めますけど、そういう濃密な関係で、遅くまで農村の風潮が残った近代国家です。

近代国家でありながら、非常に古い共同体を残している点はプラスの面もあるけれど、今になればマイナスの面もあるという、非常に難しい課題がみなさんの生き方の中に実はあるんです。

そのことをこれから申しあげたいと思っているんです。

さて市場経済、市場経済になるとお得意様、今でもそりゃそういうのは残っているけど、市場経済となると不特定多数の人を相手とすることになるでしょう。そうすると何が必要なってきますか？　広告でしょ。広告っていうのは市場経済を表現する非常に象徴的なものなんです。

1枚の紙切れだけれども、これは大きな変革なんですよ、これは。注文経済から市場経済に移るという段階で広告が問題になるわけです。

今年の1月元旦の朝日新聞、目方を量ってみた。どれぐらいあると思いますか？　僕は量ったんです。僕の家で。埼玉ですけど。1キロ20グラムあったんです。

1キロ20グラムのうちで広告がどれくらいあったと思いますか？　700グラムあったんです。700グラムと本体は300グラムくらいだよね。その300グラムの本体の中に全面広告というのは30枚あったんですよ。

どうです？　世の中広告だらけでしょ。もうテレビからラジオから新聞から雑誌から駅のから電車から、広告広告広告と満ち満ちてるじゃないですか。この広告っていうのは何を目当てにするんですか。言うまでもなく購買意欲というものをあおるんです。購買力を強めなければならないわけです。購買力を強めるということは、欲望を刺激するということでしょ。あれが欲しい、これが欲しい、という欲望刺激の手段というか、欲望刺激によって購買力を高めるということになるわけじゃないですか。

そういう購買力が少なくなったら不景気になるんですから、困ったもんだ、ああ、困ったもんだ、ということになりますから、欲望を肥大せよ、肥大せよということなるわけで、これが市場経済の持っている大きな矛盾なんですよね。

欲望を肥大させたらどうなりますか？　たとえば食欲。これを食べなさい、あれを食べなさい、これは素晴らしいものです、と刺激するわけ。欲望が刺激され、欲望が肥大すると、自己中心になる。だって欲望というのは自分本位だから、だから自己中心に傾斜するような方向に広告は働くわけですよ。自己中心に欲望肥大を求め、自己中心に、自己中心にと持っていくと、横の人間関係というものが手薄になっていくじゃないですか。

人間関係というものがかつての共同体の経済と違ってバラバラになるわけ。しかもお金を介してだから、非常に消極的な人間関係というものにならざるを得ないわけです。

マーケットに行って、レジがあるでしょ。レ

ジの所で、「ありがとうございました」って言って、挨拶をする。買ったほうは、買ってやったと言わんばかりに、ずっと黙って通っていくというまことに無礼な姿勢というものが見られるというのが、日本のマーケットの状況でしょ。欧米の場合には、かなり市民社会が発達していて、対等関係があるもんだから、そういう場合でもお互いに「thank you」「thank you」、切符を買うときにも「thank you」「thank you」とお互いに言い合っていくということがごく日常の生活の中にしみ込んでいるわけです。

我々の場合には古い共同体の上下関係というものが、皆さんはそこで育たないにしても、親の意識などを通し、社会の遺制を通して、頭の中に残っていて、つい上下関係というものに誘いこまれる。

売ってやったんだとか、買ってやったんだとか、こういう上下関係。教師が、教えてやったんだ、教えられたんだ、という上下関係。親は生んでやったんだ、育ててやったんだ、という上下関係。

こういうものが縦にずーっと、きって行く上に、マネーによって人間関係が手薄になっていくというわけだから、縦と横に引き裂かれるという社会的力学というものが働いているというのは、今日の状況ではないかと私は思うんです。

欲望肥大、自己中心、そして孤独感。そういう状況に向かうとストレスが強くなる。『ニューズウィーク』誌には鬱病大国日本を特集した号がありますよ。

実際、心の病というのがすごくいま日本社会を襲っています。学校の先生なんか心の病なんかは実に多いんですよ。あらゆる職業を通じて、その心の病というものが広がっている根拠は、私は、社会的に言えば、縦と横、上下関係、両方から引き裂かれるという、そういう市場経済の社会というものと関係があるのではないかと、私は思うんです。

そういうバラバラな人間関係の問題点をいちばん鋭く表現してくれているのが子ども達であり、若者なんだと私は思っているんです。

まず小さい子ども達の事から申しましょう。遊びが大きく変わりました。本当に私どもの時代の遊びというものと、今の子ども達の遊びというものはすっかり変わっていると言っても、言いすぎではないと思います。

僕らのときは、学校がすんだら鞄を投げ捨てておいて、そして、番長じゃないけど腕白がいて、今日はあの山を征服しようとか、あの山へ登ったら海が見えるって言うんでね、僕なんか、企みをやったもんですよ。遅くなって暗くなって、親に迷惑をかけたことがありますよ。

あるいは、蜂の巣を襲撃しようって言うんで、いろんな企みをやったもんであります。巣がいったいどこにあるかってんで、蜂を追いかけてずっと巣のある場所を探求して、そして途中にたて番を立てて、そして連絡路をはっきりさせておいて、最終的に蜂の巣を襲撃するというような事もやりました。魚を釣るとか、もう、いろいろな企みをやったわけです。そして、仲間と喧嘩をする。仲直りをする。また喧嘩をする。仲直りをする。そういうことを繰り返す中に我々の子どもの生活というものがあったわけです。

今の小さい子どもたちはだいたい家にこもって、カチカチカチでしょ。カチカチってわかりますか？　言いようがないから言うんだけど、そして携帯でしょう、万事。もう人間関係というのは、携帯を媒介するという、ああいう媒体を使わないと皆さん生きられないんじゃないですか、もう。

そういう機械に依存するということになっていて、肌と肌とをつきあわせて、顔面に自分の感情を表現して、その表現された肉体の表現と向き合って反応を繰り返す。これで人と人との関わりの手心というものが、感性として身に付くんですよ。

知恵じゃないんですよ。躾でもないんです

よ。感性として身に付いていく、人と人との関わりの手心というものが身についていくということ。

何よりも遊びって言うのは、これ、命令によって遊ぶということはないでしょ。遊びは内発的ということが特徴でしょう。自分がその気になって遊ぶんじゃないですか。じゃないと遊びじゃないじゃないですか。その気になって遊ぶ、そういう内面からの願いによって行動を起こすというのは、一つの志の現れ方なんです。

しかも仲間と喧嘩をしたり、仲直りをしたりするという社会感覚が、古い遊びの中には、たっぷりと蓄えられていくということがあるわけです。

遊びというのはね、あらゆる動物、特に高等哺乳類は遊びを通して、自分が猫なら猫という種、ライオンならライオンという種の特徴というものを獲得するんです。遊びの中には人が人になるのに必要な要件がちゃんと隠されているんです。まず内発性、自らの意志で選択をする。志でしょ。そしてその志も、ただ自分の我侭じゃなくって、仲間との関わりの中で、社会的な感覚が身に付くんですから。

自分の内発的なことだけじゃ志にならんわけです。自分の内発的な思いと、他者との関わりの中で、自分の思いが洗練されるんです。磨かれるんです。改善されていったり、悪くなったりする場合もあるわけだけれど。いろんな場合があるけれども、とにかく、内発と自治、自治っていうのは、自分たちが企むってやつですよ。内発と自治というのは、人間が人間になるための必要条件。人間が人間の特性を獲得するのには十分な遊びをやらなくっちゃならないわけです。

今、機械が発達したから、その機械の良さを活用するということも私は否定しないけれども、しかし、大本である体と体とのふれあいというものの中で、内発と自治が鍛えられるということは非常に大切だと思う。

今、ここでやってられるキャンプ生活っていうのは、それじゃないんですか？　内発と自治でしょ。遅まきながら。失礼だけれど、遅まきなんていう、でも、それ、時代がそうするだからしょうがないんですよ。皆さんの責任じゃないんですよ。僕らの責任なんですよ。後にいらっしゃる方の責任なんですよ。そういうものが作り上げた社会というものが、縦に横に人間関係というものを引き裂いている状況の中で、「人間になれ、人間になれ」ってまともに説教する人がいるけれど、僕はそういうのはもう、嫌なんですよ。

そういう状況というものの中に、新しい「どう生きるか」という志を探求するということが必要なんでしょ？　だから今求められているのは、あのふるさとの志、錦を飾ってふるさとに帰るというそれよりも、こんなに機械化し、こんなに市民化した状況の中でもって、私どもはどう生きたらよいかということを考える。どう生きるかという問題を考えないといけない。志という問題は結局どう生きるかという問題に、尽きるのだと私は思うんです。

その時代に応じ、その環境に応じ、この仕事に応じて、どう生きるか、この探求というものが志ということに他ならないのではないだろうかと思うのです。

今、小さい子どもの遊びのことを申しあげましたけれども、思春期、これはあらゆる生き物にあるんです。これは、思春期というのは、巣立ちのときなんです。親の庇護から離れて、自分を自ら規制をしていく。自分自身というものを見つけて自分自身の流儀というもの、生きる流儀というものを見当付ける。

細かいところまでは見当つかなくても見当づける。少なくも親の庇護、そういうものから自由になるという、そこの時期が思春期なんです。

ところが先ほど言っているような遊びというようなものも、バラバラな遊びですよね。あ、こないだ日曜日、久しぶりに子どもの声が聞こ

えたから、僕は公園に飛んで行きましたよ。

どんなんやってるんだろうな、と思ってね。確かに子どもは、声を上げて遊んでましたよ。しかしグループが小さいですね、今の遊びは。兄弟であるとか、お隣であるとか。仲のよい同期生一人、二人とか。とても小さいですよ。しかも公園の松の木の影にはその子たちの親がみんな、たむろしていましたね。

うちの子の安全を心配してるんだと思うんですけど、危ない社会にしたのは人間と人間の関係が疎遠になったから危険になったんですよ。あそこの子はどこの家、あの子はどこの子だって分かってるときには、そんな犯罪は起こりようがないんですよ。みんな疎遠になっちゃってるから、遊ぶのにも危険なんです。だから松の影からひも付きの遊びですよ。自由な遊びじゃなくて、そういう子どもたちが思春期になったときに、自分を見つける、自分の持ち味を知ることが非常に難しいわけですよ。

なんとしたら仲間外れにならないで済むか、こういう思いが中学生たちの間では、非常に大きな気風になっているのではないかと私は思います。

そういうつもりで中学生の諸君とも私は触れ合っています。Cちゃんという、私の知っている一人の中学校の子ですが、なかなか仲間ができない。その仲間がいないということは、本人にとって非常に気になるんですね。

そのCちゃんはですね、休憩時間が一番嫌なんですよ。だって休憩時間には、他の人は二、三人集まったりなんかしてやってるけど、自分だけ孤独に一人で机のところにいるっていうのは辛いんですよ。で、休憩時間だけはトイレに行ってるという。あるいは学校から帰るときにも、一人で帰るというのは恰好が悪い。走って帰るんです。仲間なしに帰るということの恥ずかしさというものをCちゃんは感じていたんだと思います。

まあ、これは一例でして、百人百様なんですけど、一つの例の中に私は仲間を作るということに、すごく気を遣わなくてはならないような社会に、若者たちは生きなくてはならないということになってることは事実だと僕は思います。

仲間関係が手薄な中で自立をするのには、人間という動物にとって、非常に具合が悪い。なぜなら、我々は自分とは何かということは、他人を通して、他人を鏡にして自分を知るんですよ。自分が他者に働きかけることによってその反応を通して、自分というものがいろんな友達から、関わりの中から見えてくる。自分の自画像というものが。他者との関わりの中で漠然としたものでも描き出すということになるわけ。

ところが他者との関わりが、携帯はともかくとして、直接的な接触というものが疎い状態の中で、自分を見つけることが難しい。自分というものの自画像が描きにくい。こういう思春期の悩みというものが、今日の状態としてはあるのだと思います。

この状態は、だいたい経済成長期1980年代。みなさんが生まれた頃だと思うんだけれど、その1980年代が頂点だと思われます。　その80年代末から90年代にかけて、尾崎豊がこういう歌を唄いましたよ。「僕で僕があるために」自分というものが見えにくい、その時に、僕が僕であるために、ということを絶叫する。本当に若者の置かれている心理状況というものを心身全体の力を込めて歌い上げた「哲学者」ですよ、彼は。「僕が僕であるために」それに引きつけられた若者たちが、尾崎の周りに集まった。多くの人がそれに響きあったんです。

僕はその頃、70歳の末ぐらいだったけど。やっぱり尾崎に引きつけられましてね。彼の７周忌には僕は参りましたよ。まあ、頭の禿げた人間は僕ぐらいだったけどね。だいたい若い人でつめていた。だいたい1時間くらい前に早く行かないと会場いっぱいなると思い、早く出かけましたけど。その時僕は、「僕が僕であるために」

という代表・尾崎豊、日本の青春の代わりに絶叫してくれたんだという思いでした。

今申し上げたのは目当て。志、それを立てるには、自分の自画像が見えないと、自分の夢というものが描けないですから。「僕が僕であるために」というのは、自画像を求めたんですよね。

その自画像の中にまさに志があるわけです。今の社会というものは、志の立てにくい時代だということ、申し訳なく若い人々に、むしろ私どもが頭を下げなくってはならないと考えているのです。

－休憩－

本当は、質問の時間をゆっくり取りたいと思っていたのですが40分にはここを立たないと飛行機に間に合わないそうで、帰れないことになりますので、あのギリギリまでお話しするようなことになるかもしれないんで、ご勘弁をいただくことをあらかじめお断りしておきたいと思うんです。

そうとう省略しますので、緻密に言うべきところをラフな形でしか表現できないのが、心残りなんですが。

日本社会における志の状態というものを、ちょっと図式的に申しあげますとね、こうなるんですよ。日本社会のこの志の構図ですね。それをちょっと申しあげます。その頂点には憲法がありますよね、これ。僕はあんまり法律は好きじゃないんで、なるべく法律は簡単な方がいいと思ってるんですが、しかしわが国の憲法、これは一応、日本国民の法、私たち主権者が権力をしばっている法律です。実はこれはすごい憲法だと私は思っているのです。あれはアメリカ製なんですよ、実は。アメリカのチームが作ったんです。でもね、それは詳しい歴史を申し上げなければならないんですけど。実はアメリカのチームが、あの憲法草案を作るときにですね、1945年の6月、まだ沖縄戦争が戦われているとき、国連憲章ができるんですよ。

その国連憲章が、我々人類は二度も惨憺たる残酷な戦争をやってしまった。次の世代に戦争を起こすようなことがあってはならない。個人の尊厳と基本的人権を軸にして、平和を守りましょう。これが国際憲章の精神なんです。それが1945年、戦争がまだ、日本の戦争は続いており、ドイツは敗れてる。そういう状況の中に国連憲章ができる。

それから11月にユネスコの憲章ができる。これは、戦争は人の心の中から始まるものであるから、我々の心の中から平和の砦を作りましょう。こういうユネスコ憲章というものが11月にできる。その直後の12月から、アメリカチームは憲法草案作成にかかるんです。

そうすると彼らは世界一の憲法を作りたい、と思ったと言う当事者の告白もあるように、国連憲章の基本的人権、個人の尊厳、そして平和。この精神を受け止めないわけにはいかないわけでしょ。いや、一番直接的に影響を受けてるから、アメリカ製ではあるけれども、国際的な反省の日本版なんです。国際的な反省をした結果の日本版憲法なんです。

憲法って言うのは、権力を縛るためのものですからね、権力を持っている人間っていうのは、足枷、手枷に思うんですよ。もう、すぐに改定しなきゃならないっていうようなね、考え方は、1950年の朝鮮戦争以来、もうすぐに起こったんですよ。

今のような状況というもの、自衛隊の前身警察予備隊などができるのもそのときですよ。どんどん変わっていっちゃったわけで、東西冷戦というものを機会に、非常に大きな転換が起こりましたけども、戦後の初心は国連憲章、ユネスコ憲章の精神を受け継ぎ国際的な観点を含んだ日本国憲法です。もちろん人間の作った物に完全なものはありません。今だって、僕はこのへんは変えた方がいいんじゃないかと言うとこ

ろはあります。でもね、その根本精神を侵そうとするような改定には、僕は納得しないし、そういうすばらしい憲法がお城に例えると、金の鯱のように世界に発信をしてるんですよ。

名古屋城の金の鯱は、国際博に出たんだから。あれは世界的な価値として、出品されたものであります。憲法も金の鯱に相当すると思うんだが、その下に司令塔があるわけ、天守閣だから。司令塔に住んでいる住民、つまり国民に対して命令を発している政権というものはどうなってるかっていう、これが僕はただ悪いというふうなことでは済まないんですけど、憲法の精神を十分に積極的に生かすように考えるようなスタイルになっていないということが残念だと思います。

実はね、ドイツにしてもイタリーにしても、戦争のあと、亡命政権が戻ってくるんですよ。

外国に亡命してね。戦争が終わったら、こういう国にするよ、っていう政権が外に存在したんです。日本にはその亡命政権が存在しなかったんです。そして直接戦争犯罪にかかわりをもたなかった旧来の政治家は、天皇制を守るということが第一義だったんです。それが唯一の政策だったんです。何として天皇制を守るかということに、彼らの関心は集中してたんですよ。だから国連憲章やユネスコ憲章にはその眼を向けなかったのです。視野に入るはずがなかった。天皇絶対主義をやめて天皇象徴制とした。天皇は象徴である。実際の政治には手出しをしない、こういう憲法ができたわけでしょ。そして主権が私どもの手に引き渡されたわけです。

あれ、僕、主権者なの？　そういう印象がまだ日本人の間にはあるのではないかと思うんですが、主権が変わったんですよ、あの憲法によって。つまり前は天皇が主権者であって、我々は臣民だったのですよ。それが、新しいアメリカ製国際憲法日本版によって、我々は主権者になり、女性は初めて参政権を獲得したんですよ。それまで女性は投票権がなかったんだから。



農地改革にしろ、これなんか占領下でないと絶対行えるような政治家はいなかった。だから女性の参政権を認めるというような者もいなかったんでしょ。まして天皇はね、象徴ということで、政治から切り離すというようなことをやれるような政治勢力はいなかったんですよ。なんとか守りたいと思ったわけです。

だからあの憲法は、第１章天皇という章を入れることによって、日本人の心と少しでも繋がりを持ちたいというふうに考えたろうと思うんですが、その代わり第２章に９条を１条入れて、戦争放棄する。軍隊を持たない、こういうことを入れたのは、国際情勢の中で生まれた人類の反省からきているのです。

ところが、僕らの主権者意識というのは大変いい加減なものなんですよ。私どもが主権者だと考えるのはなかなか難しいんですよ。僕は満28歳まで、臣民（しんみん）なんです。臣民って言葉、分かる？　臣民って言うのは家来、天皇の家来、天皇のしもべというのを臣民というふうに言いました。臣民というものが、僕なんか28歳までの身分だったから染み込んでいるわけです。

そう、こんなことがありましたね。僕、8年前に女房を失いまして一人なんですよ。一人で独立の生活を、所帯をやっているわけ。で、独立の一人所帯だからね、自治会の回覧板が回ってくるわけ。で、ごみ収集場の当番っていうのがやってくるんです。ちょうどそれが当たった日が、夏のお盆過ぎの頃のまあ暑い日だったん

ですよ、2、3年前。当番っていうのが入っちゃうから、明日から次の週１週間、ごみ収集場の当番になったわけ。もちろん、僕はやる気になって、生ごみをこう微細に見て、不正なものは直すくらいの、意気込みで出かけて行った。なんとか、その日は、生ごみの日は乗り越えました。

１日おいて、瓶と缶の日がきた。これは楽であろうと思ったね、瓶と缶だから。そこで僕、のこのこと収集場にちょっと遅めに出て行ったんです。なんと、ちょうどお盆の後だったからアサヒビールの缶だの、瓶がわぁーっと山のようにあるじゃないですか。その間に、いろんなものが突っ込んであるという状態を何とか整理しなきゃならんという状態です。

呆然と眺めていたら、すぐ近くにある親子でやっている小さな鉄工所がありましてね。その鉄工所の社長さんがね、のこのこやって見えましてね。「ご苦労様でございます」と丁寧に挨拶をされたんですが、助けてはくれないんですよ。（笑い）

そしてね、そのアルミですね、アルミ缶があるわけですが、これを作るのにはものすごい熱量が要るんです、と。なんしろ鉄工所だから、そういう方向の知恵はあるわけで、大変な熱量が要る。特に表へ、直接に名前を印刷したりなんかをしてる。印刷なんかをしてるのは、再生しても質のいいものはできないのですと、こういう一席、講義がありましたよね。（笑い）

そのあとで急に姿勢を正して、僕の方に向かってね、「先生、日本はどうなるでしょう」と、こうきたわけ。僕はそのとたんにね、「滅びるでしょう」と、こうやっちゃたんです。（笑い）

すぐ反省しましたよ。「どうなるでしょう」「滅びるでしょう」これが、臣民意識なんですよ。本当は「どうするかを一緒に考えましょう」これが市民意識。自立した主権者の意識なんですよ。

お上がどうするか、どうなるかっていうのを待ってるんですよ、僕ら。それが僕の中にまで染み込んでいるから、「どうなるでしょう」って言うのに、ついのっかっちゃって、「滅びるでしょう」なんて言っちまった。「一緒に考えましょう」これが、主権者の志じゃないですか。

「どうなるでしょう」「こうなるでしょう」

まあね、いろんな集会がありましたよ。教育基本法改定とか、何とかありましたよ。そうするとね、教育基本法が改定されるとどうなるかを、学者が盛んに言う。そうすると、学校の先生が向こう側から、「いやあ、もうとっくになってますよ」とか何とか言うようなことがあってね、だいたい集会終わりなんですよ。「どうなるか」「どうなるだろう」ということで終わちゃうわけです。

そうじゃない。どうするか、ということを考える主権者の力量が僕らにはまだ弱いということです。志の持ち方が主権者としての志、自立し、政治に参画する、そういう主権者としての意識というものが、まだ我々の間では眠っている部分が、私自身の中にある。そういうことを痛切に感じたんですよね。

「どうなるでしょう」「どうなるでしょう」「今の経済どうなるでしょう」「政治どうなるでしょう」みんなわくわくしているんだと思いますけど、わくわくって、喜んでわくわくというより、心配でわくわくしてるんじゃないかという、でもどうするかって、じゃあどう生きるかって、これを考えるのが今、日本の人々の必要とすることではないかと思います。

天守閣の司令塔はグラグラしてるけれど、おまけにその下の石垣である我々は、ガタガタでしょ？　さっき言ったばっかりでしょ。縦に横に裂かれて、石垣はバラバラなんですよ。その上に天守閣が乗っていて、天守閣の上に光り輝く憲法があるというような形になっているわけです。こりゃ大変な片手落ちの社会構造だと思います。

そこでどうするかというようなことを考える

のであれば、石垣を積み直すということじゃないですか。石垣を積み直すということは、私どもが石垣の一つだから、一人一人の人間相互の間に密度の濃い、しかし昔のような血縁と地縁というようなものにだけ頼るようなものだけじゃない、異質なものを含んだ、おおらかな結びつきというものを想像して、民衆的な主権者としての連帯というものを、しっかり作っていくということを時間はかかっても、身近なところからぼつぼつやっていく、それがどう生きるかということの一つの大きな日本社会における民衆の心根の中に、根性としてあってもいんじゃないかと僕は考えるわけです。

お断りしておきます。志というもの、その人その人ならではのもの。他人から与えられるものじゃないんです。その人その人の流儀で、その人が創り出すものが志なんです。

でも今僕が話しているのは、日本人として連帯しあっているこの社会というものの全体が、新しい質の連帯を生み出さない限り、自分だけで夢を描いてみても、これを実現することは難しい。

みんなが違いを大事にしながらも、それぞれ、繋がりあっていくという新しい繋がり方というものを見い出すということが必要だということになるわけです。

ことがあれば、政府が悪いとか、ことがあれば教育が悪いとか、そういうふうに人々は言いますけど、実は私ども自身の生き方が問われているんです。なによりも石垣の一人としての、私どもの生き方というもの、一人一人のユニークな志というものが欠けている。こういうふうに全体の構図としては見ることができるのではないかと思うんです。

憲法を頂点としての、我が国の言わば、志というものを、大まかな構図で申し上げてきたわけでございますけれど、どうなるかではなくて、どうするかということが大事だと申し上げたのですから、これから残された時間を、どうするかという問題。めいめいがそれぞれユニークにどうするかを考えるんです。大きな連帯というものの中で、自分のめいめいの目当てというものを確認をする、こういう前向きの工夫をしなくてはならない。

私は今、こういう志を持ちなさいなどということを皆さんに言う資格もなければ、言っても無駄なんですよ。

みんなが自分流儀にしか、志は作れないんですから。だけど、ヒントは言えると思うんですよ。

こういうことを考えに入れながら、石垣造りの一員になりましょう、と。こういうどうするかのヒントというものをこれから申し上げてみて、皆さんのご参考に今日、したいと思っているわけです。ヒントですからね。いい加減なもんですよ。あまり信用しないでください。あくまでヒントであると思って、自分流儀の思想を形成してください。これはもう私の心からの願いなので。

さて、大きなスケールでどうするかという問題を考える場合の足がかりになるのは、やっぱり現在世界の持っている人類の共通意志としての個人の尊厳、基本的人権、そして平和。こういうものは共通の大きな連帯の星になるのではないかと、私は思うんですよ。このグループの方々もまた、個人の尊厳ということが、このクラブの精神として書かれているということを私は教えられました。じゃあね、個人の尊厳とか基本的人権っていうのはなんだ？　新しい自分流儀にそれぞれそういう問いに答える知恵を出していただくことが必要なんですが。それを出していただくためのほんのヒントとして、個人の尊厳、基本的人権とは何かということをちょっと申し上げてみたいと思うんです。

基本的人権という言葉をね、字引で引きますと、必ず書いてあるのが、「生まれながらにして、有する権利」と書いてありますよ。

「生まれながらにして、有する権利」である

とすれば、生まれ出るのは命だから、命の特徴の中に、基本的人権は含まれてるに違いない。これが僕の考えなんですよ。そこで命の特徴は何かということを考えるわけですよ。およそ命なるものの特徴は何なのかということです。

まず、その一点。第一のヒント。これは「違うということ」みんな違うでしょう、一人として同じ人はいませんでしょ。一卵性双生児の方いらっしゃいますか、ここに。一卵性はＤＮＡ構成が同じなんです。でも生まれたあとはすぐ付き合う関係が違うから、すぐ違う性格ができます。個性が。とにかく違うんです。顔の形も、個性も、思想も。なんで違うんですか？　これ、あらゆる生物そうなんですよ。

豚も同じ豚っていうのはないんです。みんな一人ひとり、一匹いっぴき違ってる。一木一草全部違ってるんですよ。ＤＮＡの構成が。遺伝子情報を乗せたＤＮＡ構成はみんな違っているんです。なんで違っているんですか。これは科学では分からんわけですよね。創造主がお作りになったわけですから。わかんないんですよ。

しかし、推定はできるわけです。もしみんな一緒だったらどうですか？　天候の大きな変化で、恐竜じゃないけど、いっぺんにやられてしまうということが起こるでしょ。伝染病でも同じなんだから、ばーっと広がると言うことも言えるでしょ。あるいは天敵と言うようなものにも弱くなるでしょ。

違っていると必ず生き残るのがいるんですよ。ここにいるのはみんな生き残りなんです。全部皆さん。僕は第２次世界大戦の生き残りなんです。太平洋で36時間、筏にぶら下がっていたんですから。潜水艦にやられていたら僕、ここにいませんよ。

生き残りになっちゃたわけ。みなさんは交通戦争、病気からの生き残りでしょう。残り物っていうとちょっと具合悪いけどね。しかし残ってあることによって人類のどこかを支えてるんじゃないですか。生き残ってあると言うこと自体が、それが値打ちがあるんですよ。人類を守ってるんです。人類の命を繋いでいるんですよ。そういうふうに考えれば、残りものであるばかりでなく、一人ひとりが種の支え手だと、こういうふうに考えたらどうでしょうか。

私は都留文科大学という山の中の大学から招かれたんですけど、山梨県にあるんですよ。新宿から「あずさ」という特急に乗って「大月」で降りて、ローカルの私営電車に乗ってまた行かないと。富士山の北麓にあります谷間の大学。山の中の大学です。そこは小学校の先生を育てるのが主。そこで教員を育てないと谷間に先生は来ないということで、住民の要求でできた教員養成所がもとになって、後に都留文学大学というのが谷間にできた。そこから招かれた。僕は非常に光栄に思いましたよ。各大学がそれぞれみんな中学校、高等学校の先生を育てるのに傾いているのに対して、あえて小学校を目指す教師を育てる大学。全国から学生諸君が集まってくる。小さい都留という市なんです。人口３万人の中で学生がかなりの幅を占めています。夏休みになると皆帰っちゃうんですよ。休みに帰るでしょ。３万を切るから市の資格がなくなるんです。

学生のおかげで、３万が超えてるんですから。だから学生っていう非常に都留市にとって大事な、北は北海道から、南は沖縄から、先生になりたいという人が僕の時には集まりました。その大学で僕がやったことの一つは、１週間に１回、まあ学長室に来てもらいまして、一時間ないし、一時間半、身の上話を聞くと言うことやったんです。だいたい１週間に１回、６年間の在任中出来るだけ続けたつもりであります。その中の一人、さっきと関係があることをお話し申しあげます。

彼は毎週のごとくに、隣の町の病院の植物状態にある老人を訪問して、世話をする。体を拭くとか、撫でるという以外に、やることは無いような方なんだそうですよ。

「いやあ、君、すごいことをやってるなぁ」と感心して聞いていました。そしたらね。その若者、私に向かってね、「いやぁ、実はこんなことがあったんです。あるとき、私が、その人の病室のドアを開けて入ったら、いつも植物状態であまり反応のない方なのに、その方の目が私の方に向かって光ったんです」

大事件のように言ってくれたんですよ。僕は、「君、すごいものに触れたな。命の輝きに触れたんだ」こういうふうに感動したんです。僕はつい教師の悪い癖で、余計なことをいっちまったんです。「君はここを卒業したら、小学校の先生になって村に帰るといったけれど、子ども達と付き合う時に、その植物状態の方の目の光というものを、ちょっと思い出してくれよ」というような余計なことをいっちまったんですよ。

それから卒業間際にもういっぺん、彼は私の部屋を訪ねて、「色々考えました。私は障害をお持ちの方、あるいは病に侵されている方をお世話する仕事を選ぶようにしたいと思います」と、僕に言ってくれたんです。

「それはいい仕事だ」と言って僕は感動しましたが、僕の感動はもう一つあったんです。より強い感動があったんです。それは植物状態になっているそういう方であっても、目の光だけで、ひょっとしたらその若者の人生行路の選択に影響を与えたかもしれないと思ったからです。

人間は、どんな状態になっても、お荷物というようなことはない。どんな状態にあっても、どんな人間でも生きている限り、人間としての尊厳を持っている。人類を支える何らかの可能性というものを抱えて生きているんだと。これを基本的人権というのと違うか、そう思ったんですよ。どんな人であろうと生き残っている限り、犯すべからざる人類の支え手としての尊厳を持って、私はかかわりあっていくんだということ。彼によって教えてもらえた、というふうに思います。

私どもは、あれはお荷物だというふうにすぐ差別的な見方をする、異いを差別に変えてみるという傾向が大変強いです。違うんだというのは事実ですから、科学的事実ですから。神から与えられた真実ですから。違うんだということを受け入れるということをしないと、社会は成り立たないんですよ。

ところが、それは難しいことなんです、実は。僕は、私の家で5種類のサークルをやってるんです。あと2つばかり、イレギュラーにやりますけど。その中の一つに中小企業家同友会っていうのが。ロータリーよりも、もうちょっと経済的には苦しい状態に置かれている、いやロータリーも苦しい状態かも知らんけどね。だけど、大変、金のやりくりに苦労されてる方が多い。そういう方と、毎月第1月曜の晩に、6時から8時まで勉強会を持つ。年初めに志を述べ合うことになったんですよ。今日は志の話ですよね。

志なんて言うようなことは僕は使いませんでしたけど、今年の目当てを話しあいましょう、と言うのが誰かから出て、一人ずつ語ったんです。そしたら布団屋さんがいましてね。その布団屋さん、「今年はひと回り大きな人間なりたい」と言い出したんです。「なんだい」と、皆が聞くんですよ。そうすると、その人はね「今年は女房の言うことに耳を傾けるように努力をしたいと思ってます」と、こう言ったんです。

そう言ってね、「実は私ども夫婦は喧嘩ばっかりやってるんです。3日おきに喧嘩をやってる。実を言うと、結婚式の日も喧嘩をしたと言うんです。車で結婚式場へ行くのか、電車で行くのか、って言うので喧嘩をやったって言うんですよ。だから、喧嘩の歴史が古い」と言ってましたけど。

その布団屋さん、今年は奥さんの言うことに耳を傾けると、こういうふうに言い出したんですから。大事件なんです、これは。そしたらね、仲間がね、「いやぁ、喧嘩するぐらいなのは、

仲がいい証拠なんだ」と、こういうふうに言い出したんですよ。なるほど、その通りなんだな。

実は、アメリカのミシガン大学で129組の夫婦について、調べた結果が発表されたんです。意見と行動の合わない時に、黙ってすますのか、それとも表現しあって議論をしたりするのか、そういう事を17年間に渡って調べたというのです。よくまあ、そういう暇があるなぁと思うんだけれどね。イラク戦争なんかやってるのにね。(笑い)

そして調べたらですね。議論をして解決をめざす夫婦の方が、長生きをするということが分かったと。喧嘩をしないで、食い違いを黙ってすごしあっているという状態の方が、死亡率が高いと言うんですよ。

そういう研究結果を出してるんですよ。僕はそんな研究は、ほんとうは好かないんですよ。でもね、そういう事実は理解できるんです。自己表現をお互いにしあって物事を解決するようにするのとね、黙ってすれ違っているというのは大変違いますよ。

黙ってすれ違うって言うのはストレスを増しますよ。それこそ、命を縮めるということが起こるんじゃないかと僕は思うんで、その結果は尊重してもいいと思うんですよ。つまり、違いをあらわにするということだけでも、黙ってすれ違いになっているよりも、はるかに人間の活力をもたらすということは確かだと私は思うんです。

夫婦っていうものはね、性も違うんでしょう。当然、男性と女性ですから。しかも学歴も違えば、経歴も違うわけ。全部違う人間がペアになるわけだから、本当は夫婦の間には断崖絶壁が横たわってるんですよ。分かります？　若いから分からないかな？　結婚した二人は、全然、異質なんですよ。その異質な人間がペアを組んでいるわけです。で、組んで始めは恋愛精神によって、違いを超えて結びついているわけです。2、3か月するとぼつぼつ割れ目が見えてくる。そして自分の言う通りならないと両方が機嫌が悪くなるということもあるでしょう。違いを受け入れることができなくなる。そうならない人もたまにはあるだろうけれど、きわめて稀だと、僕は思いますね。他者の、相手の違いを受け入れないで、逆に自分への同化を一方的に強制することは、人間の尊厳を犯すということなんです。本当は憲法違反なんですよ。基本的人権の違反なんですよ、これは。

基本的人権というものを遠くに眺めないで、私どもの身近なところに観点をおいて、石垣を造り直すということが大事なんですよ。ごく身近なところから違いを超えて分かり合うという努力をするという、そういう人間関係を作り出していこうというのが、違いを大事にしていく、人間関係を創造的にする、クリーンな、よりクリーンなものにしていく。個人の尊厳を分かち合うというのは、ロータリーの精神でもあるはずです。

そういう身近なところからの石垣の積み直しというものが、学校の先生と子どもとの間にも言えることです。学校の先生なんかね、子どもに対してね、使役動詞を用いることが非常に多い。「書かせる」、「読ませる」、「立たせる」、みんな使役動詞ですよ。ヨーロッパの学校ではね、僕はそうなってないと思うんですよ。wouldとか、couldとか言うような条件法がありまして、良かったらというような意味に日本語に訳せばなるんだけれど、「もし君、よければ座ってください」「よかったら文章を書いてください」相手のことを考えて、表現を求めるということが習慣化しているんです。

日本の場合は、「書け」書かせる使役動詞が実に多いんです。これは上下関係が残っているという証拠だと思います。無理もないですよ。ヨーロッパが市民社会として、主権を市民が獲得したのはご承知でしょ。1789年、フランス革命で、主権は市民の手に渡り、絶対君主が殺されたんですよね、あの時は。ギロチンにかけら

れたでしょ。そして主権者の登場ですよ。市民の主権者が登場した1789年でしょ。アメリカはもっと早いですよ。確か、1776年だと思いますよ。7月4日じゃないですか。独立宣言をやって市民平等を宣言します。違いを受け入れあって、みんな個人の尊厳を尊重し合いましょうと言うのが、宣言の趣旨なんですよ。

これがもう18世紀に成立するのです。日本は絶対制を倒したのはいつですか？　1945年でしょ。1789年と1945年の間には、百数十年の差があるでしょ。石垣をじっくり作らなくてはならないのは、そういう歴史の上からも考えることができるんで、身近なところから、じっくりじっくり、違いを超えた関わり合いの創造という仕事を、まさにロータリーが言うように、個人の尊厳の分かち合い。それが非常に重要な命の特徴から来てるんですよ、それは。違っているのは事実なんだから。違いなさいじゃないんですよ、または、違っていいんだよ、あれ僕、嫌いなんですよ。違っていいんだよ、じゃないんです。違ってるんです。もうはっきり違ってるんですよ。そこを前提に付き合いましょうと、こう考えた方がいいんです。違っていいんだよ、なんていうような説得調って言うのは、悪い意味の教育でしてね、困ったことだと思います。

時間がありませんね。重要な事があるんです。2番目です。

第1のヒント、時間かけすぎましたね、2番目のヒント、これはすでにちょっと触れたので簡単にやりたいと思います。

命の特徴の二つ目は、先ほど述べたように、自ら変わるという特徴です。これはどんな、いわゆる下等と言われる動物でも、自ら変わる、そういう形で、しかも自分のアイデンティティーを維持する。まあ、与えられた内なる設計図というのは、非常に幅の広い物です。ＤＮＡ構成はですね。非常に幅の広いものですから、だからその枠内ではあるでしょうけれども、豊かなゆとりの中を自分流儀に発達をする。特に人間の場合は、お母さんの胎盤から抜け出ると、何が待ち受けてますか？　文化と社会が待ち受けてるんですよ。

人間という動物は不思議なことに、未熟に生まれるんです。生まれるときにね、脳が大変早くに発達しますのでね、あんまり大きくなると、産道を通りにくくなるんです。それでまだ小さいうちに出るとも言われています。あの未熟な形で、産まれ出るのです。

ある学説によれば、1年早産だと。もう1年いて出たときに立てば他の動物なみ、いいんじゃないかと、こういう説もあるくらいですね。未熟なままに、脳の発達と関係もあると思うんですが、未熟なままに早く出るんです。未熟な状態が、まあ、幼年期、少年期、思春期とこう続くでしょう。長い間、世の中に出たあと社会的文化的胎盤というものが待ち受けていて、その社会的文化的胎盤の中で鍛えられて人間になっていくわけです。

いやぁー、人間には完成はありません。90歳になろうと未熟で未完成ですから、いくらでもまだ可能性はある。胎盤にずっといるのかもしれないんだけれども、まあごく常識的に言えば、18歳くらいまでの間、社会的文化的胎盤の中にはっきりと存在するというふうに言っても、いいかもしれないと思います。

その社会的文化的胎盤というのは、文化を介しての人間と人間との関係、人間と自然との関係が網の目のようにできている社会というものの中で、人間は先ほど言ったでしょ、多肢選択型、選びながら発達をする。自分の意志による選択によって、文化を選び取って自分のものにしていく。自分の流儀によって社会の人間関係というものを創っていく。そして自分を創り上げていく。こういうふうな関係になっています。

人間という動物は未熟に生まれて、社会的胎盤、文化的胎盤の中で、学びながら自分を創っていくんです。文化を選び、社会を選びながら、自分というものを創造していく。その営みは、

学習と言うことができるんです。

もし人が、この社会的文化的胎盤に生まれて、用意されてる文化をぜんぜん学べなかったり、あるいはまた人間関係が孤独であったりしたならば、人間として成長できないじゃないですか。つまり人間は生まれたときから、人間との関係、人間と自然との関係というものの中で、文化を介して学習によって自らを創るという動物なんです。学習権というものの保証がなかったら、人間は人間として生存できません。だって学習というものがなかったら、他の法律で保証された権利だって獲得できないじゃないですか。

言論の自由が認められていたって、学習をしないで言論の自由があり得ます？　集会の自由だって出来ませんよ。学習っていうのは権利。胎盤の中での学習権というもの。いや、生涯にわたる学習権。これが生存権そのものの一部なんです。

学習権は生存権の一部だというふうに考えるべきなんです。他の権利を獲得するのにも、学習権を前提にするということなんです。皆さんがこうやって、こういう機会に、年を取ろうと若かろうと、学習を重ねられると言うことの意味の大きさは、そういう社会的胎盤の中での自己形成というものを、促進をしていくという仕事を、皆さんはなさっているんだと思うんです。

学習権の充足のために、ここにおいでになっているんじゃないですか？　何かを知りたい。何かを学びたい。そういうことを元にして、人間の生存権というものは、他の動物と違って特に、人間の場合、学習権は生存権の一部だというふうに考えていいわけです。

その学習の権利を守ってあげるのが、教育なんです。まず教育ありきじゃないんです。まず学習権があって、その学習権を満たしてあげるために、教育という一つの手段というものを講じるということ。教育は一つの手段にすぎません。どういうものか、この国は教育ということを政権を持つ人は好きなんですよ。

1960年代の成長期にはね、「人づくり」っていうようなことを総理大臣が言い出す。人なんて簡単に作れませんよ、これ。だって細胞一つ作れないんですから。こないだ、細菌が一つ合成出来たとか、出来ないとか、新聞に載ってまして、大発見でしょ。細菌が出来るか出来ないか、それも大腸菌のおかげ、酵母菌のおかげ、これらを媒介して、何とか合成したらしいんですけれどもね。まあ、怖いことのようなものですけど、最先端の科学はそこまでいっているんですが、今、最先端と言ったけれど、実際に細菌ができたのはいつですか。30億年前ですよ。30億年前にちゃんと細菌は出来てるんだ。

人間は今、最先端の科学が出来たとかいって大騒ぎしているわけでしょ。人間というものの力が、30数億年の歴史、あるいはもっと長い生命の歴史、地球の歴史、宇宙の歴史などということになればですね、実に細かい一点に過ぎない。まあ一点に過ぎないけれど、小さな小さな宇宙の夢を描き出すことができる。小さな小さな宇宙の夢というものをみんなが一人持って、それぞれその宇宙の夢は違うけれど、しかしお互いにその違いを尊重しあいながら、しかも自ら変わる力をみんな持ってるんです。今の状態がそのままのその人じゃないんだ。何点しか取れない子なんていうことで、その子のもつ可能性を無視することをしないようにしたい。　この子はどんなものになるかなんて、誰もわかりはしない。非常に豊かな可能性を持っている。今欠点と思われることが、まさにそれが長所になるということはいくらでもあるわけですよ。そんなのは例をあげてもいっぱいあるわけですよ。

大江健三郎さんの息子さんの、大江光さんなんか、脳障害でしょ。でも、音を出す、作品を創る、というようなことが出来る。

星野富弘さんなんかは、手足の自由を奪われる。何にもできないお荷物のように見えるけど、自分の違いを受け入れるのに9年間かかった。

それまでは自分より元気な患者さんが、あるいは元気な人が入って来ると、うらやましく思う。同じように不自由な人が来ると、「ああ、俺の仲間だと、ほっとする」と言う。そんな思いをかかえたまま、9年間も経って、キリスト教に入信することもありますが、俺はもう、こういう人間なんだというふうに自分の違いを受け入れる、この自分の違いを受け入れるというのが一番難しいんです。

自分の違いを受け入れたときに、俺はこういうもんだということで、今度は、口に筆をくわえて絵を描き、文章を書き、詩を書いて、多くの人々に感動を与えているという。人間は一人ひとり、不可測の可能性を持っているというのは、そういうことです。

その可能性がいい方にばっかり行くとは限りませんよ。急に多くの人を殺すような命令を出す、そういうふうなこともありうるわけですから。決してその可能性がいい方へばっかりはいかない。だが変わるものだ、変わりながら自分を創っていくんだいうことを相互に信頼しあうと言うことが、いい関わりを創り出すための第2のヒントになるのではないかと思います。

まず違いが厳然としてある。違いを厳然として認めた付き合い方を創り出そう。次に、その違いをさらに超えて、自ら変わる可能性を持っている存在として付き合っていく。それも一つの命の特徴である。これをヒントにさせてもらう。

そして第3のヒントが、命は関わり合いの中にあるということ。今朝、皆さん、他の命を食べたんじゃないですか？　生き物食べたでしょ？　食物連鎖。食べないと生きられませんから。だから相互の間に、食物連鎖って言うんで、食いつ、食われつ、ということやっているんじゃないですか。

いろいろ人間がいて、かかわりの中で生かされているというのが、命の状態なんです。だから命っていうのは独立して、自分の私物のようにあるんじゃないですよ。私物じゃなくって、かかわり合いの中の存在なんだということが。これは命の存続そのものに決して欠くことのできないものなんですから。

かかわり合いというものは、我々の命の特徴であり、一部の特質であるということを考えて、付き合い関係を考えていくということになれば、かかわるということの持っている意味が非常に大事になってくると思うんです。ＤＮＡの研究が始まった時に、ＤＮＡ理論が非常に多く報じられ学会を支配しまして、生命個体は次の時代へ遺伝子を運ぶ運び屋にすぎないとまで言われました。まあ生物学的に言えばそういう面があるんですよね。要するに自分の遺伝子が伝われればいいというふうに、考えることもできると思うんですけど。利己的遺伝子という言葉が言われるようになったときがあります。

しかしね、自分だけじゃ、どうにもならないんです。だって遺伝子を残すのには、相手がいるじゃないですか。男性には女性が要るし、女性には男性が要るわけでしょ。次の時代に伝えられないじゃないですか。かかわりじゃないですか。かかわるということなしに、残る、人類が生き残るということできない。それは明らかなことですよ。

それは単なる男と女とだけで遺伝子が伝わるというものではない。弱く生まれる子ども達みんなが、文化と社会の中で生きるのを助ける、こういう関係になってるわけですから。かかわり、別の言い方をすれば、名古屋城の金の鯱、個人の尊厳、基本的人権を、世界に平和を発信していく。下の司令塔は少々グラグラしているけれど、責任は下の石垣にある。

石垣がお互いの違いを尊重しあい、石垣の一人ひとりが、その生命の特徴である自らを変えていって、自分のユニークさを発揮する、そういう仕事をして、それを大事にする。違いを大事にする。ユニークにその人の流儀に変わると言うことを大事にしながらかかわり合いましょ

う、と。これが、石垣を造り直す、独立した市民としての連帯を作っていく。臣民制を克服する。そういう事なのではないかと思います。

いきなりいい政府を作れって、無理ですよ。まだこの国は民主化の歴史も新しい。ごくわずかだ。だから遠大な夢を持ちながら、しかも身近なところから、そういう人間のかかわりを創り出していくという営みを根気よく続けていくということが大事なんじゃないかと思うんです。

だいたい、大まかな形ですが私の申し上げたいことをお話ししたと思うんです。あと５分間しかありませんね。残念ですが、質問がありましたら、また、ご感想がありましたりしたら、どうか一つ、みなさん方からご発言をいただけましたらありがたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

佐伯　少し時間がありますけど、ご質問どなたかございませんか？　よろしいですか？

大田先生　あとで、感想文なんか書いていただけるんですか？

佐伯　はい、書きます。報告書も参りますので、またよろしくお願いします。

大田先生　綿密に見ますので、そこに思い切ってありのままの思いを書いてください。勉強になるから。それでないと勉強になる機会がないから。疑問と思うところも書いていただいて。

佐伯　大田先生、本当にありがとうございました。僕も今日から、責任ある石垣の一人として、今から石垣造りに挺身して参りますので、よろしく。今一度、先生に大きな拍手を。(拍手)

大田先生　ありがとうございます。

佐伯　西松委員、白石委員、先生の送迎をよろしくお願いします。

井上委員、悪いですけど、食事の完了になってるのかって言うのと、水の出具合、あの向こうの方で聞いてください。

大丈夫ですか、はい。

「時代の変化の中で文化の違いを乗り越えて真にお互いを理解し合うには」

フォーラムリーダー　**安平　和彦**

佐伯ディーン　みなさん、こんばんは。それでは今からライラ名物のフォーラムに入らせていただきます。以後、安平パストガバナー、よろしくお願いいたします。

安平パストガバナー　こんばんは。これからフォーラムをやりたいと思いますが、改めてフォーラムのやり方をもう一度ご説明しておきます。

各班、A班、B班、C班、D班から、発表者の方に1名ずつ前に出て来ていただいて、発表していただきます。ただし、班によっては、二人でやりたいというところもあるようでありますし、それから、発表者と、あとのパネリストが交代したいんだというような、いろんな班の事情がありそうですので、その辺のところは適宜やっていただいても結構ですけれども、だいたい10分ぐらいで、発表していただく。

発表の順番は、ジャンケンで決めていただくというふうにしますので、何もA班がトップやということはありませんのでご安心ください。

それから、発表のあとですね。まず、その意味が分からなければ質問を投げかけていただいて、説明をしていただくというふうに、各班ごとにとりあえず発表を終えていただいて、それから意見交換に入っていきたいと思います。



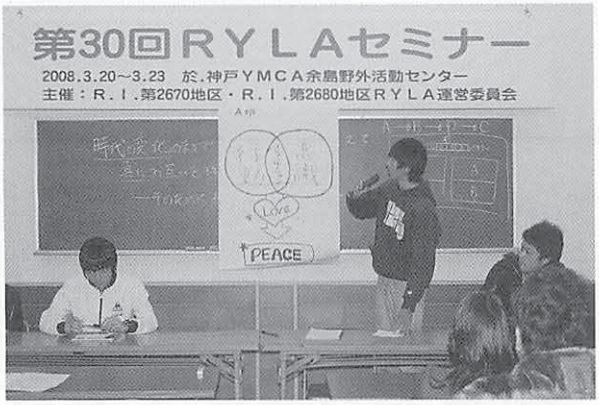
意見交換でございますけど、ロータリアンのみなさんは、おそらく発言したいというような衝動に襲われるということがあると思いますけれども、あくまで受講生が中心でございますので、ロータリアンの方の発言は、こちらが「どうぞ」と言うまではご遠慮いただきたい。大変申し訳ございません。できるだけ受講生を中心にしたいと思います。

それから、意見交換につきましては、パネリスト同士もやりますし、皆さん方も意見交換をしていただくということで、もうできるだけ、みんな一言ずつでもいいから意見を言っていただきたい。ぱっと当てますからね。いいですか。フフフフ。私は、意見を導き出す「ファシリテーター」と言うんですけど、皆さん方の意見を引き出すのが私の役目というふうに思っておりますので、よろしくお願いをいたしたいと思います。

それでは、各班の発表者の方、前においでください。それじゃ、発表の順番ですが、4人でジャンケンを。勝った班から順次発表していただきます。はい、ＡＢＤＣ、いいですか、ジャンケンの結果、間違いないですか？　はい。それじゃあA班から発表していただけますか。

はい、それじゃお願いいたします。（拍手）

バズセッション報告　A班



A班・中村　皆さんこんばんは。A班の中村と言います。

すごく緊張しています。というのもこのテーマがですね、非常に難しいもので、どうとらえたらいいのかというところから始まって、どういうふうに結論を出せばいいのかというので本当に悩みました。

だいたい書き終ったのは６時２０分ぐらいやったと思います。通し練習も１回もしてませんので非常に不安なんですけれどもよろしくお願いします。そしたら発表の方に移りたいと思います。

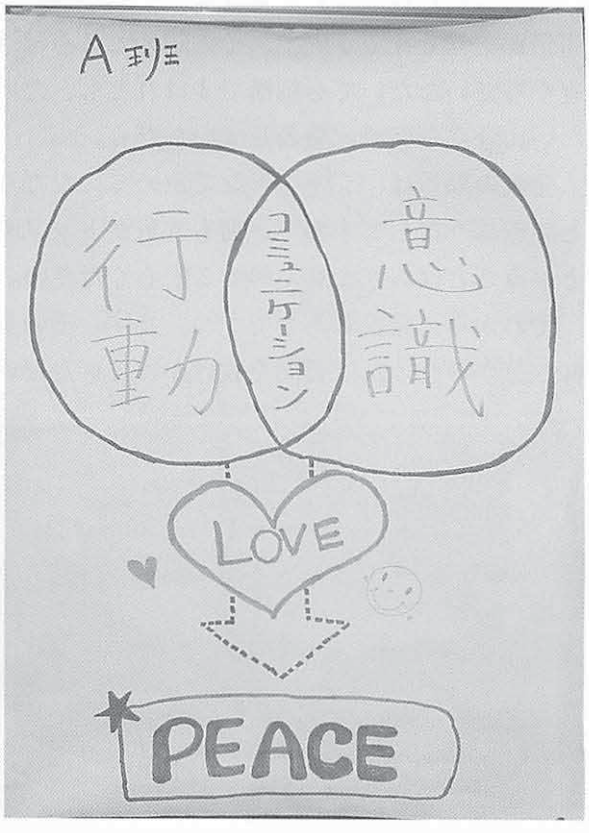
A班なんですけど、ここですね、「時代の変化の中で文化の違いを乗り越えて、真にお互いを理解し合うために、最も必要なのは何か」と言うには、コミュニケーションじゃないかというふうに考えました。

コミュニケーションって言うのには、大きく分けて二つの特色があると思ってます。一つは行動。もう一つが意識というものです。この二つが合わさって、始めてコミュニケーションというものになると思うんですけど。例えば行動です。具体的に言うと触れ合うことです。他にも目で見る。つまり顔を合わせるということですね。そうしたことや体験をすること。そういうことをやることが大事だというふうに考えました。

もう一つ、意識ですね。積極的に話をしようという積極性。あるいは相手のことをもっと知りたいと思う好奇心。他にも、自分とは違う考え方、価値観を大事にする。そういう広い視野を持つ意識、そうしたものが非常に大事じゃないかというふうに思いました。

ただ行動、コミュニケーション、意識、そういうものがあるだけだと、お互い理解することができないじゃないかと。じゃあ、そこに何が必要かと言うところですごく行き詰まったんですけど。そこでA班が出した答が「love」です。これちょっと笑いが起こるかな？　と思ったんですけど。

あの…A班、マジです。あの「愛」なんですよ。これが本当に一言に尽きると思うんですけれども、お互いを思う気持ちですよね。たとえば、これ、今回であれば、お互い理解をするというふうなテーマなんですけれども、ちょっと



なんて言うんでしょ、話を小さくしてみると分かりやすいじゃないかなと思うんです。

例えばこれを世界とかでと言うふうに考えてしまうと、すごい難しいことになるんですけども。たとえば友達同士、あるいは恋人同士とかで考えたときに、この図って分かりやすいと思うんです。

例えば、相手のことを思うって、よく言いますけれども、だってそうじゃないですか、恋愛だって相手のことを知りたいから好奇心持つわけでしょ？　その人に好きになってもらいたいというので、行動するわけでしょ？　で、当然そこにはコミュニケーションが必要になってくる。で、それだけやったらあかんから絶対にLoveが必要になってくるということやと思うんです。

で、これをちょっと大きくして、国と国とかにしてみても、この図は全く崩れないと思うんです。じゃあ、そういうふうな構造、コミュニケーション、意識、そうしたことを愛を持って活動することでどうなるかと言ったら「peace」ですよね。はい。（笑い）

僕ら、ちょっとごめんなさい。10分って言われましたっけ？　もう結論に移ってしまうんですけども、そうした行動、コミュニケーション、意識、そうしたものを「Love」ですね。「愛」を持って行動することによって、「peace」平和な社会、平和な人間関係が実現するじゃないかというふうな結論をもってA班の発表とさせてもらいたいと思います。（拍手）

安平　ありがとうございました。A班の皆さんで、付け加えるようなことありませんか？　いいですか？　はい。それじゃ、皆さん方で、議論、意見は別として、とりあえず、あれはどういうふうな意味ですか、というような質問があったら、どうぞ尋ねていただけますか？　挙手して。いいですか？　質問ないですか？　はい、それじゃ意見についてはその後に回すことにして、それじゃこれでA班の発表を終わりたいと思います。どうぞ拍手を。（拍手）

バズセッション報告　B班



B班・吉田　はい、皆さんこんばんは。B班の吉田と申します。よろしくお願いいたします。私たちB班は、「時代の変化の中で文化の違いを乗り越えて真にお互いを理解し合うには」というテーマを四つのキーワードで分けまして、意見を出し合いました。

まず一つ目のキーワードですが、「時代の変化」ということで。時代の変化とは何を意味するのか？　っていうことを考えた時に、グローバル化、少子高齢化、情報化、大人の自己中心化、道徳教育の衰退という言葉が出てきました。

そして、簡単にまとめた結論として、時代は変化するものであり、今までの常識といったものは、これからの社会の常識とは限らない。そして、そういった新しい時代の変化に柔軟に対応するということがすごく大切だ、という結論になりました。

そして続いて、「文化の違い」という、このキーワードなんですが。まず、ちょっと前後し

ちゃうんですけど、まず2段目の自己表現の違いということで、文化の違いは自己表現の違いではないかという意見も出てきました。

そしてもっと、お互いの文化を知るべきではないかという意見が出てきました。例えば日本では粗品やつまらない物や、武士道と言われる礼儀。「郷に入っては郷に従え」ということわざなどがあります。こういった文化は違っていて当然のものであり、お互い文化を拒否するのではなく、柔軟に受け入れることが大切だという結論になりました。

次に、「真に」というこの言葉ですね。この言葉は、僕たちの意見では、言い換えると、試行錯誤をすること。そして、相手のバックグラウンドまで知ろうとすること。そして長期的に、相手と関わっていくこと、などと言い換えることができるんじゃないか、という意見が出てきました。

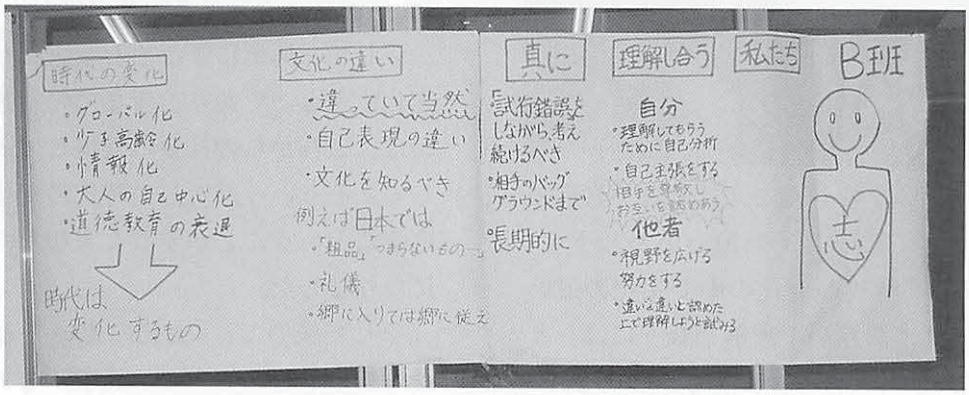
そして続いて、「理解し合う」というこの言葉。理解って言うのはまず、自分と他者とふたつに分けられるではないかということで、まず自分に関しては、理解してもらうために自己分析をする必要があるのではないか。

そしてその自己分析をした上で、自己主張して、自分を伝えていくということがすごく大切なのではないかということなりました。そして他者に関しては、視野を広げる努力を、他者を理解するために視野を広げる努力をすること。そして他者と自分との違いを認めた上で、理解しようと試みること。それがすごく大切だということになりました。はい。そして、その結果、両者をまとめると、相手を尊敬し、お互いを認めあうということ。これがこのテーマの結論として言えるのではないかということになりました。

これをまとめると、時代の変化は常に起こっていくもので、今の常識というのが常に正しいという訳ではなく、お互いの文化の違いというのも認め合いながら、深く、そして広く、長期的に相手を尊重し、お互いを認め合うということ。こういった考え方を持って、これから自分の道を歩んでいくことが「志」というものを見つけていくことにすごく大切なのではないかという結論になりました。

そして、その志っていうのは、それぞれ違うものであるので、私たちはまた人それぞれ、志というものを見つけていく必要があるということになりました。はい、以上で、私たちB班の発表を終わります。ありがとうございました。(拍手)

安平　すばらしい発表をありがとうございました。何か補足することはありませんか？　いいですか。はい、それじゃ、あれはどう意味だと言うことで、疑問、質問があったら、手を挙げていただけません？　みんな、分かります？　言ったこと。僕、聞いていいですか？　「大人の自己中心化」って、どういう意味で言っておられるのかな？



B班・吉田　こちらの今のいただいた質問に対しては、うちのエースが答えますので。ぜひ、彼にお願いして。

安平　お助けマンのエース。

B班・安部　すごい振りがきたんですけど。ああ、安部です、はい。

大人の自己中心化ってことなんですけど、それについて考えたのが、例えば医療現場とかで、今までだったらお医者さんに「お願いします」という立場で患者がものを言っていたのに対して、今では患者が、失敗したときなどに、「どうしてうまくできないんだ」というふうに、やってもらって当たり前だという立場で接しているっていうのが、例なんですけど、その根底を考えてみると、今、その多くの人が、この世の中に今の生活があるのが当たり前だと思ってる人が多いっていうのを考えて、そう書きました。

安平　それは、大人に限ったことなんですか？

B班・安部　いや大人に限ったことではないと思いますけど。そうですね、大人に限ったことではないですけど。はい。子どもも。(笑い)はい。

安平　そのほか、アレはどう意味ですか、ということありませんか？　何でも聞いてくださいよ。はいマイク、名前言ってからね。

チェッキ　すいません。チェッキです。道徳教育の衰退というのが聞きたいんですけど？

B班・吉田　はい、ご質問ありがとうございます。いただいた質問はうちのエースが答えますので。(笑い)

B班・高橋　はい、エース２号の高橋と申します。

今、ご質問いただきました道徳教育の衰退という言葉ですけども、もともと日本での道徳教育というのは、家庭で行われるべきものではないかなと私達は考えました。

家庭で、かつては家庭で行っていた教育が、今現在では両親の共働き、または夜勤などで、子どもへの道徳教育が散漫になっているではないかと。また、これは良くも悪くもなんですけど、家長制、特に父親に象徴されるんではないかと思うんですけど、家長制も無くなってきた。無くなってきたと言うよりも、薄くなっていったということも踏まえて、子どもに対する道徳教育の衰退というふうに捉えさせていただきました。以上です。

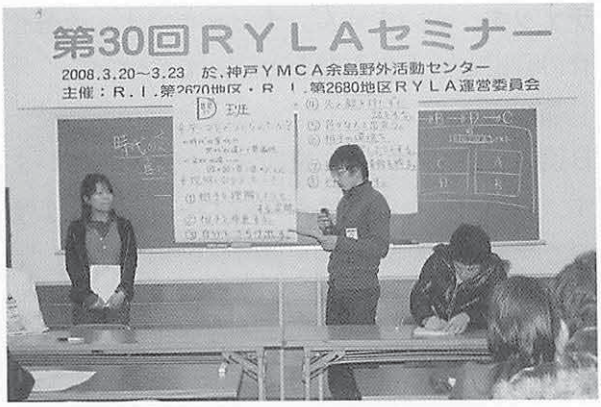
安平　はい、有り難うございました。ほかに質問はございませんか？　いいですか？
それじゃまた後でやることにしまして、それじゃＢ班の発表を終わります。どうぞ拍手を。(拍手)

バズセッション報告　D班

D班・松田　こんばんは。D班の松田と申します。よろしくお願いします。(拍手)

私たちD班が、このテーマを考えたときに、ちょっと捉え方がたいへん難しくて、なんで…、いろいろ捉え方を変えて自分なりにテーマを考えてみました。

時代っていうのは、おじいちゃんと、まあ子どもですとか、職場の先輩、後輩というような世代間に置き換えて考えてみました。また文化というのも、国と国っていうのだけではなく、まあ県と県、今日もいろんな県から来られていると思うし、県の中でもいろんな地方があるん



で。その中でもまあ、生活の仕方ですとか、育ってきた環境というのがそれぞれ全く違って、そういうのがいろいろと影響してくるんで、そういったことに置き換えてちょっと考えていました。

D班・嶋田　次に、私たちは、お互いを理解し合うためにはどんな方法があるかを考えてみました。まず一つ目に相手を理解しようとする姿勢が大切ではないか、というふうになりました。

相手のことを100%理解することはできないけれども、相手のことを理解しようとするその姿勢が大切ではないかという話になりました。

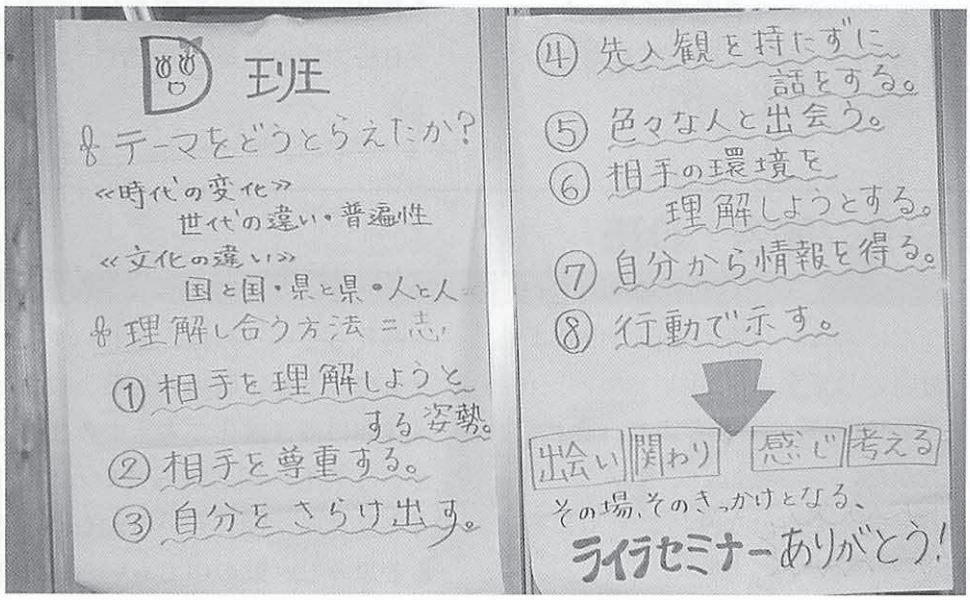
2つ目に相手を尊重すること、相手と話をしてるときに、相手の話が理解できなくて、自分の考え方と違ったときに、相手のことを否定したりするんではなく、こういう考え方もあるんだなぁ、っていうふうに認めることが大切なのではないかな、という話になりました。

3、自分をさらけ出す。相手のことを知る前に、自分のことを知ってもらうことが大切なんではないかな、というふうになりました。自分のことを秘密にしているのに、相手のことを知ろう、知ろうとしても、相手も構えてしまって、自分のことを教えてはくれないと思うので、自分をさらけ出すのは大切なことではないかというふうになりました。

次に4、先入観を持たずに話をする。自分の常識が人の常識と同じではないと言うのを、今回のセミナーでも何度も聞いたんですけれども、相手の常識と自分の常識は違うので、話を聞いている中でも、話を聞いていたりする中とか、相手がしていることを見て、「ああ、私と全然違うやん」と思うんではなくって、「こういうふうなことがあるんだな」というふうに思えたらいいな、というふうな話になりました。

5、いろいろな人と出会う。人と出会うことで自分の世界が広がり、考えが深まると思います。今回、私も、私もこのようなセミナーに参加して、考え方とかが広がったので、いろんな人と出会うことは大切だな、と思います。

6、相手の環境を理解しようとする。相手の育った環境や文化、教育を受けた場所とかも違



うので、どのような場所で育ってきたか、その環境を理解しようとすることが大切ではないかと思います。

7、自分から情報を得る。人から得る。向こうから話してくれ、くれ、くれってするだけではなく、相手がどのように考えているかというのを自分からも知ろうとするその姿勢が大切ではないかと思います。

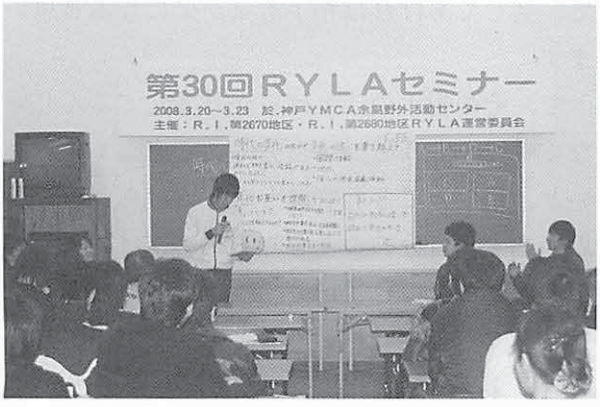
8、行動で示すというだけではなく、やっぱり行動に移すことが大切だと思います。

以上8点が、私達D班が、お互いを理解しあう方法の中で大切なことではないかなというふうになりました。で、また話を進めていく上で、理解しあう方法、イコール、志なのではないか、ということになりました。

出会い、かかわり、感じ、考える、その場、そのきっかけとなるライラセミナーありがとう。(拍手)

安平　ありがとうございました。D班の方で補足説明はありませんか？　いいですか？　それじゃ、みなさん方で、「あれはどう意味だ」と言うふうな質問ありません？　何でも言って頂いたらいいと思いますけど。ありませんか。はい、それじゃ、とりあえずD班の発表を終わっていただきます。ありがとうございました。

バズセッション報告　C班



C班　とりあえず緊張して、本当に死にそうなぐらい、心臓が飛び出しそうなぐらい緊張してますけど、頑張りますんで、よろしくお願いします。(拍手)

C班は「時代の変化のなかで文化の違いを乗り越えて真にお互いを理解しあうには」というテーマに対して、4つに分けて話し合うことにしました。

時代の変化というのは、今の現在の時代では便利で物も豊かで、情報があふれている時代だと思います。それは、どういうことかと言うと、インターネットで何でも服も買えたりとか、ゲームも買えたりとか、いろいろパソコンが普及して、便利になっているというのが、現在の時代だと思います。

昔だったら、店に行って、八百屋さんだったり行って、人と話をして商品を買うとか、そういう状況が多かったと思うんですけど、最近だったら人同士ではなくって機械を通して商品を買う、物を買うということが多くなってきていると思います。それをまとめると、「人と関わらなくっても生きていける時代」と言い換えることができると思います。

次に、文化の違いというのは、大きく分けると三つに分けられると思います。一つ目は国際理解。二つ目は地域。三つ目は個人。国際理解と言うのは、韓国のキムさんのお話のように、韓国と日本では風習も違ったり、食事も違ったり、国によって違いがいろいろあるということです。

地域としては、いろんな地方から来ておられる方も多いと思うんですけど、方言の違いとか、その県によって風習というか、昔から続いている祭りがあるとか、いろいろあると思います。

個人というのは、さらに個人を細かく分ける

と、環境と家庭と年齢に分けられると思います。結構、個人だったら育ってきた環境とか、家庭とか、年齢も様々になっていくので、個人をけっこう細かく分けられると思います。

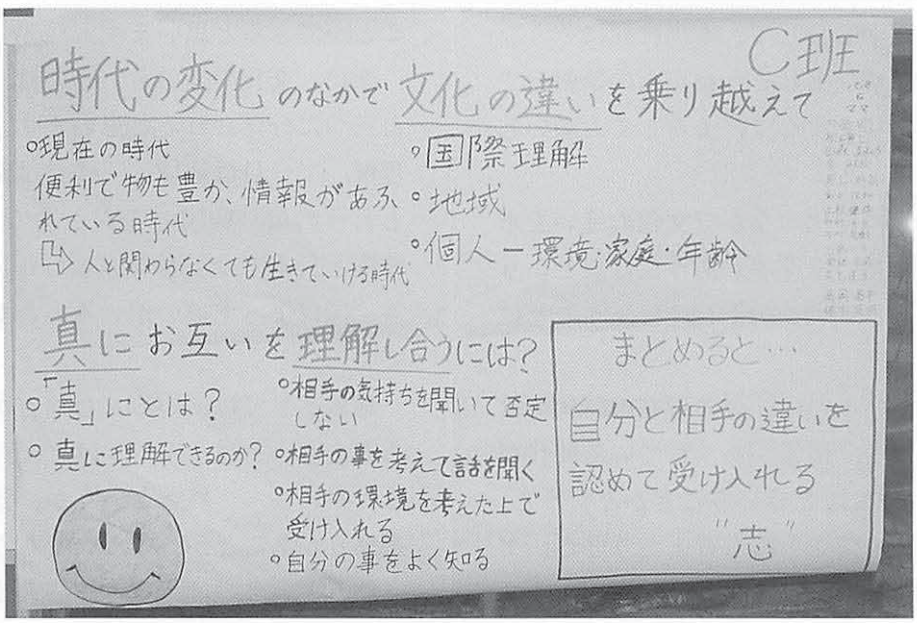
その次に、「真に」という言葉ですけど。「真に」って突然言われて、どこまで真にお互いを理解をする、どういう深さまで理解すればいいのか、人それぞれ、浅くいけば真に理解できているとか、もっと深いところまでいかないと、真に理解できないとか、人それぞれ結構違うと思うんで、C班の中でいろいろ話し合ったんですけど、結果的には真に理解できるということは、固定して結論としては出さずにどういうことか分からない。「真に」っていうことはもう、人それぞれ違うということで、ここはあえて答えを、結論を出さなかった項目です。

次に、理解し合うという項目は、理解するというのは相手の気持ちを聞いて否定しないということが大事だと思います。その相手の気持ちを聞いて話しているのに、すぐ否定しちゃったら、やっぱり自分の意見言いたいのに、途中で止められちゃったら、やっぱり嫌な気持ちになっちゃうと思うんで、とりあえずまずは、この人自分の意見と違うなぁと思っても、やっぱりその人の話してることを聞いてあげて、で、それから、「そういうこともあったんですね」みたいな感じで、そうしてあげたほうが、まぁ話してる方からしたら、いろいろ話しやすいと思います。

次に、相手のことを考えて話を聞く。今、言ったような感じで相手のことを考えてあげて話を聞いてあげれば、いろいろ話しやすい状態にもなると思うんで。まぁ、相手のことをまず尊重しようということです。その次に相手の環境を考えた上で、受け入れるということです。

相手の環境というのは、まぁ個人的なレベルというか、細かく分かれてくるので人それぞれ育ってきた環境によって性格が変わったりとかいろいろすると思うんですけど、まぁ、その環境にちゃんと合わせられなくても、だいたい推測して、少し会話した中で、こういう人にはこういう合わせ方があるかな、っていうのを考えて、話してあげれば相手も気が楽になると思います。

で、その相手のことばっかり考えてるんじゃなくって、もう一つは自分のことをよく知らないと、相手のことも気にとめてあげられないと思います。自分のことを知るためにはまず、相手から知らないと、自分のことも分からないと思うんで、まずは相手のことを知ってから自分



のことも知る、というような意見が出ました。

C班は、さっき言い忘れちゃったんですけど、ここの個人っていうところを重点的に、いろいろ話し合った結果の結論が出ました。この全てをまとめると、自分と相手の違いを認めて、受け入れる、志というのが、志として考えることができるというC班でまとまった意見です。

これは、まぁ難しいとは思いますけど、成長するための意識が強くないとできないということだと思うんですけど。僕は出来てないことなんで。これからは、もう今日から、これ終わったらすぐにでも、気持ちを切り替えて、自分と相手の違いを認めて受け入れられるように、志したいと思います。

以上でC班の発表を終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

安平　ありがとうございました。補足説明はC班ありません？　いいですか？　それじゃあ、何か質問ありませんか？　ずいぶん丁寧に発表をしていただいたと思いますが、特に質問ありません？　はい、それじゃ、C班の発表を終わります。ご苦労さんでした。(拍手)

フォーラムディスカッション

安平　はい、それじゃ、今からディスカッションをやっていきたいと思いますけど、まず、A班にちょっと補足的に説明をしてもらいたいんですけど。このA班では、この「時代の変化」とかですね、「文化の違い」とか、このあたりのことについては、どういう議論をされたんですか？

A班　実はですね。A班も時代の変化、あるいは文化の違い、真に理解しあうということについてはもちろん話し合いました。ただですね。そう話していく中で、なんていうんでしょ。理解し合うには、真にお互いを理解し合うにはというときに、時代の変化も当然、当たり前にしてあるべきもので、文化の違いも当たり前にしてあるべきものやというふうに、考えが変わっていたというか、考えていくようになったんです。それやったら時代の変化とか文化の違い、そうしたものを、話をして意見を深めていくよりは、まずお互いを理解し合うためにはどうすればいいか、この結論、まとめをみんな持っていこう、というふうに話し合いをしていました。ですので、メモ書きではあるんですけれども、時代の変化ですとか、文化の違いというものは一応、控えてはいます。

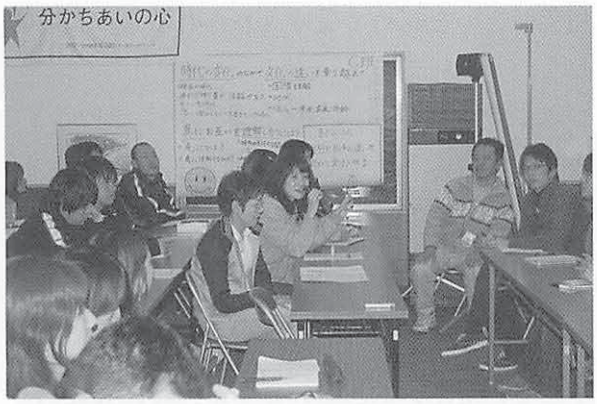
安平　ありがとうございました。このへんのところについて、どなたか意見はありませんか？

B班ではグローバル化とか、少子高齢化とか情報化とかいうような話、今の時代がそういう時代になっているんだ、というようなとらえ方をされておりますけれども、それじゃ、B班の方は、このグローバル化、少子高齢化、情報化というのが、お互いの理解をし合うということについてどういうふうな影響を及ぼすんだというような意見なんですかね？

B班　はい、ご質問ありがとうございます。やはり、この質問に関しましても、やはりエースが答えたいと思いますので、そういうことでお願いいたします。

B班・待場　失礼します。B班のエース3の待場と申します。

グローバル化、少子化と言うのは、そこにも書いてますとおり、時代というのはただ時代が



過ぎていくじゃなしに、人の心だと思うんです。ですので、そこに書いているとおり、変わっていくもの。人の心ですので変わっていくもの、という理解でいいんだと思います。そういう結論になりました。

安平　その変わっていくのは、皆さん方もそれはそうだろうと思っておられると思うんですが、そのことが、お互いに「真に理解」、「真」というのがちょっと問題になっていますけど、お互いに理解し合うために、どういうふうに関わってくるか、影響してくるかということについて、どうですか？

B班・待場　それは当然、時代というのは変わっていくものですので、影響しないと。その波のように、低いときには船は低いところを通りますし、波が上がると船は当然、波の上を、波に乗って行きますので、かかわりがほぼない、という考え方でいんじゃないかという意見です。

安平　はい、ありがとうございました。この辺については、どうですか、皆さん方の意見は？

どうですか？　何でもいいから、感想でもいいから、出していただきたいと思いますけど。どうぞ。

C班・長島　C班の長島と申します。すいません、今、聞いてなかたんですけど、（笑い）ひとつだけ、あの…、B班のアレ見ながら気になった言葉が、相手のバックグラウンドまで入り込むということなんでしょうか？

で、本当に相手のことを理解する場合に、相手のバックグラウンドまで、ずかずかと踏み込んで行ってもいいのかどうか。その辺のことをちょっとお伺いしたいと思います。

安平　この「真に理解し合う」というところの問題ですね。

はい、それではB班。またお助けマンですか？今回はエースですか。

B班　ご質問、ありがとうございます。

はい、今のバックグラウンドまで、ずかずかと行って、相手に対して失礼ではないかといったそういうふうな質問だと思うんですけど、もちろん空気を読んでそこは行くっていうのも、前提で考えています。

ただ本当に真の理解をしたいな、と思ったときに、相手の表面的な部分、外見だとか、仕草だとか、そういった部分だけで判断するというのは、真の理解ではないというのは、分かっていただけると思います。

やっぱり本当に理解したいな、と思ったら、なぜこの人はこういった行動するのかだとか、なぜこういった考えを持っているのか、っていうのを知ろうとなったときに、過去だとか、今現在行っていることだとか、未来どうしたいのかということを知ろうとすることが、やっぱり真の理解に繋がるんじゃないかということで、僕たちは、ああいった「真に」という部分をバックグラウンドまで知ろうとすることが大切だとすることにしました。ありがとうございます。（拍手）

安平　いいですか？　はい。少し戻りまして、「時代の変化」というのがですね、お互いを理解し合うということについて、それがより容易

くなっているのか、こんな聞き方するのはおかしいかもしれませんが、難しくなってるのか。何かこう、本当の理解に繋がっているのかどうか、その辺のところについて、どういうふうにお考えになっているかなということを聞いてみたいですけど。

C班は、その辺のところ、わりあい意見が出たんでしょうかね？　どうですか？

時代の変化は、時代の変化であると思うんだけれど、その辺のところは、どう関わるかということを少し、聞いてみたいなと思うんですけどね。

C班・岩蕗　C班、岩蕗と申します。

ここに書いているように、便利で、物も豊か、情報が溢れている時代っていうところで、発表にもあったように、インターネットとかで便利になったりとか、いろいろ情報が、便利にやり取りして、情報が増えた分、人と関わりを直接取らなくっても、すべて賄えていくといったところでC班は考えて、それがお互いを理解し合うというところに影響が出ているんじゃないか、といったことは話し合いの中で出ました。

安平　どういうふうに影響が出てるんですか？

C班・岩蕗　どういうふうに言ったら、ミュニケーションが、間違った情報がやり取りをなされたり、思っていることが本来の意味で伝わらなかったりであるとか、そんなのとか。だから簡単に済ませてしまったりとか、そこがお互いを真に理解できるのであるかもしれないのに、また違った方向で理解したりとか、と思います。

安平　ありがとうございました。たとえばですね、昔は、「face to face」「hand to hand」でですね、面と向かって目を見ながら、コミュニケーションを図っていたということだったと思いますけど、今はインターネットとかメールで間



単にやり取りができる。さっき、ここで話し合ってたのに10メートル離れたら、またメールでやりとりしてるとかですね。授業中に前と後ろでやっているとかですね。そんなことで情報のやり取りというか、コミュニケーションのやり方はずいぶん変わってきたと思うんだけど、そういうが「真にお互いを理解し合う」ということについては、関係あるんでしょうかね、関係ないんでしょうかね、いかがですかね？

どうぞ皆さん方、ご意見ありませんか？

○○　携帯とかでやり取りしてたら、軽いって言うか、あんまり心がこもらないんで、まあ上辺だけのような感じにはなるんですが、まあそれがきっかけで、メールで待ち合わせ場所を決めるとか、電話して、同じように待ち合わせ場所とか決めるように、その昔できなかったやり方での人と会う約束を作るためのきっかけとして使ってる。使い方を考えればいいのかと思います。

安平　はいどうぞ。

C班・長島　便利になりましたよね。携帯もあるし、パソコンでお買い物も出来るし、そういう時代になって私達っていうのは、案外、例えば、「face to face」で話をすると、相手の顔色とか、状態とか見ながら、気を遣いながら喋べらんと、コミュニケーション取れんですよね。でも、携帯とかパソコンとかっていうのは、こ



ちらの一方的な接続というか、接触で済むから、とっても便利だと思うんです。これ私、決して悪いとは思わないけれど、その代わりに無くしたものもあるんじゃないかって。今回、若い人達と話してて、相手と何となく壁があって、話がパッと話せないと、いろいろ話を聞いた時に、実はそういうことってのが影響してるんじゃないかなと思って、書かしていただきました。

安平　ありがとうございました。今のご意見、いかがですか？　メールの効用。インターネットの効用。これが、お互いに理解し合うためにどうなんだ、どうですか？　はい、何でもいいから。

A班・飯間　A班、飯間です。昔に比べて結構、携帯とか一人一台とかで、電話とかいったら家に一台の場合だったので、個人と個人との関わりというのですか、メールだからこそ言えることとか。反対に軽々しく言うてしまう部分もあると思うんです。

それはまぁ、個人個人の使い方であって、まぁ自己責任みたいな部分があると思うんです。だから賛否両論ではないですかね。僕は、結構その自分の使い方さえ間違えなければ、いい物だと考えています。

安平　はい。ほかに意見ありませんか？　はいどうぞ。

B班・稲葉　B班の稲葉と言います。愛媛県で現在、高校教師をしておるんですが、生徒達のメール状況、ものすごく情報通信には適していると思います。ただやはり、大人のように表面上の付き合いがかなり多くなったじゃないかと思います。

現在、高校においても喧嘩というものがほとんどありません。たぶん、中学校、小学校においても、そういった喧嘩をして、相手の痛みを知ったりだとか、叩いたときの拳の痛み、ちょっと古くさいですけども、そういうものを知る機会というのがちょっと減ってますんで、相手の痛みを理解する、つまり題における「真にお互いを理解し合えるか」ということにおいては、時代の変化、情報網の発達、そういったものが直に影響あるんではないか、というふうに思います。

安平　はい、ありがとうございました。

他に今の点についてのご意見はありますか？　特にありませんか？　はい、どうぞ。

B班・安部　B班の安部です。携帯とは少しずれてしまうですけど、先ほどB班のところで大人の自己中心化というところに質問を受けて、まぁちょっと変な返答をしてしまったんですけど。それも含めてちょっと、流れをもう一度、見たいと思います。

まず、グローバル化についてなんですけど、グローバル化って言うのはどのようにするかと、自分達が考えていたかと言うと、今、経済は世界的に見てグローバル化していると。でも文化の面で見れば、なかなかグローバル化は進んでいないじゃないかと、いうふうに考えています。で、そのように経済がグローバル化している状況で、文化はまだグローバル化しようとしている途中なんですけど、そういうような状況が、文化の違いを乗り越えに当たって、文化がグローバル化しようとしているってことで、

その国内にいながら、他の国の文化とかを知ることができて、そういう意味で、文化を乗り越えるのに役に立つんではないか。理解するのに役に立つのではないか、というふうに考えました。

で、少子高齢化については、少子高齢化によって何が起こるかというので、自分が考えていたのは、少子化によって、大人達は子どもをあんまり産まなくなったので、子どもにかける時間が多くなって、より甘やかしてしまうと思うんですよね。そういうふうにより甘やかされた子どもにとって、大人の自己中心化とも重なるんですけど、そういう子ども達が、その理解し合うというところに書いているように、相手を尊敬し、お互いを認め合うことができるのかということに、本当に甘やかされて自分のことばかり考えてる人が、そういうふうにできるのかというところで影響があるとかと考えていて、情報化の点においては、携帯もそうなんですけど、どれが正しい情報なのか、どれが誤っている情報なのか判断がつきにくいと思うんです。マスメディアも通して、まぁ情報がある程度、その何て言うんですかね。過大評価というか、過大に取り上げられて、その視聴者が的確に、どの情報がどういうふうに判断すべきなのかという的確な判断が、出来てないと思います。

そのような的確な判断が出来ていない状況で、そのような文化についての情報を考えたときに、その文化について誤った認識を持ってしまって、他の人々の理解をするのに支障になっていないのか、という点です。

安平　ありがとうございました。大変、お考えよく分かりました。ここに、さっきは、時代は変化するのは当然ないかと、さらっと、こうおっしゃいましたけど、いつでもグローバル化、少子高齢化、情報化、こういう問題が理解し合うというところにいつでも関係してくるんだと、そういうふうな説明がありました。大変よく分かりました。そのほか、何か、このへんのところについての意見はありませんか？

それじゃあ、この文化の違いというその辺のところについて入っていきたいと思いますけど、キムさんが韓国と日本の文化の違いについて、大変そのことが相互理解というか、お互いを理解しあうことについて、なかなか難しい点があるんだというようなこともおっしゃったと思うんですけど、この辺のところについて、それを文化の違いがあるのはそりゃ当然の話でしょうけど、それを超えて、乗り越えていけば、お互い理解し得えるよ、というふうなことについてですね、もう一度何かご意見ありません？

ごめんなさいね。A班。その辺のところについてはどういうふうな議論が出たのですか？

A班　A班です。文化の違いということではですね。主に出てきた意見というのが、本当に幅広く出まして、結局、文化の違いっていうのは結局、自分達とは違う人の集まりじゃないかな、と思ったんです。

そのすべての人を理解する。完全に理解するのは不可能じゃないかなと、僕達は思っています。そうなったときに、理解することが不可能やからって言って諦めてしまうんではなく、理解しようとする気持ちですよね。そういう気持ちがいちばん大事なんじゃないか、というふうなことを話していました。

他にも、国と国との間の違いとか、言葉や宗教、そうしたものの違いもあるんですけれども、そのすべて、例えばキリスト教、イスラム教、ヒンズー教、仏教、すべての宗教のタブーですとか、しきたりとかを全部理解するっていうのは本当に難しいことだし、それを知らないとその人達とコミュニケーションが取れないのかというと、そんなこともないんじゃないのかな、とも思ったんです。

僕たちの班には、モンゴルから来てくれている人がいたんです。その彼の話が、A班で、す

ごい印象に残ってたんで、ちょっと振ります。うちのエースです。

安平　はい、それじゃぁ、お願いします。

A班・チェッキ　A班のエースです。中国の内モンゴルから参りました、チェッキです。その確か、さっき言ったのが、この文化の違いを縮小して一人ひとりに縮小していくことは、人がそれぞれであって、それぞれそれの特徴があるので、違うわけやから、全部理解しあう、一人にとって、他の人に全部理解しあう、そういう努力も、ないですね。明らかに。だから違うから、自分と共通している点を探したらどうかなっていう考えになりました。

みんな共通してるから、ここに集まってる。いろんな話ができる、できてる訳やから、その文化の違いを乗り越えて、互いに理解できているんじゃないかな？　という考えになりました。以上です。

安平　はい、ありがとうございました。何か、意見なり、質問なりありません？　まぁ、文化が違う、ある意味では当然のことですけれども、その文化の違いというのがお互いの真に理解しあうことに対するバリアというか、障害になってるというふうなことがあるだろう。それについて、皆さん方が、どういうふうにやっていけば、そういうバリアを乗り越えて、障害を乗り越えて、お互いに真に理解し合えるんだという、こういうところ、意見をいただきたかったわけですけれども。

D班がさっき、ちょっとおっしゃったんですけれども、D班ではその辺のところは、どういうふうに意見が出たんでしょうか？

D班・嶋田　D班の嶋田加奈です。さっき自己紹介してなかったんで、よろしくお願いします。文化の違いっていうのを、まず私達の班は、その時代の変化っていうのと文化の違いっていうのを取り上げて考えてみました。

文化の違いって言っても、世界で考えてしまったら、私達自身、世界に行ったことがない人ばかりなので、そんな世界にも行ったことなくて、世界中の人と関わったこともない私達が、文化の違いを理解するなんてそんなん出来ないだろう、というふうになって、じゃあ、もうちょっと幅を広げて、文化というものを考えたら考えやすいんじゃないかなというふうに考えました。

で、その国と国だけと考えるだけじゃなくって、県と県、で、さらに幅を狭めて、家族の中であったりとか、友達同士、家族って言っても同じ家族じゃなくて、結婚したあとの夫婦だったら違う文化の中で生きてきた人間なので、そういう人達同士が育ってきた文化は違うけど生活していくので、そういうふうに文化を考えたら、乗り越える方法って、もうちょっと分かり易いんじゃないかな、というふうに考えてみました。

安平　はい、ありがとうございました。その他に、例えばモンゴルからいらっしゃった。韓国からもいらっしゃる米山奨学生の方、ずいぶん文化が違うわけですけれども、そういう文化の違い、一つのお互いに理解し合うためのバリアになる、それをこういうふうにしたら、それを乗り越えてお互い理解できるよ、そういうことについての何か意見ありません？

なんでもいいですよ。どうですか、その隣の女性の方、はい、あなた。なんでもいい、たとえば外国の方、来られてですね、で、例えば、日本人は頭撫でるとですね、「よくやった」と、こういうふうに言うわけですけど、国によってはずいぶん侮辱された、というふうな文化もありますよね。

それから、まあ右手はいいけれども、左手は不浄な手だとかいうふうな文化もあるし。いろ

んな文化があると思うんだけれど、そういうそのところでですね、お互いが理解し合うためには、どういうふうに持っていったら理解が出来るんかな、というような？　どんなんです？　なんでもいいですよ。

C班・長嶋　皆さん、ほとんど皆さん出たとは思うんですけど、本当にお互いを、国境を超えたとか全部理解し合うのはなかなか難しいことだと思うんで、やっぱりお互いに認め合うことから始めて行かないと、何も始まらないと思うんで。文化が違うとか、こういう習慣が違うからとかじゃなくて、まず、こういうのがあるんや、ああいうのがあるんや、と認めることから始めていくのが、文化の違いを乗り越えることが出来る一つの手段だとは思います。

安平　なるほど、ありがとうございました。その他、意見ありません？　あの、どこかの班で出てました、今もちょっとおっしゃったかもしれないけど、お互いを完全にと言うか、真に理解し合うことなんて不可能だよ、というような意見も少しありましたよね。これ、どなたがおっしゃたんやったかな？　C班やったかな？

C班は、「真に」とはというところで、本当に理解できるのかな、とこういうところなんですけど、まあキムさんも、「他人は自分ではない。自分は他人でない。そういう中で、とにかく他人だから、根本的な理解が出来るわけないよ」というか、「同一ではないんだから違うの当たり前だ」というふうなことを言っておられたと思うんだけれども、その辺のところについての議論はどうだったですかね？

C班、もう一度。

C班　C班の中では、そんなに固定してというか、決め付けて一人の人が、これぐらい、これぐらい思えば真に理解出来てるって、一人の人が言ったら、結構、皆さん、個性的な方が多い



ので、「いやあ、それはちょっと違うでー」とか、「私やったら、こう思いますよ。こう思います」っていう感じで、結構、人それぞれみんな、一人ひとり、「真に」って考えたときに、もう一致する意見がほとんどなかったと思うので、一致することがなかったのも一つに答えを絞って、わざと絞って出すって言うよりかは、もう、ちょっと言い方が悪いですが曖昧にして、もうC班全体的な平均的な意見として、まぁ曖昧に何が真なんかは分からないっていうふうに、一応基準を作りました。

安平　それじゃ、その相手を理解するというのは、どういうふうなことを言うんでしょうね？

どうですか、皆さん方？　理解？　どうぞ、はい。

C班・長嶋　相手を理解するっていうのは、相手と自分の違いを認める、ということだと思うんです。私は私で、ゴウ君と言う…ゴウ君はゴウ君。年も違うし、顔も全部違うし、性別も違う。でも、私と彼とは違うことを認めあって、初めて話ができたり、仲良くなれたりできる。逆に相手を理解しようとか、かえってどうかしようとすると、自分が苦しくなってしまう、しんどくなってしまうので、本当にお互い理解するというのは、まず自分を理解して相手を認めるっていうことじゃないかな？　と思います。

安平　ありがとうございます。その他いかがで



すか？　理解の押し付けになってないかっていう、どうぞ。

C班・秦　そもそも、「真に」っていうのは、皆さん、どういう考えになっているっていうのが分からないんですよ。私は、「真にお互いを理解し合うには」っていうこのテーマを投げかけられたときに、「真にお互いを理解するには」って、そんな簡単なことじゃないし、と思ったんで。初めにこれを突き付けられたときに、「そんなの、無理ですよね」っていうところから始まって、だから「真にお互いを理解し合う」っていうのも分からない。どれを理解し合う、っていうのも分からないですし、それをまた「真に」って聞かれたら、何が「真に」なのかが分からなくって、皆さんの意見はどうなのかな？　と思います。

安平　どうですか？

○○　生きていく中で、会う人って、すごい多くの人に会うと思うんですよ。1千人だったり、多くなったら1万人になったりとか。すごく多くの人に会うと思うんですけど。その、何だろう？　一人ひとりすべて違うものを持って、違うことをしてきて、いろんなものを持ってるから、その人全て理解をしようと思ったら、自分にすごい負担っていうか、すごいストレスを感じるし、すごい大きなものがかかってくると思うから、C班の方の書いてるのを見た時に、「理解をしあう」っていうところの下の、ボッツリが4つぐらいあると思うんですけど、その全ての頭に、「相手のこと」「相手のこと」「相手のこと」って書いてるんですよね。

　で、そんなね、理解することはすごい大切なんですけど、相手のことばっかりをすごい考えていたらたぶん、自分のことを打ち明けられなくなるな、とすごい見て思ったんですよね。だから、（笑い）そんな感じです。（笑い）

安平　いいですよ。いいですよ。素晴らしい意見。ちょっと後ろの彼、どうですか？

A班・常岡　A班の常岡です。そうですね。「真にお互いを理解しあう」のは、すごく先ほど、「どうか」って言葉が出てきましたけど、もうそれぐらい知らないことは無い、同じ考えである。僕は右向けば君は右向くであるような、それぐらいのものを僕も感じました。

　だから、無理だな、って言うか。まあ、極力、理解を、最初ゴールはないかもしれませんが、深く理解し合うには、っていうふうに考えてましたけれども。あとまあ、そうですね。相手が自分と合わなかっても、自分の考えとは違うかっても、まあそれを知る。自分の違いを知るっていうことが、理解かなというふうに考えました。

安平　はい、ありがとう。はい、どうぞ。

C班・秦　すいません。あの今、あの、C班なんですど、理解し合うというところの、ちょぼちょぼのところに、「相手の気持ち」「相手の」となってる、って言ったんですけど、これは、C班で話し合った時に、私、もしかしたら私一人の意見だったのかもしれないですが、まず自分のことを知ることが大事だと思うんですね。で、そこに「相手の」「相手の」と書いたんですけど、私はまず自分のことを知ったっていう

のを前提において、「相手の」「相手の気持ち」「相手のこと」って書いたんですよね。

安平　はい、ありがとう。恋人、夫婦、もっと広がっていけば、いろいろ友人だってあるわけですけども、D班、ちょっとどなたか意見ありませんか？

何か前の方ばかり、近くだから当ててしまうんだけど、D班どうぞ。

D班・堀川　D班、堀川Aでございます。うちらの班なんですけれども、時代の変化、文化の違い、「真にお互いを理解する」っていうね、問題に対してなんですけれど。まぁ、理解しあう方法としてね、相手を理解しようとする姿勢、相手を尊重する、自分をさらけ出す、この内容すべて、自分自身の向上です。向上に向けてやってます。自分が、向上…。

安平　向上って言うのは、自分が、ええ…。

D班・堀川　そうです。自分のステップアップのなかです。そしたら時代の変化がこようとも、それに乗り切れる臨機応変な対応も出来るだろうし、文化の違い、その知識と相手の環境を知ることによって、もうその対応も全然変わってくると思います。

でね、お互いを理解するためには、相手の事をどれだけ知ってるか、というふうな内容になると思うんですけど。それを知るためにはやっぱり自分が精進するというか、理解するための環境とかね、そういうふうなんを自分自身で考えて行動を起こすこと、それが、志にもつながって、相手のことも見えてくるようになるのではないかというふうな見解で終了します。

安平　はい、ありがとうございます。はい、彼どうぞ。名前を名乗ってくださいね。何回喋るときでもね、記録に載せますからね。

A班・チェッキ　チェッキです。「真について」ちょっと、さっき、ぱっと考えたんですけど、「真については」かえって持続的に考えてたらどうかなと思いますけど、持続的にお互いに理解しあう。先にB班が出たのが、長期的に。それ、長期的にはやっぱり期間が限られとるので、それをもっと長くしたら持続的にどういうふうに理解しあっていったらどうかな？　というふうに考えました。

安平　はい、ありがとうございました。他に意見ありませんか。

理解というのは大変難しいですよね。またそれが押しつけになってもいけない。柳田邦男さんが、「死の医学への序章」という本の中で書いておられましてね。ある白血病の若い女性やったですかね、その方が入院をしている。だんだんと身体が動けなくなる。そういうときに、若い看護婦さんが、もう寝たっきりですから、退屈だろうなというふうなことで、「テレビをつけてあげましょうね」と。おそらくは退屈というか、一人で孤独だろうから、テレビを見せてあげたら、ということで、善意でおそらくやったんだと思うけれど、テレビでは若い元気な青年達がはしゃぎ回ってるというような番組がありましてね。で、それを見せて、孤独感を慰めてあげようと、いうふうにその看護婦さんは思ったんだと思うけれども、逆にそのことが若い女性の患者さんに、自分の惨め感と言うんですかね、そういうふうな感じを与えてですね、「もうテレビを切ってください」と、こういうふうに言ったという話があります。

で、そういう話とかですね、同じ本の中で、病院のエレベーターには鏡が付いてるんですね。で、あれは、患者さんをストレッチャーで運ぶときに、上手く運べるようにというふうなことでも付いているんだと思うんですけど、その患者さんがベッドで運ばれるときに自分の姿



が写る、そういうふうなことがたまらなく惨めになる。というふうなことで、「鏡に写らないようして欲しい」と言ったというような話がありましてね。

これで相手を理解したんだ、という思い込みというのは、善意であっても、場合によれば押し付けになる、というふうなことがあるだろうと思うんですよね。やっぱり、相手を理解するというのは、それが善意の押し付けになっているのではないか、ということもよくよく考える必要がある。そういう意味で、「真に」というのは、確かにそんなことは不可能だよ、ということになるかも知れませんが、より深くという意味でもいいのかもしれません。

そういうふうなことも含めて、何か意見がありましたら今の段階で出していただきたいと思いますけど。どうですか？　はい、どうぞ。

A班・飯間　A班の飯間です。この問題を見ていて、そう簡単な問題ではないなと思ったんです。

時代の変化、文化の違い、真にお互いを理解しあう、これっていうのは、皆さんの宗教、国籍って言いますけど、僕は福祉の勉強してまして、これは障害者にも関係してると思うんです。高齢者にも。それをどう理解するかって、コミュニケーション、コミュニケーションと言っても、言葉が喋れなかったらどうするかと。その目が見えなかったら、聞こえなかったら。全部重なる人もいるんです。それをどう理解するんだと。それが、僕、このA班で言うたんです。

その結果、まぁ、出来がと言いますか…、僕がちょっとかき回してしまった部分もあって、それで結果的に、曖昧と言うか、答えが曖昧になってしまったんですけど。それをみんなに分かって欲しいなと思って今、言ったんですけど。

その、何ですかね。グローバル化とかいろいろあると思うんですよ。それ、時代背景もありますけども、相手とコミュニケーションを図るというより、心の中にある壁みたいなものを、本当にどこまで崩せるか、みたいなのが、僕はお互いを理解し合うというので大切ではないのかなと思いました。

安平　何か、具体的にこんなことがあったよ、という経験あります？

A班・飯間　こんなこと？　あの人には言ったんですけど、僕、今、知的障害者の方のグループホームというのがあります。結構、僕、型破りなことをする人間で、「お風呂のバイトに来ませんか？」って言われて、行ったんです。

それでまぁ、ちょろっと行って、お風呂もそんなに「これやってください。あれやって下さい」という感じでやったりするんです。

結構、言葉が喋れなくって、どうやってコミュニケーション図るのか分からず、とりあえずまあやってて、こんなんやったらいけないかな、どうかな、と思って。利用者さんがシャワーで髪洗っていたときに、僕は遊び心に、バケツに水汲んでかけたんです。すると、なんと言うんですか。けっこう何ヵ月かしてて、仲がよかったにはあったので、怒るには怒ったんですが、顔が笑ってて、こう、なんて言ったら分からないんですけど、気持ちがあればやっぱり分かってくれると思うんです。理解もしてくれると思うし。だから僕は、いろんな技術も大事やと思うんですけども、軸はやっぱり気持ちではないでしょうかと思って。

安平　大変ありがとうございました。それではですね。ここで、10分程度、トイレ休憩をさしていただきます。それで後半はですね、今おっしゃったような相手を理解するためにこういうふうな経験があったよとか、というようなこと、皆さん方いろんな経験があると思うので、そういう経験をみんなに出していただいて問題提供していただく、というふうな形で進めたいと思います。それじゃ約10分休憩します。

佐伯　はい、それでは後半をスタートさせたいと思います。よろしくお願いします。(拍手)

安平　それじゃあですね、これからは、皆さん方、いろんな職業をなさっておられますので、そういう関係でですね、人を理解するということは本当にこんなに難しんだ、こういう困難があったよとか、だけどこういうことで成功したよ、とか、そういうふうな経験談をですね、皆さん方にお互いに少し披露していただきたいと思うんです。

で、社会福祉関係、さきほど発表していただきましたけど、この中でほかに社会福祉関係のお仕事をなさっている方いらっしゃいます？手を。はい、沢山いらっしゃいますね。それでは、この方々からとりあえず一言ずつ、経験談を話していただきます。(拍手)

D班・秦　D班の秦です。ええと、何でもいいですか？　先ほどA班の飯間さんでしたかね。水をかけると、笑顔が見れたと。それを聞いたとき、僕は、あのすいません、僕は老人介護なんですが。その話を聞いたときに、なんてことするんだと。(笑い)それは、それはなしやろ、と。かなりびっくりしつつ、ちょっと怒りも出つつ、けど、あの、この研修で、なんですかね、相手の意見を尊重すると言うか、いうのもちょっと勉強したつもりなんで、ああそういう方法もあるのか、(笑い)アハハとまぁ、ちょっと押さえつつなんですけれども。この時代の変化の流れというのもあるんですけれども。

僕、結婚してまして、ちょっとそこで置き換えてみたいと思いますけど、僕は、7つ年上の嫁がいるんですが、それだけでもすでに世代、世代と言いますか、(笑い)かなりのギャップが発生してまして、僕は今、31歳なんですけど、嫁はん、今38歳で、またこれが結構、古臭い人間なんで。冠婚葬祭がありますと、あーだ、こうだ、とうるさい一面、逆に頼りになると。助かっているんですけど。それが時代の変化であり文化の違いかなと。まぁ住んでいる所の、(笑い)はい。

あと、「真にお互い理解し合うには」、結婚してこれから共に、死ぬまで一緒に、当然いるんですけれども、「真にお互いを理解し合うには」正直、僕は死ぬまでに嫁のことを理解出来るかというと、出来ないと思っています。今結婚して5年にもなりますけれども、やっぱりどうしても、何か理解出来てないな、とつくづく思っているんです。5年経過してきまして、ちょっと相手が何か言ってると、嫁が何か言ってると「なに言うてんねんアホか」と思ったりして、じゃあ3日ほど口きかない。こんなしんどいのかなわんなと思っています。

相手がまた「何言うてんの」怒ってきたら、「僕が悪いんです」「僕が悪いです」と言ったらこれで収まるんです。(笑い)そんで、そのまま仲良く喧嘩なく、やってきているんですけれども、そのために志をいかに立てるか。ちょっと前後しましたけど、ですかね。すぐ謝るっていうのが、あの、いいのかな、というのが志として、志としてちょっとアレなんですけど、ハハハ。

こういうのがあるのかなと学びつつ、また今後お互いに十分理解をし合えたらな、と思っているところです。ありがとうございました。

安平　ありがとうございました。(拍手)

私はですね。実は弁護士をやっておりましてね。離婚事件が随分持ち込まれるんですよね。で、よくよく話聞いてたら、夫婦なんて、まぁ今日も大田先生の話にありましたけれども、全く最初から他人同士なんですよね。夫婦やからお互いにみんな分かり合える筈だなんていうことは全くありえない訳で、そこんところをお互いに誤解し合ってですね、いろんなことからお互いに理解できなくなった、とかで離婚を決意する。しかしまぁ、そうじゃないんだろうと。お互いに全くの他人同士が一緒になってる訳だから、お互いに全く分からない。まず、そこから出発して、お互いが努力していかに知り合っていくか、というか、理解し合っていくか、という、そういう無から出発しないとダメだろうと、こういうふうにいつも思うんですけれどね。

えー、まぁ頑張ってくださいね。(笑い)はい、それじゃ、どうぞ。はい、あなた。

A班・常岡　兵庫県の介護老人保健施設で働いております常岡です。今、発表がありました秦さんと同じ職場で働いておりまして、介護老人保健、通称「リハビリテーション・デイケア」と言うのですけれども、そちらの方で一応責任者をしているんですが。

利用者さん、人を相手に仕事してるけれども、その人のコミュニケーション能力、今、飯間さんから話があったように、障害があったり、認知症があったりする訳なんですけれども。その人の生活歴を調べて、コミュニケーションの一つ、きっかけを作るというか、その生活歴を覗かせてもらう訳なのですけれども、なかなかそれをコミュニケーション、生活歴、昔はこういう仕事をしてたという話を聞いて、その仕事の話をうまく持っていける場合とやっぱり持っていけない場合があったりで困っているんですけれども。

ただ人、まぁ違い、自分の価値観、人の価値観が違うから人生が凄い楽しんだなというのが、まぁ業者さん相手、又、責任者してて他のスタッフを指導するというところで、衝突があって、その衝突がまた面白い。面白みがあると。だから僕、理解しあって、全員が本当にもう理解し合ってしまうと、これがまた味気ない世界というか、環境になってしまうではないかなと。衝突がまた一つ面白んじゃないかというふうに僕は思いました。以上です。

安平　ありがとうございました。すばらしい意見、随分深みのある意見だろうと思いますね。はい、どうぞ。

B班・東　B班の東です。私は高齢者の軽費老人ホームと言って、自立しているお年寄りのホームにいるんですけれども。一応職種としては、生活支援ということで、介護とはちょっと違うんですが。自分が仕事をしていく中で、一番忘れてはいけないと思うことは、否定しないということで、今回の今、赤線引いている部分にもそれって共通することで、どれを見ても否定しないっていうことが、まず第一歩かなと思ったんですね。

で、自分よりも3倍も4倍ぐらい生きている人とか、あと、その娘さんが相談に来られた場合って言ったら、だいたい40～50歳位の方なんですが、どちらにしても自分にとっては人生の先輩で、相談して頂けるだけでありがとう、と思ってしまうんですけど。

その方たちに敬意は常々忘れないようにと思いながら、でもその近づいていくためには、やっぱり敬語ばかりではいけない部分とか、やっぱり認知度が低下してきたら、「来られますか」と言うより、「来ます？」っていう言い方、「来る？」とか。

例えば小豆島、私、小豆島なんですけれども小豆島弁を使った方が分かりやすかったりとか、そういった部分もあって、敬語だけがその

人にとっての敬意を表するところではないのかなって、思う部分があります。でもやっぱりその根底には否定しないことと自分が受け入れる姿勢であることっていうのを重視して、仕事をしています。はい、なんか…（拍手）

安平　ありがとうございました。もう一人いらっしゃったですね。あ、どうぞ。まあ介護の現場っていうのはそれこそね、そういう介護を受けられる方に対して、直接的な関わりがありますので、とりあえず経験談を聞きたいなと、こういうことです。どうぞ。

B班・大川　B班の大川です。ちょっとおなか痛いんで、座って話させてください。福祉の現場に携わっているというか、この春に介護の専門学校を卒業して、この3月から、介護老人、特別養護老人ホームの方で働かさせてもらうんですけれども。介護の先輩がいっぱいいる中で、介護について語るのはちょっと気が引けるんで、とりあえず福祉を少しかじっている人間の話として聞いていただけたら嬉しいと思います。

まず介護の専門学校に行ってたら実習というのがありまして、実際に施設に行って、介護とはどういうものかを学ばしてもらう機会が有るんですけれども。そのときに出会った利用者さんと自分との関わりの話をさせてもらいます。

まずその利用者さんなんですが、不随意運動と言って、自分の意志に反して体が動いてしまうっていう症状が障害の中にあるんですけれども、その方は、ほとんど常に座ってる時も動いている状態の方で、あの、言葉の方もなかなかコミュニケーションが取れないんですね。

その方がおっしゃることはこっちにはちょっと理解出来ない、と言うか、聞き取りにくいという様な方が、ショートステイといって、一日、二日、その施設に来るっていう機会があって、そのときに初めてお会いしたんですけれども、



その時にその方が何を伝えたいのか何を言いたいのかが、私は、全然その人の言葉が理解出来なかったんですね。

で、理解しようと試みたんですけれども、やっぱり何を、何を伝えたいのか分からない。自分もつらいし、相手の方もきっと私が何を、あ、私、自分が伝わってないことにすごい葛藤を感じると思いますね。

で、その時に、相手の方は私の言っていることが理解出来るので、その相槌とかは打ちたくなかったです。よくも分かってないのに、それは失礼に値すると思って、相槌とかは打つことができなかったんですね。で、そうしていくうちに、向こうもこっちに言い返してもらえない葛藤があって、こっちも相手のことを理解出来ない葛藤があって。やっぱりそういうので自分の中ですごい悩んで、結局自分はその人から逃げてしまったというか、コミュニケーションを図ることを、その進んでコミュニケーションを図ることを止めてしまったんですね。

で、そうなった時に、よくよく考えた時に、なんかすごい自分はその人から逃げてた、その人の障害っていうのを目の当たりにしてその人から逃げてたということをすごい後悔したですね。

で、あの「真にお互いに理解し合う」っていうテーマなんですけれども、それを聞いた時にすごい、その、自分での実習の経験を思い出して、その、相手のことを本当に理解したいなら逃げない、相手から逃げない、相手がどういう



状況であってもどういう人であっても、どういう障害を持っていても、その人から逃げない。その人を知ろうとする姿勢がすごく大事なんだろうと、今この「真に」っていう意味を考えてて、そう自分の経験を思い出して、そう思ったんですね。

だから、なんか、そんな自分は20歳で、年下で、そんな人生経験積んでる皆さんにこんなこと言うのはすごいあれなんですけれども、あの、どんな人が目の前にいても、その人から逃げずに、例えば障害を持っている人だとかから逃げずに、こう、接して欲しいんです。

絶対自分の中でも何か接した後に感じるものがあると思うし、その、通じ合えた時の嬉しさって、やっぱりあると思うんで、その、なんて言うんですか、自分とは違う人であっても、そういうのを受け入れて、積極的に接していってくれたら嬉しいなと思います。すいません、上から物を言っている感じで。どうもありがとうございました。(拍手)

安平　素晴らしい意見をありがとう。もうお一人。

C班・上村　C班の上村と申します。人前で話すのが得意じゃないんで、あの心臓がバクバクしているんです。僕も、介護福祉士の専門学校卒業して、今年の3月から働くのです。その専門学校で実習って同じようにあって、高齢者だったり、認知症の方がたくさんいて。で、テーマの「真にお互いを理解しあう」ってあるんですけど。その認知症だと、言葉を発することも出来ずに、出来なくて、まぁ、それで僕が一方的に喋ってる感じで、第一段階、一番最初の実習で、向こうの職員の方が、「コミュニケーションを取ってくれ」って言われて、で、いろんな利用者とコミュニケーションを取ってたんですよ。

それで、認知症がなくって話せる利用者とは僕、どんどん積極的に話してたみたいで、僕が話せない利用者とは、遠い、離れて、コミュニケーション見られなかったって注意されたんですよ。で、そこで学校の先生とか、主任の方に、「どうしたらいいんですか？」って聞いてて、結局分からずに時も過ぎていきました。で、学校で習ったですけど、コミュニケーションって言葉だけじゃなくって、非言語コミュニケーションって言うのがあって、その仕草とか、表情作りとか、言葉を発せずともコミュニケーションが図れる、ということを学んで、そういうところから笑顔とか、そういうアイコンタクトとか、そういうのを駆使して、コミュニケーション取っていって、それで、介護をして終わったときに、一瞬口元が動いて笑みになったりとか、そういうのを見ててすごく嬉しかったし、だから、えーっと、「真にお互いを理解し合う」っていう、僕もC班のその意見と一緒で、深いところまでは絶対分からないと思うんですよ。浅くは分かっても。

だから、えーっと、締めがいつもメチャクチャなんですけれども、まぁコミュニケーションにはそういう方法もあるということです。すいません、もう。(拍手)

安平　はい。ありがとうございました。まだいらっしゃいましたよね。

D班・田部　すいません、喋りは下手がですけど、目立ちたがり屋なんで、立てらさしてもら

って。えっと、一応、僕は高知で、病院の顔とも言われる受付をしてまして、ちゃらちゃらしてますけど、病院の顔です。

で、患者さんもいろいろなんですけど、うちの病院が脳神経外科ということで、認知症の患者さんなり、いろんな患者さんが来るんです。一番は本当に大切にしてるのは、尊敬している理事長先生からなんですけれども、「患者さんの気持ちになっていつでも対応を考えろ」ということで、まぁ簡単に言われて「何のこっちゃが？」と思ったんですけれども、まぁとりあえず自分なりに考えて今は対応してるんですけど。自分がもし患者で、多分このままいけば爺ちゃんになると思うがですけど、年取ってどういう対応をしてもらったら一番ありがたいのかということで、考えながら常に対応しているつもりなんですけど。

理解し合う、まぁ人それぞれ理解度っていうのがあると思うんですけど、どれぐらい分かれば理解と言えるのか一概にはちょっと言えないですが、まぁ、相手の気持ちになって考えるっていうのは大切やと思うんで、これからもそれを貫いて対応していきたいとは思ってます。以上です。すいません。D班の田部と申します。

安平　はい、ありがとうございました。はい、どうぞ。

D班・笹田　はじめまして、D班の笹田です。私は、去年の4月から認知症の高齢者の方々が共同で生活するグループホームで働かしてもらってます。

皆さん入居者の方は、認知症は軽いものから重いものまで患っている方ばかりで、例えば暴力もありますし、キムさんのおっしゃってた便を喜んで付けるとかいう行動とかも、毎日のようにある人もいます。かと言って、そればかりではなくって、本当に自宅で暮らすのと同じように、毎日楽しく買い物に行って、料理をして、好きな歌を歌って暮らしてる、何かすごく個性あふれる楽しい職場です。

で、今回、「真にお互いを理解しあうには」というテーマで、D班の皆さんと話し合って、改めて思ったことは、やっぱりどんなに理解できない行動とか言動があっても、相手のことを否定しないっていうのは、本当に一番大事だと思います。でも、毎日そうやって、その認知症の方と触れ合ってて思うのは、どんなに頭で否定しないと分かってても、自分の感情がついていけない時とかいうのもたくさんあります。

だから私は、自分自身、ゆとりを持って、例えば、家に帰りたいって言って、5～6時間以上、真っ暗になっても町じゅうを歩き回る人とかいるんですけれども、どんなに説得して、その生活の場に連れて帰ろうとしても、その方は納得されないので、私はその人が納得できるまで、ただ黙ってついて歩いて回って、その人が満足できる時を待つ、っていうのを職場の先輩に教えてもらって、一度そういう経験をして、認知症の方と心が通じ合えたという経験があって、そういうのを喜びに変えて、働くことが出来てます。だから、自分にゆとりを持って、いつまでも付き合っていこうっていう、そういう心構えも大事なのかなと、今のところは思ってます。以上です。（拍手）

安平　はい、ありがとうございました。本当に社会福祉の現場では大変なご苦労をなさってるんだな、というふうなことが、その経験談を通じてよく分かったわけでありますけど、人と人とのコミュニケーションをはからなければならない、理解し合わなければならないのは、何も、社会福祉の現場だけじゃなしに、学校の先生とかいろんな職場があると思うので、学校の先生をやっとられる方、何人いらっしゃいます？

はい。それじゃあ、皆さん、何でもいいんです。人を理解することの難しさとか、成功談とか失敗談とか、そんなことがあったら発表して

いただきたいと思います。

B班・大島　B班の大島実幸と申します。私は成功談があります。私は、そうですね。まず理解しあうのは、まぁ難しい話だということがいくらか出てきたんですけど。じゃあ、理解しやすい所から入っていったらどうかな？　と私は思うんです。で、誰にとっても普遍的に通じることってあると思うんです。例えば音楽とか、芸術ですよね。天文学もそうですし、スポーツも。わりと言葉が通じなくても、誰の心にもすっと染み込むことだと思うんですよ。

で、私は高校時代から国際コースにおりまして、外国の方とのコミュニケーションをどうやってはかっていこうか？　相手の文化を理解する、外国の人を理解するにはどうしたらいいのかな？　っていうことを考えていたんですね。そのために、高校の頃は3年間英語を勉強していたんですけども。その3年間で、言語というのはあんまり必要じゃないんかな、って思ったのです。

で、大学は全然違う経営商学部に進んだんですけれども、たまたま大学時代に中国武術という中国の文化なんですけれども、そのカンフーに出会いまして、日本語でカンフーって言うんですけれども、それに出会いまして、それに惚れ込んで中国に留学したんです。

で、その中国武術というスポーツを通して、国際大会なんかにも出たんですけども、その国際大会の場で、同じスポーツ、例えば、言い換えると空手の演舞のようなことをしていたんですけれども、同じ動作をして汗を流している選手を見たとき、同じ難易動作をしたときに、すごい喜んでる選手の表情とか、一生懸命応援し合っているチームの存在を見たときに、これって言葉じゃないけども人間考えることは普遍的で、何かその選手の頑張りように私はすごく心を動かされたんですね。

こんな国にも、例えばアフガニスタンの選手がすごく頑張っているというのに私は勇気付けられて、ああ私も頑張ろうという、気持ちが通じあった気がするんですよ。そういう、理解のし合い方っていうのは、成功してたんじゃないかな？　と私は思っております。以上です。（拍手）

安平　はい、ありがとうございました。どうぞ。

B班・稲葉　B班の稲葉と言います。よく学生に間違えられますが、御歳30歳になります。よろしくお願いします。

実際この「お互いを理解し合う」こととはちょっと程遠いかも知れないんですが、実は私、今回、学校の方でインターアクトというボランティアの関係に携わっております。そのインターアクトと今治南ロータリーが提携していろいろ事業をさせてもらっていますので、そういったボランティア関係について一つ、話をさせていただいたらと思っています。

だいぶ時間も遅くなってきてますので、和やかな雰囲気でいきたいと思いますので、気を楽にして聞いていてください。

皆さんご存じのアンパンマン。作者が「やなせたかし」さん。彼は高知県出身です。四国、ＪＲ四国にはアンパンマン列車と言いまして、電車の側面にアンパンマンの絵を描いた列車が走っております。なぜ、彼はアンパンマンを書こうか、と言うことになったのは、やなせたかしさんにも子ども時代はあります。

その当時のヒーローはやはりウルトラマン。ウルトラマンは大きくなって怪獣を倒すと。つまりウルトラマンっていうのはヒーローである。ヒーローは困った人のために敵をやっつける存在だというものだと思うのですが、やなせさんは子供の頃、なぜウルトラマンは怪獣を倒して、倒された怪獣がビルを壊しているのに謝らないんだろう？　どうして壊れた家の人に謝らないんだろう？　という素朴な疑問を持って

いたそうです。

ある日、やなせさん、幼少時代に、少し遠くの町でちょうどお財布を無くしました。今、僕は困っている。困っている人を助けるヒーローは、なぜ今、僕のところに来てくれないんだろう？　というふうに、ものすごく悲しんだそうです。

その時、たまたま近くを通りかかった友達のお母さん。お母さんが「どうしたの？」と。その時、やなせさんにはその身近に、身近な困った子どものために何かしてくれる人、それがヒーローであるべきだ。そしてその帰りの電車の中で、お母さんにもらったアンパンを食べながら、このアンパンとそのヒーローとを組み合わせて作られたのが、アンパンマンだと言われています。

アンパンマンはご存知の通り、かばお君がお腹を空かせていると、「僕の頭を食べなよ」と、優しくアンパンを分けてくれます。つまりこれがどういうことかと言うと、人を助けるためには自分の痛みを伴う。その痛みというのが何なのか、と言うと、例えばボランティアをする側であれば時間です。普段、人が何かをする時間を誰かのためにしてあげる。ただし、それはしてあげると思っては駄目だと。つまり、痛み、つまり時間をいかに有効に自分がどのように使える、そして相手から感謝を受けるのではなく、アンパンマンはバイキンマンと戦います。

例えば頭が無くなる。例えば、頭に水がかかる。どんな状況においてもアンパンマンはバイキンマンに向かって行くと。ということは、どんなに時間が忙しくっても、自分がやりたい、そういうものがボランティアじゃないか、と思います。

現在、高校においても、ボランティアの活動、徐々にではありますが増えております。実は私自身も20日にロータリーの方に来させていただいたのですが、前日の19日に転勤の内示が出まして、見事に転勤します。帰ったらすぐに引越



しの準備でかなり忙しいんですが、明日までの４日間を楽しもうと思っています。

ただ次に行く学校には、現在インターアクトの活動がありませんので、もしよければその地区でのローターアクト、インターアクト、ロータリークラブの方にお願いして、新たなインターアクトを作っていこうかと今、現在考えております。

そうして、(拍手)、そしてですね、来週また、実はうちの生徒が、今度は少年少女キャンプということで、この場所で研修を行わせてもらう予定です。またそういった子ども達が、大きくなって、私のように、私はもう30歳を超えてライラセミナーに参加させてもらっているんですが、若い子はそういったボランティアを通して、ものすごくボランティアに興味を持ち、そういった今聞いていただいたアンパンマンの話をもう少し広めてもらってですね、ボランティアの意義、それからものすごく、私達もそうですが、みなさんも後ろにおられるロータリークラブの方々、ＹＭＣＡの方々からの援助を得て、ものすごくこういった交流の場、ボランティアの意義、今回のテーマである「お互いを理解しあうために」、いろんな貴重な経験をさせてもらっているのではないかと思いますので、こういった交流を機に、ボランティアを広めて、本当にロータリーの趣旨である横の広がりですね、「手に手つないで」というような歌もありますが、そういったものも、どんどん広げていってもらえたら、と思いますので、よろしくお願いしま

す。(拍手)

安平　ありがとうございます。こういうふうにですね、一生懸命喋っていただくということが、彼を皆さん方に理解をしてもらうという、一つの大きな、まあ手段と言うか、ことなんですよ。ですから、他の皆さん方も、私はこんなことやってるよ、ということで、とくにお互いの理解というところに焦点を絞っていただけましたらありがたいんだけれど、別にそれに縛られずにですね、こんな私の職場には苦労あるよ、こんなけしからん上司がいるよ、その上司とどうもうまくいかないんだとか、まぁ、そんなことでもいいかと思うんですけど。どうですか？　どうぞ、まだ発言の無い方。はい、どうぞ。

D班・原田　D班の原田と申します。よろしくお願いします。先ほどの振りに「はい」と手を上げるのもどうかなと思いつつ、発言をさせていただきたいと思います。ちょっと緊張しますので、すいません、座って失礼します。

えーっと、あのフフフ。まぁあの先ほどのご意見を頂いて私なりの発想ということでお答えをさせていただけたらな、と思ってるんですけれども。

私自身は、今、ボランティア・コーディネートのような仕事しております。コーディネーターをしております。学生さんのボランティアをしたい、という方が来られて、ボランティアを募集してるよ、という活動先の方をご紹介するような仕事をしております。

そもそもその仕事をしようと思ったとき、きっかけと言うのが、中学校の方の部活のコーチに、本当に母校にお手伝いで関わらせていただいたときに、どこかやらされている感じのようなものが漂ってるなぁ、という疑問もありまして、子ども達と接するのが先生でなくってもいいじゃないかと。そのとき私は子どもと接しているのが、学校の先生とか、塾の先生とか、あるいは保護者の方だったり、どうしても目上の方としか子どもが接してないのかなという疑問も少しあったりもしましたので、私自身の中で自ら動く、自ら楽しむっていうものを人に伝えていきたいな、というふうなことを考えて、まあいろんな仕事を経て、今の仕事をしております。

今回、研修に来させていただく上でですね。まあ、職場上のいろんな理由もあるんですけれども、もともとそういった、いろんなきっかけがあった中で、今の仕事についてるわけなんですけれども、お互いコミュニケーションを深め合って、知り合うことは大事だよ、と今まではずっと思ってましたし、この研修に来させていただいて、研修でいろんなことをお聞きする中で、やっとと言いますか、その「100%お互いを知り合うことは出来ないよ」ということにどちらかと言いますと、否定的な考えを持っておったんですけど、やっとその意味が少し自分の中で理解ができたのかなというふうに思っております。

ただですね。一つ、自分の中で自信がないことがありまして、なんとなくテーマについては自分の中で、言葉としては落ちたものがあるんですけれども、果たしてこれから、今からですね、いろんな方と関わる中で、本当に自分が、これが志だなぁと思ったことを、ずっと大事だと思い続けれるだろうかと、非常に不安が増えたりもしてる状況です。

と言いますのも、今年ですね、私は３０歳になるんですけれども、初めて自分と合わないかな？　と思う方と一年間過ごすことになりましてですね、いろんな関わり方をしたわけなんですけども。どこか自分でどうしてもうまくコミュニケーションが取れないという理由を勝手に自分の中でつけて、なるべくコミュニケーションを取らないようにする、という方法もあるのかなと、いうような方法を取った時もあるんです。ですので、これからもおそらく自分の価値

観だったり、常識と全く違う方とお会いする機会がどんどんどんどん増えてくるかと思うんですけど、そういった中で、今回の研修のようなことを受けさせていただいて、いろいろすごく自分でも気づいた点をですね、どうやって意識し続けていけるのかなと、その辺、その辺りをですね、受講者の方であるとか、何度かセミナーを受けたことのある方にですね、ちょっとあの、勇気が出るようなアドバイスが少しでもいただけたらいいな、と思いますので、もしよかったらお願いできたらな、と思います。

安平　はい、ありがとうございました。今の辺りのことはですね。最後に今井先生に少し締め括りの、ちょっとしたお話をいただきますので、そのときにまたお話をお聞きいただきたいと思います。その他にいかがですか？

この受講生の中にお坊様がお一人、おいでになっていらっしゃいます。お坊様もどちらか言えば、まぁ、お説教をするという人間相手の部分もあるだろうと、いうふうに思いますので、吉田君、一つ何か話を…。

D班・吉田　こんばんは。D班の吉田でございます。実は紹介いただきましたように姫路のあるお寺に、観光のお寺なんですけども、そこで一応、お坊さんをさせて頂いております。紛れもなくお坊さんであります。

先ほども美味しい夕食を頂戴いただきましたが、出された物は綺麗に食べないといけないと言うので、朝昼晩と。常は精進料理を食べているんですけれども。（笑い）

はい、すいません。あの最初に黒板に書かれております、今日テーマをいただいた「文化の違いを乗り越えて理解をし合う」というところなんですけど、実はD班では、二つのグループに分かれてこのテーマについて話し合いをさせていただきました。一つが豚さんチームで、一つが猿さんチームでありまして、まあその、豚と猿に分かれたせいか、理解し合うのは難しかったんです。（笑い）

この文化の違い乗り越えて理解しあう、英語で言うと「異文化コミュニケーション」（笑い）違いました。違いましたね、すいません。

あのすいません、私があのー、まぁあのお寺ですので、仏教のお話をしますと、仏教の中には「山川草木悉（さんせんそうもくしつ）有（う）仏性（ぶっしょう）」と言いまして、「山（やま）川（かわ）草木（くさき）悉（しつ）有（う）仏性（ぶっしょう）」というのは、「全て生きているんだよ」という意味なんですね。今日、午前中に、大田先生にお話を聞かせていただいたんですけど、ヒントの３、ヒント３というのが教えていただいたと思うんですけれども、我々生命あるものは社会という関わりの中でもって、食物連鎖の中でもって存在を教える、ということでありました。山川草木悉（さんせんそうもくしつ）有（う）仏性（ぶっしょう）、我々はそういった中でもって、存在をすることが出来る。他のものを殺して、そして食事を頂いて生きている。逆に考えると、他の物を殺してしか生きれない、そんな弱い存在でありますから、そういった他の者を、人間ですね、人を否定することなく肯定、全肯定をするような前向きな、前向きと言いますか、他の者をあまり否定するのではなく、その社会生活の中の繋がりを大切にする中で、お互いが歩み寄りながら生活することが大切なんじゃないかな、と思っております。お互いにお互いのことを知ろうとする姿勢、これが先生がおっしゃっていました「志」やる気なんじゃないかな、と思っております。

すいません。もう一つ、話したいことがありまして、あの私、ローターアクトクラブというものに所属してまして、ローターアクトと言うのは、ロータリーアクション、行動するロータリーと言う造語から生まれております。我々、どんな活動をしているのかと申しますと、奉仕を通じての親睦という標語の下、ボランティア

活動等々をさしていただいております。

ただ、ボランティア団体と申しますのは、世の中にたくさんあります。もう数え切れないぐらいたくさんの団体があるのですが、我々ローターアクターがしよりますボランティアと申しますのは、ボランティアをするだけではなくて、ボランティアをする中でもって、お互い自己研鑽をしていこうというのが、もっとも特徴となっております。

ボランティアをする側は、気持ちよく相手のために奉仕をして、そして奉仕をされた側も卑下することなく、気持ちよく「ありがとうございました」と言える関係、これがボランティアだと思うんです。これは2500年前に、仏教を広められましたお釈迦さん、お釈迦さんが教えられました「布施」の教えと同じなんですね。布施と申しましても、いろんな布施がございまして、お寺へ行きましたら、お金だったり物だったりあるんですが、決してそのお金、物だけではなくって、笑顔。例えば困っている方には、優しい愛のある優しい言葉をかけてあげる。ただ声だけじゃなくって、身振り手振りとしての笑顔ですね。そういった優しい心でもって、働きかけるというのも、立派な布施、またはボランティアになるんじゃないかな、と思っております。

もし、こういったボランティア活動の中でもって自己研鑽をはかりたいと思われる方は、是非、私の方までご連絡いただければと思います。勧誘のようになってしまいましたが、以上で終わらせていただきます。

安平　ありがとうございました。最後の方に話が出たのは、「無財（むざい）の七施（ななせ）」というやつですね。何もお布施というのは、お金を渡すばっかりが布施じゃないよ、と。笑顔、それから眼、そういう無財の七施ということで、人に愛の施しをすることができるんだと、こういうふうな話だったと思います。他に何かございますか？　どうですか？　はい、どうぞ。

A班・小濱　A班の小濱です。先ほどから、安平パストガバナー、安行さんから、「お前、早よ行かんか」というような目線を感じたので、ここでちょっと。今あの、吉田さんが話したんですが、同じく私、小濱も姫路にあるローターアクトクラブに、一緒のクラブに所属してやってます。ちょっと僕、その姫路のクラブの前に、姫路にある獨協大学でローターアクトクラブの活動しておったんですが、その時にちょっと苦労話と言うか、それをちょっとまあ話したいな、と思います。

で、クラブのその…獨協で会長をしておったんですが、非常にメンバーが少なくて、３人、２人とかいうメンバーでした。その時に何をしたらええかな、ということを思っとった時に、そのテーマである「理解、お互いに理解をするためにどうしようかな」と考えたときに、僕のやったことは、「いいところ探しをしよう」ということを言って、メンバーが２人、３人ですので、人のいいところを言い合おうということでどんどんいいところを出し合って、人には、いいところと悪いところがありますので、悪いところは言わずに、いいところだけを言い合おうと、いうことをやりました。

その結果、どうなったかと言いますと、人のいいところをどんどん見ていくうちに、僕以外のメンバーが言ったのは、「人のいいところを見てるうちに、大学のいいところも見えてきたし、地域のいいところも見えてきた」ということを言われとったんです。もし参考にできるんであれば、皆さんも、その理解をし合う方法として、人のいいところ探しをお互いに、いい所をどんどん探していってくれれば、まぁ理解し合えるんではないかなということ。

もし、こちらに松田君という子がおるんですが、実はもうローターアクトに入ることになってます。もしこれからどんどんローターアクト

を広げていこう、と吉田の方と一生懸命頑張ってますので、ぜひローターアクトをよろしくお願いします。

安平　よかったね、勧誘が出来て。他に何かありませんか？　大体ですね、このあたりの話は、あと８分程ぐらいで終えましてですね、最後に今井先生にコメントを頂きたいと思うんで、あと７分ほどしかありません。喋っておかないと、後で後悔しますよ。フフフフ、どうですか？　何か、ありませんか？　あなた、どうですか？

はい、喋べっとかないと、ストレスが発散なりませんからね、よく寝られませんよ。

B班・上羽　B班の上羽と言います。何を話そうと思うんですけど。立ってですか？　えっとですね。皆さん、福祉とか、先生とかの、ボランティアの方とかいろんな仕事あるんですけど、僕は金融の営業マンを今してて、そんな中で、どんな話をしようかなと思うんですけど。ただロータリーっていうのはいろんな業種の集まりやって言うんで、僕みたいな仕事でも何かあるかなと思って、特に研修受けてて、こう仕事に通じる、何か仕事に持って帰りたいな、と思って、ずっと聞いてたんですけども、ホンマに営業って、僕らの場合、お金を対価にしてもらうんですけど、ただ自分の、僕の仕事は顧客が決まってて、自分のお客さんが280人ぐらいいるんですけど、そのお客さんのところに自分を売りに、営業ってのは自分を売るんが仕事なんで、行くんですけども、そこで、どう言ったらいいんか分からないんですけど、自分を押し出しても売るとか、売らないとかの話の前に、まず話を聞いてくれないんですね。

もう自分のお客さんなんですけれども、「もうええわ」という感じになって、僕の年やから、お客さんとかも、歳も２倍、３倍の人もたくさんいはるんですけども、やっぱりそういう人と話すときに，ホンマに自分がその人にとって、「お前に話したら話やすいわ」とか、「ああ、必要やわ」と思ってもらうには、よく話を聞きだすというか、なんでも、別に仕事以外のことでも話してもらえるような関係というのをまず作らないと、すごい仕事が出来ないんで、今日いろいろ聞いてて、そういう部分ですごい役に立つし、自分が心がけてたと言うか、そういうふうに思ってやってたことが、他のいろんなことに通じてるんやなと、思えたんで、これからもそういう感じで営業をもっと、学んだことも使いながらやっていきたいなと思います。すいません。

安平　ありがとうございました。他にありませんか？　どうぞ。

B班・久保　B班の久保早哉香と申します。あの、話がポンポンポンと戻るんですけれど、あのこうやって座ってたんで、お顔が分からなくて、ちょっとどなたの意見だったのか、ちょっとあれなんですけど、「自分の志が保ち続けれるのかどうか」って言うのをちょっと心配されていたようなことを、少しあの、そういうふうに聞こえたので、私の意見なんですけども。ちょっとスポーツをやってまして、そのスポーツは、個人種目なんですけれど、つねに自分自身との闘いであって、周りのライバルとの戦いでなんですね。

それで、やはり友達でも、こう、ライバルなので、どことなくちょっと個人種目っていうのもあって、ギクシャクしてしまうんですね。だからすごくこう…、相手は悪気はないと思うんですけども、私が「おはよう」って挨拶しても、「おはよう」と返してくれなくって、ちょっとプイって無視されたりすることもたまにあったりするし、こう、何か意見を出したときに、「それちょっと違うんじゃない？」って、すごくきつく言い返されることもあるんですね。

それでも、私はすごく辛くって、苦しいとき

もあるんですけど、それでも笑顔で頑張って「おはよう」ってまた、何べん無視されても伝えたいって思いますし、自分の意見も「ちゃんとこれはこうなんじゃない？」って自分で思ったことは、はっきりと伝えたいって思ってます。

で、私の「志」なんですけれども、私の志は、自分が大事にしている信念をしっかりと持つんですけれども、その信念というのはたくさんの人との出会いや経験を通したりとか、すごい高い壁にぶつかって苦しんで、いろいろと考えたり、たくさんの人から助けてもらったりした中で常に成長して、それが「こうなんだろうか」「あぁなんだろうか」と悩みながら、自分の中で志が、書き換えられていくものだと思うんです。

なので、「志が変わっていくのがちょっと不安なんです」って言われた方がいたと思うんですけど、変わっていっていいと思うんです。なので、いろいろと考えたり、悩んだり、あぁこうなんだ、と自分で納得したりして、自分がこれなんだって思えるようなものを探し続けていって、追及して行くのって、いいなと思うので頑張ってください。私も自分をしっかり見つめて、自分が納得できるように成長していきたいと思っています。ありがとうございます。

安平　はい、大変ありがとうございました。大体時間が参りましたけれども、後二人だけ、ぜひとも喋りたいという人。どうです、あなた。何か喋らない？　いい？　ホントに。後悔するよ、フフフフ。どうぞ。いい？　まあ、何か喋りよ。（笑い）

C班・橋本　ああ、C班の橋本です。僕は専門学校に行ってて、今年卒業するんですけど、保育の方の専門を勉強しておりました。その中で、やはりどのクラスにも虐待を受けてるっていう子どもがいるんです。それを見極めるのは保育士の仕事であって、その実習のときに私は、虐待に興味を持ちまして、虐待の子ども達の行っている施設に研修に行ったことがあるんですけれども。そこは、自分の、自分のと言いますか、たぶんここにいる誰もが思っているよりも想像以上の場所であって、その子ども達は全くどこも、体も健康ですし、考え方にも何も異常はないんですが、心にだけ異常があるんです。

幼い頃に心に傷を負って、その施設に来てるんです。そういうのを見て、この題の「お互いを理解し合うには」というのがあって、やっぱりその子ども達を相手にしたら、とても難しいことなんです。たぶんこういうふうに、こうしたらいいって話してても、たぶん初めてその場所に行ったら、それはもう全部崩されていくと思うんです。

それぐらいの場所で、やっぱり先ほどのスポーツされてた方もおっしゃってたんですが、やっぱりそういうのは自分で見つけていくしかないと思うんです。自分で、その福祉系の方だったら、福祉の現場に実際に行って、やっぱり何をされたら、これをされたらイヤとかは、一人ひとり違うわけで、その何をされたらイヤっていうふうなことをちゃんと自分で、その場所を通じて、経験しながら、僕はまだ経験しないんですけど、経験しながら「志」をこれから立てていったらいいのではないかなと思います。ありがとうございました。（拍手）

安平　最後にどなたかありますか？　いいですか？

ありがとうございました。長時間、いろんな意見を出していただきまして。

ロータリーもですね、まあいろんな夢を持ってまして、次の会長さんは、「make your dreams real」ということで、「ロータリーの夢を形に」というふうに言っているわけですね。その中で、「ポリオ撲滅」の夢とか、「青少年の育成」の夢、それから「国際親善と理解と平和」の夢など、いろいろと夢を持っているわけですけども、やはり国際理解など、大変難しいこと

でございまして、これがまた、独善的な理解になってしまうといけない。アメリカがイラクでやったことも本当は善意だったのかも分かりませんけれど、そして理解しているつもりが、全く理解できてなかった、というふうなことがあるわけで、「理解し合う」というのは大変難しいんだというふうに思います。

今日は、たくさんの意見を出していただきました。それらを参考にあらためてお考えいただきたい、というふうに思います。それじゃ、最後に今井先生、申し訳ありませんが、締めのコメントをしていただいて、今日のフォーラムを終わりにしたいと思います。お願いいたします。(拍手)

今井先生　なぜ私、こう当たりがいいんでしょうね。最初の時にいきなり…。

前に行ったら、君らが顔をじろじろ見るやないの？（笑い）

安平　いや、それは受講生に顔をじっくり見ていただいて、話をしていただかないと…。

今井先生　いやぁ、もう。よく当たりましてありがとうございます。顔を分かったね、もう。名前分かってる、私の名前？（笑い）

当たり前やなぁ。ありがとうございます。皆さんのお話聞きました。いろいろありますけれど、実は、私達が考えてるもう一つの問題があります。それは、どういうことかって言うと、ここ２年、「変化の時代の中で」と最初に書いてます。変化の時代の中で、皆さん、変化の違いをどのように捉えたかと言うと、そしたらこれは、Ｂ班のあれですね、サードエースだったかな？　誰か、あんただったかな？　波があるときも低くなることもこうあって、こういう時代の変化だと、こういう捉え方をお話しましたね。その通りだと思います。

私が生きている世界の中では、波のいいとき、景気のいいときはいろんなことがありますけど、その波も一つの時代の変化だと。ところが私達が願っている時代の変化っていうのは、今まで私達の人類が経験したことないような大きな波の変化が今ある。それは世代間の変化、あなた達は、おそらく私の孫よりもみんな若いんです。私の孫も32くらいになりました。あなた達、そんなにならないやろ？　で、一番小さい孫が26ぐらいになりますから、だいたい皆さんの年齢は、私の孫くらいです。

三世代離れたときに、私の考えてることと、私の孫が考えてることとは、毎日違う。例えば、食べ物にも違うし、食べ方にも違う。日本の食事が好きだという私と、イタリアンフードが好きだという孫との間でも、食べ物一つにしても違います。そういうふうな意味において時代の変化の中で育った人達の違いってものがある、そんなんじゃないんです。

人類が始まってから今までの間で、最も大きな変化の一つだと考えています。私達は、地球がこのままあるんだろうか？　これから先どうなるんだろうか？　100年後に地球はあるだろうか？　ということを真剣に科学者の中には考えている人があるということは知ってますね。

このままであれば水がどうなるんだろうか？

もう黄河の水は、中国から来た黄河の水、ほとんど無くなってきたやん。あるとき、一番下まで流れてこない。上の方は流れてるけれども、下の方になったら、工業団地がたくさん出来まして、そこで水を吸い上げるもんだから、だから下の方になると、みんな伏流水になって、黄河の水はほとんどないんです。

仕方ないから、揚子江、長江から、ダムを引いて、その水を黄河の方に回しながらやってる。だから、中国においては、とっても今、水の問題も大きな問題ですね。同じようにこれは、世界中で大きな問題になったりしているだけでなく、私達、日本でも大きな問題です。

そういうような大きなものと同時に、私達の

科学技術が進めば進むほど、宇宙船が今行って、土井さんが一生懸命、初めての宇宙船の中で仕事してます。しかし、そのようなものは、つい私がまだ君らの時代には何もありませんでした。コンピューターで連絡をするってことは、一部に試験的に使われていたかもしれませんが、ほとんどありませんでした。

難しい名前の電波探知機という機械があってね。飛行機が飛び出したら、その飛行機の映像を映し、反射させて、そしてどの辺に飛行機が来たかっていう、慌てて防空壕から出てですね、見張り台の上に行った頃にはもう飛行機、目の前に来てるっていうような時代から、たったですね、40年、50年ほどの間に、こんな世界になってしまった。

しかしその私達がやった科学技術の進歩が、ある意味、私達の時代を壊しつつある。コンピューターも携帯も大変です。今、やっているときにはいろいろ問題になっている。そういう大きな時代の変化になったときに、人類として、我々として、そういう人類として変わりつつある世界の中でどうして生きれるのか、どうして新しい世界を創造していくのかってことが、私はいいんです。もうだいたい80いくつですからね。せいぜい生きてももう100年は生きないだろうと、（笑い）その間にね、だから私はいいんです。

だいたい何やかんや言いながら、しかしあなた方の時代、あなた方の子ども達の時代になったときに、どういう時代が来るかということを考えながら、時代の変化の中で、私達はどんな文化を考え、どんな文化の違いをどのように受け止めながら、何が一番私達に幸福かということを考えていく。

そんなことまで考えんでいいと。隣の人とどうしたらうまくコミュニケーションができるだろうか、携帯がいいんだろうか、出会ったほうがいいんだろうか、ということを考えるより、もうそれはアージェント（urgent）の問題、君ら若い者にとってはアージェントの問題だとは思うけど、それよりも、アージェントって緊急な問題だとも思うけれども、ロータリーとして次の世代の皆さん方に頼みたいことは、そういう新しい時代があった時に、どのように地球社会を、どのように新しい文化を、どのように私の新しい文面を築いていくか、っていうことの課題を、私達は背負ってるんだということを知ってもらいたいということですね。

例えば、じゃあ、ロータリーがどんなことしてるかと言うと、ついこの前、ロータリー・ユナイテッド・ネイションズ・ディというのがあります。国連の日というのがありまして、国連に、世界のロータリアンが集まって、国連が今、何を考えてるかどうかっていう話があったんです。それに、私達の代表、今ここに来ておられる代表が行かれました。国際ロータリーのライラの委員の一人として、日本から海沼先生がそれに出られました。ちょうどここにおられますが、その、ＲＩのユナイテッド・ネイションズ・ディというのがどんなんで、何が働いていたのか、中身は結構でございますけど、どんな人が集まって、何したのか、もし何だったら、よかったら、一言報告じゃなく…。（拍手）あのう、海沼先生はね、東京の…、まあご自分でご紹介ください。ちょっとだけ。

海沼　ありがとうございます。すいません。はい、わたくし、東京の渋谷区にございます…。

安平　どうぞ、前においでください。みんなにお顔を見ていただいて。

海沼　あの、わたくし、東京の渋谷区の恵比寿にございます、東京恵比寿ロータリークラブに所属しております。海沼美智子と申します。

ただ今、今井先生からお話しのございましたように、ロータリーでは世界中で様々な活動とか行事を繰り広げておりますんですが、毎年、

ニューヨークの国連本部、国連本部がニューヨークにあるというのは、皆さんご存知ですよね。その中で、ロータリー・ユナイテッド・ネイションズ・ディがあるんです。

大体、11月の第一土曜日なんですけれども、昨年は11月３日にございました。そこには約1,000名くらいのロータリーの関係の方たちが集まりました。800名くらいがロータリアンですね。そして、若い方たち、あなた達と同世代の方たち、すなわちインターアクト、先ほどインターアクトとお話がありましたが、14歳から18歳の中高生を対象にロータリーが活動を支援している方たちですね。

それから、ローターアクトですね。ローターアクトは18歳から30歳までの方たち、そういう方です。それから青少年交換というのは、高校生で１年間ホームスティの交換留学をしている高校生の方達ですね。その方たち。それからワールド・ピース・スカラーというのがあるんですが、それは世界で70名選ばれて、世界の平和のために考えてお勉強をしていただく、ということでスカラシップを出す、奨学金を出しているんですが、そういう方たちが集まりました。もちろんＲＩ会長・ウイルキンソンさん、次の会長の李東建さん、ＲＩの今井先生のような理事の方たちですね、そういう方達もお見えになりまして、世界規模で今、問題になっていることの話し合い、それから現状報告、そういうものを行いました。

11月３日には、識字問題ですね。文字を、まぁ字を読んだり書いたりできない方たちの、大体発展途上国の方たちのこと。それから、健康のことですね。ポリオプラスとか、結核。けっこう結核菌がまだいろんなところで出てまして、それからあと飢餓のことですね。それから環境問題。で、やはり、お水。それから、砂漠化。そういうものの環境問題。それについて、ワールド・ピース・スカラーの方たちが発表したり、また、ロータリーの方から、現状報告をしたり、そういうものがございました。

これは毎年やっていますので、たぶんインターネットで11月過ぎたら出てくると思うので、もし内容を知りたい方は、インターネットでそれをひいていただければ出てくると思います。まず、ロータリー・インターナショナルという横文字ですけど、それを入れてクリックしますと、ばーっと出てきます。日本語でも出てきますので、ロータリーについて勉強なさりたい方は、ぜひインターネットで調べていただきたい、と思います。以上です。どうもありがとうございました。（拍手）

今井　今ちょっと、皆さんに報告していただいたように、ロータリーは小さなクラブが、それぞれの町にあるだけではなくて、それが連携して世界の平和のためとか、世界の人達のために幸福であることを願いながらということ考えています。しかし、問題は、幸福とは何かということが、今、問題に。今まで私達は何が幸福かというと、物がたくさん豊かだったら幸福ですね。三木ガバナーのように、お腹いっぱいご飯を食べて「ああ、幸福」って言ってる時代は過去の時代の人であります。（笑い）

この頃の人は、そんなことがもう幸福なんて…。昔、食べる物がないような時代で育った子ども達は、お腹がいっぱいになるとですね、ああ幸福」って、「幸せ」って。確かにね、満足感がそこにあった。

しかし今、そういう満足をする以上に、世界の水がないとか、世界でそのような病気の子ども達がたくさんおって、多くの人がたくさん死んでるっていう世界の中で、本当の幸福は何かっていうことを考えてみたり、本当に助ける手立てはないだろうかと考えたり、そういうことをいろいろしてます。

そういうことは、この世界が、私達みんなが、ことに私達のような年寄りはいいんですが、皆さんのような若い方々、皆さん方の子孫、そう

いう人達がみんな幸せになるためには、今のうちにどういうふうなことを考えるのか、私達はそういうことを考えたときに、そのことをどのような形で具体的に解決するために、手を握り合うことができるのかということが課題です。

こうしてライラを始めたときに、一番最初のときに言いましたよね。他のクラブ、インターアクトクラブ、吉田君、あんたんところに入った時に、食べるお昼のご飯やなんかあったら、自分で払うやろ、ね。お茶を飲んだら、みんなで自分で払う、ね。他のクラブでも、ロータリーのところが少しずつ応援をすることがありますけど。丸抱えでですね「食べる物も、寝るところも出すからみんな考えてね」、「新しい時代は平和な時代になるように、世界の人がみんな幸福になるようなことを次の世代の人達に考えてね」、それが実はライラですね。

そういうこと考えてみたときに、時代の変化というものの視野を広く持って欲しい。そういう視野をしっかり持って欲しいってこと。しかしそのことのために随分難しいんです。文化の違いっていうことでもそうでありますけど。文化の違いは人間が作ってくるんですから。違っても慣れれば、「郷に入っては郷に従え」って誰かが書いたように、慣れれば、そこの文化に慣れてくるって言う。ですから、違いはごく当たり前だと考えることもできるんです。しかし私達が変化、そういう変化の中で生まれてくるいくつかの問題、これはあんまりやると、僕は明日、話をすることがなくなるんで、（笑）かなわんなぁ。商売道具取られてるような。

そういうようなことを考えたときに、私達はぜひ、ここに来たロータリーアン、ライラリアンになる皆さん達が、自分たちの将来と言いますか、どういう希望を持ちながら、どういう世界を作るか、その中の一人として加わってるんだということを自覚して欲しいと思います。

「真にお互いを理解し合うには」そんな世界を本当に作ろうとするならば、ただ単に理解をするだけではなくって、人類の人間の本質的なものから、例えばね、ここでどうでしょう。平和な世界を作ることが賛成ですか？　不賛成ですか？　手を挙げてください。平和を作ること、賛成の人？　平和なんて要らないと思う人？　なんでこれ、全部一致するやない。全部一致する。そしたら、平和を作ることは一致する。

それじゃあ、その次に聞きます。例えば、平和を保つためには軍備を持たなきゃならないから、小さい国は、北朝鮮なんかは核を準備したい、平和のために、私は自分が使うんじゃない。平和のために攻撃されないように、核を準備するんです。イラン。私達はよその国に攻められようとしたときに、あそこは核を持っているから下手したら火傷するぞ、って侵入しない。だから平和が保てる。こういう核を持つことによって平和を保つことに賛成する人？　一人おられます。反対する人？　ですね。そうするとね。そういうふうにして考えてみたときに、私たち意見が随分たくさんあるだろうと。お互い同士が違った意見を、そしたらその理由は何だろうか？　その理由はなんだろうか？　それを言い出したら、きりがない。日野先生と明日までやらんとならんけん。きりがないですけれども、そうじゃなくて、私達は考えの中にいろんな違う人がおる。それは、そのことのために、世界でいくら論議してもなかなか追いつかないことがある。意見の一致が無かったけれども、ある意見の一致のある部分をまず考えながら、次の問題を考えていくというふうにしながら、次の問題を積み重ねていかないと私達はなかなか理解できない。もう他のことは皆さんが言われた通りです。

お互いに理解し合う、そんなようなことのために、ロータリーはわざわざ、国連、ユナイテッド・ネイションズまで行って、今、世界の問題になっていることは何ですか？　ってことを、若い人も年寄りも集まって、「じゃこれを課題に取りましょうね」って言いながら仕事し



てます。

私たちはここで、皆さんたちが話し合ったことの中から、これが大事だと思うならば、そのことを持って帰ってそれぞれの地域の中で、そのもの自身も少しずつ試み合いながら、「これはうまくいかなかったなぁ」「これはうまくいったなぁ」失望することもあるし、落胆することもあるだろうし。

失望したら、それでおしまい。そんな人生簡単じゃない。失望したのを積み重なって、大変な思いを持って生きててよかったと思うこともあるだろうと、私達はそういうことで、今日、ディスカッションされたことも一つの大きな投げかけとして受け取っていただいて、そして皆さんが、いろんなお話の中で、人を、他の人と理解する。私とあんた方とは、おじいさんとは孫ぐらいの差があるけれども、私もあなた方の話を聞きながら、若い人達がいま、何を理解、考えながら生きてるのか。また私も、私の意見としてこういうことを考えながら生きてるんだなぁ、あの人は…ってことが分かってくださるとありがたい。そういう違いをお互い同士に分かりあえる場所として、一緒に泊まって、一緒にですね、ご飯を食べて、そして、一緒にいろんなことを考える時間を持ったということであります。

やりだすとキリがありませんから、そのくらいにして、よろしいでしょうか？（拍手）

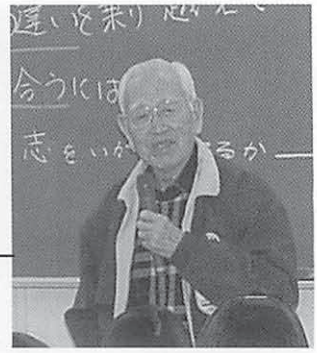
安平　今井先生ありがとうございました。また海沼さんもありがとうございました。

もう一度、拍手をお願いいたします。（拍手）

それではですね、このあと、明日の朝の注意事項があると思いますが、これでもって、とりあえずフォーラムの方は終わりたいと思います。

あまり慣れなくってですね、うまく皆さん方の意見を引き出すとか、集約できなかったなあということを申し訳なく思っておりますけど、これで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

「志」



今井 鎮雄 先生

神戸YMCA顧問、神戸西ロータリークラブ会員
国際ロータリー元理事

●プロフィール

■ロータリー略歴

1980－1981 RI第2680地区ガバナー
1982年5月、1983年5月 国際協議会グループリーダー
1984－1989 RI青少年活動委員
1993－1994 アジア地域ローターアクト実行グループメンバー
1995－1997 国際ロータリー理事
1999－2000 RI RYLA委員
2003 RI ブリスベン国際大会委員会副委員長
2004 RI 大阪大会委員会副委員長
2003－2006 ポリオプラスパートナーグループ委員長補佐（ゾーン1,2,3,4および9）
ロータリー財団メジャードナー米山功労者

■公職（現職のみ）

兵庫県青少年愛護審議会会長
神戸市青少年育成協議会会長
神戸市市民福祉調査委員会副委員長
神戸市シルバーカレッジ学長
㈶兵庫県青少年本部理事長
（社福）神戸市社会福祉協議会理事長
（学）啓明学院理事長
㈶PHD協会理事長
㈶ひょうご子どもと家庭福祉財団理事長
（社福）ひょうご障害福祉事業協会理事長
㈳家庭養護促進協会理事長
スペシャルオリンピックス日本・兵庫会長

佐伯 皆さま、おはようございます。昨日、ちゃんと寝れましたか？ もう終わりですから…今日は一番いい話を今井先生にしてもらいますので…その前に講師紹介ということで、今井先生の申し子の三木明先生の方からちょっとお話伺います（拍手）。

三木 皆さん、おはようございます。元気？ 元気やなぁ。たいがい３日目、４日目なると、皆さんヘトヘトになって大変なんですけど、今回皆さん本当によく頑張ってくださってありがとうございます。関係者みんな皆さんのファイトに感激して、そして感謝してます。ありがとうございます。

ではいまからお話いただく今井鎮雄先生のご紹介を簡単に申し上げます。皆さん方のお手許のワークブックの後ろ14頁にすでに書いてありますから、ちょっと重なりますけれども…今井先生は1920年にお生まれになりまして、現在88歳？ 87歳？ まぁ、そんなもんです。神戸西ロータリークラブの会員でらっしゃいまして、お仕事は…公務は本当たくさんあるんですけれども、神戸YMCAに長いこと奉職されまして、いまは顧問をされています。

そして1980年81年この時に国際ロータリーの第2680地区、兵庫県全県なんですけれども、ここのガバナー、ガバナーと言いますのは国際ロ

ータリーの役員でありますけれども、それをお務めになられました。そして１年後には２年間に渡って国際協議会、これはガバナーになる選任されたガバナーエレクトと申しますけれども、その人たちの研修リーダー、トレーニングリーダーとしてアメリカへ行かれました。で、２年間に渡って新しいガバナーの指導をなさったという素晴らしい経歴の持ち主であります。

そして国際ロータリーの役員をいろいろなさいまして、1995年97年の２年間に渡りまして国際ロータリーの理事をなさいました。国際ロータリーの理事というのは世界中から17名選ばれまして、２年間に渡って国際ロータリー…これからロータリーはどんなことしていこう？　どんなことが必要なんだろう？　世界中のニーズはどんなんだろうか？　そんなことを共に研究したり、あるいは国際ロータリーのあり方を皆さんで討議したり、ロータリーのまさに主導者的な立場でいろいろご活躍なさいました。国際ロータリーのライラの委員をされたり、それから毎年行われます、世界各国で行われます国際大会の、実行委員会の副委員長をなさったり、本当に枚挙に暇がないくらいの経歴の持ち主であります。

この頁ではとても足りませんで…経歴をずっと書きますと、この頁４～５頁に渡るくらいの経歴が出てきます。どれを書こうかといつも迷うんですけれども、公職は10いくつありますけれども、こんなとこでありませんで、「今日はどこへ何をしに行くんかな?」いうくらい大変お忙しい方であられます。いま兵庫県の青少年本部の顧問されまして、それから啓明学院という学校の理事長されたり、PHD協会というこれは、後でまたPHD協会について少しお話いただきますが、いろいろと大変な役割を担っておられます。

私たちはオールド、オールドというのは決して年寄りとか古いという意味ではありませんで、多少そういう意味もありますけれども、実は尊敬するとか大変大切な先輩のことをオールドと言います。オールドダディ、よく言いますよね。お父ちゃん、パパという…マイオールダディってことで…大変尊敬するパパであります。このロータリーを主導者的立場からご覧いただいて、私たち若いロータリアンを育て、また皆さん方のような新しい世代の、次の世紀を担う素晴らしい若者を育てるということでご尽力いただいております。

紹介だけで１時間くらいかかりそうなので、先生の講義は少し短くなりますがお許しいただきたい。冗談はこれくらいにいたしまして、いまから素晴らしい総括講義ということで、この三日間、今日入れて四日間ですけれど、いままでの三日間で皆さんがお聞きになったり、あるいは仲間と話し合ったりしたそんなことをいまから今井先生にまとめていただいて、また明日から皆さんたちがどういうふうに生きていくのか、そんな指針を与えていただけるものと思います。では、２時間くらいですか、お話しいただきたいと思います。先生、よろしくお願いいたします（拍手）。

今井先生　おはようございます。今日は最後の日ですので、いままでの内容をすこし振り返ってみましょう。

皆さんご存知のように、ロータリーはロータリアンの友情の集いの場であり、同時に地域のためにどのような役割が果たせるかを考えるグループでもあります。地域を大きく捉えると世界です。たとえば国連は国の代表がそれぞれの国益に沿って話し合いながら運営されていますが、国連に代表を送り出しているグループはもう一つあります。

それは地球に住む人間のことを考える団体、いわゆるＮＧＯ（非政府組織）で、市民の代表、人間の代表として国連で発言できます。このＮＧＯの中には、世界仏教連盟とかキリスト教連盟のような宗教団体の代表や赤十字の代表も入

っていますが、国益ではなく人類のこと、どうすれば世界が平和になるかを考える団体として国連に代表を出していまして、そのＮＧＯの一つに、ロータリーも入っているのです。

２日目は韓国の留学生、金静希さんのお話をうかがいました。皆さんと同じ年頃の金さんの話を聞いて、ものごとはいろんな角度から考えないといけないと教わりましたね。研究をするうえで、「自分で見つけたことでなければ、あまり信用しない」。私たちは文献を読んで、この人がこんなことを書いていたと引用します。しかし金さんはそういうものを見た後で、「自分でどれが本当かと選ぶ努力をしないといけない」。歴史の書物は国益を考えて書かれるので、間違ってはいなくても都合のいいことが書かれていて、公平というわけではない。日本の歴史は日本の国の都合で書かれる。何が真実かを探しだすのに苦労するが、そこに私の仕事がある、とおっしゃいました。学究者の態度として非常に大切なことです。古事記や日本書記の研究は韓国では十分にできないので、日本に来てオリジナルの資料に触れ、掘り下げて研究している金さんの姿を皆さんに紹介したいと思い、ＲＹＬＡの講師として来ていただきました。彼女はいま卒業論文を書いている最中ですので、東京からここに来るのは大きな負担だったと思います。けれどＲＹＬＡの主旨を理解して、講義をしに来てくださいました。ＲＹＬＡのプログラムは、そのような方々の奉仕の志によって続けられてきたことを覚えていただければと思います。

カウンシル・ファイヤーで話しあったことは、私たちがよく使う愛という言葉について。ギリシャ語では愛は三種類ある。友だち同士の愛、友情。親子の情愛。もう一つは、神（私たちの知恵を超えたもの）の義とか愛。神様はどんな人の上にも同じように雨を降らせる。精進した人も雨に濡れるだろうし、盗賊を働いた人も雨に濡れる。神様は公平に一人ひとりの人格を大事にしてくれる。熊沢テルヒサの話の中で、相手が金持ちとか知識があるとか力が強いとかで尊敬するのではなく、人間として生きていることを尊敬する、それが本当の愛だ、愛とは相手の人格の尊厳を認め合うことだと言いました。新しい世界は、人間としての尊厳を尊重するという考え方が根付いたときに開かれるのではないか。

福祉の話も出ましたが、福祉関係、子どもたちや教育に携わっている人、手を挙げてください。２人ですか？ 私は関西学院で長年、福祉の方法論や構成論の講義をしました。いまも福祉について話す機会がありますが、皆さん、よくこうおっしゃいます。お年寄りが車椅子を押してもらったり、人に食事を食べさせてもらうのを見ていると「福祉は暗い」と思う、と。そこで私は、福祉は明るいということを努めて言い続けています。「福祉の文化」すなわち人と人との出会いの中で、人と共に生きる中で、相手のために何ができるかと考えるのが人間の幸福であるとするなら、それを中心とする文化、価値の社会を作らないといけない。そう考えると、福祉は明るい仕事でなければならない。最近は講演を頼まれると、福祉は明るいんです、みんなが明るく生きることが大事なんです、と話ています。

フォーラムで皆さんは意見をまとめましたね。昨日少し話したように、いま、世界が大きく変わろうとしている。時代の曲がり角で、私たちは次の走者であるあなた方にバトンを渡そうとしています。しかし、いままで走ってきた400mトラックとは違って、これからの世界はトラックの外へ出て、どこを走るかわからないという状況です

どう変わろうとしているのか。大きな変化の一例ですが、1989年、中国で天安門事件が起きました。同じ年、ドイツではベルリンを東西に分断していたベルリンの壁が崩壊し、共産主義社会で生活していた東側の人たちが自由主義社

会に触れ、新しい統一ドイツが生まれました。これは20年ほど前のことです。当時、ドイツ政府は旧東ドイツの青年に職に就いてもらうため施策を打ち出しましたが、格差社会が生まれました。日本はバブル期があって格差社会が現れたのは少し遅く、小泉内閣の頃です。社会構造改革が叫ばれ、ニート（NEET）という言葉がイギリスから伝わり、格差社会の意味が理解されるようになったのがこの頃です。

地球規模の大きな変化については、アルビン・トフラーが1980年に「第三の波」を書き、世界に大きな衝撃を与えました。簡単にいうと「第三の波」の第一の波は農業革命、第二の波は産業革命、そしていま地球社会は第三の波、情報革命に覆われているということです。人類の祖先はおよそ600万年前にアフリカで誕生し、狩猟採集生活をしていたが、数が増えると食糧を求めて大移動を始めました。あるグループはアフリカに残り（ネグロイド）、あるグループは北上してトルコあたりから北欧まで行く（コーカソイド）、トルコあたりから東へ進路を取ったグループはシベリアを通り、南へ下りるグループと、凍ったアリューシャン列島を渡って北米から南米へ下りるグループ（モンゴロイド）がありました。今から6000年くらい前、世界のあちこちで作物を栽培し始め、人間は一定の土地に定着し、自分の知恵で生きる術を見出す。やがてナイルやチグリス・ユーフラテス、インダス、黄河など大河のほとりで農耕文明社会が生まれます。この社会は、現在まで途切れなく続いています。

トフラーは、人間が生きる術を覚えた時に農耕文明社会が生まれたと言います。農耕作業は皆が力を合わせて働く必要があるので村ができ、知恵が必要なので経験と知恵のあるお年よりが大事にされました。やがて18世紀に産業革命が起き、人間は水力や石炭、蒸気、電気などを動力に利用します。産業革命は大量生産システムを生みます。産業社会の出現で農村から工場の周辺に人が移り住み、都市化、核家族化が進み、社会構造が大きく変わります。科学や技術が急激に発展し、100年ほど前に飛行機や自動車が発明されました。その発明が人間の生活を変え、組織のあり方を変え、価値の基準を変えていきます。人間はより効率よく、より便利に、より多く持つことを追い求め、そうして生まれた資本主義社会では自分だけがより大きくなろうとして競争原理が働き、競争社会になります。第一次世界大戦が1915年から1917年まで続きますね。ヨーロッパでは第一次世界大戦を「戦争を終わらせるための戦争」と呼び、第一次大戦後、国際連盟を創って平和に生きようと考えた。ところがその後、第二次世界大戦が始まると、これは民主主義と帝国主義の戦いだといわれました。一国が他国を支配下に置き植民地を拡げようとする帝国主義と、人間は平等だとする民主主義との戦いということです。その結果、日本、ドイツ、イタリーが負けたのです。第二次大戦後、私たちは自由と民主主義を希望の旗印に、新しい世界を築こうとしました。資本主義経済社会は進展し、より新しいモノ、より便利なモノを大量に生産し、使い捨てをする社会になりました。科学と技術が発達してコンピューターの時代に入ります。

1980年、新しくコンピューターが出始めた頃、トフラーは「第三の波」の中で、これからはかつて農耕文明社会から産業社会に変わったのと同じくらい大きな社会変化が起きるだろう、私たちは第三の波の波しぶきを浴びていると書き、その新しい社会を情報化社会と名づけました。それが現実になったのがいまです。社会に大きな変化が起きれば、それに伴ってそれまでとは違う考え方が生まれます。日本はどうなったでしょう。コンピューターという便利な道具を使うようになって、私たちは幸せになったのでしょうか。

工業化が進展すると、工業用水が大量に必要になります。今の中国の大きな問題は、水が無くなるということです。黄河文明という中国の古代文明を支えた黄河の川下には水がありません。覆水になっています。黄河流域の工業団地が水を汲み上げ、工業用水として使うようになると、農業に使う水がない。長江の水を引いて黄河の水を確保しようというのが中国の大きなナショナルプロジェクトです。いま日本の米が中国に輸出されていますね。中国の一部の豊かな人たちが日本の高い米を買っています。沿岸地方の富裕層は豊かな生活をし、高級食材を輸入しています。日本では高く売れるものをますます力をいれて作ることになり、食料自給率は40%になってしまった。

子どもを二人持つと家計が苦しいから「一人しか産みません」とういう考え方もでてきます。少子化時代と言われますが、それは子どもの数が少なくなるから大変というのではなく、人口のバランスが変わるからそれまでの生活構造を変えなくてはならないということです。それをどのように変えていくかが、問題なんです。

高齢者が社会でどんな役割を取れるかは、まだ十分に考えられていない。いまは寝たきりのお年寄りよりも、元気に働ける高齢者の方がずっと多いんです。しかし55歳とか60歳になると「定年です」。元気でエネルギーがあっても、定年で何もすることのない高齢者の方は大勢います。100歳以上のお年寄りは、日本で3万人ほどいらっしゃるんじゃないでしょうか。 高齢化社会はコンピューター社会に伴う社会構造の変化の一つです。ナノテクノロジーの技術が発達し、病院では人の血管に小さいカメラを入れてコンピューターで操作し、写真を撮ったり血流スピードを計り、ここが悪いから切り取ろうということもできます。手術も工場の部品交換のようになる。

空気と水はただ、と少し前まで日本人の大半は思っていました。山に入ってキャンプをする時は、湧き水を飲みました。そのうち田畑に農薬が撒かれるようになって、キャンプのリーダーは子どもたちが川の水を飲まないように気をつけなければいけなくなった。いまでは、水は買うもの。日本にはたくさん水があるのに、外国から高い水を買って飲んでいる。

花粉症も、スギの木を切ったらいいじゃないかと言うけれど、花粉をくっつける排気ガスをどう処理するかという根本的な話はあまりされないんですね。化石燃料はいずれ底をつく。ガソリンの代わりにエタノールを燃料にする車を走らせよう。エタノールが安く作れるようになれば、排気ガスも出ないから空気汚染の防止にも効果があるといって、エタノール作りに懸命です。遺伝子を操作して2倍とか3倍の大きさの麦が作れるようになると、とれる量が3倍になりますから、小麦の値段は下がる。しかしみんな売ることばかり考えて、基本的な問題を捉えていない。

あるいは経済問題。いままでは金の時代です。1976年にノーベル経済学賞を受賞したミルトン・フリードマンは、経済効率を上げることが経済の原則なら、資本を大きくするほど利潤は高くなる。効率を良くするには資本を大きくすること。自分で稼いで資本を作るのでなく、「私の株を買ってください」と言って資本を集め、それをまとめてあちこちの会社の株を売り買いするファンド屋さんが現れた。ライブドアの堀江さんは、変わっていく経済の仕組みをいち早く捉えて、株の売買で時代のヒーローになり若い人たちに持てはやされました。

ところが1998年にノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センは「あの人たちは経済効率を良くするという論点においては賢い。けれどそれは人間が生きていることとどう関わりを持つかを考えていない。新古典派の経済学者たちは合理的な愚か者だ」。マイクロソフトのビル・ゲイツ氏は、「金儲けはもういい。これからは利子を福祉や慈善事業に使いたい」と言っ

て、昨日も話があったように、ロータリーが全力を注いでいるポリオ撲滅運動のために1億ドルを寄付しました。そういう生き方を選ぶ人もいます。

そういった変化は身近にたくさんあるのに、私たちの目にはそれがバラバラに映っている。それを整理すると、いろんなことが見えてきます。食糧問題も少子化も高齢化も水の問題も温暖化も、一つひとつの身近な変化はみんな知っていますが、それぞれの変化の関連性が明確に意識されていないのではないでしょうか。私たちはすでに時代の変化の渦の中に放り込まれているんです。気がついている方もいらっしゃると思いますが、贅沢して、いいものを着て、おいしいものを食べて、形が悪ければ食べられるものでも捨ててしまうという生活、自分が満足で幸福ならいいんだという考え方を変えなければならない。それを反省することが新しい情報化社会への構造変革につながると、私は考えます。産業社会の論理構造とか効率がもたらした幸福とかモノを追いかける時代は過ぎようとしているとは思いませんか。

では、本当の豊かさとはなんでしょう。私は、兵庫県のある会の委員長を務めています。子どもたちにふさわしい社会を考え、妨げるものは条例を作って規制することができます。最近困っているのは、携帯電話です。コミュニケーションの道具として携帯電話は便利だけれど、それで豊かさを感じられるだろうか。いまの高校生は90%以上が携帯を持ってるでしょうね、中学生で60%くらい、小学生でも35%くらいでしょうか。売る側は、これは子どものための携帯で、お母さんとだけ連絡が取れます。「いま私、塾」「それじゃご飯を食べて、今度はピアノ教室に回りなさい」「はーい」。子どもは携帯で指図されながらあちこち走り回る。お母さんには便利で、子どもがいまどこで何をしているかもわかる。

ところが、子どもの方は携帯を使って「みんな、あいつと口きくなよ」「あぁわかった」「あの子と口きいたらアカンで」。ある日、その子が学校に行くと、誰も教室で口をきいてくれない。2～3日同じことが続き、その子のお母さんが先生に「うちの子がクラスでいじめにあってます」。先生も知らないうちに子ども同士が携帯を使ってそんな連絡をとりあう。携帯がそういうふうに使われるとしたら、それを防ぐ方法はあるのか。通信会社の人、技術者、子どもの教育に携わる人たちに来ていただいて話を聞きましたが、結局、答は出ないんです。経験豊かな教育者が集まっても、子どもの携帯所持について「なるほど」という答が出ない。

昨日、皆さんから出ましたね、コミュニケーションとは、他の人たちと意思を通じあわせること。いま人と人が触れ合う機会が少なくなっています。独居老人が多くなりました。誰からも声をかけられずに亡くなって1ヶ月以上経ってようやく誰かが気づくケースだってある。お母さんが子どもを「お荷物」と考えて虐待するケースも起きている。子どもが親を殺してしまうケースも。それは人と人とのヒューマンリレーションが何らかの理由で欠落してきた中で起きている。

前の時代の人々も、社会構造が変わっていくときは長い時間をかけて新しい変化に対応していったに違いないと思います。その変化を理解しないといけないのは、あなた方です。新しい時代への変化の中で、何が大切かを注視してください。資本主義社会、人間の欲望を中心とした効率優先の社会の経済構造の仕組みに固執していると、根本的に行き詰まるでしょう。新しい考え方、哲学を生み出さなければならないが、それがどんなものかは私もわかりません。一つ言えるのは、モノが豊かになったためにかえって人と人が交わることが減ってしまったということ。この状況を回復させないといけない。人と人が一緒に生きるために何をどのように整えていくかを考えていかなければなりません。新

しい世界を作るためには、いままで「価値がある」と思っていたことではなくて、これが大事ということを認識することが大切なんです。

“Time”というアメリカの雑誌が、世界の人たちが自国の生活に満足しているかどうか調査しました。あなたはいまの生活に満足していますか、幸福ですか、という質問に、いまの暮らしが一番幸福だと思う人が一番多い国は、どこだと思いますか? フィリピンだそうです。ロータリーの奉仕活動でも、フィリピンに学校を建てたり井戸を掘りに行ったりしますね。日本人は、日本にいる私たちの方が幸福だと思っているようですけれど、そうじゃなかった。それはなぜか。何かあった時、困った時には誰かがそばにいて助けてくれる。そういう環境なら安心して生活ができる。安心して年も取れるし、子どもを育てることもできる。火山が爆発しても、台風で家が壊されても、私はここにいることが幸福だと、フィリピンの人たちは答えたのです。“Time”は、モノの時代ではない時代がそこまで来ていると書いています。昨日、皆さんは、国と国、県と県、人と人と書いてましたね。日本の中で、住んでいる人の幸福度が一番高いところはどこでしょう? 沖縄です。理由は、人と人との絆の深いことを幸福と考える人が多いから。兵庫県では13年前に阪神大震災がありました。家も持ち物もなくしてしまった多くの人たちが、そのとき言ったことです。「モノは壊れた。でも隣の人が『大丈夫? おにぎり食べにいらっしゃい』と言ってくれたことで、私は心が安まった」。心が安まるということが、これからの人間社会の中でどれほど大事なことか、このことからもわかります。

20世紀の終わり頃、私たちは産業社会が追求してきたものは、必ずしも人間を幸福にするものではなかったと気づき始めました。新しい時代、人間は何を幸福だと思うのか。時代の価値観が大きく変わろうとしている中で出てくる様々な新しい問題、実はそれが大きなヒントになるのです。

新しい時代の人間の幸福を考えるとき、手がかりとなるのは、産業社会で暗いイメージをもたれていた福祉です。人と人とが寄り添って生きることの大切さを考えると、福祉の文化こそ次の世界を作る第一歩だと思います。人と人との寄り添いの文化は、新しい時代の体系を構築するキーワードです。私は皆さんに必ずしも福祉の仕事をしてくださいといっているのではありません。皆さんはモノを豊かにするための教育を受け、方法論を学んでこられましたが、それとは異なる考え方がこれから生まれるはずです。新旧の価値観の狭間にいるのは、あなた方です。どちらへ進むべきか選択するのは、あなた方です。

フランシス・フクヤマというアメリカのジョンズ・ホプキンス大学の教授が、2006年11月に「アメリカの終わり」という本を出しました。英語の原題は「岐路に立つアメリカ」。2001年にアメリカ・ニューヨークで同時多発テロが起きましたね。乗っ取られた旅客機がツインタワーに激突する壮絶な場面がニュースでたびたび映し出されました。アメリカ本土は敵から直接攻撃を受けたことがなかったので、アメリカ国民には大変なショックでした。それ以後、アメリカは世界戦略を変えます。自由から安全へ。戦略を変えたのはブッシュ大統領で、当時はネオコンと呼ばれるグループの影響を受けたといわれました。この本は、なぜブッシュ大統領が変わったのかを分析している。アメリカのネオコンと称されるコンサバティブな人たちの考え方は変わっていない。アメリカがこういう方向に進んだのはブッシュ政権の読み違いだ、ブッシュ政権が変わり、アメリカは基本的な考え方に戻らなければならないというのが、フクヤマの考え方です。

アメリカという国はヨーロッパ社会に失望した人が移民として渡って来て生まれた。新天地で自分たちの理想の国を作りたい、国のためで

はなく、ピープルのために。アメリカの憲法では国民ではなく「ピープル」という言葉が使われています。いろんな国の人たちがアメリカへ渡って来ましたが、みんなこの考え方を信じてアメリカという一つの国を作ろうと努力してきたし、いまもそれは変わらない。ネオコンの間には共通認識があって、第一は、民主主義、人権。一人の人間の人格と民主主義を大事にするために新しく国を興した。それゆえ他の国の国内政策も尊重する。国内政策はそれぞれの国が決めることなので、関与しない。二つ目は、もし必要ならアメリカの力—富であっても権力であっても—は道徳的信念に基づいてだけ世界に提供する。それ以外には使用しない。三つ目は、重大な安全保障上の問題は、国際機関による解決は効果がないと考えた時は、黙って身を引く。四番目は、大胆な社会改造は予測できない弊害を伴うかもしれないので、確かな根拠が見つかるまではやめよう。それを自分たちの共通認識としてきた。しかしブッシュはこの共通認識を取り違えた。イランへの攻撃や北朝鮮に対する政策も、ブッシュの政治的判断ミスでアメリカがいまの苦境に陥ったんだ。もしアメリカが、もう一度最初の共通認識に戻って立ち上がるなら、世界の人たちはアメリカを信用してくれるだろう、そうしなければアメリカは世界の人の信頼を失うだろう。どちらを選択するかを、これから政権は考えなければならない。アメリカはいま岐路に立っている（at the crossroads）。

最後に、日本の読者のために一章が加えられています。日本は国連の常任理事国になりたいと一生懸命だが、日本が世界から尊敬される方法はほかにもあるではないか。日本は国際システム全般に対する創造的思考の活気が欠けている。いま時代の中で何が変化しているのか気付いていない。自由や民主主義という基本理念が世界の人々に共有される時代になって、国家の主権が何であるかを明確にしないと日本の国家主権が溶解するかもしれない。日本が自国の国益だけで「これは損だから止めよう」「これは得だからやろう」という考え方をしていると、日本の主権は溶解する危険がある。日本の政治家は新しい時代における民主主義とか自由について明確な理念と哲学を持っていますかと、フクヤマは指摘しています。終戦後、アメリカから入ってきた「民主主義」がどんなものか、私たちはよく理解できなかった。笑い話ですが、お母さんが三匹のイワシを「お父さんは働いているから二匹。あなたは一匹」。子どもは「なんで僕が一匹？　民主主義だからなんでも同じように分けよう」。その後、民主主義の哲学を確立しないまま形だけを整えてきたために哲学の貧困がいま問われているのではないか、ということです。

私は、歴史が動いて新しい時代に入ろうとしていることを理解してくださいとお話してきました。いま、新しい時代にふさわしい新しい哲学を作り上げる必要があります。その時、私たちの視野が日本だけ、日本人だけに限られているとすれば、世界的な課題に対応することはできないでしょう。新しい哲学を世界の人たちと一緒に作りながら、その流れの中で自身の判断をすることが、皆さんがたに望まれているのです。（拍手）。

閉講式

閉講のあいさつ



稲山　三治

国際ロータリー第2670地区ガバナー（徳島プリンスRC）

どうも皆さん、すみません。もうちょっと今井先生の話を聞いた方が良かったように思いますけども、誠に申し訳ございません。今日こういう格好しとりますのは、いまから2670地区のペッツという、新しいロータリーの会長の会がございますので、１時半までに高松に行かなきゃいけませんので失礼いたします。

ま、本年はですね、2670地区の、たくさんのライラリアンが来ていただきましてありがとうございました。こんなに多いのは久しぶりみたいに思います。昨夜フォーラム見ていましても、皆さま非常に積極的に意見されまして、友だちはたくさんできたでしょうか？　我々が思いますのは…もう年でございますので、女子も多いので申し訳ないんですけれども、男子３日会わざればという話です。４日間に渡って、いろんな有意義な話をいただきました。

最後に今井先生の話を聞きまして、この間の志という意味をですね、一言で申しますと、最後に、ケネディ大統領が言いました。こういう言葉です。老いたる者は夢を見よと。若き者はビジョンを描けと。ビジョンなきところに人間は滅ぶと。ビジョンとは、将来に対する展望と構想に尽きる。このビジョンというのが、志だと思います。そういう意味で、今後ロータリアンの皆さんも、ますます努力してくれるようにお願いいたしまして閉講のご挨拶と致します。本当にありがとうございました(拍手)。



閉講のあいさつ



三木　明

国際ロータリー第2680地区ガバナー（姫路RC）

皆さん、長時間ご苦労さまです。ありがとうございます。間もなく、このライラセミナーも幕を閉じることになりました。３人の講師の先生方の話を、皆さんはどういうふうにお聞きになったでしょうか。金先生の切り口、大田先生の切り口、また今井先生の心のこもった温かいお話…それぞれが、皆さん方の心の中に沁み込んできたことと思います。そして各班、キャビンタイムを通じて、素晴らしい仲間を得られたことと思います。４日間という長いようで実は本当に一瞬のことだったかもしれませんけども、このお付き合いを一生続けていただきたい、そしてそれぞれの班のカウンセラーのおふた方とも一生のお付き合いをしていただきたい、そんなふうに思うわけであります。

昨日ちょっとアクシデントがありまして、お水が出なくなりました。大変ご迷惑おかけいたしました。13年前に阪神淡路大震災があった時には、数十日間水の出ない地域がありまして、大変そこに住んでおられる方は苦労なさったことを思い出しました。そんな時に私の知り合いの家庭や知り合いの仲間から中学生の子どもさんちょっと預かってほしいということで、ま、私は姫路に住んどりまして、被害がなかったので「どうぞ、お預かりしますよ」と。中学生だったんですけれども、一人で姫路にやってきまして、昼ご飯を食べてしまうと「おじさん、僕やっぱり帰るわ」と。「え？　どうして」と聞いたら、小学校の弟さんが水運ばなきゃ行けないって。「それはちょっと、僕には堪えられない」と。そんなことを思い出しまして、彼はまた電車を乗り継いで帰って行ったのでありますが、そんなことを思い出してる時に、ちょうどインフォメーションセンターで、私はスタッフに「何時に会合するんだ」「どういうふうないま展開なってるんだ」「メドはどうなんだ」っていうふうにいろいろと話しておりましたら、本当に２人の女性の受講生がたまたまインフォメーションセンターにやってまいりまして、「悪いねぇ、ゴメンね水出なくて」と言いました。もうね、本当に顔も洗えない、トイレも行けない、食事もできるんだろうかってそんな不安がいっぱいあった時に「悪かったね、なんとか午前中には回復すると思うよ」って言ったら、その女性の受講生は「いえいえ、こんなに水が大切なものだということをやっと気が付きました。いい勉強させていただきました」こんなふうに言ってくれたんですね。

僕はこの、謙虚で美しい心に触れて、本当に良かったと言いますか、「良かったなぁ、そんなふうに思ってくれたんだ」…数秒間のことでありましたから本当は顔を覚えていなくて…この20人の女性の中にその方いらっしゃるわけですけれども、きっと、全て60人近い受講生の皆さんも同じ思いでいてくれたんかなと、そんなふうに思って、大変うれしく思いました。

そんなことで、この志というテーマがあり、いろんな先生方のお話もあり、そんなこともありましたが、こういうハプニングのおかげで、皆さん方の美しい心に私たち関係者が触れるこ

とができまして、本当に私たち自身が多くのことを学んだ大変有意義な、私たちにとっても有意義なライラセミナーでありました。本当に、受講生の皆さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。

そして、これからまた明日から皆さん地域に戻られて、職場であったり、地域の人々と共にいろんなことで生きていかれると思うんですけれども、是非ここで出会った仲間、そして人を大切にする心、いろんなことを常に思いながら、またお仕事に、そして仲間との生活に、邁進していただきたい。

ヘンリー・フォードが、こんなことを言いました。肉体的な年齢に関係なく、学ぶことを止めた人はすでに老人である。肉体年齢に関係なく、学び続ける人は常に若人である。まさにその若人が、いま、今井先生がおられるわけですけれども、皆さん方は肉体年齢も若いし、頭脳も若い、そして学ぶ姿勢を持っておられますから、常に若人であっていただきたい。そんなことを思ったわけでございます。

またこれから学友会というのがありまして、このライラを卒業した仲間たちが集まる機会、あるいは情報交換する機会がたくさん出てきます。どうか皆さん方が各地域で活躍されたそんな情報を、仲間たちにも分かち合っていただきたい。そして仲間に対しても、そしてまた自分自身に対しても、それが一つのきっかけとしてまた新しい展開が起きることを心から祈っております。大変短い４日間でありましたが、これから一生のお付き合いができると思います。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。そして受講生の皆さん、本当に来てくださってありがとうございました。また会いましょう(拍手)。

閉講のあいさつ



佐伯　直治

ディーン（小豆島RC）

佐伯　来年は2680地区、兵庫の担当でありますが、ちょっと次のガバナーの方いらっしゃらないので、再来年また四国が担当なる時に担当されます岡内ガバナーノニミーから一言、最後にいただきます。

岡内　人と出会い、神と交わり、愛の深まる所、ここ余島で４日間、皆さんと大変楽しく、充実した勉強することができました。これから皆さんはそれぞれのご家庭はもちろん、学校や職場に戻られるわけでありますが、苦しいことや困ったことが起きた時は、是非このライラセミナーで学ばれた、外部講師のお二人の先生、そして今井先生、安平先生のお話をですね、思い出していただいて、問題解決に努めると共に、挫けず明るく前向きな考えで物事を見ていただいて…挫けず明るく前向きに物事を捉えて、これからの人生元気良く、歩んでいただきたいというのが私の希望でございます。これからの皆さんのですね、大いなるご活躍を心からお祈りいたしております。この４日間、本当にありがとうございました（拍手）。

佐伯　最後に皆さんの４日間の委員を務めさせていただきました私から一言。アメリカにチェスター・ミニッツという提督がおります。この人の伝記を読んだ時に、こんな分厚い本ですけども、一番最後に感動的な言葉が書いてありました。それには、こう書かれておりました。誰も偉大な者はいない、そこには大きな仕事があるだけだと。この言葉を読んだ時に、「あ、俺も単なる凡人なのに…仕事ある時にはちゃんとやらないとイカンのだなぁ」と思いました。これから皆さん、地域に帰った時に、物事は好き嫌いや損得だけではなくて、逃げずに必ず完遂してお進みください。そうすれば、バッジを付けてようと付けてまいと、ロータリーの精神と同じような良い世界を築けることができると、私は信じております。この４日間、水が出なかったことや、ご飯が足りなかったことがあったり、ちょっと不便なことがありましたけれども、そこは４日間共に過ごした仲間としてお許しください。４日間、どうもありがとうございました（拍手）。

ここでガバナーの関係の方、ご退室ください。トラックが真ん中で待ってますから…お気を付けて（拍手）。

それではいまからの、最後の行事の説明をいたします。まず皆さまは、この会が終わった後、学友会という組織に各地区分かれて自動的に入れます。およそ1900名くらいいまいるんですけども、それの勧誘の話がありますので、まず2680地区より安行さん、ちょっとこの話、お願いいたします。

安行　まず最初にですね、2680地区のみの皆さま対象にお話をさせていただきます。実はライラってのは、いままでは修了生の次の受講生を終わった方々の学友会という組織がありませんでした。それで1900名か1800名ほどいるんです

けれども、その中の内の2680地区の学友会、あるいは四国地区の学友会の部分では、受講生の方々の学友会指標を一遍立ち上げてみようかということで、いままではそれがなおざりになってましたので、去年の９月１日に2680地区では受講の修了の方々の同窓会組織、あるいは親睦を図るため、あるいはこのライラの運営に携わっていただくような、そういう組織を作ろうということで、去年の９月１日に立ち上げました。

実は修了と同時にですね、皆さま方はその学友会という組織には自動的に入ることになります。じゃ、それには少し、お金が1,000円ほど払っていただくような会費になります。それ365日で割りますと、1日2.73円くらい。実はすでにあなた方は４日前ほどから素晴らしいもの得ておられますし、これからも素晴らしい友を得るのでございますから、差し詰め安い会費ではないかと思っております。

そういう意味で皆さまの絆を築いていただく一つのお助けやお手伝いを我々ができればということで学友会組織ということを考えて、設立をいたしました。是非ですね、自動的に入会しますけど、継続して学友の組織にいていただきたいと思っております。詳しくは去年の設立の総会の資料と、会則と、それと実はまぁ、これからすぐにご異動になったりしてご住所が変わる場合もありますので、その変更届けと等を…もしなければ、いま我々の手元にある住所録であなたたちの動静がわかると思うんです。

そういうこと含めた、パンフレットを、いまからお渡しいたします。今日、素晴らしかったなぁということで年会費をいただいても結構です。実はもう少し得たものを溜め込んでから払っていただいても結構でございます。じゃ、その案内を、いまからお渡しをいたします。2680地区からということでですね、少し…2680地区の受講生の方、手を挙げていただくような形でお渡ししたいと思いますので…。

佐伯　2670地区の方は、ちょっといまペッツの関係で地区員だいぶ減りましたので、皆さまが作文を書き終わった後か食事中に、こちらの方からまたお配りいたします。ウチの方はちょっと変わってて、1,000円っていうところは一緒なんですけども、集金はまた後日になります。ただ、メーリングリストの方にご登録ください。

では、いまから最後の行事の説明をいたします。記念植樹を行います。雨降ってるんですけどもいいですね？　これで行って？　ちょっと待ってくださいね。はい、じゃあ、この記念植樹を行って、ちょっと濡れてますけど、ここに戻って、受講生の方は、ごめんなさい、カウンセラーももちろん、感想文書きます。ここにありますのでね、だいたい1～2枚、もっという方は、置いときますから取って帰ってください。感想文書き終わった方から、そこでお昼ご飯を食べて、お昼ご飯食べたら自由解散になります。

足の方なんですけれども、13時から15時くらいまで、皆さん乗ってきたと思うんですけども2台のマイクロバス、1台はYMCAだと思うんですけど、ライラセミナーって札の付いたマイクロバスが土庄港までピストン輸送しますから、順番にお乗りください。雨も降ってますから濡れない所で待ちながら、皆さんの方まで帰ってください。船の時刻とかはたぶん運転手の方みんな知ってると思いますので、またお聞きください。

最後に余島から植樹についての説明がありますから、山根さんにその話をしていただきます。

山根　毎年ライラセミナーの修了の時に、受講生の方々を中心に、記念植樹をいただいております。ありがとうございます。毎年いろんな木を植樹いただいとるんですが、特に今年は、今井先生からのリクエストもありまして、ハマゴウという、瀬戸内の海岸沿いに生殖をする木を植えていただこうと思ってます。

特に余島はハマゴウが自生をしている数少な

い浜なんですけれども、少し最近数が少なくなってきてますので、そちらの方と、それから松ですね。黒松の苗木、こちらも松の木がどんどん少なくなってきましたので何本かということでご用意いたしました。で、下りられまして南の浜ですね、こちらの浜の方に4カ所に分かれて植樹の場所を設けております。これは仮植えになりますので、実際そこで大きく育つわけではございませんが、余島の所に植樹ってことで、穴を掘っておりますので、グループごとでまとまって植樹をしてください。で、記念撮影があるようですので、そちらの方もよろしくお願いいたします。外、少し雨が降ってます。もしいまこういうナイロンのジャケットを…お持ちの方は着て行かれた方がよろしいかと思いますので、よろしくお願いします。

佐伯　いま雨の方がだいぶキツくなってまいりまして、安平パストガバナーの配慮で、濡れて風邪引いたらイカンということで、植樹の方は、そこの浜辺の所に、このハマゴウという紫色の花の咲く、これぐらいの木と、それから松の木の方、準備してますので、皆さんにお見せして、植樹の方はYMCAのスタッフが代わりにやるということで行います。それでよろしいですね？　濡れないように、ちょっと待ってくださいね。



参加者感想文

A班



●カウンセラー　**黒田　建一**

昨年に引き続き二回目のカウンセラーでありますが、今年は前回より人数も増え（班としては前回12名、今回14名）、年齢も全体に若くなりました。男性は二部屋に別れ、班としてのまとまりを心配しましたが、イベントを経、夜のミーティングを重ねるに連れ、特にフォーラムの準備の際には、そうした心配も無くなったように思います。

今年は怪我や病気も無く、メンバーの人間関係も問題が無いよう感ぜられました。

給水のストップというハプニングも生じましたが、これにも臨機応変に対応されていた様で、これからリーダーとなるべきヤングとして適格性を示したものと思います。

フォーラムへ向けての準備は、かなりまとめることが難しい問題であるにも関わらず、高度のまとめ方をしていたと思います。

全体に静かな班の様に思われましたが、日を追って活発な面が表に出る様になり、最終夜は、朝四時過ぎ迄仕事の事など内容の深い話し合いがなされ、本領が発揮されたと思います。

受講生の皆さん、団体生活で何かと不自由なことがあったと思いますが、これからも中々経験すること無いチャンスであったと思います。時々セミナーのことを思い出して頑張って欲しいと思います。

●カウンセラー　**森田　康子**

第30回ライラセミナーに初めて参加しました。どのような三泊四日になるのか期待と不安がありましたがＡ班14名の受講生と共に過ごした、自然豊かな余島での波乱万丈の日々を生涯忘れないでしょう。

カウンセラーとして何も出来ない私を助けて頂きましたＡ班の黒田建一カウンセラーには本当にお世話になりました。最後の夜のフォーラムでＡ班は「ＰＥＡＣＥ」に辿り着きました。それは、例会でよく歌うロータリーソングに『奉仕の理想に集いし友よ、御国に捧げん我等の業、望むは世界の久遠の平和～』と、その平和そのものと思いました。彼らはこれからの地域社会においても、また専門分野の社会においても、その職能を活かして、指導力を発揮し伝達力を磨くことの出来る人材であると思いました。

今、私達は現代の日本に言い知れぬ危機感を抱いています。でも悲観的に決してならないで、連綿と続く日本文明を誇りとし、かつ広い国際

的視野に立って考えなくてはなりません。いつの時代においても旧態を打破してきたのは若者達です。現状に甘んじることなく、時代を切り開いていって欲しい。

今年のテーマ「志」は目的に向かって志があります。人生の目的は何でしょうか。それは目的ある日々をクオリティー・オブ・ライフを高めてゆく、その連続を言えると私は思います。私の土佐の高知には「自由は土佐の山間より」という言葉があります。明治政府の弾圧に抵抗し、植木枝盛、片岡健吉、板垣退助ら多くの勇士らで自由民権運動が起こりました。「板垣死すとも自由は死せず」は自由民権史に輝く台詞として今日に伝えられています。「志」を持って目的に向い、情熱力の先にある遥かな未来に向って一歩を踏み出す勇気を持って下さい。そして、万一挫折しても失敗を恐れず、失敗に学んでそれを次につなげる前向きな姿勢こそが大切です。仕事は自分を磨き輝かせるものであり、夢を実現するものです。多くの可能性を秘めた若者へ「意志あるところに道あり」と、心に留めておいて欲しいです。終りにこのセミナーを見守り、支えて頂きました、ＲＩ世界本部ライラ委員会の海沼美智子委員はじめ八十余名のロータリアンの皆様、私の尊敬しています今井鎮雄先生、第30回の佐伯直治ディーン、その他ライラセミナーの運営に御尽力を頂きました多くの方々に心より感謝し、御礼を申し上げます。

●小野　諭

志について。私は抽象的かつ一般論的な物の見方をしがちです。公務員という職業柄かもしれないし、生来のものなのかもしれません。何でも物事を曖昧なまま見過ごすことは、簡単なことです。ただ、それを繰り返していくうちに、自分が人間としてつまらない物言いをするようになりました。

今回、このライラセミナーに参加させていただき、大変刺激を受けたのは、大いなる志を抱く同世代の若者たちが、大いに語る姿を見ることができたからではないかと考えます。そして、彼等の姿が私の中に秘かにくすぶり続けていた志という灯を赤々と燃え上がらさせてくれました。あのカウンシルファイヤーで吸いこまれるように眺めつづけた炎のように。

講師の先生方、カウンセラーのお二方、他の受講生の姿を見て、私には、まだまだ知識が足らないと痛感させられました。余島で過ごして得た物も必ず社会のために役立てたい、私の抱いている志はそのことに尽きます。

心の底から感謝しています。

●真野　貴史

この四日間のセミナーを通じて、自分の中で色々な所が変わったと思います。まずは、団体行動が苦手だった自分が人と触れ合い、かかわり合う喜びを知りました。それは、グループ分けされた時のメンバーの影響が大きかった。特に同室の四人が、それぞれに大きな夢を持っていて、それに向って努力している熱い人達でした。暑苦しいと思う反面、すごいな。まねできないなと年齢関係なく尊敬しました。もちろん、同じ班人全員しっかりとした目標を持っていました。このセミナーでの人と人とのかかわりが、自分の中にある、小さな夢に向って行く勇気をくれました。いずれは家業（農業）を継いで、会社として立ち上げたい。それには大きな壁があると思いますが、今回のセミナーの経験を生かして頑張ります。

●中邨　悠

本当に充実した三日間でした。３名の講師による講演、カウンシルファイアー、フォーラム、毎晩遅くまで語り明かしたキャビンタイム。色々な人の色々な価値観にふれ、年齢に関係なく議論を交わすことが出来ました。違いを認めること、そして共通点を共有するという当たり前の事を、しっかりと時間をかけ実践すること

で、一生の友を得ることが出来ました。

志というテーマを聞いて、分かる様で分からない志ということをじっくり考える事が出来ました。まだ具体的に志とは何かを理解できていませんが、志を大切にしてこれからずっと生活していきたいです。

一人では生きていけないという事、そして自分は一人ではないということを強く実感しました。自分という人間が社会に対して何が出来るのか。一人では出来ない事も、仲間と一緒なら出来るんだという実感があります。ライラで学んだ事をどの様に普段の生活に生かしていくか。ライラからもらったヒントを参考にがんばっていきたいです。

第30回ライラに参加したことを誇りに思います。

●田尾　有加里

このセミナーを終えて「自由」というものを考えるようになった。セミナー中、全てが自由であった。時間を守ること以外は、全て自分たちに任され、自分たちの選択によって行動できた。解放感を感じ、全て自分の意志によって動いていることへの誇りと充実感をあじわうことができた。現実の社会へ戻ってみると沢山の束縛の中で、限られた自由を取捨選択しながら生きているということを感じる。そこには、しがらみがあり、日本特有の人間関係が存在するのかもしれない。このセミナーで学んだ「自由」というのは、自分の納得のいく自由を選ぶということ、自分が最大限に努力しつかみ取ろうとできる自由を選ぶということである。そしてそこには、自分がどうしたいのかという強い意志・志が必要である。

これから更に社会にもまれ、自分を見失いそうになりながら人生を歩んでいくようになるだろう。その時に、自分の軸となる志を忘れず自分が納得する道を創りあげていきたい。

●飯間　徹彦

四日間という時間は、人によって色々だと思いますが、私はみじかく感じた。日々、あそんでいたイメージがあり、ある意味では何をしにきたのかと思った時もあった。しかしその事を深く考えた時に、気付きました。あそび方によるが、ライラで楽しむために必要不可欠なのが仲間だと思う。会ってからみじかいので仲間とは言えないかもしれないが、外では得られない物があったように思える。来る前はのり気ではなかったのが本音です。でも、今は、来て良かった。ライラに来る前から悩んでいた事があり、その解決になればと思って参加しました。ただ、ライラセミナーを通して方向とか解決とか確実に決まったとは思えないが、何か見えました。それは、文字や言葉で説明できる段階ではないが、前よりは、進んでいるように思っている。その点では良かった。反対に、ライラの主催であるロータリーについて、少し感情がめばえました。ロータリーの精神とかを全て知りえたとは言いませんが、雰囲気はつかめました。またロータリーアクトの事もつかめたように思います。そこで思ったのが、「自分の事より他人の事」と言った考えに一つ意見があります。ロータリーに入会している、ほとんどの人は経済的によゆうがあるのだと思います。そんな事があるから、他人を優先といった事がいえるのだと思います。人によっては、今の生活がやっとな人がいるので、あまり強く言うのは良くないように思える。特にアクトに入会している人は、とても志が高いと思う。しかし、反対に現実に気付いていない。世の中で生きていくにはボランティア精神ではなく「金」である。その事から目をはなしているように思いました。「他人のため」といった事を世間におしえるのはとても良い事だと思います。しかし、自分の身がこわれるほどではないと思います。自分の身がこわれているからガンバっているのだと考えるのはおかしいと思うし、相手がいれば気が引ける。

だんだんと言いたい事がわからなくなってきたので、終わりにしますが四日間は私の中でみじかい数字ではあるが、とてもこい時間でありました。

ありがとうございました。

●疋田　香織

入社してからずっと会社という狭い社会の中でしか過ごしていなかった私は、知らない人と三泊四日もの合宿に耐えられるか不安を感じていました。でも今は、ここに来なければ出会う事のなかったであろう職業も年代も違う人との出会いを与えてくれたライラセミナーに来て良かったと本当に思えます。班のメンバーとたくさん語り合ったり、講師の方のお話を聞いて今までにないくらい自分を見つめ直し、何て自分本位な生き方をして来たんだろう、と気づくことができました。これからは他人を素直に受け入れ、尊重できるようなひとまわり大きな人間になれるよう努力しようと思います。ＬＯＶＥ＆ＰＥＡＣＥ！！

●眞鍋　文

セミナー四日間を通して、本当に色んな考え方の人がいるなぁと改めて感じました。就職活動を現在行っているので、企業を選んだり将来どのように生きていくかということ等を深く考える上で、他の方の生き方なども参考にさせていただけるかなぁと思い、セミナーに参加しようと決めたのですが、私が以前からしてみたいと思っていたことをすでに何度も経験されている方に実際話をきいたりするなど、今まで出会えなかったような人とも知りあえて本当に貴重な経験をさせていただくことができたなぁと感じます。これまで、自分の性格や考え方を知るには、自分を過去から振り返って見つめ直すなど内面との対話が重要だと言われてきましたが、そのようなことは人と接して初めて気づくことができるのだと強く実感しました。社会人の方から、会社の裏側なども教えていただけて、とてもいい勉強になりました。

●松浪　和正

色んな世代、職種の方と一緒に学び、活動してゆく中で、人それぞれの意見や気持ちが理解出来て来たように思います。最初、余島に上陸した時は、この研修の意味や内容がわからず不安でいっぱいだった気持ちが時間が経過し慣れるにつれ、たのしいものに変わってゆきました。

また、志というテーマで金先生、大田先生の話を聞きその中で志を持つには、一人だけでは志を持つのではなく他者との関わりの中で自我を確立させ自我像をえがくことによって、希望、夢が持てるようになると学びました。

そして、バスセッションを通して講義で学んだことを土台に、みんなで考え一致団結して解答をみちびき出す過程を学習出来たと思います。

最後にこのようなすばらしい、機会をあたえてくださった方々に対しお礼を申し上げます。

●中島　悠

私は、今回この第30回ライラセミナーに参加し、様々な経験をさせていただきました。

私は、ロータリークラブという団体の活動に参加させて頂いたのは初めてであったので、四国・兵庫のロータリークラブの人々に出会うことができました。又、ロータリークラブというものがどの様な活動を行っているのかということも知ることができました。

ライラセミナーで自分の考えを考えさせていただいたり、自分の目標、進路を導いて下さる講演を聴くことができ、私はこのセミナーに参加する前よりも一まわり成長できたのではないかと思っています。これからは、周りの人々にライラセミナーでの出会い、素晴らしさを伝えて、周りの人の成長に少しでも手助けしていける存在になっていきたいと思います。今回、人

として成長させて頂ける機会、出会い、水の大切さを教えていただき本当にありがとうございました。そして、カウンセラーとして、この四日間お世話をして頂いたお二人、お世話になり、ありがとうございました。

●山本　友紀

私はこのセミナーで出会いの大切さを知りました。性別・年齢・職種・国籍が違う人達がこの無人島である小豆島の余島に集い、三泊四日一緒に生活をしました。時が経つにつれて、徐々に親身になっていき、たくさんの話が聞けました。私が一番感じたことは、一人一人がきちんと自分の意見や意志を持っていたことに驚かされました。私は今まであまり深く一つの事について考えたことがなかったので、自分の意見・意志を持ち、それを人に伝えることがどんなに大事なのかを知り、体験することが出来ました。これから将来のことをしっかりと考えて、志をしっかりと持ち続けていこうと思います。人との出会いで人生は変わるものだと身に染みて感じたのでこれからもっともっと一人の出会いを大事にしていきます。この四日間は楽しくてあっという間に過ぎました。ありがとうございます。

●常岡　義政

四日間の研修で三名の講師の話をきき、自分の知識の無さを感じると共に、悩んで行きづまったときの道しるべになるような事を学べたと思います。

一番良かった事は良きメンバーとの巡り合いです。何歳になっても初対面の方と同じ部屋の下で過ごすのは、緊張もありますし、堅苦しさがあります。そうこうして二日・三日経った時、ふとここまで仲良くなれるのは何故なんだと思いました。志について熱く語り又、腹をかかえて笑ったりと・・・。志についてという今回のテーマ、どうすれば理解し合えるだろうとバズセッション等で考えましたが、まさしくこのような出会いをくり返しお互いの事を短時間でより深く理解しようとするその姿勢にあると感じた事です。今回の研修で仕事に対する刺激も受け明日から一段と頑張りたいと思います。又今回の研修で得たものを一人でも多くに伝える事が出来たらいいと思いました。

●小濱　正也

一日目余島に集合した時にみんな別々に座り話するまもなくどうなるのかなと思っていました。でも仲間になるにはそう時間がかかりませんでした。バズセッションの時にも発表しましたがみんなの良い所を探そうと言うのが今回も僕のライラのテーマでもありました。ライラに来てる人は良い所を探しても探してもつきないぐらい非常に良い所が多かったです。それが出来たからこそみんなで仲良く語り合えたように思います。

今後は知りあったライラリアンの方と私は友達よりも親友として付きあいたいと考えています。友達は楽しみを共有出来るが友達、親友とは苦しみを共有出来るのが私は真の親友ではないかと考えています。このライラ受講生の方々とは親友と今後も苦しみをわかち合えるような関係になればなと思っています。ロータリークラブの方々、このような出会いの場を提供していただいて本当にありがとうございました。何かこれから生きていく上でもヒントをもらったような気がしています。

●松田　啓希

真の他者理解の見本は子供、と言うこの一文が、今回のセミナーを通して具体的に一つの考えに昇化できた事です。

年齢も職種も違う十数人が一つ屋根の下日夜議論した四日間。知識の共有にとどまらず、その思いの共有こそこのセミナーの醍醐味だった様に思います。

僕はちょうどこのＲＹＬＡの行われた余島でキャンプリーダーをさせていただいていますが、そこでよく言われる「プログラムは目的ではなく手段だ」という言葉を身をもって解りました。最後の夜に行われたディスカッションのテーマである「違う時代、文化の中での真の理解」が、このキャビン間の交流そのものだと気づきました。プログラムという手段を知らず知らず使い、議論し理論を学んだ結果です。

しかしここで一つ感じました。このセミナーの様に「そうしようと」して、様々なプロセスが頭にあってはじめて他者理解に至るのが僕達大人です。ところが、子供はすごい。キャンプに置きかえると、はじめての環境、はじめて会う仲間という不安の中で文化や世代の壁など最初からなかったかの様に彼らは打ち解けていきます。もちろん、彼らの頭の中には「仲良くなりたいという気持ちと行動がコミュニケーションとなり、それがふれ合った時に相手を一人の人格として形容し、仲良くなっている」なんてプロセスがあるはずもなく、それが愛だと知るわけもないのです。

大人になるにつれ多くの対人経験や雑学で頭でっかちになり、どんどん行動できなくなります。それを乗りこえるのに最も単純で何よりも不可欠なものが真っ正面から愛を持って人と接する事だと気づく事ができたのは、この四日間と素晴らしい仲間のおかげです。

今日この日を僕の原点とし、日々自らの薪を燃やし続ける事を志します。

●ジャヤト

日本に来て三年半になります。ライラセミナーみたいなセミナーに初めて参加しています。

日本に来て日本人の学生であり、社会人であり、いろいろな交流をしました。しかし、いままでの交流を繰り返し見ますと、毎回の交流は何時間程度の交流に過ぎなかった。今回ライラセミナーを参加させていただき、しかも共に四日間一緒に過ごし、一緒にセミナーの課題である志を討論し合うなどの非常に現代の若者のひとりひとり考えるべきであるテーマをみんなで一緒に考え、日本人の若者たちと非常に今までにない深い交流をできました。

日本に留学に来て、専門知識を学び私にとって、社会学も学習できました。これからの文化の違いを乗り越え、既に一歩進んだ交流をできたと思います。こんなすばらしいセミナーを参加させていただき誠にありがとうございました。

B班



●カウンセラー　大森　英夫

永年の課題であったライラセミナーのカウンセラーを初めてさせていただきました。カウンセラーの役目を正しく務めることが出来るだろうか、しかも四日間の長丁場をどうしたら良いのか大変不安でした。しかしそんな事は全くの杞憂でした。優しいパートナーと素晴らしい受講生に恵まれて何の苦労もすることが無く皆様に面倒を見ていただいて楽しい四日間はあっと言う間に過ぎ去りました。愛の心と信念をしっかり持った若者が沢山居られる事を知って本当に幸せでした。将来何か一緒に仕事が出来れば良いですね。

●カウンセラー　鴨居　利枝

三泊四日のＲＹＬＡセミナー、島に着いた時は、始めてのカウンセラーで不安がいっぱいでした。が、ほんとうにあっという間に過ぎてしまいました。私にとっては、思いがけない貴重な大切な経験となりました。

今しがた、今井先生のお話の中で「人間の絆が一番深い国、県の人達が一番幸せに感じている」とおっしゃった事、まさに実感として私は今、それを感じています。人との出会い交わり、今までに幾度となくあった中で本当に何度振りにこのような感動とパワーをいただいた事でしょう！

大森先生はじめ受講生の皆様本当に有難うございました。

●安部　祐一

今回、このセミナーには、ボーイスカウトを通じてご紹介頂き、自分自身何かについて考える場をもちたいと感じていたので参加させていただきました。正直、具体的にどのようなことをやるのかイメージできず、不安をかかえたままスタートしましたが、班分けされて、班内で話し合ってうちとけ、毎日毎日過ごしてきた中で、とても名残惜しい気持ちで今日を迎えました。

このセミナーを通して、自分が感じ得ることができたと思うことは二つあります。

一つは、セミナーの中での講義を通して、社会における自分の役割は何なのか、どういうふうに志を見つけることができるのか、という点について、自分なりに考える機会を持てたことです。もちろん結論はでませんでしたが、この先、この事について考えていく良い手がかりを

得ることができたと感じています。

二つ目は、毎日のキャビンタイムを通して、いろんな人と深く話すことができた点です。普段、友達とは話しにくいような悩みや考えについて、キャビンの中で話し、また聞くことによって、自分を新たな視点で見つめ直すことができた気がします。自分はこれまであまり自分をさらけ出そうとはしなかったので、このような機会を得たことは非常に有意義でした。これほど人と話すことが大切だと感じたのははじめてでした。今後もこれを糧に頑張っていきたいです。

最後に、このような場を提供して下さったロータリークラブの皆さんや、いろいろサポートして下さったカウンセラーの方、何よりもB班のメンバーに感謝したいと思います。どうも、ありがとうございました。

●稲葉　輝宏

あっという間の四日間でした。

不安だらけの参加でしたが、開講式・オリエンテーションで、B班のカウンセラー大森先生と鴨居さん、それに十二名の班員と出会いました。年齢、職業、出身地は違えど、今思い出しても最高の仲間だと思います。

ＲＹＬＡスケジュールを見た時、午前中の二時間半に渡る三日間の講義は、さすがに鬼だと思いました。しかし、講師の方々の見事な話術に取り込まれ、気が付けばメモ用紙が真っ黒になるくらいペンをすべらせていました。

レクリエーションでは、エンゼルロードを二人で歩くと結ばれるという話は本当か検証しました。B班の中からナイスカップルが誕生することを願っています。

思索の時間では、眼前に広がる海をながめながら、ゆっくりとした時間を過ごすことができました。その後のバズセッション・フォーラムでは、吉田君お疲れ様。みんなのフォローも絶妙でした。

今、感想文を書いていますが、残り少ない憩いのひとときを悔いの残らないよう楽しみます。

今回、ご好意により参加させていただいた今治南ＲＣの皆様、ほんとうに貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

今回のセミナーで知り合ったB班のみんな、絶対に再会しよう。

●吉田　将三

「時代の変化の中で文化の違うを乗り越えて真にお互いを理解し合うには？」

三月二十日、私たちはこの余島に集いました。徳島から五人のメンバーでやってきた私たちは「どんなことするんやろか…？」「余島って余った島って書くよね…これどういう意味なんやろ…もの凄いサバイバル生活を強いられたらどうしよう…」などと期待と不安を入り交らせながらこのＲＹＬＡセミナーに参加しました。

私はこのセミナーに参加するに当たって一つの目標を立てていました。それは“セミナー終了後に泣いて別れを惜しむほどのチームになる”ということでした。なぜこの目標を立てたのかというとそれはこの目標は『一人だけでは達成できるものではなく、チームのメンバーと心を通わせることが必須の条件だ』と思っているからです。しかし私はたった四日間でそんな素晴らしいチームにすることができるのだろうかと半信半疑なままチームのメンバーと対面しました。そして、初日のキャビンタイムを迎えたとき私は『なんて個性が強い人たちなんだ…』と思い、この人たちと良いチームワークを発揮することができるのだろうかと凄く不安を覚えていました。しかし、このセミナーはたったの四日間しかありません。私は思っていたことをそのままメンバーに伝えました。すると、メンバーの人たちとも少しずつ心を通わせることができてきました。世間話や一日の振り返り、恋愛や将来の目標など、本音で何でも話しました。

そして、三日目の最後の夜、私たちは朝の六時三十分まで真剣に話をし続けました。私は正直、初日の印象からここまで腹を割って話せるようになるとは思っていなかったのでこのように短期間でここまで深い話ができるようになったことに凄く達成感を感じています。

今回のフォーラムのテーマである「時代の変化の中で文化の違いを乗り越えて真にお互いを理解し合うには？」の答えは将にこのＲＹＬＡセミナーを通しての教訓となりました。

私はこの短い四日間で非常に貴重な経験をさせて頂きとても感謝しています。ＲＹＬＡセミナー関係者の皆様を初め、個性的で尊敬できるＢ班のメンバーの皆様、本当にありがとうございました。ここで学ばせてもらったことを行動に移し、これからの人生で恩返しをしてゆきたいと思います。

また今後ともライラリアンとして皆様と深く関わってゆきたいとホンマに思っています。

「ＲＹＬＡセミナーありがとう！！」

「そしてまた余島に集いましょう！！」

●久保　早哉香

私は今、この第30回ライラセミナーに集い巡り合えた素晴らしい仲間がいるという嬉びで胸がいっぱいです。様々な価値観や考え方、感じ取り方を知り、自分自身どのような人間で何を大切にして生きてきたのかを深く見つめ直す事の出来る四日間でした。そして、志・こころざしについて真剣に考えました。考えて悩んで見つけ出した“今”の答えは、自分の中で最も大切にしている信念をコア（軸）に自分が進むべき道を突き進んでいく、という事です。信念はたくさんの人との交流や経験を通して思考するたびに自分の中で書き換えられていくものであると思います。信念は私が成長すると共に成長して、大きく深みが増すものだと感じています。私は将来たくさんの人に“笑顔”と“元気”を届けられる人間になりたいです。こんな私を認め受け入れてくれたライラＢ家族のみんな、ありがとう。私はとっても幸せ者です。今の私でこれからも頑張っていいんだ！という勇気とパワーを与えてもらいました。どんなに高いハードルが目の前に現れても乗り越えられる気がします。本当にありがとう。私もみんなの事を応援してるよ。

●戸田　遥基

今回は、ライラセミナーに参加させて頂き非常に勉強になりました。様々な背景をもつ人々と、腹を割って語り合いました。この四日という短期間でこんなに質の高い友情を築けるとは思ってもいませんでした。

今回、僕は自分探しの旅という名目で来たのですが、大田先生のお話にもあるように、人を知って初めて自分を知り、他者との共生方法を知るのだということを体で実感致しました。現在大学二回生で、これから三回生を迎えるのですが、就職について悩んでいる時期でした。しかし、班のメンバーに相談したり、彼らの生き方を知ることで、自分はこういうことが好きなんだと、すごく大切な気付きに出会うことができました。僕は、これから、ＮＧＯに入り、世界中でボランティア体験をし、更なる見分を広げようと思います。金先生のお話にもあるように、相手を表面だけで判断することのないよう、異文化を認め理解し、もっと様々な人間に出会いたいと心から思いました。というのも、今回のライラセミナーで、人との交流というのが本当に面白いと感じたからです。もっと多くの人と世界中の人と、腹を割って語ってみたい。そうすることで、自分という人間の質を高め、人を幸せにすることで、自分も幸せを分け与えられるような、そんな人間になりたいです。おいしい食事ありがとうございます。静かな自然も心ゆくまで楽しませて頂きました。改めて自然の素晴らしさに気付くことができました。

今回のセミナーのおかげで、一回り大きくな

れた気がします。今回のセミナーでの学び、気持ち、帰ってからの日常で行動に移していこうと思います。

本当にありがとうございます。

●高橋　遼介

自分を高めるチャンスになればと考え、参加した本セミナーでは、志を明確にする良い機会となった。歳が離れた方や、同世代で社会人の方、専攻が異なる学生など、まだ学生である自分にとって、様々な視点から物事をとらえられる話し合いの場を提供して頂いた。普段では特定の人との付き合いが多いため、多ジャンルな方々と接することが何よりも良い刺激となった。

志とは個々によって異なるものであり、また正解の無いものである。したがって個人の思想を色濃く反映するものであり、常に思想の向上が求められる。いま現在もつ志も、時間経過と共に変わりゆくだろうと考える。この過程により、自分がより向上できているものととらえ、日々何かを学びとろうとする姿勢を失わないことを誓う。

次回、今回の仲間に再会するときは、自分は更なる高い志をもった人間になっているものと信ずる。

●上羽　裕樹

私は、今回このセミナーに参加して感じたことは「人のつながりの大切さ」でした。

初めは、住む場所も年齢も業種もちがう人たちと上手くやっていけるかという不安な気持ちもありましたが、共に考え、共に意見を出しあううちに、そういった気持ちはなくなりむしろ、この短い期間では考えられないぐらいの、つながりが出来たように感じます。

それは、やはり講師の先生方のお話を聞きふだんは考えることのない様なことに気付かされ、考えさせられた部分が多かったような気がします。フォーラムやキャビンタイムでこれらのことを深く考えることは一人ではきっとできなかったと思います。

相手のことを理解しようと気づかい、また真剣に意見を出し合える、班の仲間がいたからこそ、自分にとってこのセミナーは本当に実り多きものだったと感じられました。

これから地域に帰り、仕事に戻りますが、ただ仕事をこなすのではなく、自分にも何かできないだろうか？ということも考えながらそして、Ｂ班の仲間たちと再び会う日を楽しみにしながら、日々進んでいきたいと思います。

今回は、このようなすばらしいセミナーに参加させていただき本当にありがとうございました。

●切石　明良

無事、ＲＹＬＡセミナーが終わりほっとした部分、そして寂しい部分があります。

今回ＲＹＬＡセミナーについてどんなものか全く知らずの参加だったので正直不安でいっぱいでした。まして、ロータリークラブというクラブもどんなことをしている組織かもあまりわかってなかったのも事実でした。

開講式が終わり、キャビンタイムでの自己紹介で不安はすぐになくなりました。とても皆さん打ちとけやすくキャラで濃い人ばかり、ほんと四日間か皆さんのおかげで楽しい時間すごせました。ありがとうございます。またカウンセラーの大森さん、鴨居さんほんと楽しい四日間お世話してくださりありがとうございました。

今回普段聞くことの出来ないような話を聞く事が出来、今まで自分が常識と考えてきたことをもう一度考えさせてくれる機会をくださったＲＹＬＡセミナー運営の皆さま、ありがとうございました。

●待場　博道

丹波市役所に就職し、本年三月で14年が経過

しました。その間、農林、水道、財政と三課の仕事に従事し、年齢的にも経験年数もいわゆる中堅と呼ばれる位置となりました。

しかし、毎日の忙しさにかこ付けて、やらなければいけないと分かっていながらも、学ぶこと、自分を高めることをやっていない自分に葛藤がありました。そんな時に、このセミナーの募集があり、自分の気持ちを整理させてくれるヒントがあるのではないかと思い参加しました。

セミナーでは、講師先生方の講義はさることながら、年齢、性別、仕事や学校も違う人と出会えました。そして、その仲間とたわいもな話や、一発芸を披露するなど、それぞれが、自分という人間は、こういう人間なんだということを一所懸命、表現されていることに感動を覚えました。

また、若い人達に引っ張られていくように私自身も、自分の思いを積極的に話し、皆なの話も積極的に聞けるようになり、とても話し、語り合うことが楽しく思いました。

ここで出会えた仲間と語り合ったことを心に刻み、今後の人生の志のヒントにしていきたいと思います。

Ｂ班の皆さんに出会えたこと、楽しく実のある研修となったことに感謝します。そして、この機会を与えて下さった全ての方々に感謝します。

ありがとうございました。

また会いましょう。

●大川　千穂

余島で過ごした四日間は本当に楽しく夢のようでした。

私は自分勝手な性格なので、集団行動が苦手でした。なので初日は馴じんでるようでも壁を作っていた部分がありました。しかし、二日目に体調を崩したり、ネックレスをなくした時に、Ｂ班の皆さんの優しさに触れました。他人のことなのに、すごく心配してくれ気にかけてくれました。その温かさに触れた時、壁を作っていた自分、心の狭い過去の自分をすごく恥しく思い、反省しました。Ｂ班の皆さんから、無償に人を想いやる心を教えて頂きました。

夜のキャビンタイムでは、将来への想いや、ライラに対する考えなどを話し合いました。色々な人の話を聞くということは貴重な体験であり、すごく勉強になりました。しかしそれと同時に、自分の知識不足や話術のなさを痛感しました。Ｂ班のメンバーは、皆さん「自分」をもっていて、自分の想いを口に出して伝えられる、尊敬すべき大人です。メンバーとすごす中で、本当に目指すべき大人だなと思いました。そんなメンバーの中で話すことに気が引けていると「変に背伸びをせずに自分の色を出すことが大事。」とあるメンバーが声をかけてくれました。そのアドバイスを受け、後に自分の専門分野である「福祉」の話をした所「言いたいことすごく伝わった」と言ってもらえ、すごく嬉しく思いました。私には人に自慢できるような知識もないし、頭の良さそうな話しもできません。だけど皆さんの前で「福祉」について多く話す内に、自分にも皆さんと同じように、人に話せる、自慢できるものがあるということに気づきました。

このセミナーに参加して自分の色を見つけることができました。今後専門分野での知識を深め、自分に自信がもてる大人になりたいと思います。そんな大人になれた時は、討論のリベンジをさせて下さい。是非またＢ班の皆さんと話し合いたいです。

Ｂ班の皆さん。セミナーで関わった皆さん。四日間本当にありがとうございました。皆さんと過ごした時間は一生の宝物です。

●大島　実幸

今回ＲＹＬＡセミナーに参加できました事、大変嬉しく思っております。

このセミナーには日常の生活をより豊かに過ごすためのヒントがたくさん隠されておりました。

まず一つ目は知識豊富な講師の方々による講義に隠れておりました。常に勉強をすることが人生や視野の幅を広げ、自分をより大きな世界へと導いてくれるのだと気付いたのです。

二つ目は、余島という自然あふれる環境に身を置くことにより気付かされました。都市部に生活する者は日常の生活の中で草花の成長や星や海の波の音に注意を払うことが少なくなっています。しかし、自然へと目を向けることは心に大きな安らぎを与えてくれることに改めて気付いたのです。

三つ目は一緒にセミナーを受講した班の皆さんの存在により気づかされました。

生活をどの様に豊かにするかという事について各々が自らの考えを持っており、そんなメンバーの方々と深く話し合いをするキャビンでの時間はとても楽しかったです。今井先生のお話にもありましたが「絆」を作ることが心豊かに生きることにつながると知りました。その事によりこれからの日常がとても楽しみになるのでした。又セミナー中は他にも様々な所で温かく見守られている様な安心感を持ちました。それは班のカウンセラー役でいらしてくれた大森さんや鴨居さんの存在によるものだと思います。素敵な生き方をする多くの人々に出会えた事に感謝しております。

環境と人々と、食事の度に死んでいったお魚や穏やかな自然にもありがとう！

●東　真梨子

あっという間の四日間。毎日が新鮮で、新しい刺激を頂き、さらに人の優しさにふれることから自分をみつめ直す、毎日がそんな繰り返しでした。受講中は講師の先生の話、キャビンタイムでの語りなど何をとっても考えさせられることばかりで、気づけば、視野を広げて物事を考えられるようになってきたのかなと感じています。器が広がったことで今までの悩みは悩みでなくなりました。今回のセミナーで学んだことは数えきれないのですが、今回は最後のキャビンタイムでの出来事を紹介します。

最後の夜、突然部屋が暗くなったと思えば、ケーキとバースデーソング。私だけが知らないこの状態に最初は何がなんだかわかりませんでしたが、同時に今まで体験したことのない位の幸せに包まれました。みんなにとって制約のある貴重なキャンプ生活の中で、班のメンバー、お父様、お母様が企画してくれたサプライズバースデイ。

一生忘れられない誕生日となりました。そしてこの経験を通じて、さりげない優しさが、人にとっていかに重要なことか、自分もそれを与えられる人間でありたいと本当に考えるようになりました。こんな出来事を筆頭に、様々なことを気づかせて下さったＢ班のメンバー、ライラセミナーに関わって下さったすべてのロータリアンの皆様には感謝するばかりです。貴重な体験をありがとうございました。

●桝谷　英樹

二日目の大田教授の講義が興味深かった。中でも「新しい連携を作らなければ、志をもつことは難しい。」「赤ん坊は胎盤を抜けた後、文化を選び、人間関係を作り、自分を作る。その営みが学習であり、学習権が保証されなければ人間は人間になれない。」という話が印象に残り、自分の中に新しい物の見方が生まれた気がした。また、大田教授や今井先生の幅広い知識や深い洞察力に接し、「真の教養人」の偉大さを垣間見ることができた。

キャビンタイムやバズセッションでは、四十歳を過ぎた私が、20歳過ぎの若者と真剣に議論する機会をもつことができた。そのなかで感じたのは、若者の意識の高さと、まだ未熟ではあるが前向き、ひたむきな態度。今の私が、ひょ

っとすれば失ってしったものなのかも知れない。何となく「守り」に入って生きてしまっている私が、若者たちから熱いものをもらった気がする。年齢差を超えてこのような若者を尊敬し、また彼らより二十年程長い経験から、彼らの迷いに何らかのアドバイスを与えることができるよう、自分自身を高めてゆきたいと感じた。

四日間に渡りお世話になったカウンセラーのお二人、私より十年以上の人生の先輩であるが、そのお人柄に触れ、素敵に歳を重ねておられるように感じた。これから四十代後半、五十代へとなってゆく私にとって、人生のあるべき理想的な姿のひとつとして見習ってゆきたいと思う。

このような得難い貴重な経験を与えて下さったロータリーの方々に感謝申し上げます。ロータリーは私にとって全くの別世界だと思っていましたが、今回のセミナーで少し身近に感じることができました。



C班



●カウンセラー　太田　國博

ライラセミナー参加者の大川君、奥山君、上村君、秋山君、竹村君、西川君、橋本君、高岡君、島田君、斎藤さん、岩蕗さん、秦さん、西森さん、長島さん、女性カウンセラーの永田恵子さん三泊四日のセミナーでは、誠に御世話になりました。未熟な私でしたが、皆様のおやくになれたことを、願っています。

●カウンセラー　永田　恵子

ながい人類の歴史の中にあって、今日程、豊かな時代はありませんでした。にもかかわらず、今日程生きづらい時代もなかったと思います。

長い時間をかけて多くの人々によってもたらされた科学技術から生み落された物質やシステムもこの地球上のあまねく人々の上に等しく恩恵を与えている様には思えません。

これからの私達がまず一番に考えていかなければならない事は、この様な恩恵をどの様な方法で皆が幸せになれる様に分配するかという事だと思います。

グローバリゼーションと言う言葉も、本当にご都合主義的に使うのではなく皆が心から、地球上にある、あらゆる垣根をのり越える為に使わなければなりません。

一人一人は微力ではあっても、その一人一人がまず、行動しなければ何も先には進みません。見えない物（事柄）に目を注ぎ、あらゆる視点から物ごとを見通す目を養い、人間と技術を調和させる知性を育てる努力をしましょう。人間の存在意義を暖かいまなざしで考える事の出来る自分に育って行きたいと思います。かけがえのない、この地球の上に、たまたま同時代に生まれあわせた皆様一人一人が、本当に、生まれて来てよかったと思える様な人生を送られる事を心より祈っています。

今、窓の外は、春を迎える為の恵みの雨が降っていますが、セミナーの期間中にはお天気に恵まれとても暖かい日々であった事に感謝です。

この四日間の為に多くのロータリアンの方々が、周到な準備をされ、昼夜を徹して働いて下さいました事にも心から感謝いたします。微力な私を、カウンセラーとして、働かせて下さいました事にも深い感謝と共に厚く御礼申し上げます。

ライラセミナーの趣旨がここに参加された若人の心の中に育ち、やがて花咲かせて、次の方々

の心に又、伝播されていきます事を願っています。

受講生の皆さんが四日間、全力でこのセミナーに取り組まれた事に、敬意を表すると共にこれから先、自信を持って前進されます様、心からエールを送ります。

●奥山　将司

今回のライラセミナーを終えてまず感じたことは本当に来てよかったということです。

まず三日間の講義では文化の違いや生きていく上での新たな発見がありました。今までの講義を聞く姿勢は受け身でしたが今回は自分自身様々な問題を考えつつ受けることができました。大田先生の講義の中でどうしても一つ納得のいかない点がありました。それは私達若者が携帯を介してしか意思の疎通がとれないという内容でした。これは私達若者の携帯文化が理解されていないのかとも思いました。しかし大田先生のおっしゃるように時下に会ってのコミュニケーションの大切さもよくわかります。今回のライラを私は本当に仲間に恵まれたと思いました。フォーラムの課題作成にしてもこのモチベーションの高い仲間達だからこそ全力で最高の発表ができました。C班のみんなに会えてよかった！

●下川　尚樹

今回、三泊四日というスケジュールでライラセミナーに参加させて頂き、初めは長い日程だなと思っていました。

しかし実際過ごしてみると、一日一日が充実していて、すごく短く感じ、又、色んな地域、色んな年代の人が集まり、ディスカッションをし、スポーツで共に汗を流したり等、普段の生活では中々経験出来ない事を出来た事がすごく新鮮で楽しく勉強になりました。やはりその中でも、年代に関係なく班の人達と仲間になれた事が一番の収穫だったと思います。勿論他にも先生の方々の講義も、もの凄く分かりやすく、心に染みて、心に残るお話しばかりで勉強になった事が沢山ありました。又、明日からは職場に戻りますが、今一度、初心に戻り、今回過ごさせて頂いたこの三泊四日での事を常に思い出し、仕事に役立てていきたいと思います。ありがとうございました。

●岩蕗　かをり

私は現在心理臨床の仕事をしてる。最近感じることは、居場所が無いと訴える人が多いことである。そんな時、私自身も自分の居場所についてや、自分にとっての幸福って何だろうかと考えることが多くなってきた。

そんな時、このセミナーに参加させて頂けることになった。セミナーに参加して、まず最初に私の心をとらえたのは、世代を越えた多くの人との出会いであった。年齢、社会的地位、立場、職業が全く違う、ロータリークラブの人達との出会いや、受講生との出会い通じて、指導者として、上から見るのではなく、私達と同じ立場で接して下さったことに対して感激した。又、各地域で種々の悩みを持ちながらも、夢をえがき、頑張っている受講生との出会いであった。

そして、研修内容である、志というテーマに添っての研修は各先生、メッセージは様々ではあったが、「自分のわからなさの自覚」「自分で発見したことを信じる」「自分の信念から目をそらさない」「自分の自己同一性を維持しながら変わる」「愛すること」等は私をとても勇気付けてくれた言葉である。

そして、それ等体験した事をふまえて、受講生の皆と語りあい、ワークショップに向けて種々の議論はとても有意義なものであった。

この三泊四日を通じて、人は人の中で生活をしており、その中で元気付けられもし、豊かに生きていける事を再認識した。今後も地域社会の中で、私のできる事で、精一ぱい頑張っていくことができればと考えている。

●橋本　英明

私は、このＲＹＬＡセミナーに参加して本当に充実した四日間を送ることができました。大切な仲間も増え、互いにバズセッションをしながら、Ｃチームの意見が、だんだんと一つにまとまっていく様子が、見ていてとても嬉しかったです。このセミナーを通じて、私は、他の人のことをもっと知りたい、と思うようになりました。この人は今どのような気持ちなのだろう、どんな人なのだろう、と。このように、他人のことを深く受けとめたい、と考えるのは、この四日間で私が成長した証だと思います。

しかし、ここで終えるのではなく、この証を、もっと多くの人達に伝え、そして、ＲＹＬＡセミナーに興味をもってくれる人が少しでも増えていくようにしていきたいと思います。

本当に貴重な時間を送ることができて良かったです。ありがとうございました。

●高岡　亮平

この四日間を通じて、様々な事を学びましたが、今回のテーマでもあった「真にお互いを理解し合うには、どうするか。」であったが、私見ですが、受け入れてもらおうとする姿勢を自分から作ることが大切であり、それが理解へとつながると思います。この余島で、全然知らない方々と一緒に過ごし、人生観も少しではありますが、変わりました。まだまだ、仕事をしていない身なので、自分の意見としては具体性を欠いていますが、まだ後に残っている学生生活を有意義な物にするためにも、このライラセミナーで、培った事を生かして頑ばっていこうと思います。

●秋山　晃二

余島に渡って来た初日、セミナーの内容も十分把握していないまま参加した。

四国・兵庫の両県から様々な立場の者同士が顔を合わせ四日間を共にし、“志”について考え始めた。研修において金先生、大田先生、今井先生の講義を受け、人間として本来あるべき姿、自分はこうありたいと思うものが見えた気がする。人間はもちろん一人では生きていけない。生かされているという日常生活の中で忘れがちな基本的な“心”を改めてこの四日間で思い直すことができた。

ここ余島でしか感じることができない貴重な経験を、今までの自分の人生の反省の材料に、これから生きていく。“志”として一生、心に持ち続けていきたい。

セミナーに参加させていただいたことを心から感謝申し上げます。

●上村　健作

この三泊四日という、長いようで短い時間の研修で学んだことは、数え切れない程あります。人見知りな性格のため、うちとけれないな、と思っていましたが、良いメンバーに恵まれこの四日間はほんとに楽しかったです。また、自分を見つめる時間もでき、今後の新たな課題も見つかりました。

今では、このグループのみんなと別れがとても寂しいです。この余島をみんなで探索したり、スポーツをして昔に戻ったような感覚で楽しめ、また寝る間を惜しんで、夜遅くまで語り合ったあの時間を私は生涯忘れる事はないと思います。そしてまた何かの機会でこのグループのメンバーと再会して、また共に笑いあえれば幸いと考えます。この四日間共に学べ笑えたＣグループのみんなに「ありがとう」と言いたいです。そしてこのライラの皆様ありがとうございました。

●秦　麻美絵

長いようで、とても短い四日間でした。はじめは、全く知らない、年齢もちがう、地域もちがう人たちと、この四日間過ごすことがとても

不安で、とても緊張していました。しかし、レクリエーションや話し合いをするうちにその不安や緊張がなくなり、たくさんの知識やさまざまな考え方を得ることができました。今まで感じなかったこと・考えなかったことをたくさんの人たちと話し合って、さまざまな意見を得て自分なりに感じ・考え、そして自分を見つめ直すことができました。たくさんのことを学ぶことができた四日間でした。また、あんなに自分の意見をぶつけて討論し合う機会がいままでなかったので、新たな自分を発見することもできました。この四日間は私にとってとても貴重な四日間でした。私が持っていないものをたくさん持っている人たちと出会うことができ、少しだとは思いますが成長できたのではないかと思います。本当にありがとうございました。

●西森　美和子

初めての参加ということもあり、最初、ライラセミナーがどんなセミナーなのかということを小さなパンフレットで説明してもらった程度だったのでもちろんよく知らずの参加やったのでやや緊張してましたが、この三泊四日は私にとって一生忘れることのないかけがえのないひとときになったと思います。見ず知らずの受講生、ライラの運営委員の方々、講師の先生方との出会いでいろんなことを勉強させて頂き本当に感謝しています。今年のテーマは、“志”でしたが、“志”があるとコミュニケーションがうまくなるということは全くその通りだと思いました。自分は、もともと人とのコミュニケーションがいまいち上手な方ではなかったのでフォーラムの場でいろんな人の意見を聞かせて頂いて、「あ～なるほど～」ってただただ納得することばかりでした。このセミナーではとにかく人との和を大切にすることを学べたのでこれからも日常生活の中で、ライラで学んだことを思い出しながら生かして行きたいです。

●川西　剛

最初、このセミナーに参加した時は親の勧めで参加したので、あまり期待を持つことはできませんでした。しかし、いざ始ってみると、自分とは年齢も出身地も違う人たちとグループになり、話し合いの場であったり、食事をする時などいろんな人のさまざまな考えを聞くことができ、自分になくて必要な事をたくさん吸収することができました。

講義では、韓国の方などの話を聞いて、内容が心に響くものばかりだったので、とてもいい経験ができたなと思いました。

このセミナーの中で最も印象に残ったのは、バズセッションでグループの意見について話し合い、フォーラムで発表したことです。僕はグループの代表として、グループの意見を発表しました。その発表を通してたくさんの人の意見を発表することの難しさを痛感することができました。その発表をした後にもっと人前でうまく喋れるようになりたいと思いました。

このライラセミナーを通して、自分に無い知識をたくさん知り、視野が広くなることができたと思います。そして同じグループになった人たちにはとても感謝しています。このＣ班のメンバーだったからこそ四日間充実した日々をすごせたと思います。このセミナーで学んだことをこれからの生活で生かして行きたいと思います。

●竹村　秀史

今回このＲＹＬＡセミナーに参加して多くの人々に出会い、普段話す機会のない職種の方々と話し、いろんな考えがあるということが知れて大変良い経験になりました。

私は、今年までの六年間大学で生物に関する研究をしており、ほとんど理系の方としか話をしておらず、今回のセミナーで教師、介護福祉、お坊さんなどの理系とは遠い職種の方々と話をし、また道徳の授業のようにある議題に対して

討論をしてみて自分では思いつかないような発想や考えをしている、どうしてこんなに分かりやすく、しかもおもしろく人前で話せるのだろうと驚かせられることばかりでした。この経験から私は、多くを学び自分には足りないもの、直すべき自分の性格などを再度見つめ直すことができました。

最後に今回のセミナーに参加して大変良かったです。ありがとうございました。

●長島　道子

私の子どもが受講するような、ずい分年のとった参加者でしたが、初めて出会った若い人たちとずい分楽しい時間を過ごすことができました。

忙しい日常の生活の中で、「本当にこれでいいのだろうか」と思うことがたくさんあります。「子どもの問題」について、大人たちが話し合う場面で会議録をとることが仕事の一つですが、今井先生が終りに言われた言葉「日本人は哲学が貧困である」ということ、外側ばかり作り上げて、肝心の中身は考えていない。個人の哲学を会議の中できちんと伝え、今起こっている現実について「どうすれば子どもを守れるか」ということを論じない。

なにごとも変わらないのだろうなと思いながら、次世代に期待したいという気持ちが、ふつふつと沸いてきました。

●島田　佳和

島に到着した時は、三泊四日の間何をするのか？という疑問で一杯でした。しかし、日を追うにつれ、このセミナーが自分にとって糧になるものであると実感できました。まず、各日午前中の講義では、先生方の話を聞いていかに自分が物事について深く考えていないかを思い知りました。特に今まで自分が分かっていると感じる事柄も、本当の事は何なのか？ということを追求する姿勢を持ち、より勉強して広い視野から物事を考えられる人間になりたいです。またこれから私の人生の中で出会う全ての人々に対して理解しようと努力し、人々との関わりを大切にしたいと思います。キャビンタイムやフォーラムの時間では、自分と同年代の人達の考え方を知る事ができ、とても貴重な体験でした。それらを通じては、いろいろな考え方を吸収し、物事の見方、切り口について新たな発見をするとともに、私は自分の考え方、視点をうまく他の人に伝えられなかったので、まずコミュニケーションの能力を磨き、自分の考え方についても、確固たるものを築けるよう、努力したいです。四日間大変お世話になりました。ありがとうございました。

●齋藤　奈奈

三泊四日のセミナーは、思ったよりあっという間に終わってしまいました。ロータリークラブのこともライラのことも、どんなセミナーなのかも知らない状態で余島まで来てしまい、少し不安がありました。しかし、気さくな感じのカウンセラーさんと、良いメンバーにめぐまれ、有意義な時間を過ごせたと思います。

一番楽しかったのは、フォーラムへ向けての話し合いです。普段の生活ではなかなか考えない内容で、このセミナーに集まったメンバーだから話せるのだと思いました。キャビンタイムでも、友達や親とは話さないようなことが、意外に話せて、面白かったです。

また、思索の時間には、一人で余島をぐるぐる歩き回りながらたくさんの事を考えることができました。

有意義な四日間をありがとうございました。

D班



●カウンセラー　**濱田　吉隆**

ありがとうございました。

すばらしい出会い、気づかされたこと、至福の時間でした。

まず、吉岡おかあさん、本当にお世話になりました。

そして、D班の皆様、楽しい時間でした。

とても誇らしく、また感謝しています。

準備くだされたスタッフの皆様、お世話になりました。

●カウンセラー　**吉岡　喜久子**

年令、職業、住所も様々な15名の人達と出会い追したライラセミナーの四日間はとても楽しく有意義なものでした。

介護や医療の現場で社会福祉に携わる人、公民館活動を通して地域の為に働く人、司法書士という仕事を持ち連合ＰＴＡで活躍されている人生経験豊かな人、僧侶、明日の子供達を育てることに夢を持ち牧師を目指す人や現役の塾講師、ボランティアコーディネーター、様々な職業を経験して人生のステップアップを進行中の人、夢半ばで人生進路を変更した人、未だ将来を決めかねている人など様々な人々との出会いでした。しかし彼等の中にある共通のものは、人を尊敬し、愛し、そして優しさや思いやりをもってしっかりと目的に向って進む真摯な姿でした。三日間の講義やパネルディスカッション、フォーラムはもとより15名の仲間と熱く楽しく語り合ったキャビンタイムを通して、彼等が更に大きなものを学び体得していった姿は余島での日々を重ねる度に輝きを増した彼らの瞳の中にしっかり見い出すことが出来ました。

今回のテーマ「志」の中には願望や厚意、親切という意味があります。

変化の激しい時代の中にあって、急速にグローバル化が進む今日、またそういう時代だからこそ人への思いやりや優しさなど普遍の「愛」の大切さが必要とされるのだと思います。

今後は地域でこのセミナーで学ばれた種をまき、水をやり「愛」という苗木を更に大きく育ててほしいと思います。

15名の皆様、そして私と共にカウンセラーをし多くのものを学ばせて下さった濱田パパにただただ感謝です。

D班ファミリー本当にありがとう！！

最高！！

●吉田　靖順

第30回目のＲＹＬＡセミナーに参加出来ましたことを大変嬉しく思っております。三泊四日のスケジュールではありますが、常日頃の生活では到底得ることのない非常に有意義な四日間でありました。

又、参加者の年齢も20才～上は上限が無いとのこと。普段の生活の中ではきっと知り合うこともないであろう同世代の若人達と出会い、そして共同生活を送る中でお互いに職業（大学生）の壁を越えて尊重し合いながら自己を見つめ直す良い機会となりました。

この経験とつながりが私自身を成長させてくれたことは明らかです。ありがとうございました。

●原田　礼

様々な人と出会うなかで、私は「言葉」の大切さや恐さを感じ、考えながら過ごしてきたつもりでした。しかし、人と関わるなかで自分自身が心身のバランスを崩していると感じ、また改めて自分の進み方、生き方をどのように捉え、行動するのか？迷い模索した状態の時にこのＲＹＬＡセミナーに参加させて頂くことが決まりました。

自分自身が大切にしたいこと、してきたことなど一度整理するきっかけの場としたいとＲＹＬＡセミナー当日を迎えました。

初めに、「世界が今何を必要としているか」「世界の平和のために真剣に考える若者を育てたい」こう聴いた時はこの言葉が私にはきれいな言葉ではあるものの自分の言葉に変えられるものにはならない程度の理解力でした。

セミナーを通じ、自分なりな過ごし方をするなかで人と関わり、人から観た自分や自分自身で気づく自分があったり自分自身にとっても有意義な時間を過ごすことが出来ました。

自分のことばかりを述べましたが、このように過ごしたなかで最終日に「世界の平和」という言葉に対する理解力が少し高められたように感じています。

一方、「豊かな社会って？」新たに疑問も生じたりもしています。

変動する時代のなか、その時代を一つ一つ積み重ねて今を創って来られた先輩の皆様方と関われる場をその時代を担うグループのメンバーや多くの受講生と過ごせたことに心から感謝いたします。

「考える」その大切さを改めて実感し、このＲＹＬＡセミナーを通して実感したことを今後また思い起こす。これが今の私にとっては一つの「志」なのかなと思います。

●光田　正

この四日間のセミナー期間中に、大変お世話になったカウンセラーの濱田吉隆お父さん、吉岡喜久子お母さん、本当にありがとうございました。初めて会った時から、私たち十五名が少しでも楽しく快適に過ごせるようにと細かな心遣いをして頂きました。同じ班として四日間を共にしたＤ班のみなさん、最初は少し離れて遠慮がちに接していましたが、三日目のバズセッションとフォーラムを終えた時には、みんなぐっと近づけた気がしました。その夜のキャビンタイムは、とても有意義で幸せな気分になりました。

今回のセミナーには、「志」というテーマ設定に引かれて参加を決めました。私自身も地域での青少年育成活動やまちおこし活動を続けていますが、あらためてロータリー活動に接してみて、その志の高さを、今後の自分自身の生き方に生かしていけるよう努力してみる決意です。今回の有意義でありがたい経験を、地域に帰って伝えます。

本当にありがとうございました。

●合田　啓祐

ライラセミナーというセミナーで勉強してき

なさいという出張命令があった時、僕は、正直気乗りがしなかった。まず、四日間つぶれてしまう事、一週間前には、仕事でバタバタしていた事、自分の性格からして打ちとけられるのだろうか。またどんな人が来るかも想像できず、すごく不安な気持ちになった。でも、内容は、そんなに不安を感じていない事、また知っている人間も一人いるので、その彼と一緒にいれば、何とかなるだろうと思っていた。部屋で自己紹介をしていくと、年齢、職種、住んでいる県、見事な位共通項がなかった。特に若い世代の人とふれ合う機会のない僕にとって、若い人達と話が合うのだろうかとさらに不安になった。若い人達の中に、自分の夢を言っている人が何人もいたことに驚いた。正直言って、「僕の夢ってあったのだろうか？」自分の夢を他人に悟ると言う機会もなく、ただ漠然と市役所に入って日々生活をしている僕にとって彼ら彼女たちが新鮮ですごく羨ましく思えた。僕は市役所で働いていろいろな所（児童福祉・知的障害者更正施設・市民税課・公民館）と渡り歩いたが、仕事には二種類あって、人との関わりがメインとなる仕事と物（お金・資料）とニラメッ子している仕事があると言うことがわかった。僕は、人との関わりにおもしろさを感じているので、何か彼らのために、力になることはできないだろうかと考えた。（上から目線になりますが）三泊四日の時間をすごしたが、僕にとっては、どの講習よりも間違いなく、D班の人間と色々な事を話したり、聞いたりした事の方が重要だった。これからの自分に生かせそうなエネルギーをもらえたのは、今後の自分にとっては、とても大きな事だと思った。そして何より自分の考えのガクブチがはずれた事や、僕の事なのに、真剣に考えてもらえた事（ナッソの事）に対して感謝したいと思う。ありがとうございました。

●笹田　彩

今回ＲＹＬＡセミナーに参加させて頂いたことは、私の人生のターニング・ポイントになったと感じています。三泊四日の中で、色々な考え方、生き方を持つ人と知り合い、自分の心をさらけ出し、語り合ううちに、自分の内面がどんどん変わっていくのを自分自身感じることが出来ました。また、講義を聴く中で、これから生きていく上での道標になる言葉にたくさん出会うことが出来ました。こうしてこのセミナーの間、一分一秒進むにつれて私の中に少しずつ「自分の生き方を見つめ直す目」や「他人を尊重したいと思う心」が強く根付いていきました。講義やバズセッション・フォーラムなどを通して、これまでの自分がいかに狭く小さな世界にいたのかを感じられたからです。まだまだ自分の中で整理できない気持ちもたくさんありますが、それはこのセミナーを終えてからの宿題だと思います。地域に戻り、たくさんの人たちと出会う中で、今回学んだことを整理し、生かすことが出来るのだと思います。

そして、今井先生の仰った「福祉の文化が明るい世界をつくる一歩」という言葉を胸に、私は私の地域で、自分自身と、出会えた多くの人たちと、明るい世界のために、小さなことからでも志高く取り組んでいきたいです。

今回のセミナーでの出会いが、この先何かで行き詰った時も大きな支えになると思います。今のこの感謝の気持ちを大切に、私の“志”を育てていきたいです。

●酒井　智加

私がライラセミナーに参加したきっかけは、父からの紹介でした。私の父は、兵庫地区のロータリアンであり、第一回目のライラセミナーの参加者でもあります。最初は、あまり乗り気ではありませんでしたが、父が「よかったから是非」と楽しそうに話すのを見て、参加してみようと思いました。

山育ちの私にとって、「どこを見ても海があ

る小さな島」なんて、とても魅力的な場所。潮風や波の音を聞くだけで、とても心が落ち着きます。そんな中での新しい出会い。今、自分の夢について考え途中である私にとって、これはターニングポイントになるのではないか？と言う期待をライラセミナーは裏切りませんでした。ハイレベルな講義や、色々な人達とのふれ合い。“志”をテーマに、多くの新しい引き出しが、私の頭に増えました。

参加したことによって、これがこうなった、あれがそうなったではありません。それによって、私の悩みが解決したわけでもありません。文章や言葉にはできないけれど、「参加した事」に意味があるのです。それではダメですか？テーマに反しますか？私は楽しかった。清々しく帰ることができそう。頭の悪い私なりに、成長できた気がします。

そして、この繋がりをこれで終わりにしたくないと言う多くの受講生の気持を理解した、「ライラ学友会。」これからも繋がっていられる喜びを胸に、できれば2670地区と2680地区合同の同窓会もしたいなぁなんてワガママも言いつつ、感想文としたいと思います。ありがとうございました。

●松田　匡史

この「ＲＹＬＡ」セミナーに参加させて頂きまして、一番楽しかった事、為になった事は三日目の、班ごとに一つのテーマについて討論したバズセッションと、その結果をまとめた、フォーラムの時間でした。このＤ班に最初合流した時は、年齢層が幅ひろくて、班になじめるかすごく不安を感じましたが、みなさんすごく優しく、すぐ仲良くなれました。

Ｄ班は年齢層が幅ひろかった為、色々な世代から意見がきけ、大変よかったです。私もこう言った討論の場では、かなり引っ込みじあんで、なかなか自分の意見を言えない人間ですが、年上の方々が私の意見でも聞き入れていただき、私もすごく自分の意見が言い易かったです。多分私の今までの討論であれだけ自分の意見をはっきり言えたのは初めてだと思います。積極的に参加すると、討論というのも楽しいものなんだと素晴らしい経験ができたと思います。

また、色々な職業をされている方々に出会え、普段では聞ける事のない仕事の話など多くの貴重な体験ができた四日間だったと思います。お父さん、お母さん、堀川Ａさん、堀川Ｂさん、光田さん、畑さん、杉村さん、嶋田さん、杉本さん、合田さん、笹田さん、田鍋君、西村君、酒井さん、原田さん、吉田さん、四日間短かったですが、楽しかったです。ありがとう！！！

●杉村　ゆかり

余島に着いた初日、船から降りた直後、不安もありましたが正直、早く帰りたいかもしれないと思ったのが着いたときの感想でした。しかし、時間が経つにつれて余島の自然の魅力が分かりだし、普段行かない海だけれど、緩やかな海岸がお気に入りになり、気づけば空いている時間はいつも海岸にいました。

初日の立食パーティやカウンセラーの方の配慮のお陰でいろんな人と話すきっかけもいただいたし、就寝前のグループの雑談会では大学のサークル合宿みたいな機会をいただけました。初日、沈黙が続きがちだった私達がここまでお互いのプライベートな話までするようになったのは本当に驚いたし、カウンセラーの方々の気遣いに感謝しています。

講義では、普段、お目にかかれないような方のお話を聞け、自分の人生の考え方が少し変わったし、最近、とりことなっている韓国文化について、さらに詳しくお聞きでき、より一層、韓国に興味をもつことができました。

また、今回は、部屋やお風呂場で水のハプニングも経験し、飲み水には困らなかったものの、トイレや入浴、手洗いなど普段、当たり前のようにしていることができなくて、予想外に、普

段「きれいな水」が使える暮らしに感謝できました。

今まで海には特に興味を示さなかった私ですが、徳島に帰ったら、地元の海を見にいこうと考えるようになりました。テレビも新聞もなかった余島での四日間、短かったけれどたくさん考えることができました。ありがとうございました。

●杉本　京子

ＲＹＬＡセミナーへの参加が決まり、不安と楽しみが入り混じった状態で参加しました。

実際セミナーが始まり、様々な職種・生まれ・考え方・育った環境が違う人達が集まり、その人達と出会い、一つのテーマについて話し合いをしました。今まで自分が出会って関った人達の影響を受けて、自分なりの考え方や価値観が出来ており、それが今回の話し合いで、たくさんの意見を聞き、今まででは感じていなかった発想やとらえ方の違い等を知りました。

大田先生の講義の中で、「人間関係が孤独ならば、人間は成長できない。」「命は関わり合いの中にある。」という言葉がありました。

今まで関ってきた人、今日この研修で出会い、たくさんの時間を共有した大切な仲間、これから出会い関わっていく人を大切に、そしてその中で自分もこれからもっと成長していこうと思います。

ありがとうございました。

●西村　恵祐

三泊四日のＲＹＬＡセミナーに参加して本当に良かったと、心から感じています。

本当のところ、このＲＹＬＡセミナーというのが何を目的として、何をするのか分からないまま、むしろこのＲＹＬＡセミナーがあると教えてもらった親の説明で、親もいまいち何のことか分かっていなかったようで、子どもたちと触れあう、関わりあう場と勘違いしたまま参加し、余島に着いた時には不安でいっぱいでした。

とりあえず一人だと不安だったので何人かの方に話しかけ、その中の人がグループで一緒であったり、グループでは年齢層が高く、様々な話を聞くことができました。

三日間で、金さん、大田さん、今井さんの講義を聞かせて頂き、その話を聞いて考えさせられたことはたくさんありました。グループでの話し合いも色々な視点から内容を捉えられていることが分かり、そして自分が無知であり、考えが甘く幼稚過ぎたと痛感させられました。このことに気付くことができ、かつ皆さんのお話を聞かせて頂いたことで、少しは知識の幅を広げることができました。

Ｄ班で過ごした四日間は決して忘れることのできない思い出となりました。Ｄ班のお父さん、お母さん、そして、皆さん本当にありがとうございました。

●田鍋　伸明

この度、三泊四日という短い間でしたがＲＹＬＡセミナーに参加させていただきありがとうございました。

多職種の方、いろんな地域、幅広い年齢層の方と交流を深めれるのかと初めは心配でしたが一緒に生活をしていくうちに心配もすぐ消えました。住まれている地域の話、専門職の話を語り合い、少しでも相手の気持ちが解り合えたのではないかと思います。また、今回のセミナーのテーマである“志・こころざし”を講義・討論・思索の時間・バズセッション・フォーラムなどを通し学び、とても良い自分のスキルアップになったと思います。

最後に「Ｄ班＆お父さん＆お母さん」本当にありがとうございました。

●嶋田　加奈

今回のライラセミナーで私は相手のことを理解することの難しさ、理解しようとする大切さ

を学びました。

出身地も年齢も価値観も方言も違う、違うところがいっぱいのD班メンバーと四日間過ごす中でも学ぶことができたし、バズセッション・フォーラムの時間にも学ぶことができました。こんなにも真剣に初対面の人と語り合うこともなかったので本当に勉強になりました。

そしてフォーラムでは班の代表として発表できたことがとても印象的です。最年少の私を大きな包容力で支え見守ってくれた班メンバーのおかげで楽しく発表することができました。

本当に四日間で多くのことを学ぶことができました。優しく、おおらかなお父さんお母さんに見守られ、頼りがいがあり包容力のある、たくさんのお兄ちゃんお姉ちゃんメンバーに支えられ、四日間を楽しく余島で過ごせてよかったです。

本当にありがとうございました。

●畑　達也

今回、第30回ライラセミナーに参加させて頂き、たくさんの学び、多くの仲間を得る事ができました。三回にわたるハイレベルな講義、仲間との親睦を深めるキャビンタイム、二日目のレクリエーション、三日目の思索の時間、バズセッション、フォーラム。どれについても、とても有意義なものであったと感じました。このセミナーには、大きな不安と期待を持って、やって来ました。果たして自分が、仲間を得る事ができるのか。孤独な四日間を過ごす事にならないであろうかと。そういう不安に反して、やはり皆と仲良くなり、和を広げられ、お互いに高め合う事ができる機会になるのではないかと。実際セミナーが始まり、自分なりに努力し、まず皆と打ち解けようとし、徐々に仲良くなり、初日は、まずまずいい感触でしたが、二日目の午後には、正直疲れてきて、家に帰りたいなぁと思った時も、正直ありました。しかし、キャビンタイムの時等、カウンセラーの気配りがとても上手く、精神的にとても支えられ、このセミナーを終える事ができました。カウンセラーの存在はこのセミナーにおいて、大変重要な位置付けであると感じ、カウンセラーの偉大さに感心と感謝しています。バズセッションにおいて、グループの意見がなかなかまとまらなかったのですが、それは、ある意味グループメンバーのそれぞれが、積極的な意見を述べる事ができた表れだとも感じました。さらに皆の意見を最終的にまとめられたという事もグループメンバーそれぞれが、他の意見を受け入れたという事であり、バズセッションの目的が達成されているのではないかと感じました。自分の中では一番バズセッションが良いものでありました。今回のセミナーで出会った人全てに感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

●堀川　寿和

時代の変化のなかで文化の違いを乗り越えて真にお互いを理解しあうには？バズセッションのテーマだ。

これに対する解答のしつとして、今回のライラセミナーにおける経験を上げることができるだろう。仲間となった人たち、年齢層は様々、みんな育った環境もちがえば職業もちがう。初対面で、不安と期待でいっぱいだったことだろう。これが四日間の島での生活、キャビンタイムでの楽しいひとときを通じて、みんなが一体となれた。それはどうしてだろう。みんながお互いを理解しあおうと努力したからではないだろうか。みんなが今回のライラセミナーでの経験を、様々な局面で実践していけば、このテーマの目標を達成されるであろう。

ライラセミナーへの参加は自分をみつめ直す貴重な機会となった。また、D班のみなさんとの出会いに感謝する。今回のライラセミナーを企画し派遣して下さったロータリアンの皆様、ありがとうございました。

●堀川　正吾

このセミナーを受ける機会を設けていただいたロータリーの皆様に感謝いたします。

期待と不安の中の島流し、少し話に聞いていましたが内容が見えないうちにみんな集まり四つのグループに別れました。

部屋に着き自己紹介、色々な職種、年齢の方がいました。意外にみんな話せる様で特に不都合はありませんでした。

そんな中、講義、レクリエーションをこなし日に日に仲よく、チームワークが生まれたと思います。みんなの考え、思いを聞ける貴重な時間だったと思います。

この班のメンバーで楽しい時間を過ごせた事を大切にしたいです。

D班は最高の班だったと思います。また会える機会を楽しみにしています。

ありがとう。



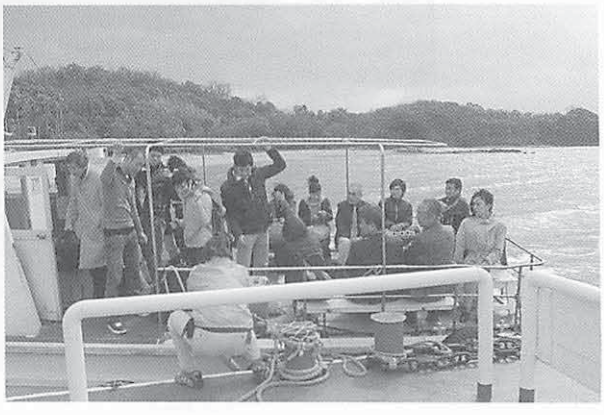

分かちあいの心


第30回ＲＹＬＡセミナー
2008.3.20～3.23　於.神戸ＹＭＣＡ余島野外活動センター
主催：Ｒ.Ｉ.第2670地区・Ｒ.Ｉ.第2680地区ＲＹＬＡ運営委員会

















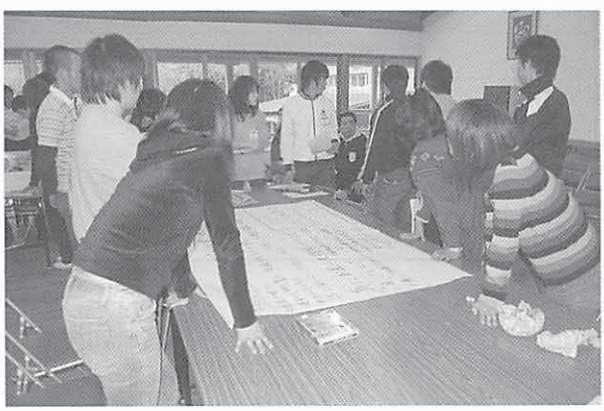
















受講生名簿

2670 地区

No.	氏　名	推薦 RC	性別	班	勤務先・在籍校
1	川西　　剛	小豆島	男	C	近畿福祉大学福祉心理学科
2	堀川　正吾	小豆島	男	D	小豆島総合開発㈱
3	東　真梨子	高松	女	B	社会福祉法人　サンシャイン会
4	飯間　徹彦	高松グリーン	男	A	専門学校穴吹医療福祉カレッジ
5	杉本　京子	高松グリーン	女	D	ドコモサービス四国株式会社
6	橋本　英明	高松グリーン	男	C	専門学校穴吹医療福祉カレッジ
7	疋田　香織	高松グリーン	女	A	ドコモサービス四国株式会社
8	切石　明良	高松西	男	B	四国医療専門学校
9	西森美和子	高知東	女	C	特定医療法人久会　久病院
10	田鍋　伸明	高知東	男	D	内田脳神経外科
11	中邨　　悠	高知西	男	A	高知大学
12	稲葉　輝宏	今治南	男	B	愛媛県立今治工業高等学校
13	高岡　亮平	伊予三島	男	C	近畿大学経済学部　大学院
14	合田　啓祐	新居浜	男	D	新居浜市立垣生公民館
15	小野　　諭	新居浜	男	A	新居浜市立多喜浜公民館
16	高橋　遼介	伊予	男	B	愛媛大学　理学部
17	長島　道子	松山	女	C	松山市教育支援センター
18	光田　　正	松山	男	D	光田司法書士事務所
19	眞鍋　　文	松山北	女	A	立命館大学
20	吉田　将三	徳島プリンス	男	B	徳島大学
21	島田　佳和	徳島プリンス	男	C	阿波市役所
22	杉村ゆかり	徳島プリンス	女	D	徳島文理大学
23	山本　友紀	徳島プリンス	女	A	徳島大学
24	久保早哉香	徳島プリンス	女	B	徳島大学

●カウンセラー

森田　康子	A班	高知東 RC
鴨居　利枝	B班	高松グリーン RC
太田　國博	C班	小豆島 RC
濱田　吉隆	D班	高松グリーン RC

2680 地区

No.	氏　名	推薦 RC	性別	班	勤務先・在籍校
1	中島　悠	尼崎	女	A	ボーイスカウト尼崎 20 団
2	安部　祐一	伊丹	男	B	ボーイスカウト伊丹第 1 団
3	下川　尚樹	川西	男	C	㈱ダスキン川西
4	嶋田　加奈	伊丹昆陽池	女	D	いえしま自然体験センター　リーダー会
5	田尾有加里	三田	女	A	FAIR TRADE CAFE FROM
6	上羽　裕樹	篠山	男	B	篠山証券㈱
7	奥山　将司	篠山	男	C	篠山証券㈱
8	酒井　智加	篠山	女	D	
9	常岡　義政	篠山	男	A	特定医療法人社団　紀洋会『咲楽荘』
10	畑　達也	篠山	男	D	特定医療法人社団　紀洋会『咲楽荘』
11	待場　博道	柏原	男	B	丹波市役所
12	秋山　晃二	柏原	男	C	丹波市役所
13	松浪　和正	柏原	男	A	丹波市役所
14	大島　実幸	宝塚武庫川	女	B	ふるさと青年協力豊か会　ひょうご青年フォーラム実行委員
15	齋藤　奈奈	宝塚中	女	C	大阪教育大学　(いえしま自然体験センターリーダー会)
16	堀川　寿和	神戸	男	D	塾講師
17	吉雅図	神戸南	男	A	神戸大学大学院自然科学研究科
18	岩蕗かをり	神戸垂水	女	C	ソーシャルワーカー　臨床心理士　兵庫県青年洋上大学同窓会　ひょうご青年フォーラム実行委員会
19	笹田　彩	神戸中	女	D	社会福祉法人光朔会オリンピア荘
20	松田　啓希	明石北	男	A	神戸学院大学
21	戸田　遥基	小野	男	B	大学生
22	秦　麻美絵	洲本	女	C	関西外語大学
23	原田　礼	淡路三原	女	D	(財)兵庫県青少年本部青少年活動コーディネーター
24	真野　貴史	津名	男	A	製造業
25	上村　健作	あわじ中央	男	C	特別養護老人ホーム緑風館　介護職員
26	大川　千穂	あわじ中央	女	B	特別養護老人ホーム緑風館　介護職員
27	吉田　靖順	姫路	男	D	書寫山圓教寺
28	小濱　正也	姫路南	男	A	姫路ローターアクトクラブ
29	桝谷　英樹	姫路西	男	B	兵庫県いえしま自然体験センター
30	竹村　秀史	神崎	男	C	鳥取大学大学院医学系研究科 2 年
31	西村　恵祐	相生	男	D	四国学院大学
32	松田　匡史	豊岡	男	D	㈱ウノフク

●カウンセラー

黒田　建一	A 班	西宮夙川 RC
大森　英夫	B 班	伊丹 RC
永田　恵子	C 班	神戸垂水 RC
吉岡喜久子	D 班	伊丹 RC

第30回RYLAセミナー運営委員会

ガバナー	稲山　三治	(2670地区　徳島プリンスRC)
	三木　　明	(2680地区　姫路RC)
顧問	今井　鎭雄	(2680地区　神戸西RC)
	深川　純一	(2680地区　伊丹RC)
アドバイザー	三宅　洋三	(2670地区　高松RC)
	本山　新三	(2680地区　篠山RC)
ディーン	佐伯　直治	(2670地区　小豆島RC)
副ディーン	徳海　明彦	(2680地区　あわじ中央RC)

●新世代委員会（第2670地区）

委員長　古田　茂樹（徳島プリンスRC）

●新世代委員会（第2680地区）

委員長　安行　英文（三田RC）

●RYLA委員会

（第2670地区）

委員長	佐伯　直治	(小豆島RC)
委員	日野　博夫	(高松RC)
	別役　重具	(高知東RC)
	白石　正明	(高松グリーンRC)
	西松　繁夫	(松山南RC)
	田中　雅仁	(今治RC)
	猪野恵一郎	(松山南RC)
	篠原　成行	(北条RC)
	工藤誠一郎	(徳島プリンスRC)

（第2680地区）

委員長	徳海　明彦	(あわじ中央RC)
委員	加藤　　拓	(伊丹RC)
	大森　英夫	(伊丹RC)
	黒田　建一	(西宮夙川RC)
	滝澤　功治	(神戸須磨RC)
	安平　和彦	(姫路RC)

●主　催●

ＲＩ第2670地区
ＲＩ第2680地区
ＲＹＬＡ運営委員会

ＲＹＬＡ運営事務所

国際ロータリー2670地区 ガバナー事務所
〒770-0941 徳島県徳島市万代町３－５－１ 徳島プリンスホテル内
TEL：088-611-1010　FAX：088-611-1012
E-mail：ri2670@utopia.ocn.ne.jp

国際ロータリー2680地区 ガバナー事務所
〒670-0940 兵庫県姫路市三左衛門堀西の町210 姫路キャッスルホテル2階
TEL：079-224-2680　FAX：079-224-2682
E-mail：office@ri2680.org
URL：http://dist.ri2680.org